財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第388集

立馬（たつの）Ⅰ遺跡

―縄文時代早期・晩期および弥生時代の豊富な資料―

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

2006

国　土　交　通　省
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

『立馬Ⅰ遺跡』正誤表

頁・行	誤	正
182 頁 14 行／ 183 頁 4 行／ 188 頁 10 ／ 191 頁 11 行	上の段地点	上の段地点(27 区)
197 頁観察表	17 区 2 号住居跡	27 区 2 号住居跡
P L 39 − 9	写真天地逆	
P L 44	67 ± 2 68 ± 1	68 ± 1 67 ± 1
P L 46	27 − 17 住 1	27 − 17 ± 1

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第388集

立馬（だつめ）Ⅰ遺跡

―縄文時代早期・晩期および弥生時代の豊富な資料―

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

2006

国　土　交　通　省
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

口絵1

1．遺跡上空から西に丸岩を望む

2．土器棺墓(17区58号土坑)

3．粕川テフラ堆積状況(17区30号土坑)

4．平安時代の陥し穴(17区29号土坑)

口絵2

1．女鳥羽川式土器

2．女鳥羽川式土器出土状況

3．赤く塗られた縄文時代晩期の土器

序

八ツ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的に計画され、現在は吾妻郡長野原町ならびに同東吾妻町を中心に工事が進められています。八ツ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成６年度から開始され、本年度で13年目を迎えました。

発掘調査の増加により、徐々にこれまで不明だった時代の西吾妻地域の様子がわかり始めています。今回報告する立馬Ⅰ遺跡は、現在の集落から離れた山中にありましたが、豊富な湧出量を持つ湧き水を背景にして、古くから居住地として適地だったことがわかってきました。成果として、縄文時代草創期から弥生時代中期後半まで、間断なく続く遺構と出土遺物の検出があります。なかでも長野県の影響を強く持つ縄文時代晩期終末の土器を伴う住居跡や、弥生時代中期後半の土器棺墓などが特筆されるでしょう。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省八ツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が基本的な歴史資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成18年11月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　高橋勇夫

例　　言

1．本書は、八ツ場ダム建設工事に関連する東原防災ダム(その3)(その4)及び立馬沢流路工工事に伴う事前発掘調査報告書である。

2．遺跡所在地　吾妻郡長野原町大字林甲1536、乙1536、甲1537、乙1537、1541、甲1544、乙1544、1550、1557-2、1557-3、1559、1560番地ほか

3．事業主体　国土交通省

4．調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間及び担当者

(1)発掘調査　調査期間　平成13年(2001)12月26日～同年12月28日(第1次調査)
平成14年(2002)4月1日～同年7月30日(第1次調査)
平成17年(2005)8月10日～同年11月9日(第2次調査)

担当課長　下城　正(平成13・14年度)　中沢　悟(平成17年度)

調査担当者　平成13年度12月26日～同年12月28日　藤巻幸男　石田　真
平成14年度4月1日～同年7月30日　飯森康広
平成14年度4月1日～同年5月31日　石田　真
平成14年度5月27日～同年6月28日　石川雅俊
平成14年度6月3日～同年7月30日　麻生敏隆　唐沢友之
平成14年度7月1日～同年7月30日　原　信行
平成17年度8月10日～同年9月30日　友廣哲也　森田真一
平成17年度11月8日～同年11月9日　友廣哲也　森田真一

(2)整　理　整理期間　平成16年(2004)4月1日～同18年3月31日

ただし、立馬Ⅱ遺跡の整理作業を同時並行して行う。

調査研究部長兼整理課長　佐藤明人

整理担当　飯森康広

整理嘱託員　中島(旧姓萩原)園子(平成16年4月16日～同年11月30日)

整理補助員　井草峯子　新保純子　石村千恵美　吉田豊子
黒岩扶美枝(平成17年)　山口由利枝(同年)　富澤友理(同年)

(3)事　務　理事長　小野宇三郎(平成13～16年)　高橋勇夫(同17年)

常務理事　吉田　豊(平成13・14年)　住谷永市(同15・16年)
木村裕紀(同17年)

事業局長　赤山容造(平成13年)　神保侑史(同14～16年)
津金澤吉茂(同17年)

総務部長　矢崎俊夫(平成17年)

管理部長　住谷　進(平成13年)　萩原利通(同14・15年)
矢崎俊夫(同16年)

八ツ場ダム調査事務所長　水田　稔(平成14・15年)　巾　隆之(同16・17年)

同調査研究部長　津金澤吉茂(平成14・15年) 佐藤明人(同16・17年)
同調査研究課長　下城　正(平成14年) 斉藤和之(同15・16年)
中沢　悟(同17年)
同庶務係長　野口富太郎(平成14～16年) 町田文雄 (同17年)
同庶務係　矢嶋知恵子(平成14・15年) 富澤よねこ(同16・17年)

6．報告書作成関係者

編集　飯森康広

本文執筆　第3章第7節第1項1、第4章第2節第1項2　橋本　淳、
上記以外　飯森康広

平安時代遺物の年代比定　神谷佳明、石材鑑定　渡辺弘幸

遺物写真撮影　佐藤元彦、金属器保存処理　関　邦一　小材浩一　津久井桂一　森田智子

機械実測　酒井史恵　廣津真希子　友廣裕子

7．縄文土器接合・復元作業の進行管理及び選定、縄文時代早期・前期土器の分類は、嘱託員中島園子が主に担当した。

8．縄文時代草創期・早期土器の選定・実測図作成について、橋本淳の指導・助言を仰いだ。

9．自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託して行った。

10. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）

国土交通省関東地方建設局八ツ場ダム工事事務所、長野原町教育委員会、設楽博巳、金子直行、鈴木徳雄、菅谷通保、富田孝彦、石田真、中島園子

11. 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

12. 発掘調査にあっては、地元長野原町をはじめとし、嬬恋村、六合村、草津町、東吾妻町、中之条町などから多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡　　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。

住居跡　1：60　　住居跡のカマド　1：30　　土坑　1：40

土坑（陥し穴）　1：60　　埋設土器・焼土　1：30

3．遺構図中のスクリーントーンは、下記の通りである。

焼土　　炭　　攪乱

4．遺物図の縮尺は下記のとおりであり、それ以外の場合のみ、各挿図番号に()書きを付した。

石鏃・異形石器・装身具、古銭	1：1
縄文時代早期土器、ドリル・石匙・スクレイパー・砥石、鉄器	1：2
縄文土器破片、土器　杯・椀・皿類	1：3
スタンプ・敲き石・打斧・磨斧・石棒・磨石・凹み石	1：3
縄文土器、石皿・石棒	1：4

5．遺物図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

土器　ススス　　石器　磨滅部分

6．胎土に繊維を含む土器は、断面図にドットを添付して示した。

7．テフラについては、略称を使用している。詳細は第5章を参照。

YPk	浅間草津黄色軽石(As－YPk)	浅間B軽石	浅間Bテフラ(As－B)
柏川テフラ	浅間柏川テフラ(As－Kk)		

8．遺物写真は、遺構図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。

9．遺物観察表(土器)の法量は、口径を口、底径を底、器高を高と略した。推定径には全て()を付した。遺物観察表(石器・鉄器類)の地模は、欠損品の数値の場合()を付して完形品と区別した。

10．遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議　監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版標準土色帖』を参考に色名を使用した。

11．遺構外出土石器については、形態的特徴から弥生時代～近世と分別できるものを除き、縄文時代石器として掲載した。

12．竪穴住居跡の主軸方位については、カマドを有する辺に対して直交方向を主軸として計測を行った。カマドを有しないものについては、長辺方向を主軸として計測した。

13．掘立柱建物跡の全体規模については、梁間×桁行の順で示し、庇を伴う場合は＋を付すこととした。

14．17区の遺構は2面調査を行った関係で、全体図を第1面・第2面に分割した。第1面は弥生時代以降を対象とし、第2面は縄文時代とした。付番については、調査順位を優先したため、時代順とは逆転している。第1面で遺構深度の深い遺構は、第2面の遺構を壊している関係となる。遺構の重複関係については、第1

面が第２面に後出することを前提する。新旧関係を示す場合には、第１・２面に分かれる場合、新旧関係を省略することとした。

15. 土坑（陥し穴）の時期決定は、テフラ層位を基準として平安時代以降と平安時代以前に分け、後者は弥生土器混入を指標に、更に弥生時代以降とそれ以前に分けた。それ以外の土坑の時期決定は、出土遺物を基本にしながら、層位及び埋没土を考慮して決定した。

16. 遺構名称及び付番は、原則調査時点のものをそのまま使用するよう努めた。このため、以下のとおり欠番が生じた。この場合、遺構番号の振り替えなどにより欠番とならなかったものは除外する。

住居　17区５、27区３

掘立柱建物跡　17区１・３

土坑 16区109、17区42・87・92・120・151・162・169・170・171・186・191、26区９、27区６

焼土　17区３

17. 縄文土器・弥生土器は、時期・形式・施文形態によって13群の土器群に分類し、適宜種類により細分を施した。詳細については、第３章第７節に示してある。なお、出土した遺物について、未掲載遺物も含めて土器群・石器種類ごとに、遺構別・グリッド別に点数を数えている。詳細は第４章のとおりである。この場合、接合された破片は１つとして数えるが、別の遺構・別のグリッドから出土した場合には、接合され同一個体であっても、それぞれ１点として数えている。

参考文献

・大川清・鈴木公雄・工楽善通編　1996年　『日本土器事典』　雄山閣

目　次

口絵
序
例言
凡例
本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章　調査の経過と方法
　第1節　調査に至る経緯と経過・・・・・・・1
　第2節　調査の方法・・・・・・・2
　第3節　調査区の設定・・・・・・・3
　第4節　基本土層・・・・・・・5
第2章　地理的環境と歴史的環境
　第1節　地理的環境・・・・・・・7
　第2節　歴史的環境・・・・・・・7
第3章　検出された遺構と遺物
　第1節　遺跡の概要・・・・・・・13
　第2節　縄文時代（第2面）
　　第1項　竪穴住居跡・・・・・・・19
　　第2項　竪穴状遺構・土坑
　　　1　竪穴状遺構・・・・・・・28
　　　2　土坑・・・・・・・28
　　第3項　集石遺構・・・・・・・34
　第3節　弥生時代（第1面）
　　第1項　竪穴住居跡・・・・・・・38
　　第2項　土坑・・・・・・・41
　第4節　平安時代以前
　　第1項　土坑・・・・・・・44
　　第2項　土坑(陥し穴)・・・・・・・47
　　第3項　焼土遺構・・・・・・・68
　第5節　弥生時代以降
　　第1項　土坑・・・・・・・69
　　第2項　土坑(陥し穴)・・・・・・・70
　　第3項　焼土遺構・・・・・・・75
　第6節　平安時代以降
　　第1項　竪穴住居跡・・・・・・・75

第２項　掘立柱建物跡・ピット群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第３項　竪穴状遺構・土坑
１．竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
２．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第４項　土坑(陥し穴)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第５項　溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第６項　焼土遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第７節　遺構外出土遺物
第１項　土器
１．縄文時代草創期・早期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
２．縄文時代前期～晩期終末・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
３．弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第２項　遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第４章　まとめ
第１節　遺構
第１項　竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第２項　掘立柱建物跡・ピット群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第３項　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
第４項　陥し穴
１．構築年代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
２．形態的特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
３．掘削工具痕跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
４．分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
第２節　遺物
第１項　土器
１．概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
２．縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
３．弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
４．平安時代以降・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・176
第２項　石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・176
第５章　自然科学分析
第１節　立馬Ⅰ遺跡における火山灰分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・182
第２節　立馬Ⅰ遺跡における植物珪酸体火山灰分析・・・・・・・・・・・・・・・188
第３節　立馬Ⅰ遺跡における花粉分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・191

挿 図 目 次

第 1 図　調査区設定図(No.36地区)……4
第 2 図　基本土層図……6
第 3 図　周辺遺跡の位置図(1/37,500)……11
第 4 図　周辺遺跡の位置図(下図　長野県都市計画図)……12
第 5 図　7・17区第2面全体図……14
第 6 図　7・17区第1面全体図……15
第 7 図　16・17・26区第2面全体図(1)……16
第 8 図　16・17・26区第2面全体図(2)……17
第 9 図　27区全体図……18
第10図　17区6号住居跡……19
第11図　17区6号住居跡出土遺物(1)……20
第12図　17区6号住居跡出土遺物(2)……21
第13図　17区6号住居跡出土遺物(3)……22
第14図　17区6号住居跡出土遺物(4)……23
第15図　17区7号住居跡……25
第16図　17区7号住居跡出土遺物(1)……25
第17図　17区7号住居跡出土遺物(2)……26
第18図　27区4号住居跡……26
第19図　27区4号住居跡出土遺物(1)……27
第20図　17区2号竪穴状遺構……28
第21図　17区66、67、68、69、74、76、82号土坑……29
第22図　17区86、94、95、96、111、112号土坑……30
第23図　17区竪穴状遺構・土坑出土遺物……31
第24図　17・27区竪穴状遺構・土坑出土遺物……32
第25図　27区9、10、11、14、17、24号土坑……33
第26図　17区1号集石遺構……34
第27図　17区2号集石遺構……34
第28図　17区3号集石遺構……34
第29図　17区4号集石遺構……34
第30図　17区1号集石遺構出土遺物……35
第31図　17区2・3号集石遺構出土遺物……36
第32図　17区4号集石遺構出土遺物……37
第33図　17区3号住居跡……38
第34図　17区3号住居跡出土遺物……39
第35図　27区2号住居跡……40
第36図　27区2号住居跡出土遺物……40
第37図　17区58号土坑……42
第38図　17区58号土坑出土遺物……42
第39図　17区63、72号土坑……43
第40図　27区1号土坑……43
第41図　17・27区土坑出土遺物……43
第42図　7区4号土坑……44
第43図　17区8、51、83、158、160、164、166、168号土坑……45
第44図　17区179、180、188、206号土坑……46
第45図　26区10号土坑……46
第46図　7区1、2、3号土坑……48
第47図　7区5、6号土坑……49
第48図　16区101、102、104号土坑……50
第49図　16区105、107、109、119号土坑……51
第50図　17区31、33、40号土坑……53
第51図　17区41、45、55、56号土坑出土遺物……54
第52図　17区100、113、114、156、159、163号土坑……55
第53図　17区172、173、174、177号土坑……57
第54図　17区178、181、182、183、184号土坑……58
第55図　17区185、187号土坑……59
第56図　17区189、190、192、193、194、195号土坑……61
第57図　17区197、198、199、200、209、210号土坑……62
第58図　17区114号土杭出土遺物……63
第59図　26区1、2、3、4、5、6号土坑……65
第60図　26区7、8、14、17号土坑……66
第61図　26区19、22、23、24号土坑……67
第62図　17区4、5、6号焼土遺構……68
第63図　17区38、43、64号土坑・出土遺物……69
第64図　17区34、91、93、157、161号土坑……71
第65図　17区165、176号土坑……72
第66図　26区11、12号土坑……72
第67図　26区13、15、16号土坑……73
第68図　26区18、20、21号土坑……74
第69図　17区1号焼土遺構……74
第70図　17区1号住居跡カマド……75
第71図　17区1号住居跡……76
第72図　17区1号住居跡出土遺物……77
第73図　17区2号住居跡カマド……78
第74図　17区2号住居跡・出土遺物……79
第75図　17区4号住居跡……80
第76図　17区4号住居跡カマド……81
第77図　17区4号住居跡出土遺物……81
第78図　27区1号住居跡・出土遺物……82
第79図　16・17区掘立柱建物跡・ピット群・出土遺物……84
第80図　17区2号掘立柱建物跡……85
第81図　17区ピット群(1)……86
第82図　17区ピット群(2)……87
第83図　27区1号掘立柱建物跡・ピット群……88
第84図　17区1号竪穴状遺構……89
第85図　27区1号竪穴状遺構……89
第86図　17区1号竪穴状遺構出土遺物……90
第87図　16区103、106号土坑……91
第88図　17区9、13、36、46、49、77号土坑・出土遺物……92
第89図　17区77、101、102、103、104号土坑……93
第90図　27区7、8、12、13・15号土坑……94
第91図　27区12号土坑出土遺物、16区108号土坑……95
第92図　17区29、30号土坑……96
第93図　17区32、35・39号土坑……97
第94図　17区35・39号土坑出土遺物……97
第95図　17区79、90、157、175号土坑……98
第96図　26区25号土坑……99
第97図　17区2号溝出土遺物……100
第98図　17区2号焼土遺構……101
第99図　17区7号焼土遺構・出土遺物……101
第100図　17区縄文時代草創・早期土器(第Ⅰ・Ⅱ群)出土位置図……109
第101図　17区縄文時代前期土器(第Ⅲ・Ⅳ群)出土位置図……110
第102図　17区縄文時代中・後・晩期土器(第Ⅴ～Ⅸ群)出土位置図……111
第103図　17区弥生時代土器・石器出土位置図……112
第104図　17区縄文時代遺構外出土土器(1)……113
第105図　17区縄文時代遺構外出土土器(2)……114
第106図　17区縄文時代遺構外出土土器(3)……115
第107図　17区縄文時代遺構外出土土器(4)……116
第108図　17区縄文時代遺構外出土土器(5)……117
第109図　17区縄文時代遺構外出土土器(6)……118
第110図　17区縄文時代遺構外出土土器(7)……119
第111図　17区縄文時代遺構外出土土器(8)……120
第112図　17区縄文時代遺構外出土土器(9)……121
第113図　17区縄文時代遺構外出土土器(10)……122
第114図　17区縄文時代遺構外出土土器(11)……123
第115図　17区縄文時代遺構外出土土器(12)……124
第116図　17区縄文時代遺構外出土土器(13)……125

第117図　17区縄文時代遺構外出土土器(14)……126
第118図　17区縄文時代遺構外出土土器(15)……127
第119図　17区縄文時代遺構外出土土器(16)……128
第120図　17区縄文時代遺構外出土土器(17)……129
第121図　17区縄文時代遺構外出土土器(18)……130
第122図　17区縄文時代遺構外出土土器(19)……131
第123図　17区縄文時代遺構外出土土器(20)……132
第124図　17区縄文時代遺構外出土土器(21)……133
第125図　17区縄文時代遺構外出土土器(22)……134
第126図　17区弥生時代遺構外出土土器(1)……134
第127図　17区弥生時代遺構外出土土器(2)……135
第128図　17区弥生時代遺構外出土土器(3)……136
第129図　17区縄文時代石器出土位置図……137
第130図　17区縄文時代遺構外出土石器(1)……138
第131図　17区縄文時代遺構外出土石器(2)……139
第132図　17区縄文時代遺構外出土石器(3)……140
第133図　17区縄文時代遺構外出土石器(4)……141
第134図　17区縄文時代遺構外出土石器(5)……142
第135図　17区縄文時代遺構外出土石器(6)……143
第136図　17区縄文時代遺構外出土石器(7)……144
第137図　17区縄文時代遺構外出土石器(8)……145
第138図　17区縄文時代遺構外出土石器(9)……146
第139図　17区縄文時代遺構外出土石器(10)……147
第140図　17区縄文時代遺構外出土石器(11)……148
第141図　17区縄文時代遺構外出土石器(12)……149
第142図　17区縄文時代遺構外出土石器(13)……150
第143図　17区縄文時代遺構外出土石器(14)……151
第144図　17区縄文時代遺構外出土石器(15)……152
第145図　17区弥生時代遺構外出土石器(1)……153
第146図　26区縄文・弥生土器・石器出土位置図……154
第147図　17区平安時代遺構外出土遺物……155
第148図　17区近世遺構外出土遺物……155
第149図　26区縄文・弥生時代遺構外出土遺物(1)……155
第150図　26区縄文・弥生時代遺構外出土遺物(2)……156
第151図　26区平安時代以降遺構外出土遺物……156
第152図　27区縄文・弥生土器・石器出土位置図……157
第153図　27区遺構外出土遺物(1)……158
第154図　27区遺構外出土遺物(2)……159
第155図　27区遺構外出土遺物(3)……160
第156図　？・17区陥し穴分布図……164
第157図　26区陥し穴分布図……165
第158図　出土土器分類別割合図(1)……168
第159図　出土土器分類別割合図(2)……169
第160図　調査区別出土一覧……177
第161図　石器別石材割合図(1)……178
第162図　石器別石材割合図(2)……179

表　目　次

第1表　周辺遺跡の一覧……9・10
第2表　遺構・グリッド別土器出土数一覧(1)……170
第3表　遺構・グリッド別土器出土数一覧(2)……172
第4表　遺構・グリッド別土器出土数一覧(3)……174
第5表　遺構・グリッド別石器出土数一覧(1)……180
第6表　遺構・グリッド別石器出土数一覧(2)……181
第7表　土坑(ピット群)計測表……193
第8表　出土遺物観察表……193

写真図版目次

ＰＬ１　１．17区全景
　　２．同１号住居跡周辺
　　３．同１号住居跡周辺
　　４．同２号住居跡周辺
　　５．７区全景
ＰＬ２　１．17区二次調査全景
　　２．同全景
　　３．同東調査部分近景
　　４．26区全景
　　５．同南端部分
ＰＬ３　１．16区近景
　　２．同近景
　　３．26区中央部近景
　　４．同北側部分
　　５．同北端部分
　　６．同北端部分
　　７．27区全景
　　８．同近景
ＰＬ４　１．17区６号住居跡全景
　　２．同遺物出土状態
　　３．同土器尖底部出土状況
　　４．同炉全景
　　５．同炉土層断面
ＰＬ５　１．17区７号住居跡全景
　　２．同土層断面
　　３．同遺物出土状態
　　４．同遺物出土状態
　　５．同遺物出土状態
ＰＬ６　１．27区４号住居跡全景
　　２．同土層断面
　　３．同炉全景
　　４．同炉確認状況
　　５．同炉土層断面
ＰＬ７　１．17区２号壁穴状遺構全景
　　２．同土層断面
　　３．７区４号土坑全景
　　４．同４号土坑土層断面
　　５．17区51号土坑全景
　　６．同51号土坑土層断面
　　７．同66号土坑全景
　　８．同66号土坑土層断面
　　９．同67号土坑全景
　　10．同67号土坑土層断面
　　11．同68号土坑遺物出土状態
　　12．同68号土坑全景
　　13．同68号土坑土層断面
　　14．同69号土坑全景
　　15．同69号土坑土層断面
ＰＬ８　１．17区74号土坑全景
　　２．同74号土坑土層断面
　　３．同76号土坑全景
　　４．同76号土坑土層断面
　　５．同82号土坑石出土状態
　　６．同82号土坑土層断面
　　７．同82号土坑完掘状態
　　８．同94号土坑遺物出土状態
　　９．同94号土坑遺物出土状態
　　10．同94号土坑完掘状態
　　11．同96号土坑全景
　　12．同95号土坑全景
　　13．同95号土坑土層断面
　　14．同111号土坑全景
　　15．同111号土坑土層断面
ＰＬ９　１．17区112号土坑全景
　　２．同112号土坑土層断面
　　３．同158号土坑全景
　　４．同158号土坑土層断面
　　５．同160号土坑全景
　　６．同160号土坑土層断面
　　７．同164号土坑全景
　　８．同164号土坑土層断面
　　９．同166号土坑全景
　　10．同166号土坑土層断面
　　11．同168号土坑全景
　　12．同168号土坑土層断面
　　13．同179号土坑全景
　　14．同179号土坑土層断面
　　15．同180号土坑全景
　　16．同180号土坑土層断面
　　17．同188号土坑全景
　　18．同188号土坑土層断面
ＰＬ10　１．17区206号土坑全景
　　２．同206号土坑土層断面
　　３．27区９号土坑全景
　　４．同９号土坑土層断面
　　５．同10号土坑全景
　　６．同10号土坑土層断面
　　７．同14号土坑全景
　　８．同14号土坑土層断面
　　９．同11号土坑全景
　　10．同24号土坑全景
　　11．17区１号集石遺構全景
　　12．同２号集石遺構全景
　　13．同２号集石遺構確認状況
　　14．同２号集石遺構完掘状態
　　15．同３号集石遺構確認状況
ＰＬ11　１．17区３号集石遺構全景
　　２．同３号集石遺構完掘状態
　　３．同３号集石遺構遺物出土状態
　　４．同３号集石遺構遺物出土状態
　　５．同４号集石遺構全景
　　６．同Ｈ－６グリッド遺物出土状況
　　７．同Ｈ－５・６グリッド遺物出土状況
　　８．同Ｈ－５・６グリッド遺物出土状況
　　９．同Ｉ－９・10グリッド遺物出土状況
　　10．同Ｉ－７・８グリッド遺物出土状況
　　11．同Ｇ－４グリッド遺物出土状況
　　12．27区Ｔ－12グリッド遺物出土状況
　　13．同磨製石斧出土状態
ＰＬ12　１．17区３号住居跡遺物出土状態
　　２．同全景
　　３．同土層断面
　　４．同炉全景
　　５．同炉土層断面
ＰＬ13　１．27区２号住居跡全景
　　２．同土層断面
　　３．同土層断面
　　４．同炉全景

5．同炉土層断面
PL14 1．17区58号土坑確認状況
2．同58号土坑確認状況
3．同58号土坑確認状況
4．同58号土坑遺物出土状態
5．同58号土坑遺物出土状態
6．同58号土坑土層断面
7．同58号土坑土層断面
8．同58号土坑土層断面
9．同58号土坑遺物出土状態
PL15 1．17区58号土坑遺物出土状態
2．同58号土坑遺物出土状態
3．同58号土坑遺物除去状態
4．同58号土坑完掘状態
5．同63・72号土坑全景
6．同72号土坑遺物出土状態
7．同63号土坑土層断面
8．27区1号土坑全景
PL16 1．27区17号土坑遺物出土状態
2．同17号土坑土層断面
3．17区Ⅰ－8グリッド弥生時代遺物出土状態
4．同Ⅰ－9グリッド礎石出土状態
5．同8号土坑全景
6．同83号土坑全景
7．26区10号土坑全景
8．同10号土坑土層断面
9．7区1号土坑土層断面
10．同2号土坑全景
11．同2号土坑土層断面
12．同3号土坑全景
13．同3号土坑土層断面
14．同5号土坑全景
15．同5号土坑土層断面
PL17 1．7区6号土坑全景
2．同6号土坑土層断面
3．16区101号土坑全景
4．同101号土坑土層断面
5．同102号土坑全景
6．同102号土坑土層断面
7．同104号土坑使用面全景
8．同104号土坑土層断面
9．同104号土坑掘り方全景
10．同104号土坑土層断面
PL18 1．16区105号土坑全景
2．同105号土坑土層断面
3．同107号土坑全景
4．同107号土坑土層断面
5．同109号土坑全景
6．同109号土坑全景
7．同109号土坑土層断面
8．同109号土坑土層断面
9．17区31号土坑全景
10．同31号土坑土層断面
11．同33号土坑全景
12．同33号土坑土層断面
13．同40号土坑全景
14．同40号土坑土層断面
15．同40号土坑杭跡確認状況
16．同40号土坑杭跡確認状況
PL19 1．17区41号土坑全景
2．同41号土坑土層断面
3．同45号土坑全景
4．同45号土坑土層断面
5．同55号土坑全景
6．同55号土坑土層断面
7．同55号土坑掘削工具痕跡
8．同55号土坑確認状況
9．同56号土坑全景
10．同56号土坑土層断面
11．同100号土坑全景
12．同100号土坑土層断面
13．同113号土坑全景
14．同113号土坑土層断面
15．同114号土坑全景
16．同114号土坑土層断面
PL20 1．17区156号土坑全景
2．同156号土坑土層断面
3．同159号土坑全景
4．同159号土坑土層断面
5．同163号土坑全景
6．同163号土坑土層断面
7．同172号土坑全景
8．同172号土坑土層断面
9．同173号土坑全景
10．同173号土坑土層断面
11．同174号土坑全景
12．同174号土坑土層断面
13．同177号土坑全景
14．同177号土坑土層断面
15．同178号土坑全景
16．同178号土坑土層断面
17．同181号土坑全景
18．同181号土坑土層断面
PL21 1．17区182号土坑全景
2．同182号土坑土層断面
3．同183号土坑全景
4．同183号土坑土層断面
5．同184号土坑全景
6．同184号土坑土層断面
7．同185号土坑全景
8．同185号土坑土層断面
9．同187号土坑全景
10．同187号土坑土層断面
11．同189号土坑全景
12．同189号土坑土層断面
13．同190号土坑全景
14．同190号土坑土層断面
15．同192号土坑全景
16．同192号土坑土層断面
17．同193号土坑全景
18．同193号土坑土層断面
PL22 1．17区194号土坑全景
2．同194号土坑土層断面
3．同195号土坑全景
4．同195号土坑土層断面
5．同196号土坑全景
6．同196号土坑土層断面
7．同197号土坑全景
8．同197号土坑土層断面
9．同198号土坑全景
10．同198号土坑土層断面
11．同199号土坑全景
12．同199号土坑土層断面
13．同200号土坑全景

14. 同200号土坑土層断面
15. 同200号土坑全景
16. 同200号土坑土層断面
17. 同210号土坑全景
18. 同210号土坑土層断面

P L 23　1．26区１号土坑全景
2．同１号土坑土層断面
3．同２号土坑全景
4．同２号土坑土層断面
5．同３号土坑全景
6．同３号土坑土層断面
7．同４号土坑全景
8．同４号土坑土層断面
9．同５号土坑全景
10．同５号土坑土層断面
11．同６号土坑全景
12．同６号土坑土層断面
13．同７号土坑全景
14．同７号土坑土層断面
15．同８号土坑全景
16．同８号土坑土層断面
17．同14号土坑全景
18．同14号土坑土層断面

P L 24　1．26区17号土坑全景
2．同17号土坑土層断面
3．同19号土坑全景
4．同19号土坑土層断面
5．同22号土坑全景
6．同22号土坑土層断面
7．同23号土坑全景
8．同23号土坑土層断面
9．同24号土坑全景
10．同24号土坑土層断面
11．17区４号焼土土層断面
12．同４号焼土掘り方全景
13．同５号焼土全景
14．同５号焼土土層断面
15．同６号焼土土層断面
16．同38号土坑全景
17．同38号土坑土層断面

P L 25　1．17区43号土坑全景
2．同43号土坑土層断面
3．同64号土坑全景
4．同64号土坑土層断面
5．同34号土坑全景
6．同34号土坑土層断面
7．同91号土坑全景
8．同91号土坑土層断面
9．同93号土坑全景
10．同93号土坑土層断面
11．同157号土坑全景
12．同157号土坑土層断面
13．同161号土坑全景
14．同161号土坑土層断面
15．同165号土坑全景
16．同165号土坑土層断面
17．同176号土坑全景
18．同176号土坑土層断面

P L 26　1．26区11号土坑全景
2．同11号土坑土層断面
3．同11号土坑硬化面
4．同12号土坑全景
5．同12号土坑土層断面
6．同13号土坑全景
7．同13号土坑土層断面
8．同15号土坑全景
9．同15号土坑土層断面
10．同16号土坑全景
11．同16号土坑土層断面
12．同16号土坑掘削工具痕跡
13．同16号土坑掘削工具痕跡
14．同18号土坑全景
15．同18号土坑土層断面
16．同20号土坑全景
17．同20号土坑土層断面

P L 27　1．26区21号土坑全景
2．同21号土坑土層断面
3．17区１号焼土確認状況
4．同１号焼土土層断面
5．同１号焼土掘り方全景
6．同１号住居跡全景

P L 28　1．17区１号住居跡遺物出土状態
2．同土層断面
3．同土層断面
4．同カマド全景
5．同カマド石出土状態
6．同カマド土層断面
7．同２号住居掘り方全景
8．同土層断面

P L 29　1．17区２号住居跡全景
2．同カマド全景
3．同カマド遺物出土状態
4．同床下土坑全景
5．同床下土坑土層断面

P L 30　1．17区２号住居跡二次調査全景
2．同鉄製品出土状態
3．同４号住居跡全景
4．同掘り方全景
5．同カマド土層断面

P L 31　1．17区４号住居跡カマド全景
2．同カマド遺物出土状態
3．同土層断面
4．同土層断面29号土坑重複部分
5．27区１号住居跡全景

P L 32　1．27区１号住居跡土層断面
2．同カマド全景
3．同カマド土層断面
4．同炭化材出土状態
5．16区１号掘立柱建物跡全景

P L 33　1．16区１号掘立柱建物跡Ｐ２全景
2．17区２号掘立柱建物跡全景
3．同全景
4．同Ｐ１土層断面
5．同Ｐ３土層断面
6．同Ｐ４土層断面

P L 34　1．17区２号掘立Ｐ５土層断面
2．同Ｐ６土層断面
3．同Ｐ７土層断面
4．同123号土坑土層断面
5．同130号土坑土層断面
6．同２号土坑土層断面
7．同５号土坑土層断面
8．同18号土坑土層断面
9．同21号土坑土層断面

10. 同97号土坑柱痕部分
11. 同97号土坑土層断面
12. 同201号土坑土層断面
13. 同202号土坑土層断面
14. 同203号土坑土層断面
15. 同204号土坑土層断面
16. 同205号土坑土層断面
17. 同207号土坑土層断面
18. 同208号土坑土層断面

PL35 1．7区7号土坑土層断面
2．同8号土坑土層断面
3．同9号土坑土層断面
4．17区ピット群全景
5．同1号溝全景
6．同2号溝全景
7．同3号溝全景
8．同4号溝全景
9．同4号溝土層断面
10. 27区1号掘立柱建物跡全景
11. 同P1全景
12. 同P2土層断面

PL36 1．27区1号掘立P3土層断面
2．同P5土層断面
3．同3号土坑全景
4．同5号土坑全景
5．同16号土坑全景
6．同18号土坑土層断面
7．17区1号竪穴状遺構全景
8．同土層断面
9．27区1号竪穴状遺構全景
10. 16区103号土坑土層断面
11. 同106号土坑全景
12. 同106号土坑土層断面
13. 17区9号土坑全景
14. 同9号土坑粘土面土層断面

PL37 1．17区9号土坑粘土面全景
2．同9号土坑石出土状態
3．同13号土坑全景
4．同36号土坑全景
5．同49号土坑全景
6．同49号土坑土層断面
7．同77号土坑全景
8．同101号土坑土層断面
9．同102号土坑全景
10. 同102号土坑土層断面
11. 同103号土坑土層断面
12. 同104号土坑全景
13. 同104号土坑土層断面

PL38 1．27区7号土坑全景
2．同7号土坑土層断面
3．同8号土坑全景
4．同12号土坑鉄製劫錆車出土状態
5．同12号土坑全景
6．同12号土坑土層断面
7．同13・15号土坑全景
8．同13・15号土坑土層断面
9．16区108号土坑全景
10. 同108号土坑土層断面
11. 17区29号土坑全景
12. 同29号土坑土層断面
13. 同29号土坑杭痕跡状況
14. 同29号土坑杭3・4近景

PL39 1．17区29号土坑二次調査全景
2．同30号土坑全景
3．同30号土坑土層断面
4．同30号土坑土層断面
5．同30号土坑杭痕群
6．同32号土坑杭痕群
7．同32号土坑土層断面
8．同32号土坑全景
9．同32号土坑断ち割り状況
10. 同32号土坑杭1土層断面
11. 同32号土坑杭4土層断面
12. 同32号土坑杭5土層断面
13. 同35号土坑全景
14. 同35号土坑土層断面
15. 同35号土坑二次調査全景
16. 同39号土坑全景
17. 同39号土坑土層断面

PL40 1．17区79号土坑全景
2．同90号土坑全景
3．同90号土坑土層断面
4．同167号土坑全景
5．同167号土坑土層断面
6．同175号土坑全景
7．同175号土坑土層断面
8．26区25号土坑全景
9．同25号土坑土層断面
10. 同7号焼土土層断面
11. 同2号焼土土層断面
12. 17区基本土層
13. 同調査前既存状況痕全景

報 告 書 抄 録

ふりがな	だつめいちいせき
書名	立馬Ⅰ遺跡
副書名	八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	11
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	388
編著者名	飯森康広　橋本　淳
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20061130
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377－8555
電話番号	0279－52－2511
住所	群馬県渋川市北橋町大字下箱田784－２

遺跡名ふりがな	だつめいちいせき
遺跡名	立馬Ⅰ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	0037
北緯(日本測地系)	363245
東経(日本測地系)	1384113
北緯(世界測地系)	363256
東緯(世界測地系)	1384101
調査期間	20011226－20011228／20020401－20020730／20050810－20051109
調査面積	5738
調査原因	八ツ場ダム建設
種別	集落／散布地
主な時代	縄文／弥生／平安／中世／近世
遺跡概要	集落－縄文－竪穴住居＋竪穴状遺構＋土坑＋焼土＋集石遺構－土器＋石器／集落－弥生－竪穴住居＋土坑＋焼土－土器＋石器／集落－平安－竪穴住居＋竪穴状遺構＋土坑＋焼土－土師器＋須恵器＋灰釉陶器＋紡錘車＋鉄器／集落－中近世－掘立柱建物＋土坑＋溝－陶器＋鉄滓＋古銭
特記事項	縄文時代晩期終末の竪穴住居、弥生時代中期後半の土器棺墓

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現　国土交通省関東地方建設局)と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町(現東吾妻町)教育委員会が協議し、平成６年３月18日「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年４月１日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

立馬Ⅰ遺跡の第１次調査は、周知の遺跡である立馬遺跡(長野原町遺跡台帳37)に隣接することから、平成13年度工事発注する東原防災ダム(その３)(その４)工事に際して試掘対象となった。平成13年12月12日、県教育委員会文化財保護課(現　文化課)による試掘調査が実施され、事業対象地面積約4,000㎡のうち、約2,800㎡が本調査対象と確定した。本調査は次年度に予定されたが、車両通行上最小限の拡幅部分約130㎡だけ平成13年度中に調査することとなった。しかし、予定部分に縄文時代から中世にわたる遺構が密集して存在することが判明したため、調査を中断し次年度本調査となった。

第２次調査は東原防災ダム下流整備のため立馬沢流路工工事が計画され、第１次調査の隣接地であることから、調査対象地2,024㎡が平成17年５月18日国土交通省から示された。８月10日県文化課の試掘調査により、調査範囲約2,938㎡が確定した。なお、調査地内に東京電力によって設置されている電柱も移設対象となったが、調査前の移転が不可能なため、該当部分を後回しとして分割調査を行うこととなった。

日誌抄録

第１次調査

平成13年度

2001年．12．26　17区調査開始

28　17区１号住居確認、調査次年度継続。

平成14年度

2002年．４．11　27区、７・17区、26区表土掘削

16　遺構確認調査開始

23　７・17区１面１～３号住居(弥生・平安時代)調査開始

５．10　26区土坑群調査開始

20　７・17区第１面調査終了、下面縄文・弥生包含層調査開始。

22　17区58号土坑(弥生時代)調査開始。26区中央部調査終了、26区北端・16区表土掘削開始。

６．５　調査進捗のため、１班合流して２班体制となる。

6　17区包含層調査から第２面調査へ移行。

26　17区58号土坑出土遺物保存処理のため本部搬出。

27　17区７号住居(縄文時代早期)調査開始

７．５　27区調査開始。立馬Ⅱ遺跡調査のため１班体制に戻る。

8　27区１号住居(平安時代)調査開始
12　航空写真による遺跡全景写真撮影
19　7・17区・26区調査終了
26　27区４号住居(縄文晩期)調査開始
30　27区調査終了。古環境研究所自然科学分析現地調査。
8．23　17区出土の弥生時代中期後半土器棺墓(58号土坑)について上毛新聞発表。

第２次調査

平成17年度

2005年．8．10　7・17区表土掘削開始
19　土坑調査開始
9．12　昭和女子大学学生現場見学
13　17区２号住居(第１次調査残)調査開始
14　八ツ場ダム調査事務所内立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡整理班現場研修見学
29　航空写真による遺跡全景写真撮影
30　一部電柱部分を残し調査終了
11．8　電柱部分陥し穴１基調査開始
9　調査終了

第２節　調査の方法

調査区は３カ所に分かれており、中グリッド名で７・17区調査区(以下調査区略す。ほか同じ)、16・17・26区、27区と呼称し、遺構については中グリッドごとに付番を行った。ただし、16区については隣接する立馬Ⅱ遺跡も含まれるため、土坑は101号から付番することとした。16・17・26区は傾斜地であり、総延長約135m、巾10m弱と細長いことから調査手順を２回に分け、中央部を先行することによって、廃土処理などを行った。

表土掘削は、掘削機(バックホー)によって行った。

竪穴住居跡・土坑などの調査は、埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定し、縄文包含層はグリッド設定線を原則使用して観察用ベルトを設定し、ジョレン・移植ゴテほかにより掘削を行った。

遺構断面(縮尺１/20)測量および写真撮影を行った。

遺構平面測量にあたっては、業者委託によるデジタル平板測量を基本として、任意に縮尺１/10、１/20、１/40、１/100を選択して行った。縄文時代早期・弥生時代包含層遺物については、希少な遺物であるという判断から、可能な限り出土位置を平面実測し、出土地点観測に努めた。なお、出土位置を実測しなかった包含層遺物についても、将来的な分布範囲の地点的な集約を想定して、４ｍグリッドごとに分別した。

記録写真の撮影には、基本的に６×７、35㎜のモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。

７・17区は遺構が密集しており、弥生時代～中近世までを第１面として調査し、下層は縄文・弥生時代遺物包含層としてグリッドごとに土層観察面を設置して調査を行った。遺構が確認された場合、随時平面的な調査に切り替え、第２面として集約を図った。ただし、Ⅵ層上面を最終遺構確認面として縄文早期の住居・土坑を調査しており、便宜的にこれを第２面として地形を計測し、全体図を作成した。

第２次調査対象地は、第１次調査対象地の東西両側に当たる。東側は住宅地であったことから、宅地造成に伴う削平および盛り土が顕著であった。建物敷地はAs-YPk上層まで掘削したのち、盛り土していたことから、当初の予測よりも遺構面が消滅し、盛り土を全て除去して遺構を確認した。この結果、遺構深度の深い土坑以外は全く発見できなかった。また、南側は傾斜地を埋めていたことから、表土下を遺構確認面として調査を行った。

第２次調査の西側は尾根から続く傾斜地で、表土下の地形は複雑であり、南北で土層の堆積が異なっていた。北側は傾斜が急なため黒色の堆積が少なく、Ⅵ層以下を遺構確認面とした。また、南側には谷状にくぼむ部分があったことから、黒色土が厚く堆積する部分が見られ、一部柏川テフラと思われる火山灰もシミ状に堆積していた。ただし、第２次調査では出土遺物が少なかったため、発掘作業の安全性などからⅥ層まで遺構確認面が下げられた。この結果、第２次調査の遺構確認面は、概ね第１次調査時の第２面に相当することとなってしまった。なお、陥し穴とみられる土坑も調査深度が浅くなっており、形状などを根拠として分別を行った。

第３節　調査区の設定

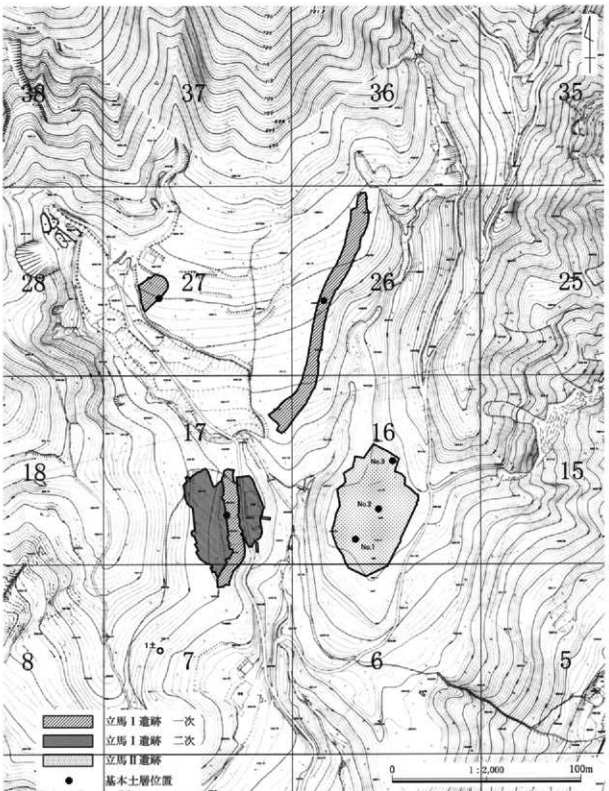
国家座標（2002.4改正以前の日本測地系を使用）に基づく。長野原町域を含め、八ツ場ダム関連の建設事業に及ぶ東吾妻町大戸付近に至る範囲に方眼がすでに設定されている。全体的な設定状況については、群埋文2002『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』に詳述されているため、参照願いたい。

１㎞方眼をもとに地区（大グリッド）が設定され、本遺跡はNo36地区に所在する。グリッドの設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系を使用しており、方眼の原点は南東隅にあたる東吾妻町大柏木付近の座標値X＝＋58000.0、Y＝－97000.0の地点である。大グリッドはこの地点から北西に向い60区画が設定されている。

さらに100m方眼をもとに、区（中グリッド）が設定される。本遺跡は調査区が３カ所に散在している関係で、該当する中グリッドが多く、７・16・17・26・27区にわたる。なお、16区の多くは、立馬Ⅱ遺跡に該当している。

グリッドの最小単位として、４m方眼によるグリッド設定がある。A－１～Y－25。100m方眼の中の中グリッド内を４m方眼で625区画に分割する。グリッドの番号はX軸にアルファベット、Y軸に算用数字を用いる。X軸は東から西へA～Yまで、Y軸は南から北へ１～25までの番号を付す。グリッドの呼称は、南東隅のグリッド番号を使用し、中グリッド名たとえば７区などを冠して呼称した。

八ツ場ダム関連埋蔵文化財調査では、別に便宜的な遺跡略称を設けており、本遺跡は４：林地区にあることから、YD４－11が付番されている。



第１図　調査区設定図（No36地区）

第4節　基本土層

本遺跡及び立馬Ⅱ遺跡は小河川を挟んで立地することから別の遺跡地として把握されている。しかし、基本土層は同様な様相を持つことから、地域的な確認も含めて本節で両者を並記する。なお、基本土層観測位置は第1図に示してある。

本遺跡中央部は北側山岳部から続く尾根が張り出しており、傾斜地のため黒色土などの流失が著しく、表土下はすぐローム層となり、以下As-YPkが厚さ1m弱堆積している。尾根を挟んだ南北面は西側に南流する立馬沢へ向かって傾斜する軽微な谷地形をなし、1.5mを超える黒色土が堆積して、縄文土器包含層を形成している。また、尾根は緩く比較的広いことから、居住に適した南斜面として縄文集落が形成されたものである。

立馬沢を挟んで西側の立馬Ⅰ遺跡は、立馬沢上流で二筋の流路に挟まれた狭い南斜面と縁辺になっている。26区は東側に流れる立馬沢支流に向かって傾斜するものの、土砂の崩落などは少なく比較的安定した土層堆積を形成している。17区も南東傾斜地であるが、西側背後のやや尾根から急激に東傾斜することから土砂の堆積が著しく、2m近い黒色土が堆積し、弥生～平安時代遺物包含層と縄文時代早期・前期包含層の二枚の文化層を持っている。27区は立馬沢湧水点に近く北側背後に急峻な山岳部を背負い、中～大角礫を含んだ崩落土が数層にわたっている。遺構はこうした崩落土を掘り込むかたちで造られている。

16・17・26区基本土層

Ⅰ　黒褐色土　As-Aをわずか含む。表土。

Ⅱ　灰褐色土　黄色小礫を少量含む。

Ⅲ　黒褐色土　As-YPk・黄色小礫を少量含む。

　一部土坑に堆積するAs-B・As-Kkや色調の明るい褐色土はこの層中に含まれる。

Ⅳ　暗褐色土　As-YPk・細粒黄色軽石をやや多く含む。

Ⅴ　黒褐色土　As-YPkをやや多く含む。

Ⅵ　灰褐～褐色土　モザイク状に黄褐色粘質土を含む。ローム漸移層。

Ⅶ　黄褐色粘質土　下層は色調鈍く堅く締まる。

Ⅶ'　にぶい黄褐色粘質土　中～大角礫（山石）を多く含む。崩落土堆積層。

As-YPk　上位に堅く締まったオリーブ～桃色火山灰層が一部で見られる。

　下部の地形変化により、層厚は非常に異なる。

Ⅷ　黄褐色粘質土　下層に粗粒白色軽石（As-OK）を含む。

27区　基本土層

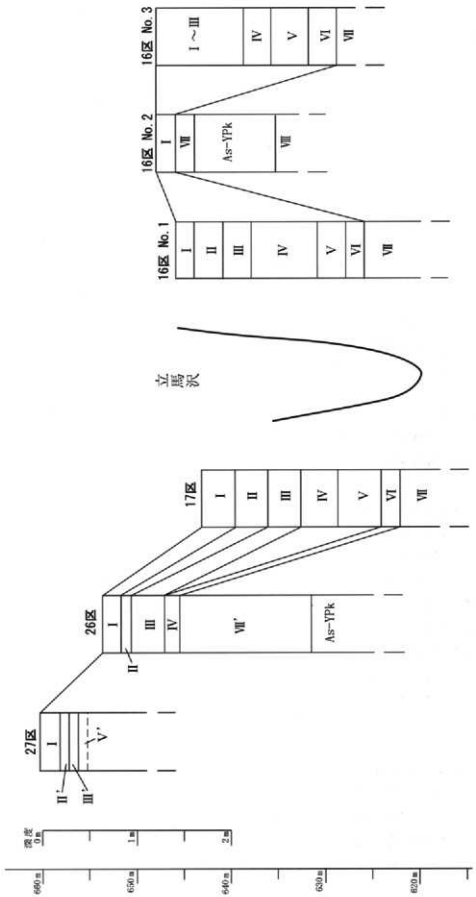
Ⅰ　黒褐色土　中～大角礫（山石）を多く含む。表土。

Ⅱ'　灰褐色土　中～大角礫（山石）を多く含む。

Ⅲ'　中～巨角礫　オリーブ褐色土が混じる。崩落土堆積層。

Ⅴ'　暗灰色土　中～大角礫（山石）を多く含む。

　以下、にぶい黄褐色礫混土と黒褐色礫混土が不規則な互層をなす。崩落土堆積層。


立馬Ⅱ
立馬Ⅰ
16区 No.3
16区 No.2
16区 No.1
17区
26区
27区
立馬沢
I～Ⅲ
As-YPk
Ⅶ'
深度
0m
1m
2m
660m
650m
640m
630m
620m

第２図　基本土層図

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　地理的環境

長野原町の中心部を流れる吾妻川は、深い峡谷を刻んで東流している。今から200～100万年前、浅間山に重なる領域には別の火山活動があり、三原付近（嬬恋村）に湖を形成していた。この湖に堆積した粘土は「吾妻粘土」などの名で呼ばれ、厚さ50m以上で標高1,100m辺りまで分布し、湖の最高水位を知ることができる。この湖は浅間山の活動以前には埋没して現在の吾妻川の流路が現れ、渓谷を刻み始めたらしいが、その後も浅間火山活動による堆積物によって埋没が繰り返され、流域に河岸段丘地形を形成した。段丘は最上位・上位・中位・下位の概ね４つにまとめられている。

吾妻川は南北を険しい山地に囲まれている。北側の高間山・王城山は90万年前くらいに活動していたもので、激しい浸食を受けて現形を留めていない。南側の管峰（かんぼう）も古い火山で、活動時期は100万年ほど前と言われ、岩峰丸岩を形成する溶岩を流出している。更に南方には現在も活動する浅間山がそびえる。噴火活動はおおよそ10数万年前からとみられ、天仁元年(1108)に浅間Ｂ軽石、天明３年(1783)に浅間Ａ軽石を降下させた噴火は、前掛山山頂の釜山を火口としている。当遺跡におけるテフラの具体的な堆積状況については、第５章自然科学分析を参照願いたい。

本遺跡は吾妻川北岸の王城山南麓に位置し、大字林に属する。王城山の浸食は激しく、深い谷が山頂に向かって数条延びている。折の沢もその一つであるが、本遺跡が隣接する渓流は折の沢の支流立馬沢であり、近くに湧水点を持つ２つの流路が合流してできている。西方約500m以西には林の集落があり、最上位段丘面に載っている。ふつう段丘面はほぼ水平に近いが、ここでは吾妻川に向かって低くなっている。これは山から流れてきた谷川による土砂の堆積によるものである。この段丘面の最上部の標高は約650mであり、本遺跡の標高とほぼ等しい。

小字名である「立馬」(だつめ）は珍しい地名であり興味深い。地元の古老たちの話によれば、３つほどの由来が考えられている。①馬が立ち上がるほど斜面が険しい所、②馬に乗せた荷駄を詰め替える場所、③狩猟場で追い込んだ獲物を撃つ場所を「立間」(たつま）といい、一部では「ダツメ」ともいう。以上、それぞれが最もらしい由来であるが、以前紹介したとおり、立馬Ⅱ遺跡はまさしく、狩猟における「立間」であり、調査前まで狩猟が行われていた証言を得ることができた(『立馬Ⅱ遺跡』第７章)。よって③の由来が最も有力であると考える。なお、本文に掲載のとおり、本遺跡では狩猟用の陥し穴とみられる土坑が多数発見されており、示唆に富む結果となっていることを付言しておきたい。

第２節　歴史的環境

旧石器時代　遺構は未発見だが、柳沢城跡(34)で細石器文化期の珪質頁岩製のスクレイパー１点が出土する。

縄文時代　草創期では表土採集遺物ながら、横壁勝沼遺跡(22)で槍先形尖頭器１点が発見されている。

早期では、表裏縄文・撚糸文・押型文などの土器群と獣骨の出土した石畑岩陰遺跡(25)が著名であるが、近年調査された楡木Ⅱ遺跡(４)は、撚糸文期の竪穴住居跡17軒が調査された全国的にも希少な遺跡である。本遺跡と同じく、林地区に属し現集落の西端部に位置する。湧水に近い南斜面に立地するなど共通点が多く、示唆に富む遺跡である。

前期では、坪井遺跡(27)で前期初頭(花積下層式期)の住居跡１軒、篠坪遺跡(28)で前期前葉（二ツ木式期)

の住居跡２軒、長畝Ⅱ遺跡(26)で関山～黒浜式期の住居跡２軒、楡木Ⅱ遺跡では黒浜式・有尾式～前期後半(諸磯式)の住居跡９軒が調査されている。

中期前半（五領ヶ台式・阿玉台式期）の調査例は少なく、楡木Ⅱ遺跡で住居跡２軒が調査されたほか、幸神遺跡(20)で完形の阿玉台式土器を持つ円形土坑１基が発見された程度であったが、隣接する立馬Ⅱ遺跡(2)で住居10軒が発見された。中期後半以降になると、広い範囲で集落が見られる。横壁中村遺跡(21)では、中期後半(加曽利Ｅ式期)から後期中葉(加曽利Ｂ式期)にわたる住居跡250軒余が見つかり、現在でも調査進行中である。また、横壁中村遺跡と吾妻川を挟んで北西対岸にある長野原一本松遺跡(19)でも、中期後半(加曽利Ｅ式期)から後期中葉(加曽利Ｂ式期)にわたる住居跡250軒以上が報告され、現在も調査を継続している。

晩期では石畑岩陰遺跡で氷式や安行式、千網式土器などが収集されている。本遺跡も同様に多様な側面を持つが、住居跡の発見は八ツ場地区で初めての事例となった。川原湯勝沼遺跡(18)では晩期から弥生時代初頭に属する土坑２基が調査され、再葬墓の可能性が指摘されている。林地区では上原Ⅳ遺跡(11)で浮線文系の土器片多数が出土しているが、土坑１基が当該期である可能性以外、遺構は不明な状況である。

弥生時代　吾妻地域では、中期前半の岩櫃山式土器の標識遺跡である岩櫃山・鷹ノ巣岩陰遺跡(東吾妻町)など当期を代表する遺跡があり、資料の増加が期待されていた。横壁中村遺跡では樫王式土器の甕を埋設する再葬墓の可能性がある土坑１基が検出されている。本遺跡発見の中期後半の土器棺墓も、八ツ場地区では初めての調査事例であり注目される。

古墳時代　吾妻川流域の古墳の分布は、確実な面では東吾妻町岩島付近が西限となっている。集落については林地区の林宮原遺跡Ⅱ(17)で５世紀末～６世紀初頭の住居跡１軒が調査され、八ツ場地区では初めての発見となった。ついで、下原遺跡(8)でも同時期の住居跡１軒が見つかっている。

古代　律令制下の上野国内の郡・郷の状況は、10世紀の『和名類聚抄』の記載に詳しいが、吾妻郡では長田・伊参・大田の３つの郷しか記載がなく、本地域を含む西吾妻地域の状況を知ることはできない。平安時代の調査遺跡では住居跡が点在する程度のものが多かったが、楡木Ⅱ遺跡では９世紀後半から10世紀前半の住居跡17軒が発見された。中でも、「三家」の墨書を有する土器が数点あることは注目される。「ミヤケ」は古代朝廷の直轄領を指しており、県内では緑野屯倉や佐野三家の存在が『日本書紀』や『山ノ上碑』の記載で知られていた。吾妻郡内ではその存在の可能性を初めて示す資料となり、非常に重要な成果である。また林集落の中央部に位置する林宮原遺跡Ⅱでは、わずか200㎡の調査面積の中で、９世紀後半から10世紀前半の住居跡６軒が重複して発見されており、周辺に同期の大きな集落が広がる可能性を見せている。

中世　仁治２年(1241)、本地域は三原荘と呼ばれ海野幸氏の領有であった（『吾妻鏡』）が、正確な荘域は不明である。海野一族は下屋・鎌原・西窪・羽尾などの一族を輩出して本地域各所に広がり、領主層として勢力を温存していった。林地区は羽尾氏の勢力下であったらしく、永禄９年(1566)に滋山城攻略に戦功のあった湯本氏は、武田信玄から羽尾領之内　林村で20貫文の領地を得ている（『加沢記』所載文書）。なお、羽尾氏は武田氏の吾妻討略の中で没落を遂げる。同じく林村を領有した地侍に横谷氏がある。寛文８年(1668)に所領を安堵された横谷勘十郎は、横谷村・松尾村・林村で合わせて359石余を相続している（上田横谷家文書）。領有開始の時期は不明だが、吾妻渓谷を挟んで横谷村・林村両方を領有していた点で注目される。

中世城郭では長野原城(33)や丸岩城(35)があるが、発掘調査によって常滑焼・珠洲焼の大甕をはじめ、多彩な出土遺物を有することが判明した柳沢城(34)も注目される。林地区では小字名「堀之内」の範囲が「林城」(30)として紹介され、領主の居所と推測されている。また、王城山神社の裏山には「林の烽火台」跡(31)が良好に残存しており、林集落との関わりが想像される。

調査遺跡では、楡木Ⅱ遺跡で信仰物「つぶらっこ様」との有機的な関係を思わせる掘立柱建物群があり、一つ東側の谷地に位置する二反沢遺跡(10)でも14～16世紀の遺物を多く有する区画遺構が発見された。吾妻川に面する下原遺跡(8)では15世紀代の中世屋敷遺構が調査されている。以上から、林地区の西端部にやや多く中世遺跡が分布することがわかってきた。

近世　天正18年(1590)小田原合戦によって北条氏が滅び、徳川家康が江戸に入部することとなったが、永禄年間以来吾妻地域を支配してきた真田氏は、豊臣秀吉との結びつきを背景に勢力を温存していた。そうした関係も関ヶ原合戦では悪い方向に左右することとなったが、一族分離で乗り切った末、真田信幸が沼田藩領に加え、信濃国上田までも領有することとなった。やがて真田氏は本家にあたる上田藩（松代藩）と沼田藩に分かれることとなり、天和元年(1681)には真田信利・信澄の悪政のためか沼田藩が改易となり、以後長野原地域のほとんどが天領(幕府領)となされた。この真田信利が実施した寛文2年(1662)の伊賀守検地では、長野原地域の中で林村が571石余と最大の石盛りとなっている。

天明3年(1783)の浅間山噴火による泥流被災の遺跡では、八ツ場ダム関連の発掘調査をはじめ、県内各所の吾妻川・利根川流域で畑跡などの調査事例が増加してきている。中でも、町内長野原字坪井で泥流に被災した小林助右衛門屋敷跡(29)は広く知られた長者屋敷であり、杉田玄白の手記によっても被災の状況が伝えられてきた。一部発掘調査されて礎石建物跡などが発見され、その実態が漸くわかりはじめている。なお、本遺跡は標高が高いため、泥流被害は及んでいない。

本遺跡周辺の交通を知る資料として、道しるべと馬頭観音がある。林集落から本遺跡へと向かう道の分岐点に道しるべ(36)があり「右ハ　ぬまた　者(は)るな道　左ハ　やま」と刻まれ、本遺跡方向は山道で往還という意識は認められない。馬頭観音群(37)は伝承地名「あしぐら観音」に集中的に造立されており、宝暦4年(1754)を最古に5基が並んでいる。山仕事の道にしては馬頭観音の造立量が多く感じられるが、そこから奥は久森沢川に降りていくだけとなっている。

参考文献

長野原町　1976　『長野原町誌』上巻

長野原町　1988　『長野原町の自然』

長野原町　1993　『長野原町の民俗』

長野原町　2004　『町内遺跡Ⅳ』

松原孝志編　2002　『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

諸田康成編　2002　『長野原一本松遺跡(1)』財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

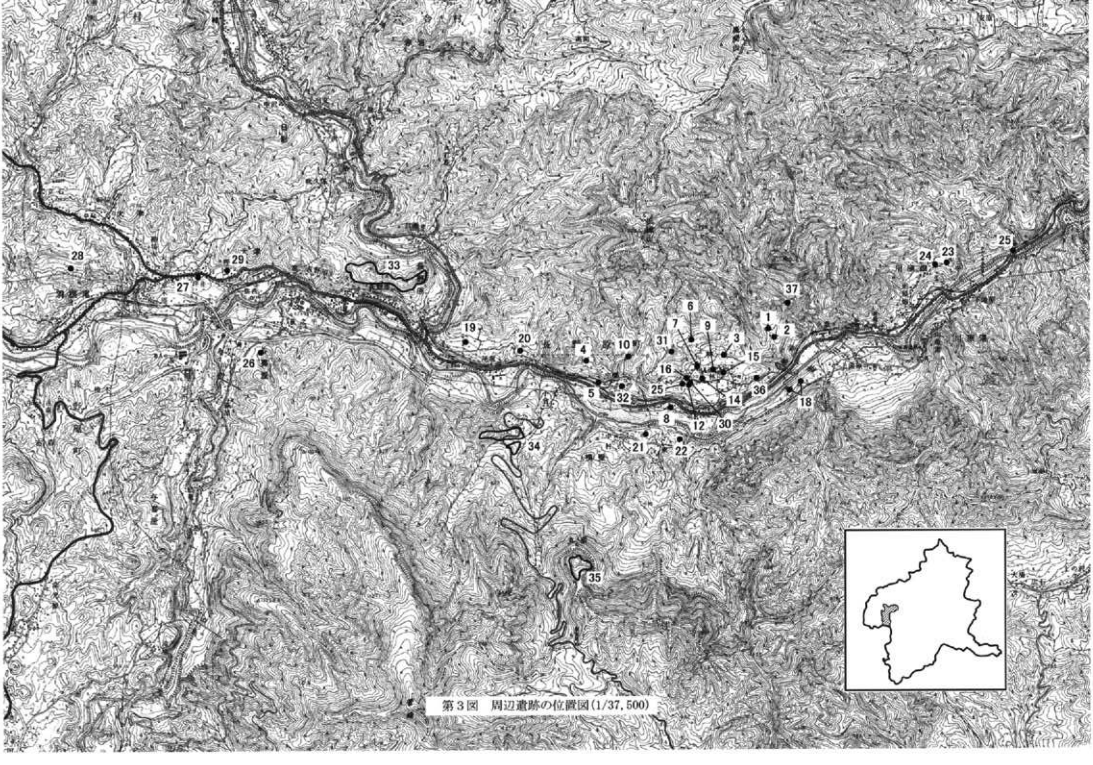
山崎一　山口武夫共著　1972『吾妻郡城郭史』

第1表　周辺遺跡の一覧

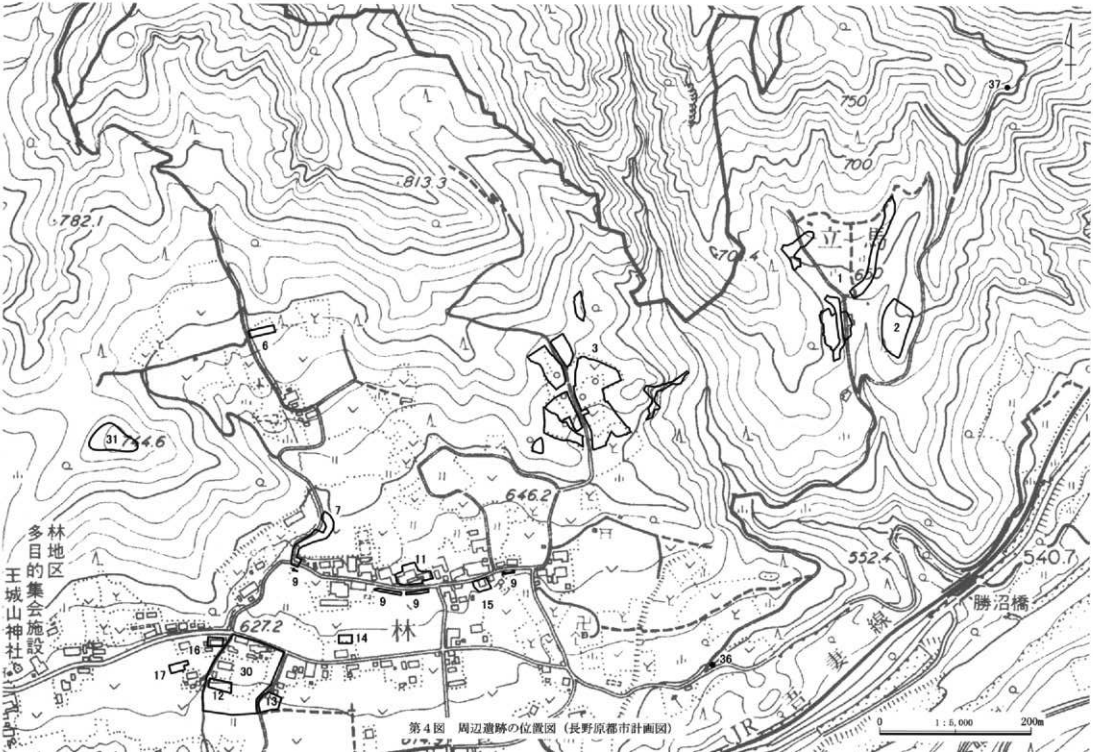
No	遺跡名	所在地	概　要	文献等
1	立馬Ⅰ遺跡	林	本報告書	群埋文 2006『立馬Ⅱ遺跡』
2	立馬Ⅱ遺跡	林	縄文時代中期前半～後半の住居11軒。縄文時代早期包含層遺物多量出土。縄文時代～平安時代の陥し穴多数検出。	群埋文 2006『立馬Ⅱ遺跡』
3	花畑遺跡	林	平安時代の住居3軒、陥し穴51基などを検出。	群埋文 2002『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』
4	楡木Ⅱ遺跡	林	縄文時代早期前半（撚糸文）の住居17軒、前期住居3軒、中期住居2軒。平安時代住居（9～10世紀）17軒。「三家」と書く墨書土器、刻字「称」を持つ石製紡錘車あり。中世の掘立柱建物群多数検出。信仰岩石「つぶらっこ様」と関係か。	群埋文 2001『年報20』・同2002『年報21』・同2005『年報24』・同2006『年報25』

No.	遺跡名	所在地	概　要	文献等
5	檜木Ⅲ遺跡	林	縄文時代前期、弥生時代前期を中心とする包含層検出。	No.3と同じ
6	上原Ⅱ遺跡	林	トレンチ調査の結果、遺構は検出されなかった。	群埋文 2005『年報24』
7	上原Ⅳ遺跡	林	縄文時代後期敷石住居跡４軒、晩期の土器包含層、近世の河道跡検出。	群埋文 2004『年報23』
8	下原遺跡	林	古墳時代中期住居跡１軒、平安時代住居跡１軒、中世の屋敷跡１カ所(15世紀代)、中世から近世の畑跡３面検出。	群埋文 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同2006『下原遺跡(2)』
9	林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡	林	縄文時代・平安時代の遺物を検出した。	群埋文 2005『年報24』
10	二反沢遺跡	林	中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡検出。	群埋文 2001『年報20』
11	上原Ⅳ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2003『町内遺跡Ⅲ』
12	林中原Ⅰ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2003『町内遺跡Ⅲ』
13	林中原Ⅰ遺跡Ⅱ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
14	林中原Ⅰ遺跡Ⅳ	林	縄文時代後期敷石住居跡１軒ほかを検出。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
15	林中原Ⅱ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
16	林宮原遺跡	林	試掘調査の結果、縄文時代の包含層検出。	長野原町教委 2003『町内遺跡Ⅲ』
17	林宮原Ⅱ遺跡	林	古墳時代中期住居跡１軒、平安時代住居跡（９～10世紀）６軒検出。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
18	川原湯勝沼遺跡	川原湯	縄文時代晩期の埋甕２基。平安時代の住居跡３軒、天明三年の畑跡検出。	群埋文 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』
19	長野原一本松遺跡	長野原	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。調査継続中。	群埋文 2002『長野原一本松遺跡(1)』、同2001～2005『年報20～24』
20	幸神遺跡	長野原	縄文時代中期住居跡２軒ほかを検出。	群埋文 1997『年報16』、同1998『年報17』、同2006『年報25』
21	横壁中村遺跡	横壁	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。中世の屋敷跡１カ所。鍛冶関連遺構あり。調査継続中。	群埋文 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同2005『横壁中村遺跡(2)』、同2005『横壁中村遺跡(3)』
22	横壁勝沼遺跡	横壁	縄文時代土坑数基。槍先形尖頭器１点表採。平安時代住居跡１軒検出。	No.3と同じ
23	三平Ⅰ遺跡	川原畑	縄文時代前期住居跡３軒・土坑６基ほか、平安時代以降の掘立柱建物３棟・焼土10基などを検出。	群埋文 2005『年報24』、同2006『年報25』
24	三平Ⅱ遺跡	川原畑	縄文時代草創期～前期の土器・石器を多量に検出。掘立柱建物７棟ほかを含む中世屋敷跡１カ所。	群埋文 2005『年報24』
25	石畑岩陰遺跡	川原畑	縄文時代草創期～晩期の包含層検出。	『群馬県史』資料編１
26	長納Ⅱ遺跡	与喜屋	縄文時代前期住居跡２軒、中期後半住居跡２軒検出。	長野原町教委 1992『長納Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
27	坪井遺跡	大津	縄文時代前期初頭住居跡１軒、中期後半住居跡19軒、平安時代住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟ほかを検出。	長野原町教委 1992『長納Ⅱ遺跡・坪井遺跡』、同2000『坪井Ⅱ遺跡』長野原町教委 2001『幕坪遺跡』
28	幕坪遺跡	羽根尾	縄文時代前期前葉住居跡２軒ほかを検出。	長野原町教委 2001『幕坪遺跡』
29	小林勘右衛門屋敷跡	長野原	天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林勘右衛門屋敷の一部、蔵石建物跡２棟、土蔵跡１棟ほかを検出。	長野原町教委 2005『小林家屋敷跡』
30	林城	林	地名「堀ノ内」という以外詳細不明。	県教委 1988『群馬県の中世城館跡』
31	林の修火台跡	林	王城山神社の裏山に所在。照切２本。	長野原町教委保管『林の修火台縄張り図』金子康夫氏作図
32	中棚の砦跡	林	伝承のみ、詳細不明。	県教委 1988『群馬県の中世城館跡』
33	長野原城	長野原	長野原中心部の裏山にある拠点的な城郭。	同上
34	柳沢城	横壁	土塁や堀を調査。珠洲焼の大甕ほかや中国陶磁器片出土。	長野原町教委
35	丸岩城	横壁	草津道の須賀尾峠を守備する山城。	県教委 1988『群馬県の中世城館跡』
36	林の道しるべ	林	造立年不明「右ハぬまた者（は）るな　道　左ハ　やま」	長野原町 1989『長野原町の石造文化財』
37	馬頭観音群（あしぐら観音）	林	文化４年以降、明治大正期にわたる数基の馬頭観音群。	

略称　群埋文：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、県教委：群馬県教育委員会、長野原町教委：長野原町教育委員会



第３図　周辺遺跡の位置図(1/37,500)



第4図　周辺遺跡の位置図（長野原都市計画図）

第3章　検出された遺構と遺物

第1節　遺跡の概要

7・17区　本調査区は縄文時代草創期から弥生時代後期まで、多少の消長はあるものの、連続して遺構と遺物があることから、本遺跡の性格を良く反映している調査区である。遺構・遺物とも多く、二面調査を行った。第1面は概ね弥生時代以降の遺構確認面である。竪穴住居跡では、平安時代の住居跡3軒、弥生時代中期後半の住居跡1軒が検出された。ピットについても、調査区北側1号住居跡周辺に集中が見られる。一部に直線的に並んで掘立柱建物跡や構列の可能性を持つものもあったが、関連づけが困難なため、ピット群として一括して扱った。

土坑では、弥生時代中期後半の3号住居跡の南側に隣接して、同時期の土器棺墓である58号土坑がほぼ完全な形で検出された。同じく土坑形態は明確でないが、72号土坑も土器棺墓の可能性を持つ遺構である。また、陥し穴とみられる土坑は、調査区全体に広く分布して確認される。時期は平安時代の遺物等を伴うものを平安時代以降とし、弥生土器を伴うものを弥生時代以降、それ以外を平安時代以前として3時期に分類した。29号土坑は10世紀前半に比定される4号住居跡を壊す陥し穴で、廃棄後は12世紀初頭の火山灰（浅間B軽石、柏川テフラ）に覆われており、時期が限定される点で注目される。

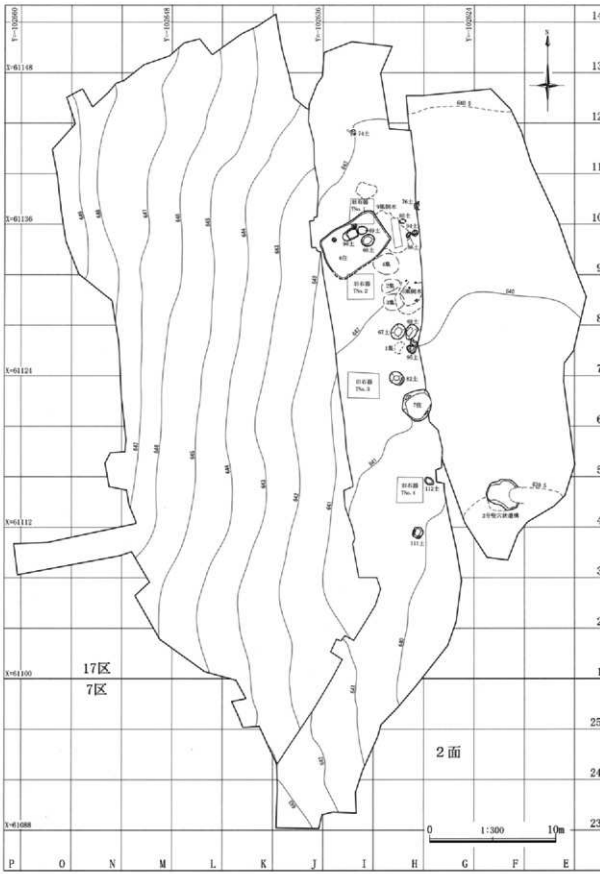
第2面は、縄文時代遺構確認面となる。同時期の厚い包含層も含み遺構外遺物も多く、掘削過程で確認された遺構も含んでいる。竪穴住居跡では、縄文時代早期の住居跡2軒を検出した。また、人頭大の石を集めた集石遺構も4基検出され、3号集石では大形の撚糸文深鉢が出土している。

なお、調査は第1次と第2次の二度に分かれたため、分割して調査する遺構も発生した。第2次調査による17区西側は、西側尾根部に向かって急傾斜となる関係で、陥し穴以外の遺構・出土遺物ともに少なく、17区東側も調査以前宅地化されていたため、遺構が少ない。この東側については、本来第1次調査同様、遺構・遺物が多く存在していたものと想像される。

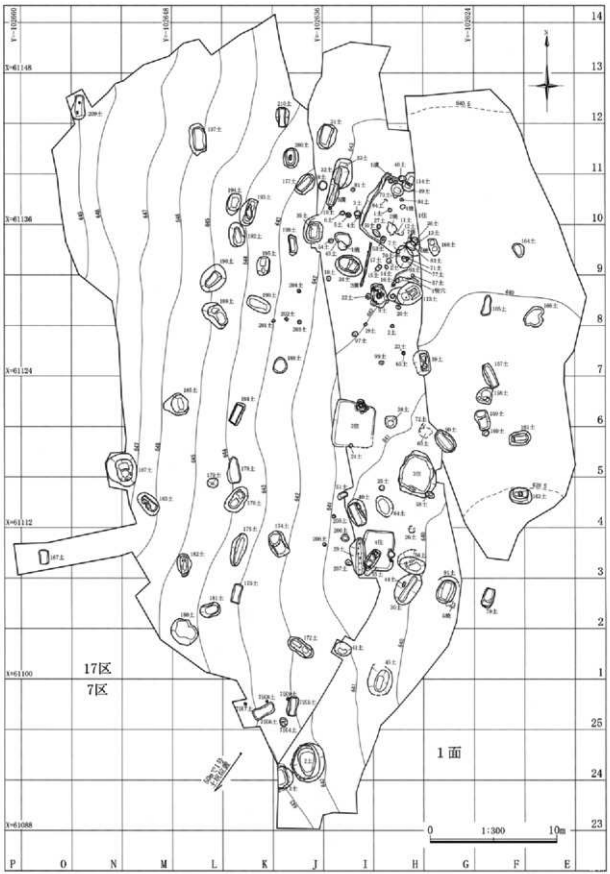
16・17・26区　調査区最大幅約12mと狭く、総延長は約140mと長大で、比高差は約15mを計る傾斜地である。調査区全体では陥し穴である土坑が全体に集中部を持ちながら散在する。時期についても7・17区と同様に、平安時代の遺物等を伴うものを平安時代以降とし、弥生土器を伴うものを弥生時代以降、それ以外を平安時代以前として3時期に分類した。

南端部分の16・17区部分では、中近世に属する建物跡と関連するピット群（柱穴）が検出された。建物敷地は山側（北西）を段切りカットして整地している。

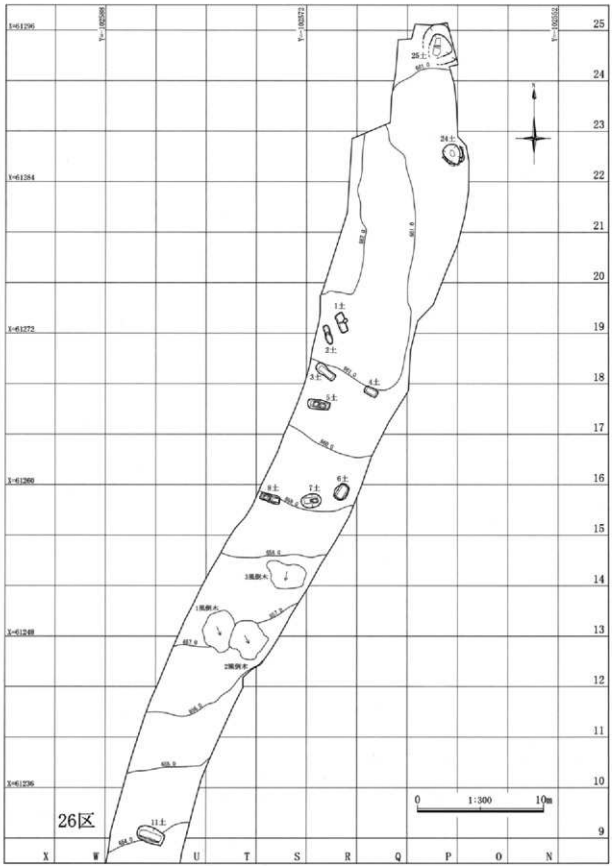
27区　傾斜がきつく背後の山岳部が近いため、崩落した山石が多く堆積している。ただし、西側に面する立馬沢は湧水点に近いため谷が浅く、生活水の供給は最も良い立地となっている。遺構は弥生時代から平安時代まで同一面で確認したが、トレンチ確認により検出された縄文時代晩期終末の竪穴住居跡1軒については確認面が異なっている。竪穴住居跡では、ほかに平安時代の住居跡1軒と弥生時代中期前半～中葉の住居跡1軒が検出される。縄文時代晩期終末の4号住居跡は、長野県の遺跡を標識とする女鳥羽川式土器を出土し注目される。包含層遺物は、縄文時代晩期終末から弥生時代前期まで連続する遺物が出土し、他の調査区と様相を異にする。調査範囲内では、陥し穴と思われる土坑も発見されていない。



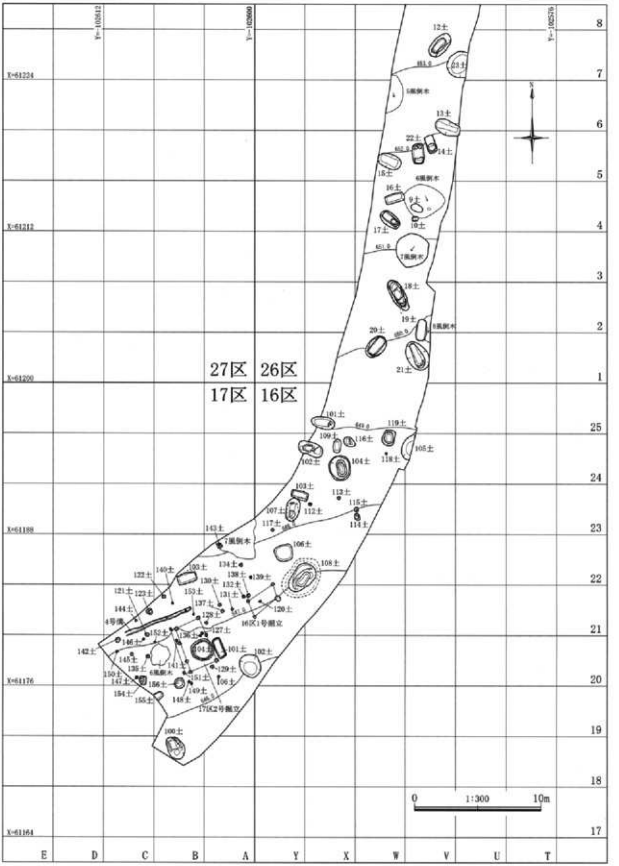
第５図　７、17区第２面全体図



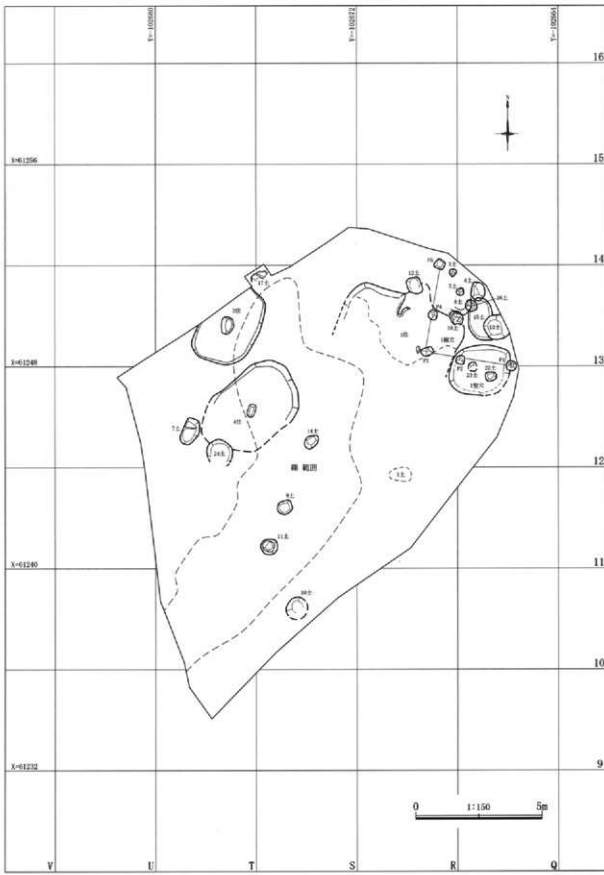
第６図　７、17区第１面全体図



第７図　16、17、26区第２面全体図（１）



第８図　16、17、26区第２面全体図（２）


Y=-1505860
Y=-1505872
Y=-1505884
16
15
14
13
12
11
10
9
X=61256
X=61248
X=61240
X=61232
N
V
U
T
S
R
Q
0
1:150
5m

第９図　27区全体図

第２節　縄文時代（第２面）

第１項　竪穴住居跡

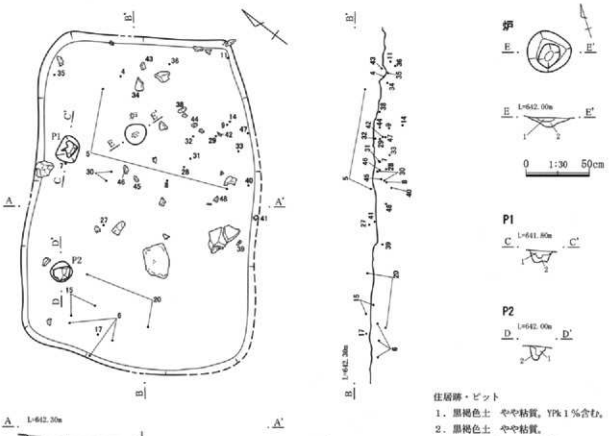
17区　６号住居はⅣ～Ⅴ層を掘削中に発見され、７号住居はⅥ層上面を確認面とする。埋没土は前者が黒褐色土で、後者がオリーブ褐～にぶい黄褐色土であり、全く異なっている。

６号住居跡（第10図、第11～14図、ＰＬ４、41､67）

縄文包含層の調査として平面的に掘削していく経過で、北辺の直線的なプランを確認し、土層断面観測をしながら調査を行った。遺構確認面と埋没土が黒みの強い黒褐色土であったため、南辺は判然としなかった。

位置　17－Ｈ・Ｉ－９・10　**重複**　56・59・96号土坑より前出。南西隅部は第１面の34号土坑（陥し穴）で大きく欠損する。　**形態**　長方形　**主軸方位**　Ｎ－38°－Ｗ　**規模**　南北3.69m、東西5.35m。

壁　明確でないが、西辺は16cmである。　**炉**　中央部北よりにある。焼けの悪い滲んだ焼土であるが撹拌されておらず、炉と認定した。規模は長辺17cm、短辺15cm、深さ４cmである。掘り込みもわずかあるが、掘り方とまでは判断されなかった。　**内部施設**　北辺に沿ってピット２本を検出した。　**ピットの規模**（長径・短径・深さcm）Ｐ１：50、43、19、Ｐ２：35、33、22

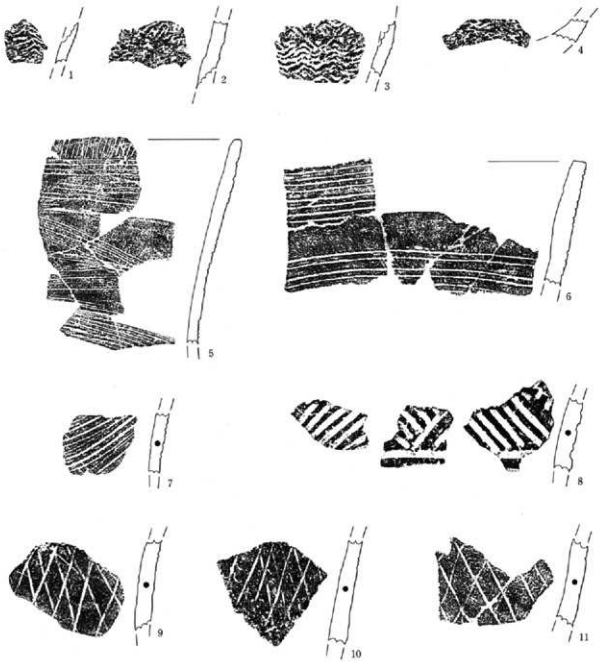


第10図　17区６号住居跡

床　土層観察と炉との高低差から床面を推定したが、やや締まるものの、明確な硬化面は見られない。遺物からも床面を想定できない。

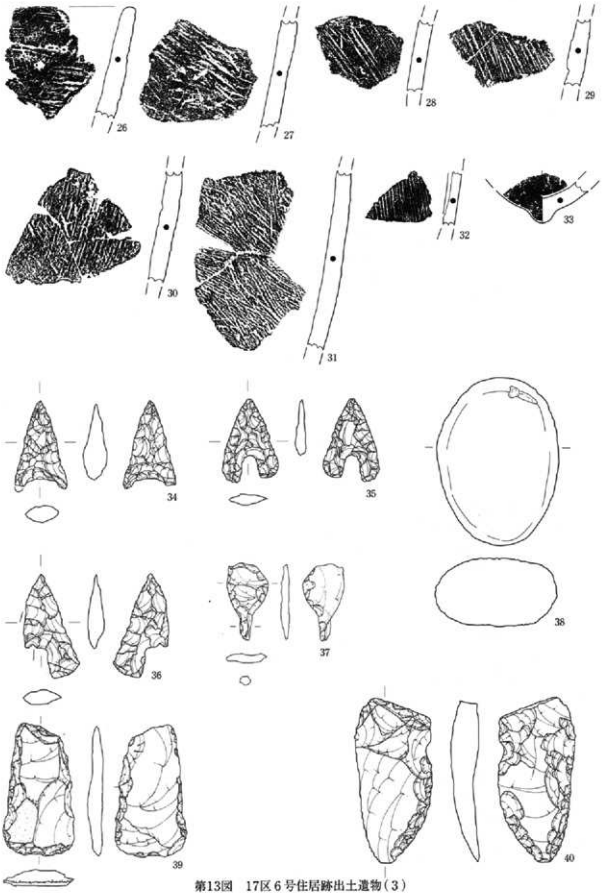
埋没状況　遺存する深度が浅く、埋没経過を判断できなかった。

遺物出土状態　出土遺物は小片が多く、掘り方遺物か下層の包含層遺物なのか判別がつかない。中央西よりの床面に平滑な川原石があったが、使用痕跡は見られなかった。

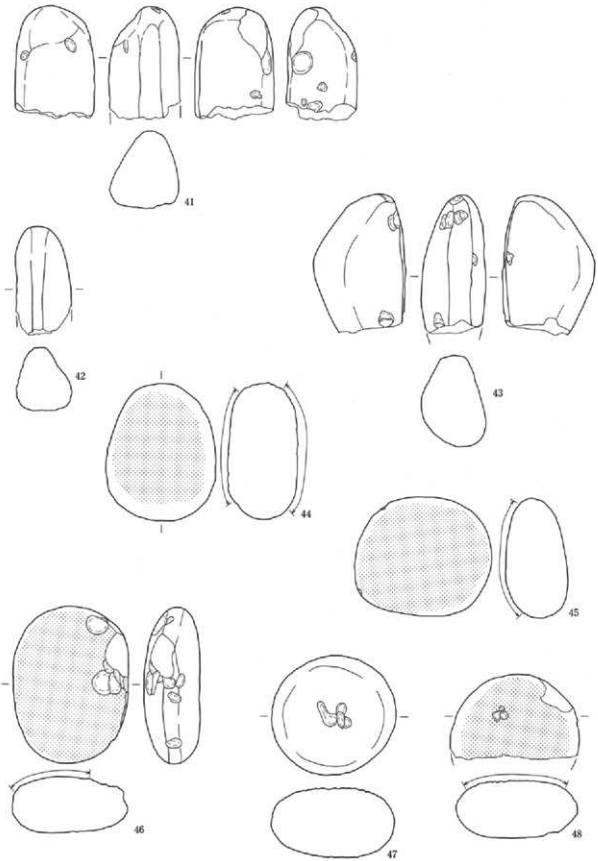


第11図　17区6号住居跡出土遺物(1)

第12図　17区６号住居跡出土遺物（２）



第13図　17区６号住居跡出土遺物（３）



第14図　17区６号住居跡出土遺物（４）

出土土器　１～４は同一個体で山形押型紋を横位に施紋する。５、６は田戸下層式。焼成良好で、内面は研磨されて平滑である。５はやや内削ぎの口唇部で、口唇下に縦位沈線帯を設ける。以下、縦位鋸歯状の沈線を施す。６は角頭状の口唇部で、横位沈線帯を間隔を空けて２帯施す。７～24は中部系の沈線紋土器。石英粒を多く含む胎土から、田戸下層式とは明確に区分できる。７は多条沈線を斜位に施すが、曲線状のモチーフになるようである。８は太沈線によるモチーフとなる。横位に紋様帯を区画し、紋様帯内に横位鋸歯状に充填施紋する。胎土に金雲母を含む。９～14は斜格子目沈線を施すもので、石英粒を多く含む胎土が似ることから同一個体の可能性が高い。15～20は沈線と櫛歯状工具による刺突を施す。15は条線状の多条沈線を口縁部と胴部上位に横位施紋して紋様帯を区画し、紋様帯内に櫛歯状刺突を横位多段に充填する。16～18は同一個体で、15と同様の構成になると思われるが、櫛歯状刺突は斜位に施されている。19は刺突が他のものに比べて大きく深い。20は緩やかな波状口縁を呈す。区画紋の役割をもつのかは不明であるが、波頂下に条線を縦位施紋しており、それ以外は横位施紋する。口唇部に櫛歯状刺突を斜位に施紋する。21～24は条線を施すものである。21は明確な縦区画が認められ、区画内は縦位鋸歯状やクランク状の条線が施される。22～24は同一個体で、条線を縦横に施紋する。24から施紋は胴部の途中で終わり、胴部下半は無紋となることがうかがえる。25～32は条線状の条痕を施す。原体は貝殻ではなく、櫛歯状工具によるものと思われる。33は乳房状の底部破片。無紋なので帰属時期は確定できないが、石英粒を多く含む胎土から７～24の時期に比定が可能であろう。（橋本　淳）

７号住居跡（第15図、第16・17図、ＰＬ５、42）

Ⅳ層上面で遺構確認された。ただし、Ⅴ層中から遺物が出土し始める状況であった。調査段階で住居跡としたことを尊重したが、内部施設がないことから、竪穴状遺構としても良い遺構である。

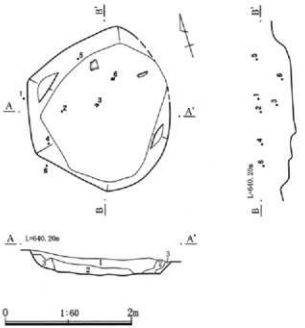
位置　17－Ｇ・Ｈ－６　**重複**　なし　**形態**　不整円形　**主軸方位**　Ｎ－17°－Ｗ

規模　南北2.38m、東西2.38m。　**壁**　壁高は北辺24～25cm、東辺６cm、南辺10cm、西辺29～31cmである。斜めに立ち上がる。

炉・内部施設　なし　**床**　明確な硬化面はなく、やや凸凹している。掘り方は認められない。

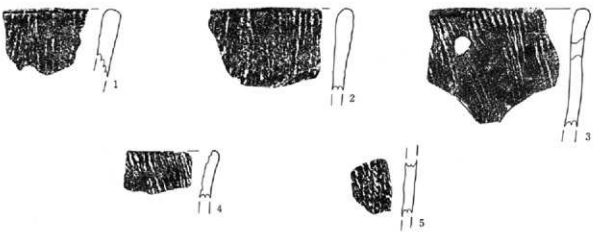
埋没状況　自然埋没。埋没土はオリーブ褐～にぶい黄褐色土で全体に締まり、明らかに他の時期の住居跡と異なっている。　**遺物出土状態**　遺物は少ないが、全て第Ⅰ群３類ａ種の深鉢で、確認面上層が多い。

出土土器　１、２は同一個体。丸頭状口唇部で撚糸紋Ｌを縦位施紋する。口唇部はよく研磨され、平滑である。３、４も同一個体。丸頭状口唇で外側がやや肥厚する口縁部形状を呈し、撚糸紋Ｒを縦位施紋する。１、２同様、口唇部は研磨され、平滑である。５はＲを縦位施紋する胴部。６は丸頭状口唇部で、撚糸紋Ｌを縦位施紋する。やはり口唇部はよく研磨され、平滑である。１～６は稲荷台式に比定できよう。（橋本　淳）

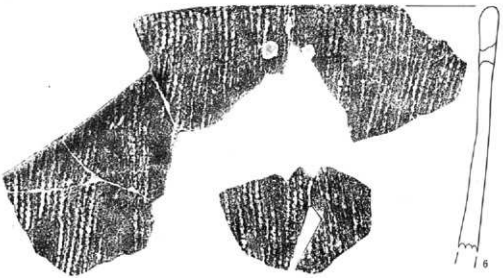


1．オリーブ褐色土　粘質。Yp％５％・赤褐色粒１％含む。
　やや締まる。
2．にぶい黄褐色土　粘質。Yp％５％含む。
3．にぶい黄褐色土　粘質。Yp％５％含む。
　ロームをモザイク状に含む。

第15図　17区７号住居跡



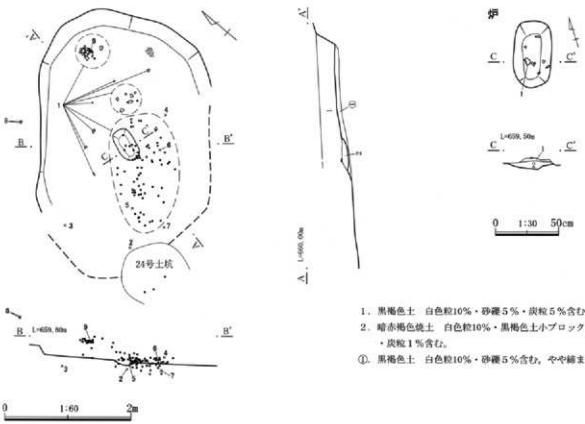
第16図　17区７号住居跡出土遺物（１）



第17図　17区７号住居跡出土遺物（２）

27区　遺構は４号住居のみであるが、調査区全体に縄文時代晩期遺物の広がりがある。

４号住居跡（第18図、第19図、ＰＬ６、42）



1．黒褐色土　白色粒10%・砂礫５%・炭粒５%含む。
2．暗赤褐色焼土　白色粒10%・黒褐色土小ブロック10%・炭粒１%含む。
①．黒褐色土　白色粒10%・砂礫５%含む。やや締まる。

第18図　27区４号住居跡

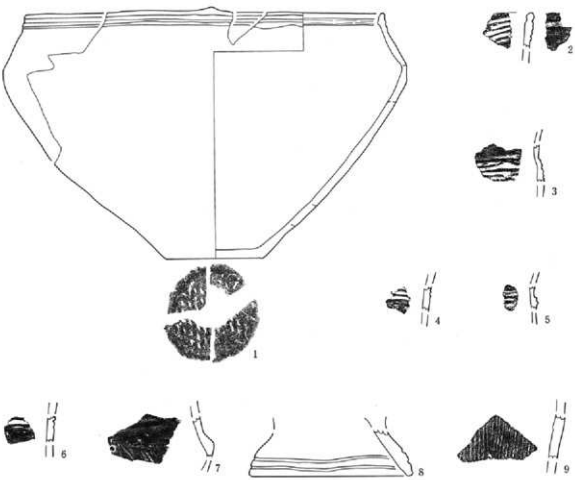
斜面に位置する関係で山石の堆積が多く、弥生～平安時代遺構面を終了後、土層確認ベルトを設定して掘り下げを行ったところ、断面に炉が確認された。このため、南半分が欠損している。

位置　27－Ｓ・Ｔ－12・13　**重複**　なし　**形態**　隅丸方形か　**主軸方位**　Ｎ－12°－Ｅ

規模　南北2.78m以上、東西4.27m。　**壁**　壁高は北辺31cm、東辺13～21cm、西辺８～14cmである。斜めに立ち上がる。

炉　ほぼ中央部に位置し、楕円形。全体に焼けは悪く、滲んで薄赤い程度であるが、遺構範囲の確認は容易であった。規模は長辺53cm、短辺30cm、深さ10cmである。掘り方は深さ２cmである。出土遺物は比較的多いが、ほとんどが浅鉢（１）として復元された。

床　硬化面は認められなかったが、炉の確認面や遺物の出土状態から床面を認定した。　**掘り方**　深さ６～９cm、ほぼ平坦に掘り込まれている。　**埋没状況**　Ａ断面では現れていないが、調査時の所見から自然埋没である。　**遺物出土状態**　炉内部を含め、床面に広がっている土器破片のほとんどが浅鉢（１）に復元された。特に北隅部に集中部分があるが、炉内、炉南側でも多く出土している。破片数も多いことから、割られた可能性も考えられる。



第19図　27区４号住居跡出土遺物（１）

第２項　竪穴状遺構・土坑

１．竪穴状遺構

17区　調査時は162号土坑として調査されたが、規模と形態から竪穴状遺構とした。

２号竪穴状遺構（第20図、第23図、ＰＬ７、50）

位置　17－Ｅ・Ｆ－４

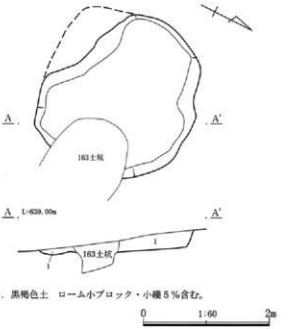
重複　163号土坑より前出　**形態**　不整円形

主軸方位　Ｎ－26°－Ｗ

規模　南北264m、東西258m。

壁　壁高は北辺22～30㎝、南辺８～９㎝、西辺８～30㎝である。　**内部施設**　なし

遺物出土状態　掲載遺物１点のみ出土。



第20図　17区２号竪穴状遺構

２．土坑

本項で扱う土坑は当該期の土器を伴うもののほか、確認面や埋没土から判断したものを含む。

17区

66号土坑（第21図、ＰＬ７）Ｈ・Ｉ－９グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺104㎝、短辺91㎝、深さ19㎝である。

67号土坑（第21図、第23図、ＰＬ７、44）Ｈ－７・８グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土中にやや大礫が混入する。規模は長辺126㎝、短辺103㎝、深さ78㎝である。

68号土坑（第21図、第23図、ＰＬ７、67）Ｈ－７・８グリッド。上・下面とも不整楕円形。西壁は垂直気味に、東壁は斜めに立ち上がる。底面は西壁に向かって傾斜する。規模は長辺124㎝、短辺86㎝、深さ92㎝である。

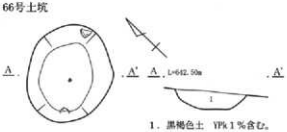
69号土坑（第21図、第23図、ＰＬ７、44）Ｉ－９グリッド。１号住居跡より前出。上・下面とも不整楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土中に大礫を含む。規模は長辺72㎝、短辺62㎝、深さ38㎝である。

74号土坑（第21図、第23図、ＰＬ８、42、54、56、68）Ｉ－11グリッド。掘り込み浅く、平面形は判然としない。大形の深鉢(１)など出土遺物は大片が多い。規模は長辺52㎝以上、短辺42㎝、深さ13㎝である。

76号土坑（第21図、ＰＬ８）Ｈ－10グリッド。１号住居跡より前出。現代の道路に東側大半を壊され、平面形不明。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面に接して巨礫が混入する。規模は長辺58㎝以上、短辺35㎝以上、深さ61㎝である。

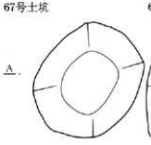
82号土坑（第21図、ＰＬ８）Ｈ－６・７グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。拳大以上の亜円礫を主体として埋まる。中に被熱してビビ割れるものもあり、埋没土中に大粒の炭片を含むことから、調理遺構の可能性がある。焼土は含まれない。規模は長辺118㎝、短辺96㎝、深さ33㎝である。

66号土坑

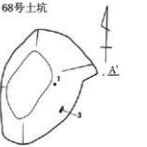


1．黒褐色土　YPk１％含む。

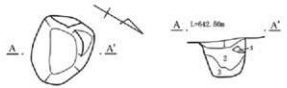
67号土坑



68号土坑



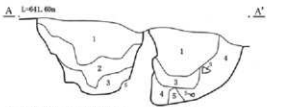
69号土坑



1．黒褐色土　炭粒５％含む。
2．暗褐色土　YPk５％・黒色土小ブロック10％含む。
3．暗褐色土　均質。

0　1:40　1m

A　L=641.60m　A'



1．暗褐色土　YPk５％含む。
2．暗褐色土＋黒褐色土　YPk５％含む。
3．暗褐色土　黒色土小ブロック５％含む。
4．暗褐色土　締まらない。
5．暗褐色土　塊状ブロック。締まる。

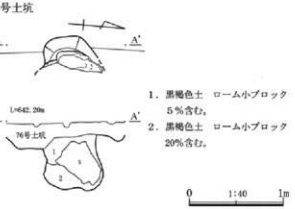
0　1:40　1m

74号土坑

1．オリーブ褐色土　均質。

0　1:30　50cm

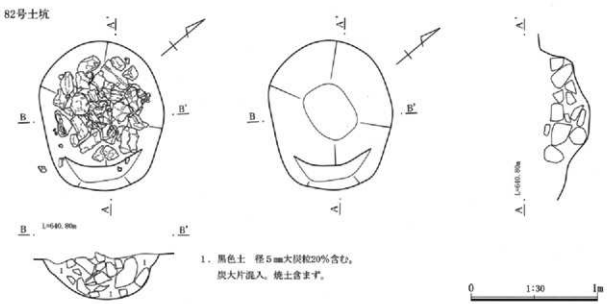
76号土坑



1．黒褐色土　ローム小ブロック５％含む。
2．黒褐色土　ローム小ブロック20％含む。

0　1:40　1m

82号土坑

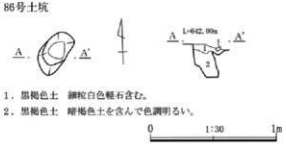


1．黒色土　径５mm大炭粒20％含む。
炭大片混入。焼土含まず。

0　1:30　1m

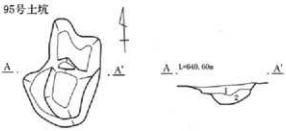
第21図　17区66、67、68、69、74、76、82号土坑

86号土坑



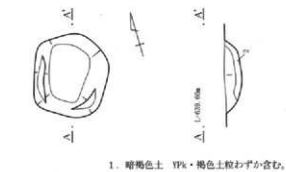
1．黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2．黒褐色土　暗褐色土を含んで色調明るい。

95号土坑



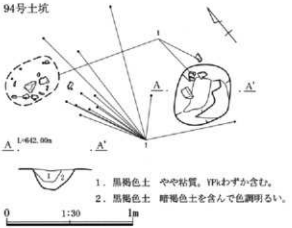
1．黒褐色土　やや粘質。YPk５％含む。
2．黒褐色土　YPk５％・褐色土大ブロック20％含む。

111号土坑



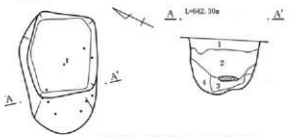
1．暗褐色土　YPk・褐色土粒わずか含む。
2．褐色土　YPk・褐色土粒５％含む。

94号土坑



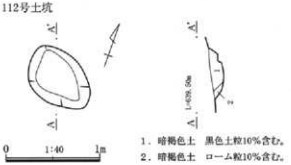
1．黒褐色土　やや粘質。YPkわずか含む。
2．黒褐色土　暗褐色土を含んで色調明るい。

96号土坑



1．黒褐色土　やや粘質。YPkわずか含む。
2．黒褐色土　YPk５％含む。
3．黒褐色土　YPk５％・褐色土粒５％含む。
4．暗褐色土　YPkわずか・黒褐色土粒５％含む。

112号土坑



1．暗褐色土　黒色土粒10％含む。
2．暗褐色土　ローム粒10％含む。

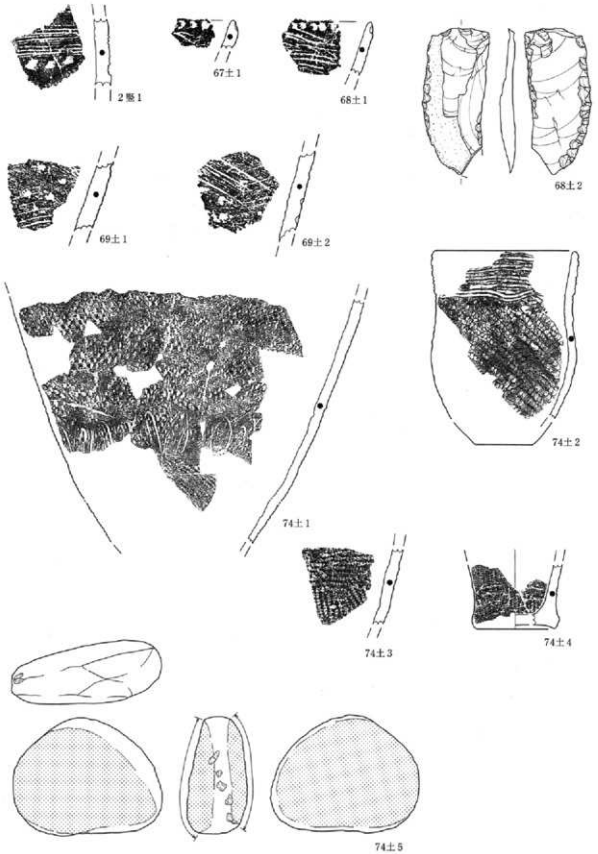
第22図　17区86、94、95、96、111、112号土坑

86号土坑（第22図）Ｈ－９グリッド。上面は楕円形、下面は円形。ピット状。規模は長辺48cm、短辺27cm、深さ34cmである。

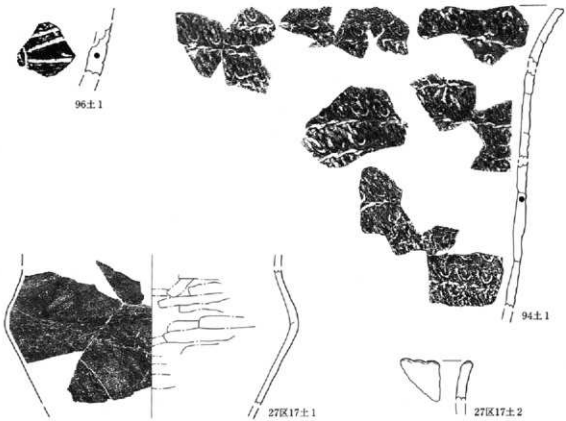
94号土坑（第22図、第24図、ＰＬ８､43）Ｈ－９グリッド。上面は長円形、下面は不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。出土した深鉢（1）が、１ｍ程離れた西側にも広がっており、同一遺構として扱った。土坑の規模は長辺49cm、短辺43cm、深さ15cmである。

95号土坑（第２２図、ＰＬ８）Ｈ－７グリッド。上・下面とも不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺114cm、短辺80cm、深さ21cmである。

96号土坑（第22図、第24図、ＰＬ８､41）Ｉ－９グリッド。３号住居より後出。上面は不整楕円形、下面は隅丸方形。底面はほぼ平坦。規模は長辺126cm、短辺82cm、深さ34cmである。



第23図　17区竪穴状遺構・土坑出土遺物



第24図　17・27区竪穴状遺構・土坑出土遺物

111号土坑（第22図、ＰＬ８）Ｈ－３グリッド。上・下面とも不整楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺87cm、短辺78cm、深さ18cmである。

112号土坑（第22図、ＰＬ９）Ｇ－４グリッド。上・下面とも不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺75cm、短辺54cm、深さ16cmである。

27区

９号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｓ－11グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺63cm、短辺57cm、深さ19cmである。

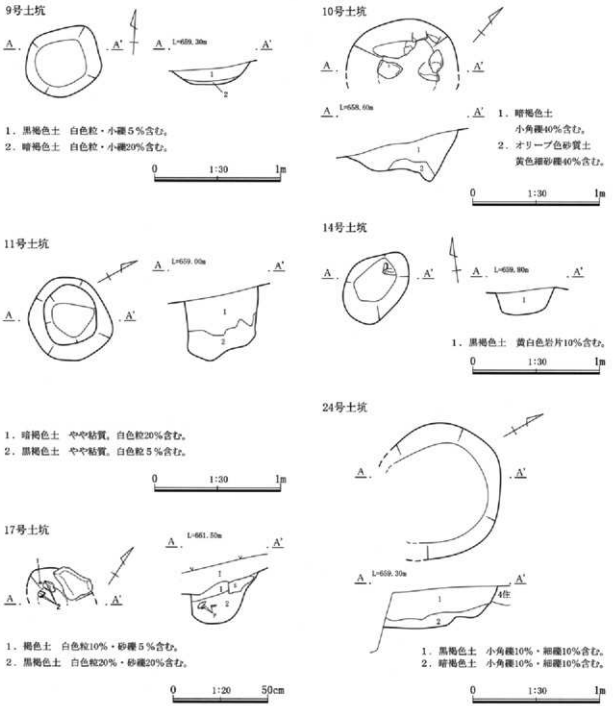
10号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｓ－10グリッド。トレンチ調査の際、確認できず南半分を欠損してしまった。上・下面ともほぼ円形と推定される。壁は斜めに立ち上がる。地山に亜円礫が壁面から露出する。底面は丸みを持つ。規模は長辺89cm、短辺42cm以上、深さ39cmである。

11号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｓ－11グリッド。上面はほぼ円形、下面は不整形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は径67cm、深さ60cmである。

14号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｓ－12グリッド。上・下面とも不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺63cm、短辺45cm、深さ23cmである。

17号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｓ・Ｔ－13グリッド。調査区に北壁で確認されたが、その時点で南側は掘削していた。地山および埋没土が礫混土であるため、遺構確認は非常に困難であった。規模は径72cm、深さ43cmである。甕（１）は破片であるが、４号住居出土の甕（４住１）に似ており、同時期の遺構と考えられる。

24号土坑（第25図、ＰＬ10）Ｔ－12グリッド。包含層調査の際、確認できず南半分を欠損してしまった。上・

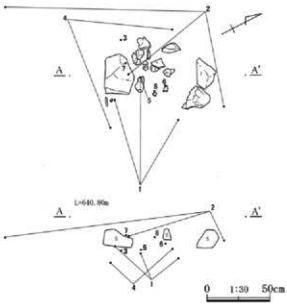


第25図　27区９、10、11、14、17、24号土坑

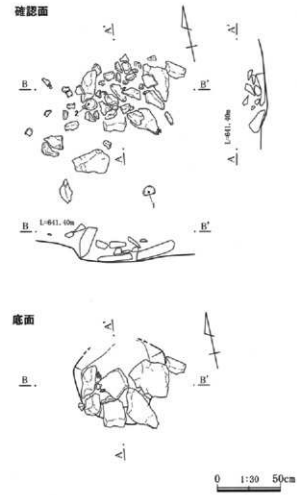
下面ともほぼ円形と推定される。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺105cm、短辺80cm以上、深さ34cmである。

第3項　集石遺構

17区　V層縄文包含層を掘り下げ段階で、逐次確認された。4基とも近接しており、層位からも時期的に近いものと判断される。

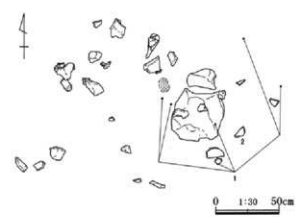


第26図　17区1号集石遺構



第27図　17区2号集石遺構

第28図　17区3号集石遺構

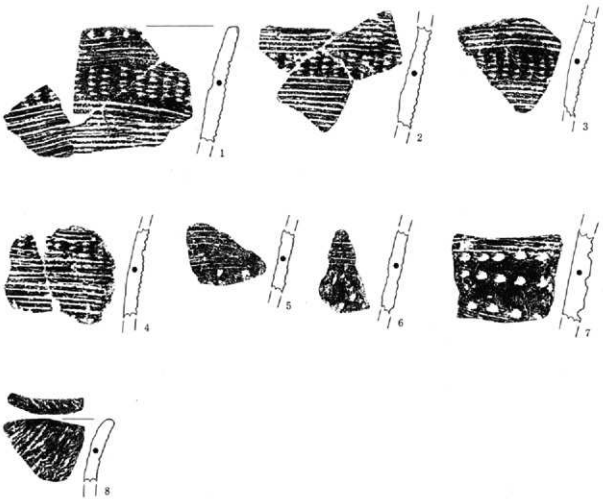


第29図　17区4号集石遺構

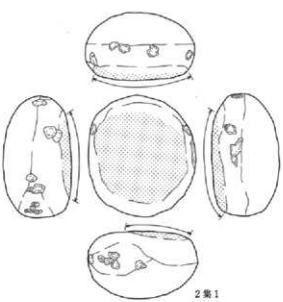
１号集石遺構（第26図、第30図、ＰＬ10、44）Ｈ－７グリッド。規模は長辺88㎝、短辺49㎝である。巨礫３個に挟まれる形で、拳大の石を配する。焼土がみられたという所見はない。掘り込みも確認できなかった。

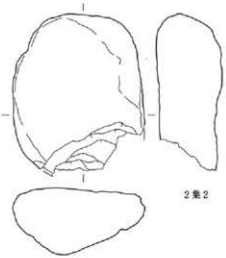
２号集石遺構（第27図、第31図、ＰＬ10、68）Ｈ－８グリッド。規模は長辺125㎝、短辺95㎝、深さ30㎝である。円形に扁平な巨礫７個を配する。遺構確認する前段階のトレンチによる包含層調査で、誤って平石を１個を除去してしまった。本来は円形プランに沿って、北側にもう一石配されていた。西側一石は立ち、南側は斜めに置かれることから、円形に掘りくぼめた底面に平石を並べたものと推測される。拳大ほどの礫が平石を覆っていた。焼土がみられたという所見はない。敷かれた礫の一つは、針鉄鉱の礫器（２）である。

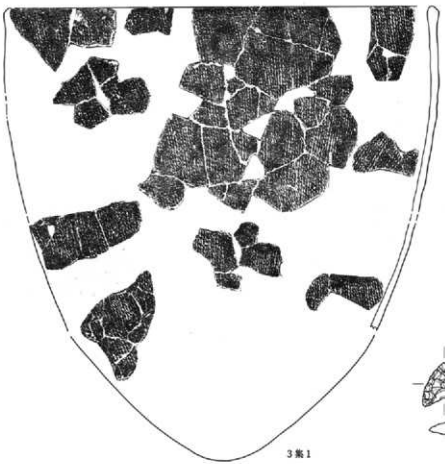
３号集石遺構（第28図、第31図、ＰＬ10、11、43、44、67）Ｈ－８グリッド。規模は長辺86㎝、短辺52㎝、深さ37㎝である。巨礫は少なく、拳大ほどの石がほぼ楕円形に分布する。底面で若干の掘り込みは確認できた。西側の石が斜めに立ち上がることから、掘り込んだ状態で石を配したものと推測される。すぐ北側で大形の撚糸文の深鉢が出土し、一部が集石に混じることから、本遺構の遺物として扱った。焼土がみられたという所見はない。

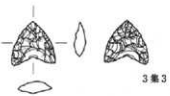


第30図　17区１号集石遺構出土遺物









第31図　17区2・3号集石遺構出土遺物

第32図　17区４号集石遺構出土遺物

４号集石遺構（第29図、第32図、ＰＬ11、42、68）Ｈ・Ｉ－９グリッド。およそ1.70m範囲で、巨礫を中心に土器片と小礫が点在する。わずかだが幅約12cmの焼土も見られる。周辺で出土した前期前半の深鉢（１）の一部が、集石に混じることから、本遺構の遺物として扱った。集石の形態から、他の３基とは遺構の性格が異なると考えられる。

第３節　弥生時代(第１面)

第１項　竪穴住居跡

17区

３号住居跡（第33図、第34図、ＰＬ12、44､67､71）

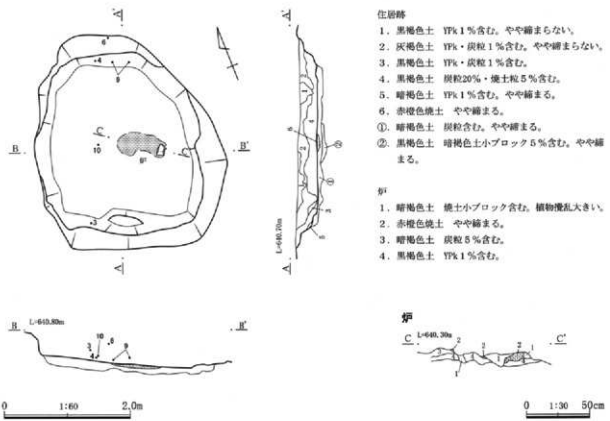
位置　Ｇ・Ｈ－４・５　**重複**　なし。ただし、58号土坑と図上では重複して見える(第６図参照)。これは、３号住居が軽微な落ち込みを外郭線としてとらえた結果であり、実際に重複関係として確認されたわけではない。　**形態**　不整隅丸方形　**主軸方位**　Ｎ－22°－Ｅ　**規模**　南北3.40m、東西3.04m。　**壁**　壁高は北辺23～40cm、東辺14～21cm、南辺19～33cm、西辺33～38cmである。斜めに立ち上がる。

炉　ほぼ中央部に位置する。焼土範囲は長辺77cm、短辺37cmである。焼土の焼けは良く、一部堅く締まっていたが、植物攪乱が激しく、使用面を明確にできなかった。掘り方は深さ６cmである。

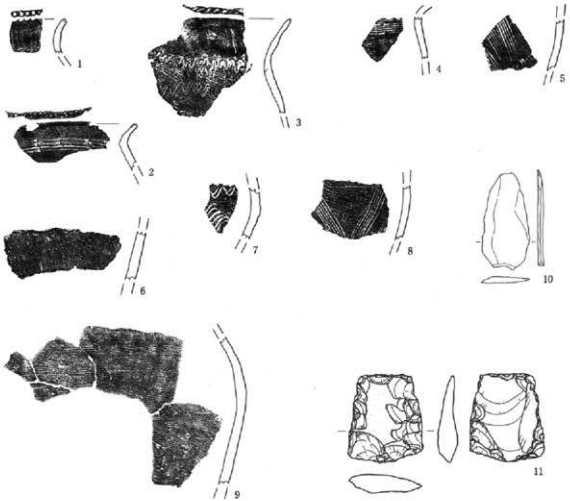
床　炉確認面を基準に確認し、やや締まるが硬化面は確認できなかった。

掘り方　深さ３～16cm、やや凸凹に掘り込まれている。

埋没状況　自然埋没　**遺物出土状態**　確認面近くを主体として、破片遺物が出土した。遺構範囲に重なって、第Ⅱ群遺物の集中が見られるが、床面に対して深すぎており、遺構外遺物として別に扱った。



第33図　17区３号住居跡



第34図　17区3号住居跡出土遺物

27区

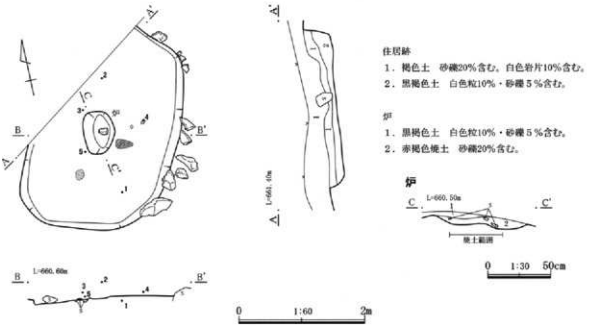
2号住居跡（第35図、第36図、PL13、45、67）

遺構範囲は明確でなく、輪郭に合わせて周辺の石が無いことから、遺構範囲が判明した。

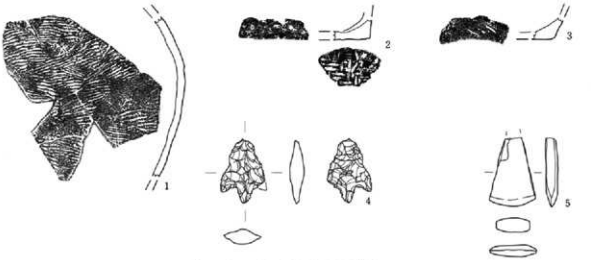
位置　27－S・T－13　**重複**　なし　**形態**　隅丸長方形　**主軸方位**　N－56°－E　**規模**　南北3.20m以上、東西2.32m。　**壁**　壁高は東辺40cm、西辺24cmである。ほぼ垂直に立ち上がる。

炉　ほぼ中央部に位置する。規模は長辺67cm、短辺51cm、深さ14cmである。焼けの悪い滲んだ焼土であり、使用面は明確でない。　**床**　炉確認面を基準に確認したが、硬化面は確認できなかった。掘り方は認められない。　**埋没状況**　土層観察位置が判断材料として適切でないが、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態　遺物量は少ない。焼土・炭が床面に少量分布している。



第35図　27区２号住居跡



第36図　27区２号住居跡出土遺物

第２項　土坑

17区

58号土坑（第37図、第38図、ＰＬ14･15、45）Ｇ－４グリッド。完形の甕の口側に、口縁部と下半分を欠損する壺を正位状態で入れ子状に被せ、更に甕と思われる底部片で蓋をする形で、西方向を上にした状態で土器３点が出土した。組み合わされた土器だけの長さで約53cmを計る。甕は内面の成形痕も明確で使い込まれたものではないが、外面にススが付着しており、煮炊具として使われていたものを転用したものであろう。掘り込みの規模は長辺73cm、短辺49cm、深さ24cmで、壁は斜めに立ち上がり、底面は丸みを持つ。土器は掘り込んだ底面に接しておらず、浮かんだ状態を示す。甕は横位であり、それに被せた壺上部は斜位に傾いている。ただし、甕は表土側が土圧で崩落した状態であり、壺も連動して上側が落ち込んで斜位となった可能性もある。蓋とした土器がずれているのもそのせいだろうか。内容物の存在を想定して、土器内の埋没土全てを水洗いし、微細な骨片、玉類の発見に勤めたが、植物の根以外見つけることができなかった。形態や類例から土器棺墓として性格づけられよう。

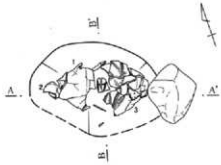
備考　確認段階で東側に出土した川原石の巨礫は、掘り込んだ埋没土も表土に近く、本遺構の埋没土とも異なることから、関連を積極的に判断できない。ただし、大きさから移動しにくいものであるため、元来あったものが後代に動かされた可能性もあり、遺構図に含めた。本遺構は隣接する３号住居跡と同時期の遺構でありながら、遺構面を削り込む段階で確認されたため、調査時期が異なっている。図上では重複して見える（第６図参照）が、これは３号住居跡の外郭線の認定にも問題があり、実際には重複関係は確認できない。

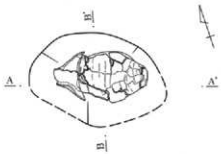
63号土坑（第39図、ＰＬ15）Ｇ・Ｈ－５・６グリッド。調査区の東端に位置し、現代の道路際であったことから、東半分が壊され、遺構の形態は明確でなかった。断面観察から72号土坑より後出。規模は長辺38cm以上、短辺50cm以上、深さ26cmである。72号土坑遺物が本遺構に帰属していた可能性もあるため、この時期として扱った。

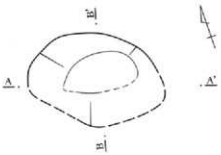
72号土坑（第39図、第41図、ＰＬ15、61､63）Ｇ・Ｈ－５グリッド。調査区の東端に位置し、現代の道路際であったことから、東半分が壊され、遺構の形態は明確でなかった。断面観察から63号土坑より前出。規模は不明で、遺物は約50cm範囲に分布する。集中する遺物は接合の結果、口縁部を欠損する甕（４）と、口縁部と下半部を欠損する壺（１）に復元された。南に約５ｍ離れて、58号土坑が存在することから、調査段階から同種の土器棺墓の可能性が想定されており、ほぼ想定どおりの結果となった。土器は小さく割れた状態で出土したが、甕（４）の破片は北側に集中し、対して壺（１）の破片は南に20cm程度離れて集中することから、元々甕を北に、壺を南に並んで埋設されていた可能性が高い。土器の大きさから、58号土坑同様に、入れ子状態であったことも想定されよう。甕は内外面の成形痕も明確で使い込まれたものではないが、外面にススが付着しており、煮炊具として使われていたものを転用したものであろう。

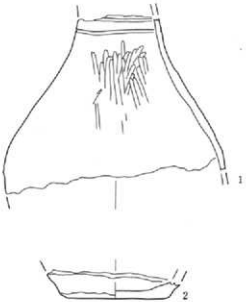
27区

１号土坑（第40図、第41図、ＰＬ15、45）Ｒ－11グリッド。甕（１）が底部まで露呈する段階まで、遺構確認がなされなかったため、掘り込み規模は不明。甕は正位に出土しており、埋設された土器と判断される。時期は弥生中期後半に比定される。本時期の遺物は27区では少なく、遺構としても孤立したものと解される。





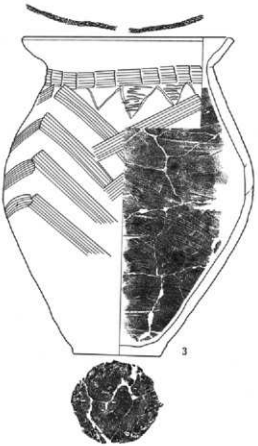




1．灰褐色土　砂粒10%含む。表土に似る。
2．黒褐色土　YPk５%・炭粒10%含む。締まらない。
3．黒褐色土　YPkわずか含む。

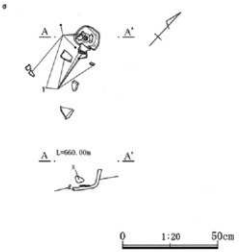
0　1:20　50cm

第37図　17区58号土坑

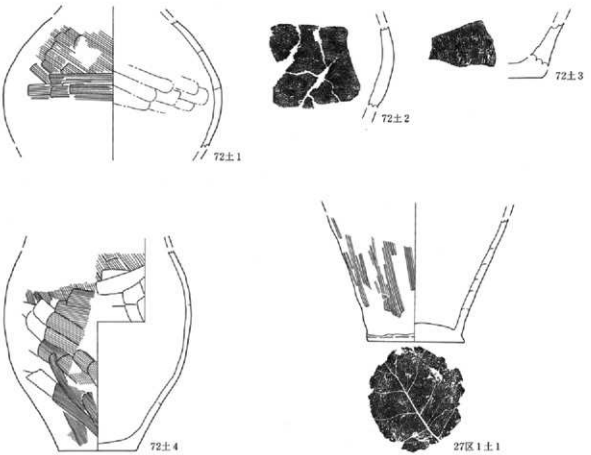


第38図　17区58号土坑出土遺物

第39図　17区63、72号土坑



第40図　27区１号土坑



第41図　17・27区土坑出土遺物

第４節　平安時代以前

第１項　土坑

本節の遺構は、時期を示すような出土遺物もなく、積極的に縄文時代とみなせない土坑を扱う。なお、第２項以下も同じである。

７区

４号土坑（第42図、ＰＬ７）Ｊ－25グリッド。上面楕円形、北側に中段をもって、下面は南により円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺74cm、短辺56cm、深さ39cmである。

17区

８号土坑（第43図、ＰＬ16）Ｉ・Ｊ－10グリッド。上・下面とも円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺75cm、短辺65cm、深さ10cmである。

51号土坑（第43図、ＰＬ７）Ｉ－４グリッド。第１次と第２次調査に分かれてしまい、第１次調査では断面確認のみであった。上・下面は楕円形と推測される。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺84cm、短辺50cm、深さ37cmである。

83号土坑（第43図、ＰＬ16）Ｈ－９グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。巨円礫が壁際で出土したが、使用痕跡はなかった。規模は長辺121cm、短辺87cm、深さ19cmである。

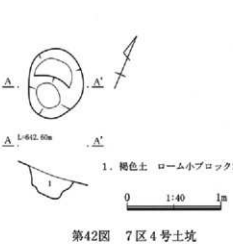
158号土坑（第43図、ＰＬ９）Ｆ－６グリッド。上・下面とも不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺136cm、短辺124cm、深さ28cmである。

160号土坑（第43図、ＰＬ９）Ｆ－５グリッド。上・下面とも不整円形。ピット状。規模は長辺54cm、短辺44cm、深さ53cmである。

164号土坑（第43図、ＰＬ９）Ｆ－９グリッド。上・下面とも不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長辺116cm、短辺87cm、深さ39cmである。埋没土は人為埋没であり、特異な土層堆積である。確認面が深いため、当期に属する位置づけであるが、現代の家屋敷の下層であり、攪乱の可能性もあると考える。本報告では調査者の所見を尊重した。

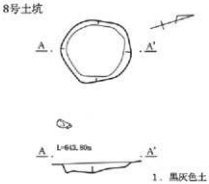
166号土坑（第43図、ＰＬ９）Ｅ－８グリッド。上・下面とも不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長辺184cm、短辺142cm、深さ27cmである。埋没土は人為埋没であり、特異な土層堆積である。確認面が深いため、当期に属する位置づけであるが、現代の家屋敷の下層であり、攪乱の可能性もあると考える。本報告では調査者の所見を尊重した。

168号土坑（第43図、ＰＬ９）Ｇ－９グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長辺140cm、短辺78cm、深さ33cmである。埋没土は人為埋没であり、特異な土層堆積である。確認面が深いため、当期に属する位置づけであるが、現代の家屋敷の下層であり、攪乱の可能性もあると考える。本報告では調査者の所見を尊重した。



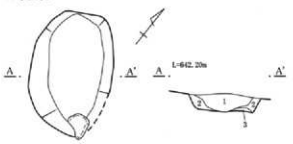
第42図　７区４号土坑

8号土坑



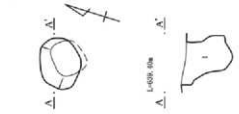
1．黒灰色土　黄色粒１％含む。

83号土坑



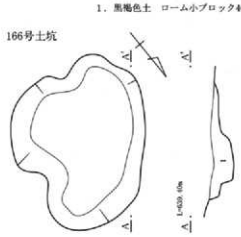
1．暗褐色土　細粒白色軽石・黄色砂粒５％含む。
2．黒褐色土
3．暗褐色土　ローム小ブロック20％含む。やや締まる。

160号土坑



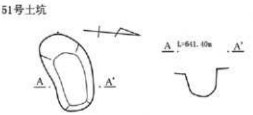
1．黒褐色土　ローム小ブロック40％含む。

166号土坑



1．暗褐色土＋YPk＋ローム大ブロック　層状に堆積。

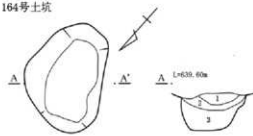
51号土坑



158号土坑

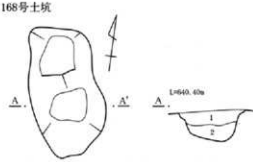
1．黒褐色土　ローム小ブロック５％含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック20％、YPk１％含む。

164号土坑



1．暗褐色土　YPk１％・ローム大ブロック５％含む。
2．黄色軽石　YPk主体。汚れる。
3．褐色土　YPk１％・ローム大ブロック５％含む。

168号土坑

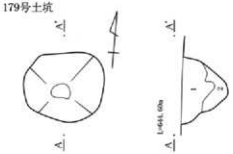


1．黒褐色土　ローム大ブロック20％含む。
2．暗褐色土＋YPk　汚れる。

0　1:40　1m

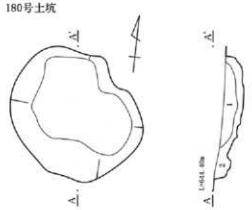
第43図　17区８、51、83、158、160、164、166、168号土坑

179号土坑



1．暗褐色土　YPk10%含む。
2．にぶい黄褐色土＋YPk

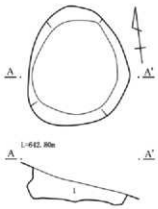
180号土坑



1．黒褐色土　YPk１%含む。
2．褐色土　ローム大ブロック20%含む。

0　1:60　2m

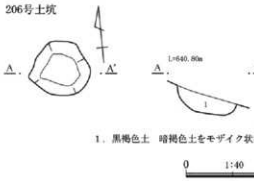
188号土坑



1．黒褐色土　ローム粒、YPk５%含む。

0　1:40　1m

206号土坑



1．黒褐色土　暗褐色土をモザイク状に含む。

0　1:40　1m

第44図　17区179、180、188、206号土坑

10号土坑

1．黒褐色土　ローム粒10%含む。

0　1:40　1m

第45図　26区10号土坑

179号土坑（第44図、ＰＬ９）Ｌ－４グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は小さく、丸みを持つ。規模は長辺76㎝、短辺86㎝、深さ50㎝である。

180号土坑（第44図、ＰＬ９）Ｌ－１・２グリッド。上・下面とも不整形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺215㎝、短辺210㎝、深さ46㎝である。

188号土坑（第44図、ＰＬ９）Ｊ－７グリッド。上・下面ともほぼ円形。壁はやや内湾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺126㎝、短辺108㎝、深さ39㎝である。

206号土坑（第44図、ＰＬ10）Ｉ－３グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺66㎝、短辺58㎝、深さ31㎝である。

26区

10号土坑（第45図、ＰＬ16）Ｖ－４グリッド。上面は楕円形、下面は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺50㎝、短辺37㎝、深さ27㎝である。

第２項　土坑(陥し穴)

形態的な特徴により、以下の分類を基準に記述を行った。

筒形：上面・底面ほぼ円形で、壁が垂直に立ち上がる茶筒形のもの。

スリ鉢形：上面・底面ほぼ円形だが底面積は小さく、壁が斜めに立ち上がるもの。

箱形１類：上面・底面が長方形か隅丸長方形で、壁が垂直に立ち上がるもの。

２類：上面は楕円形で、途中から長方形となって底面も長方形か隅丸長方形となる。壁面は下半部が垂直で途中から外反して、上面に向かって斜めに立ち上がるため、断面くの字形をなすもの。

逆台形：上面は楕円形か隅丸長方形で、壁は斜めに立ち上がるもの。底面は隅丸細長方形をなす。

溝状：上面は細長い楕円形、底面は端部の丸い細長い溝状になる。壁は長辺は斜め気味のＶ字形になるが、短辺側はほぼ垂直気味に立ち上がるもの。

以上、５種６分類とした。なお、箱形２類は発掘調査時の確認面が深くなったり、耕作による攪拌で消滅していた場合など、上半部を欠損して箱形１類となるため、同種として分類した。

７区

１号土坑（第46図、ＰＬ16）Ｒ－14グリッド。調査地に隣接地する起業地の壁面に、旧時の破壊により遺構断面が露呈していたため記録を行った。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は径157cm、深さ164cmである。

２号土坑（第46図、ＰＬ16）Ｊ－23・24グリッド。上面は楕円形、下面は不整楕円形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はほぼくの字形に立ち上がる。底面は西から東へ大きく傾斜する。西壁はオーバーハングするが、土層断面観察の結果、埋没過程で壁面が崩落したと判断される。全体形は箱形２類。規模は長辺308cm、短辺257cm、深さ180cmである。

３号土坑（第46図、ＰＬ16）Ｊ－23・24グリッド。西半分が調査区域外となり、東半分のみ調査された。上面は円形、下面は正方形と推測される。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁の中間で大きくオーバーハングする。土層断面観察の結果、埋没過程で壁面が崩落したと判断される。全体形は筒形か。規模は長辺178cm、短辺121cm以上、深さ253cmである。

５号土坑（第47図、ＰＬ16）Ｊ－25グリッド。上・下面とも長方形。西壁を除き、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁はくの字形を呈し、下部はオーバーハングする。壁面のYPk層が崩れたものとみられるが、埋没土中にはなく、使用時にすでにえぐれていたと推測する。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺142cm、短辺86cm、深さ82cmである。

６号土坑（第47図、ＰＬ17）Ｋ－25グリッド。上・下面とも長方形。西壁は整った直角に作る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺176cm、短辺162cm、深さ35cmである。

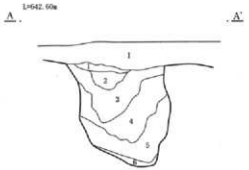
16区

101号土坑（第48図、ＰＬ17）Ｘ－25グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺186cm、短辺94cm、深さ152cmである。

102号土坑（第48図、ＰＬ17）Ｘ・Ｙ－24グリッド。上・下面とも隅丸長方形。長辺の壁はほぼ垂直に立ち上がり、短辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。埋没土５の上層が硬化しており、この面で使用面が存在した可能性もある。規模は長辺199cm、短辺102cm、深さ67cmである。

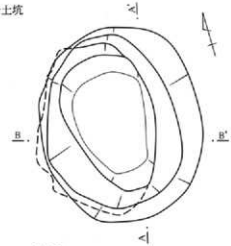
104号土坑（第48図、ＰＬ17）Ｘ－24グリッド。上面は楕円形、下面は使用面長楕円、掘り方長方形。使用面の壁はくの字形に、掘り方の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。壁面側にロームと黒～暗褐色

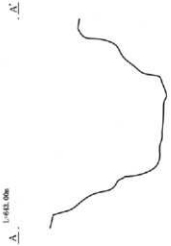
1号土坑

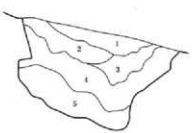


1．黒褐色土　締まらない。
2．暗褐色土　YPk１％含む。
3．黒褐色土　YPk５％含む。暗黄褐色土をモザイク状に含む。
4．黒褐色土　YPk１％含む。
5．黒褐色土　YPk・炭粒１％含む。
6．黒褐色土　ローム小ブロック20％含む。

2号土坑

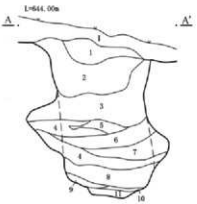






1．暗褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　YPk５％含む。
3．黒色土　YPk１％含む。
4．黒色土　YPk・炭粒１％含む。
5．黒褐色土　YPk・ローム小ブロック20％含む。

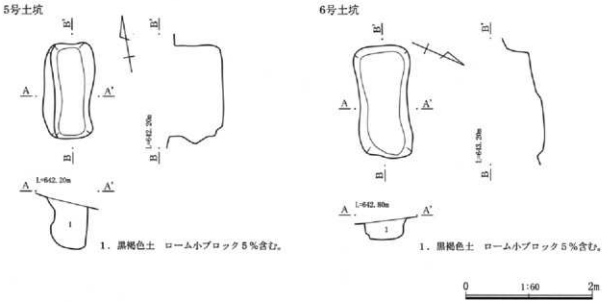
3号土坑



1．暗褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。
3．黒褐色土　YPk・ローム小ブロック10％含む。
4．黄褐色ロームブロック　壁崩落土。
5．暗褐色土　ローム小ブロック10％含む。
6．黒褐色土　ローム粒５％含む。
7．灰褐色土　YPk・ローム粒５％含む。
8．黒褐色土　YPk・ローム粒５％含む。
9．YPk　壁崩落土。
10．黒褐色土　YPk20％含む。
11．黒褐色土＋YPk

0　1:60　2m

第46図　７区１、２、３号土坑



第47図　７区５、６号土坑

土が交互にほぼ水平堆積しており、人為的に壁面が構築されたものと解される。掘り方面では壁面がオーバーハングする部分もあるため、崩落した壁面を補強した可能性もある。全体形は使用面で箱形２類、掘り方で筒形を呈する。全体形が異なるため掘り方面としたが、当初の使用面であったことを否定するものではない。使用面の規模は長辺196cm、短辺170cm、深さ152cm、掘り方面の規模は深さ20cmである。

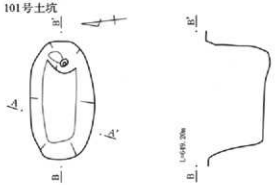
105号土坑（第49図、ＰＬ18）Ｖ・Ｗ－24・25グリッド。主体部が調査区域外となるため、形態は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁の中間にオーバーハングする部分もある。底面はほぼ平坦。埋没土中にローム面があり、使用面として調査を行った。ただし、掘り方の土層堆積状況は自然堆積にも見えるため、壁面の崩落土が堆積した可能性も残る。使用面の規模は長辺227cm以上、短辺82cm以上、深さ146cm、掘り方面の規模は深さ40cmである。

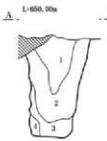
107号土坑（第49図、ＰＬ18）Ｙ－23グリッド。上面は楕円形、下面は不整楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、下半はオーバーハングする。埋没土の下半にロームが多く混入しており、埋没過程で壁面が崩落した可能性が高い。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。規模は長辺186cm、短辺108cm、深さ120cmである。

109号土坑（第49図、ＰＬ18）Ｘ－24グリッド。トレンチ調査段階で発見されたため、中央部を欠く。上・下面とも楕円形と推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形は筒形。規模は長辺106cm、短辺59cm、深さ112cmである。

119号土坑（第49図、ＰＬ18）Ｗ－24・25グリッド。使用面は上・下面とも隅丸長方形、掘り方面は上・下面とも不整円形を呈する。壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。使用面の上下で埋没土が全く違っており、掘り方埋没土は人為的な埋没と判断した。全体形は筒形。全体形が異なるため掘り方面としたが、当初の使用面であったことを否定するものはない。使用面の規模は長辺147cm、短辺124cm、深さ59cm、掘り方面の規模は径118cm、深さ56cmである。

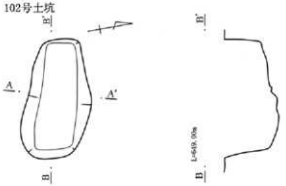
101号土坑





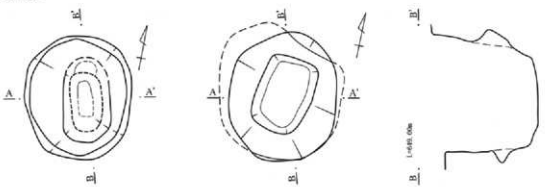
1．暗褐色土　小角礫５％含む。
2．黒褐色土　小角礫５％含む。
3．黒褐色土　ローム小ブロック10％含む。
4．黄褐色ローム　暗褐色土小ブロック10％含む。締まらない。

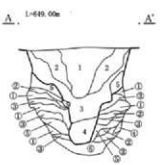
102号土坑



1．黒褐色土　白色粒・小角礫５％含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック10％含む。
3．黒褐色土　ローム粒５％含む。
4．暗褐色土　ローム粒５％含む。
5．褐色土　やや粘質。ローム小ブロック10％含む。締まる。
6．褐色土　ローム粒・暗褐色土小ブロック10％含む。
7．黄褐色ローム　締まらない。

104号土坑



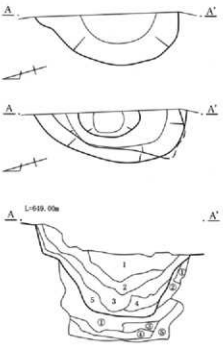


1．褐色土　白色粒・小角礫５％含む。
2．暗褐色土　白色粒・小角礫５％含む。ローム粒５％含む。
3．黒褐色土　白色粒・小角礫５％含む。ローム粒５％含む。
4．褐炭色土　YPk・ローム粒・暗褐色粒10％含む。
5．暗褐色土　ローム粒10％含む。締まらない。
①．黄褐色ローム
②．黒色土　締まる。
③．暗褐色土　ローム粒５％含む。締まる。
④．YPk
⑤．褐色土　ローム粒５％含む。締まる。

0　1:60　2m

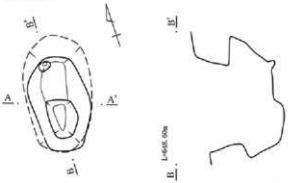
第48図　16区101、102、104号土坑

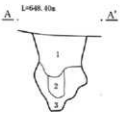
105号土坑



1．褐色土　白色粒・小角礫５％含む。
2．暗褐色土　白色粒・小角礫５％含む。ローム粒５％含む。
3．黒褐色土　白色粒・小角礫５％含む。ローム粒５％含む。
4．暗褐色土　ローム大ブロック20％含む。
5．暗褐色土　ローム小ブロック20％含む。
①．黄褐色ローム
②．黄褐色ローム＋YPk　締まらない。
③．黄褐色ローム＋暗褐色土
④．黄褐色ローム＋YPk　締まる。
⑤．黄褐色ローム　YPkを層状に20％含む。

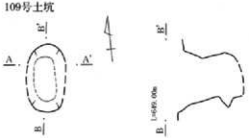
107号土坑

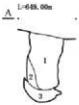




1．黒褐色土　ローム粒10％含む。締まらない。
2．黒褐色土　ローム粒20％含む。
3．黒褐色土＋黄褐色ローム

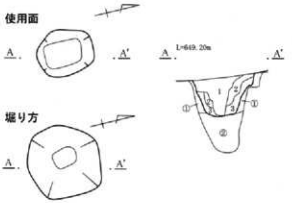
109号土坑





1．黒褐色土　ローム粒10％含む。
2．黄褐色ローム＋黒褐色土
3．黄褐色ローム　黒褐色土大ブロック20％含む。

119号土坑



1．黒褐色土　YPk・ローム粒20％含む。
2．暗褐色土　YPk・ローム粒10％含む。
3．暗褐色土　ローム粒10％・ローム小ブロック20％含む。
①．にぶい黄褐色ローム　白色ローム小ブロック５％含む。やや締まる。
②．にぶい黄褐色ローム　YPk５％含む。やや締まる。

0　1:60　2m

第49図　16区105、107、109、119号土坑

17区

31号土坑（第50図、ＰＬ18）Ｉ・Ｊ－11グリッド。上面は楕円形、下面は不整長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形は箱形２類。規模は長辺200㎝、短辺147㎝、深さ111㎝である。

33号土坑（第50図、ＰＬ18）Ｉ－10・11グリッド。32号土坑・３号溝より前出。上・下面とも隅丸長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺241㎝、短辺155㎝、深さ157㎝である。

40号土坑（第50図、ＰＬ18）Ｉ－４グリッド。上面は楕円形、下面は不整楕長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、掘り方面は凸凹して、南側が一段下がる。底面は締まり、逆茂木跡と思われる杭跡３基を確認できた。掘り方面はYPkとなり崩れてしまうため、底面を半分掘削して土層断面を観察した。杭跡は外向きに傾いて掘られていた。全体形は箱形２類。規模は長辺216㎝、短辺137㎝、深さ235㎝である。掘り方は35㎝である。なお、埋没土について火山灰分析を行ったところ、As－Ｂは含まれず、構築年代はそれ以前と判断された（第５章参照）。杭の規模（長径・短径・深さ㎝）　杭１：21、12、18、杭２：16、14、値無、杭３：８、６、22

41号土坑（第51図、ＰＬ19）Ｉ－１グリッド。上面は楕円形、下面は不整形。壁は斜めでやや凸凹する。底面は丸みを持つ。全体形はスリ鉢形に近い。規模は長辺132㎝、短辺105㎝、深さ73㎝である。埋没土のロームの入り方など、埋没過程とは考えにくい様相である。本報告では調査担当の所見を尊重したが、風倒木であった可能性も残る。

45号土坑（第51図、ＰＬ19）７－Ｈ・Ｉ－25、17－Ｈ・Ｉ－１グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はほぼくの字形に立ち上がる。底面近くでオーバーハングするが、埋没土中に目立った崩落土はなく、使用時にすでに壁面はえぐれていたものと解される。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺228㎝以上、短辺203㎝、深さ186㎝である。

55号土坑（第51図、ＰＬ19）Ｈ・Ｉ－３グリッド。４号住居より前出であり、その床面で確認された。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。壁はほぼくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺167㎝、短辺93㎝、深さ97㎝である。

56号土坑（第51図、ＰＬ19）Ｇ・Ｈ－３グリッド。30号土坑より前出。上面は楕円形、下面は不整楕円形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形２類。規模は長辺230㎝、短辺126㎝、深さ109㎝である。

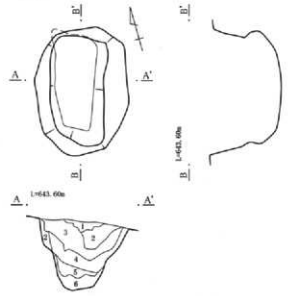
100号土坑（第52図、ＰＬ19）Ｂ－18グリッド。上面は不整楕円形、下面は不整長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。壁の中間はオーバーハングする。底面はやや凸凹して、南側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺187㎝、短辺137㎝、深さ107㎝である。

113号土坑（第52図、ＰＬ19）Ｈ－８グリッド。上面は楕円形、下面は不整隅丸長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面は丸みを持ち、西側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺206㎝、短辺158㎝、深さ142㎝である。

114号土坑（第52図、第58図、ＰＬ19、68）Ｈ－10・11グリッド。東側を現代の道路で壊される。上・下面とも隅丸長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺157㎝以上、短辺107㎝以上、深さ67㎝である。

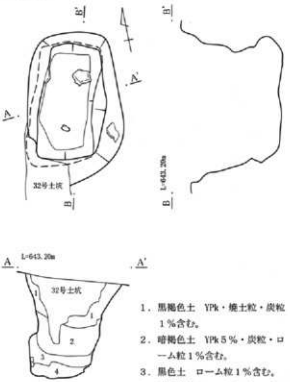
156号土坑（第52図、ＰＬ20）Ｂ－19・20グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。使用面の上下で埋没土が全く違っており、掘り方埋没土は人為的な埋没と考えた。ただし、

31号土坑



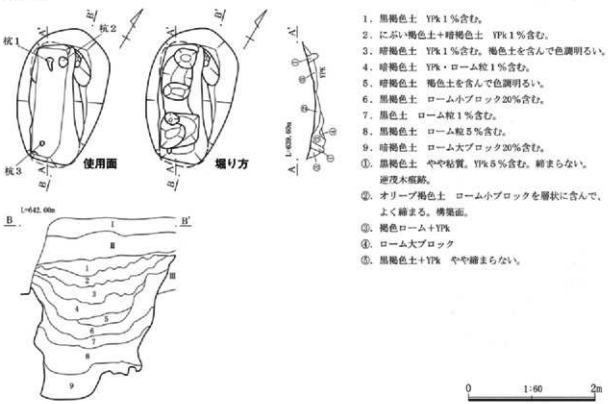
1．にぶい黄褐色土　YPk５％・黄色土大ブロック40％含む。
2．暗褐色土　YPk１％含む。黄色土を含んで色調明るい。
3．黒褐色土　YPk１％含む。均質で黒み強い。
4．黒褐色土　YPk１％含む。黄色土を含んで色調明るい。
5．黒褐色土　YPk５％含む。黄色土をモザイク状に含む。
6．黒褐色土　ローム小ブロック20％含む。

33号土坑



1．黒褐色土　YPk・焼土粒・炭粒１％含む。
2．暗褐色土　YPk５％・炭粒・ローム粒１％含む。
3．黒色土　ローム粒１％含む。
4．暗褐色土＋ローム大ブロック。

40号土坑

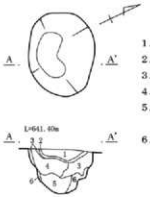


1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．にぶい褐色土＋暗褐色土　YPk１％含む。
3．暗褐色土　YPk１％含む。褐色土を含んで色調明るい。
4．暗褐色土　YPk・ローム粒１％含む。
5．暗褐色土　褐色土を含んで色調明るい。
6．黒褐色土　ローム小ブロック20％含む。
7．黒色土　ローム粒１％含む。
8．黒褐色土　ローム粒５％含む。
9．暗褐色土　ローム大ブロック20％含む。
①．黒褐色土　やや粘質。YPk５％含む。締まらない。逆茂木痕跡。
②．オリーブ褐色土　ローム小ブロックを層状に含んで、よく締まる。構築面。
③．褐色ローム＋YPk
④．ローム大ブロック
⑤．黒褐色土＋YPk　やや締まらない。

0　1:60　2m

第50図　17区31、33、40号土坑

41号土坑

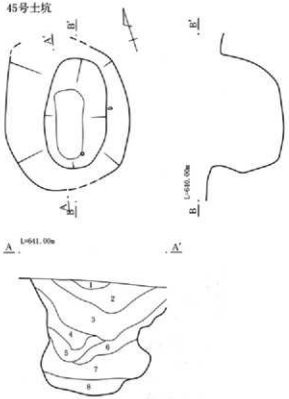


1．黒褐色土　ローム粒５％含む。
2．黒褐色土＋黄褐色ローム
3．黒褐色土
4．黄褐色土　YPk５％含む。
5．暗褐色土　黒色土粒・YPk５％を含む。
6．にぶい褐色土　ローム粒10％含む。

55号土坑

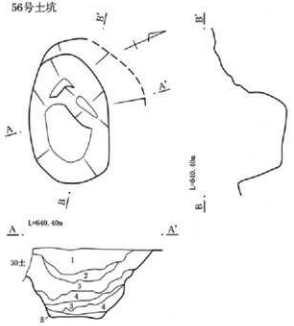
1．褐色土　YPk・褐色粒５％含む。
2．黒褐色土　褐色粒１％含む。黒み強い。
3．黒褐色土　褐色粒１％含む。
4．黒褐色土　ローム小ブロック10％含む。

45号土坑



1．黒褐色土　炭粒10％含む。
2．暗褐色土　YPk１％・炭粒５％含む。
3．黒褐色土　YPk１％含む。黒み強い。
5．黒褐色土　ローム小ブロック40％含む。
6．黒褐色土　ローム小ブロック10％含む。
7．黒褐色土　ローム小ブロック20％含む。
8．黒褐色土＋ローム小ブロック

56号土坑

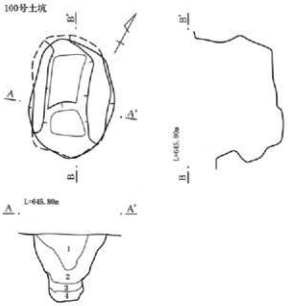


1．黒褐色土　YPk・褐色粒５％含む。
2．黒褐色土　褐色土を含んで色調明るい。
3．黒褐色土　褐色粒１％含む。黒み強い。
4．黒褐色土　ローム小ブロック10％含む。
5．黒褐色土＋ローム小ブロック

0　1:60　2m

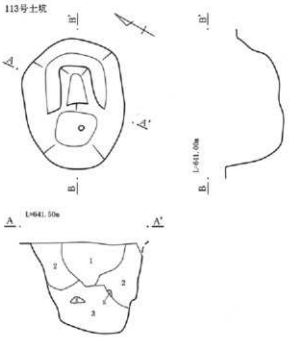
第51図　17区41、45、55、56号土坑

100号土坑



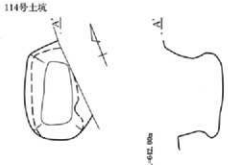
1．黒褐色土　褐色粒・小角礫５％含む。
2．褐色土　黒褐色土小ブロック・ローム小ブロック20％含む。
3．褐色土　黒褐色土小ブロック20％・ローム小ブロック20％含む。
4．褐色土　ローム粒５％含む。締まる。

113号土坑

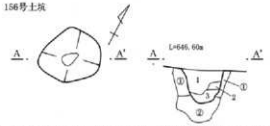


1．暗褐色土　細礫20％・大角礫20％含む。
2．暗褐色土　小中礫10％・ローム小ブロック５％含む。
3．黒褐色土　小中礫10％含む。

114号土坑

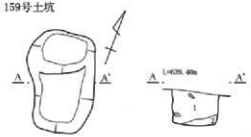


156号土坑



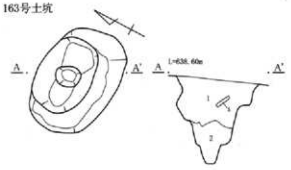
1．にぶい黄褐色粘土　YP20％含む。黄褐色土を含んで色調明るい。
2．褐色土ローム　やや締まらない。
3．にぶい黄褐色粘土　黒みが強く締まる。
①．褐色ローム　YPk１％含む。均質。
②．褐色ローム＋にぶい黄褐色粘土＋YP％　固く締まる。

159号土坑



1．黒褐色土　ローム大ブロック５％含む。
2．黄褐色土＋YP％

163号土坑



1．黒褐色土　ローム小ブロック５％、炭礫含む。
2．褐色土　ローム小ブロック20％含む。

0　1:60　2m

第52図　17区100、113、114、156、159、163号土坑

使用面の全体形は、掘り方面をひと周り小さくしただけで、形態的に疑問も残るため、あえて平面図は分けず、完掘状態のみ掲載した。全体形は筒形。規模は長辺99cm、短辺86cm、深さ54cmである。

159号土坑（第52図、ＰＬ20）Ｆ－５・６グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北側が一段下がる。全体形は箱形１類。規模は長辺164cm、短辺102cm、深さ53cmである。

163号土坑（第52図、ＰＬ20）Ｅ・Ｆ－４グリッド。２号竪穴状遺構より後出。上面は楕円形、下面は細長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持ち、中央部が円形に30cmほど窪む。逆茂木痕跡かも。堀没土中に巨礫の混入がある。全体形は逆台形。規模は長辺180cm、短辺126cm、深さ140cmである。

172号土坑（第53図、ＰＬ20）Ｊ－１グリッド。上・下面とも長楕円形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はほぼくの字形に立ち上がる。壁の中間でオーバーハングする。堀没土中に目立った崩落土はなく、使用時にすでに壁面はえぐれていたものと解される。底面はほぼ平坦で、東側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺232cm、短辺112cm、深さ121cmである。

173号土坑（第53図、ＰＬ20）Ｋ－２グリッド。確認面がかなり下がったため、遺構深度が浅く情報が少ない。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。規模は長辺15cm、短辺７cm、深さ22cmである。

174号土坑（第53図、ＰＬ20）Ｊ・Ｋ－３グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はやや凸凹して、北側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺210cm、短辺132cm、深さ92cmである。

177号土坑（第53図、ＰＬ20）Ｊ－10グリッド。上面は長楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺186cm、短辺125cm、深さ133cmである。

178号土坑（第54図、ＰＬ20）Ｋ－４・５グリッド。遺構深度が浅く情報が少ない。上・下面とも不整長方形。西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、他は不明。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺212cm、短辺103cm、深さ38cmである。

181号土坑（第54図、ＰＬ20）Ｌ－２グリッド。上・下面とも隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東側がわずか一段下がる。壁から底にかけて植物攪乱が著しい。全体形は箱形２類。規模は長辺163cm、短辺108cm、深さ62cmである。

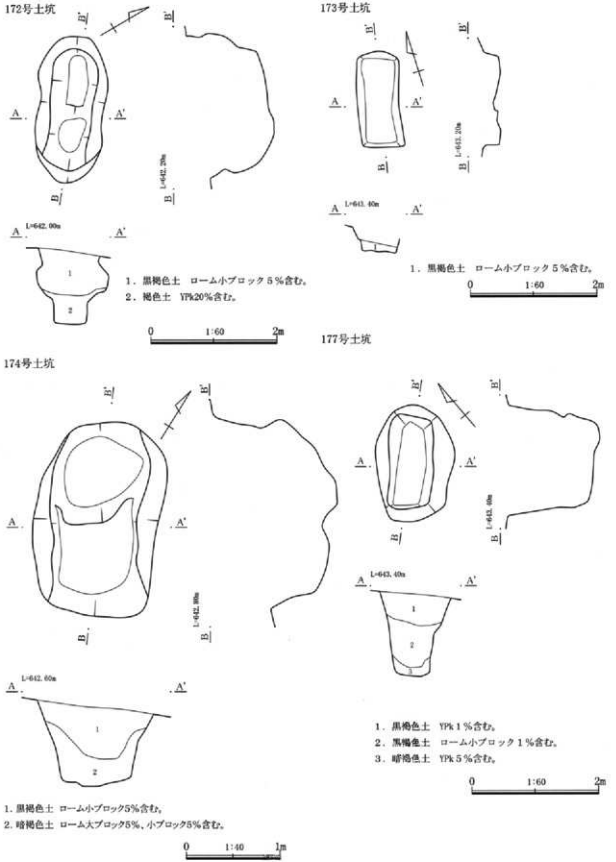
182号土坑（第54図、ＰＬ21）Ｌ－３グリッド。上面は不整楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形は箱形２類。規模は長辺180cm、短辺114cm、深さ118cmである。

183号土坑（第54図、ＰＬ21）Ｍ－４グリッド。上面は隅丸長方形、下面は不整長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。地山から巨礫が露呈しており、壁・底面が不整形なのは石が邪魔であったためと解される。したがって、全体形は箱形２類とする。規模は長辺206cm、短辺126cm、深さ104cmである。

184号土坑（第54図、ＰＬ21）Ｋ－６グリッド。上面はやや乱れるが、上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺186cm、短辺83cm、深さ101cmである。

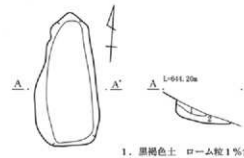
185号土坑（第55図、ＰＬ21）Ｌ・Ｍ－６グリッド。上面は不整形、下面は隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形はスリ鉢形。規模は長辺200cm、短辺174cm、深さ129cmである。

187号土坑（第55図、ＰＬ21）Ｍ・Ｎ－４・５グリッド。上面は不整円形、下面は不整楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持ち、南側が一段下がる。全体形はスリ鉢形。規模は長辺268cm、短辺230cm、深



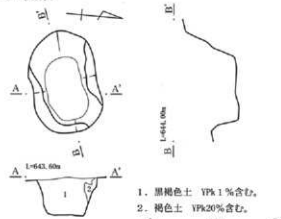
第53図　17区172、173、174、177号土坑

178号土坑



1．黒褐色土　ローム粒１％含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック５％含む。

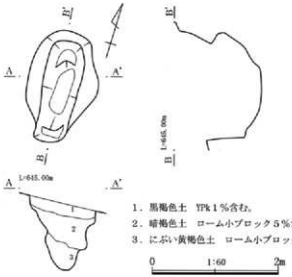
181号土坑



1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．褐色土　YPk20％含む。

0　1:60　2m

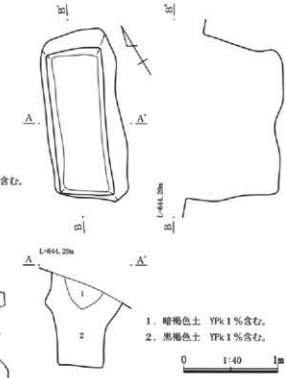
182号土坑



1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック５％含む。
3．にぶい黄褐色土　ローム小ブロック10％含む。

0　1:60　2m

184号土坑



1．暗褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。

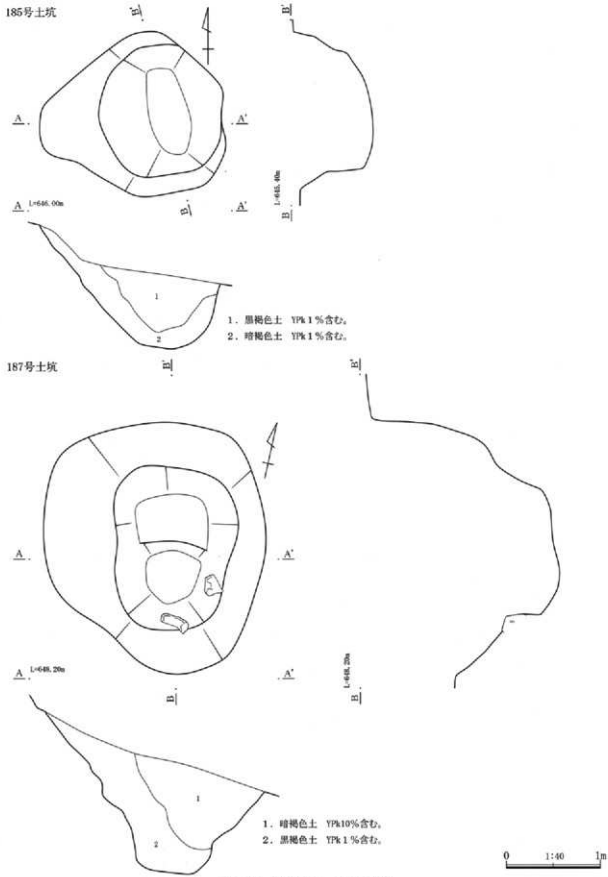
0　1:40　1m

183号土坑

1．にぶい褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　YPk５％含む。
3．YPk＋ローム大ブロック　締まらない。

0　1:40　1m

第54図　17区178、181、182、183、184号土坑



第55図　17区185、187号土坑

さ163㎝である。

189号土坑（第56図、ＰＬ21）Ｋ・Ｌ－７・８グリッド。上・下面とも不整長楕円形。壁は内湾気味に立ち上がる。底面は丸みを持つ。壁面がYPk層であり、崩落を考慮して、全体形は箱形２類と考える。規模は長辺235㎝、短辺170㎝、深さ115㎝である。

190号土坑（第56図、ＰＬ21）Ｋ・Ｌ－８・９グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺232㎝、短辺175㎝、深さ130㎝である。

192号土坑（第56図、ＰＬ21）Ｋ－９・10グリッド。上面は楕円形、下面は不整長楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁の中間にオーバーハングする部分もある。土層断面観察の結果、埋没過程で壁面が崩落したと判断される。全体形は逆台形。規模は長辺193㎝、短辺128㎝、深さ174㎝である。

193号土坑（第56図、ＰＬ21）Ｋ－10グリッド。上・下面とも不整長楕円形。北壁はほぼ垂直で、他は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹して、中央部が丸く窪む。全体形は逆台形。規模は長辺220㎝、短辺132㎝、深さ129㎝である。

194号土坑（第56図、ＰＬ22）Ｋ－10グリッド。上面は不整楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺176㎝、短辺109㎝、深さ93㎝である。

195号土坑（第56図、ＰＬ22）Ｋ－９グリッド。上・下面とも不整隅丸長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹し、南側が丸く一段下がる。全体形は逆台形。規模は長辺152㎝、短辺108㎝、深さ105㎝である。

197号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｌ－11グリッド。上・下面とも不整隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁の中間にオーバーハングする部分もある。埋没土の堆積が不自然に見えるのは、おそらく壁面の崩落の影響と考える。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺248㎝、短辺140㎝、深さ134㎝である。

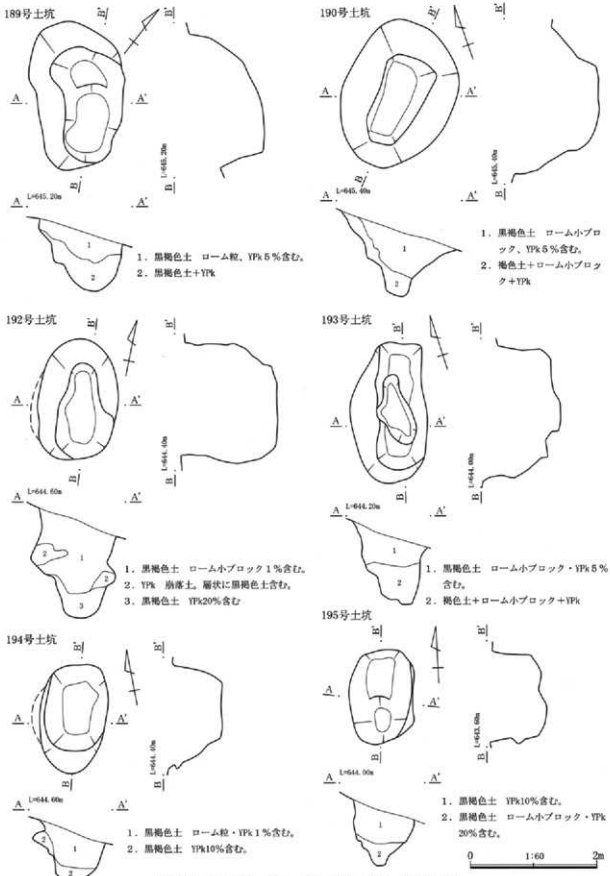
198号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｊ－９グリッド。上面はやや乱れるが、上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁の中間にオーバーハングする部分もある。埋没土中に目立った崩落土はなく、使用時にすでに壁面はえぐれていたものと解される。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺165㎝、短辺72㎝、深さ142㎝である。

199号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｋ－８グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東側がやや一段下がる。全体形は箱形１類。規模は長辺196㎝、短辺106㎝、深さ63㎝である。

200号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｊ－11グリッド。上面は楕円形、下面は不整隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部に長楕円形の穴を持つ。全体形は箱形２類。規模は長辺158㎝、短辺125㎝、深さ118㎝である。穴の規模　長辺40㎝、短辺21㎝、深さ42㎝である。

209号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｎ－12グリッド。上・下面とも隅丸長方形。北壁はほぼ垂直に、他はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。両壁寄りに杭跡２基を持つ。全体形は箱形２類。規模は長辺188㎝、短辺114㎝、深さ60㎝である。杭の規模（長径・短径・深さ㎝）杭１：16、14、16、杭２：22、14、18である。ともに壁に向かって斜めに掘られ、ハの字状を呈する。

210号土坑（第57図、ＰＬ22）Ｊ－12グリッド。上面は隅丸長方形、下面は長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁はくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺158㎝、短辺109㎝、深さ105㎝である。



第56図　17区189、190、192、193、194、195号土坑

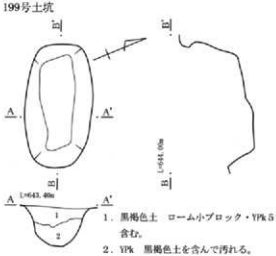
197号土坑

1．暗褐色土　ローム粒・YPk１％含む。
2．黒褐色土　ローム粒・YPk１％含む。
3．YPk　崩落土
4．黒褐色土＋YPk

198号土坑

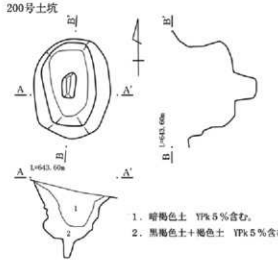
1．黒褐色土　褐色土を層状に含む。ローム粒５％含む。
2．黒褐色土　ローム小ブロック・YPk10％含む。
3．黒褐色土＋YPk

199号土坑



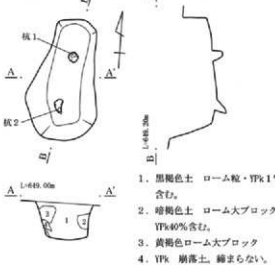
1．黒褐色土　ローム小ブロック・YPk５％含む。
2．YPk　黒褐色土を含んで汚れる。

200号土坑



1．暗褐色土　YPk５％含む。
2．黒褐色土＋褐色土　YPk５％含む。

209号土坑



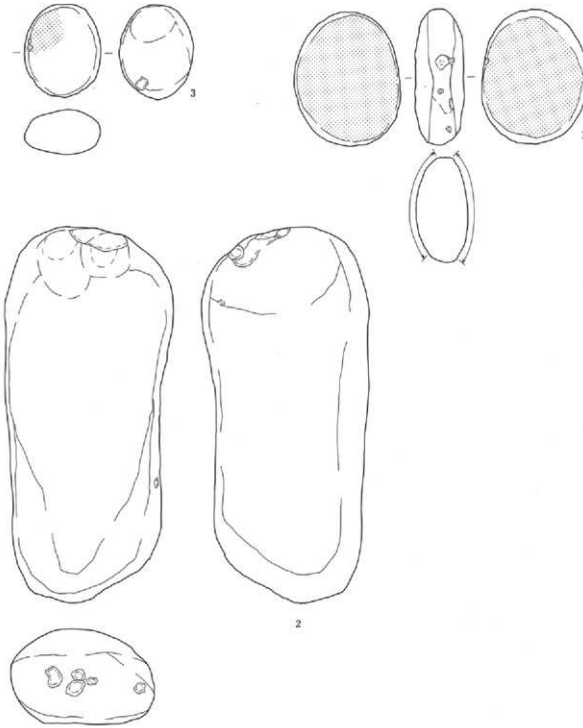
1．黒褐色土　ローム粒・YPk１％含む。
2．暗褐色土　ローム大ブロック・YPk40％含む。
3．黄褐色ローム大ブロック
4．YPk　崩落土。締まらない。

210号土坑

1．黒褐色土　ローム粒・YPk１％含む。
2．暗褐色土　ローム粒・YPk10％含む。

0　1:60　2m

第57図　17区197、198、199、200、209、210号土坑



第58図　17区114号土坑出土遺物

26区

１号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｒ－19グリッド。上・下面とも長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南側が一段下がる。全体形は箱形１類。規模は長辺156cm、短辺69cm、深さ51cmである。

２号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｒ－18・19グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹し、南側が楕円形に窪む。全体形は箱形１類。規模は長辺154cm、短辺51cm、深さ21cmである。

３号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｒ－18グリッド。上・下面とも隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺176cm、短辺76cm、深さ25cmである。

４号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｑ－17グリッド。上・下面とも長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺111cm、短辺64cm、深さ57cmである。

５号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｒ－17グリッド。上・下面とも長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹し、２カ所で丸く窪む。全体形は箱形１類。規模は長辺178cm、短辺75cm、深さ41cmである。

６号土坑（第59図、ＰＬ23）Ｒ－15・16グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺138cm、短辺106cm、深さ46cmである。

７号土坑（第60図、ＰＬ23）Ｒ・Ｓ－15グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形２類。規模は長辺158cm、短辺108cm、深さ132cmである。

８号土坑（第60図、ＰＬ23）Ｓ－15グリッド。上・下面とも細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹し、中央に稜を持って東西２カ所が窪む。全体形は箱形１類。規模は長辺161cm、短辺65cm、深さ63cmである。

14号土坑（第60図、ＰＬ23）Ｖ－５グリッド。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南側が一段下がる。全体形は箱形１類。規模は長辺143cm、短辺75cm、深さ35cmである。

17号土坑（第60図、ＰＬ24）Ｗ－４グリッド。上面は長楕円形、下面は長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側が丸く窪む。全体形は箱形２類。規模は長辺176cm、短辺101cm、深さ105cmである。

19号土坑（第61図、ＰＬ24）Ｖ－１・２グリッド。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺173cm、短辺85cm、深さ75cmである。

22号土坑（第61図、ＰＬ24）Ｖ－５グリッド。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺160cm、短辺95cm、深さ73cmである。

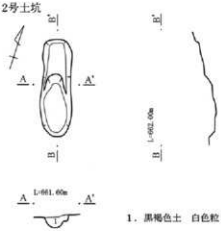
23号土坑（第61図、ＰＬ24）Ｕ・Ｖ－７グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土の底面近くが水平堆積で堅く締まっており、調査所見として作り直しという見解もある。今回土層断面図から判断して、埋没土４を境に土層が異なることから、ここで時期を二分した。全体形はスリ鉢形。規模は長辺213cm、短辺(164)cm、深さ169cmである。

24号土坑（第61図、ＰＬ24）Ｏ・Ｐ－22グリッド。上面は不整形、下面は楕円形。壁は丸みを持って立ち上がる。底面も丸みを持つ。埋没土は風化した白色岩片を多量に含んでおり、特異な状況である。全体形はスリ鉢形。規模は長辺168cm、短辺165cm、深さ128cmである。

1号土坑

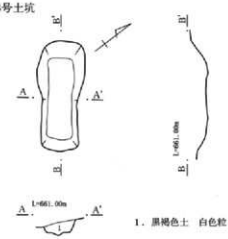
1．黒褐色土　白色粒10%含む。
2．黒褐色土　白色粒５%含む。

2号土坑



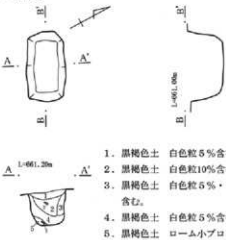
1．黒褐色土　白色粒５%含む。

3号土坑



1．黒褐色土　白色粒５%含む。

4号土坑



1．黒褐色土　白色粒５%含む。
2．黒褐色土　白色粒10%含む。黒み強い。
3．黒褐色土　白色粒５%・ローム粒10%含む。
4．黒褐色土　白色粒５%含む。黒み強い。
5．黒褐色土　ローム小ブロック10%含む。

5号土坑

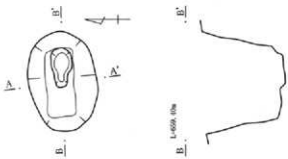
1．黒褐色土　白色粒５%含む。
2．黒褐色土　白色粒10%含む。黒み強い。締まらない。
3．黒褐色土　白色粒５%・ローム粒10%含む。締まらない。

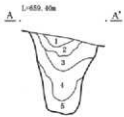
6号土坑

1．黒褐色土　白色粒５%含む。
2．黒褐色土　白色粒10%含む。黒み強い。
3．黒褐色土　白色粒５%・ローム粒10%含む。
4．黒褐色土　ローム小ブロック10%含む。

第59図　26区１、２、３、４、５、６号土坑

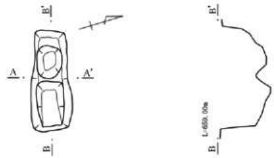
7号土坑





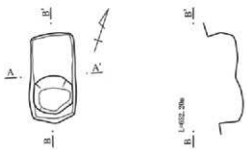
1．暗褐色土　白色粒わずか含む。
2．黒褐色土　白色粒５％含む。
3．黒褐色土　白色粒10％含む。黒み強い。締まらない。
4．黒褐色土　白色粒５％・ローム粒10％含む。黒み強い。締まらない。
5．黒褐色土　白色粒５％・ローム粒20％含む。

8号土坑



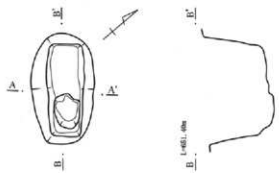
1．黒褐色土　白色粒わずか含む。
2．黒褐色土　白色粒５％含む。
3．黒褐色土　白色粒５％・ローム粒20％含む。

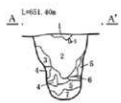
14号土坑



1．黒褐色土　YPk・ローム粒10％含む。
2．黒褐色土　ローム粒５％含む。
3．黒褐色土　ローム粒10％含む。締まらない。
4．黒褐色土　ローム粒20％含む。

17号土坑



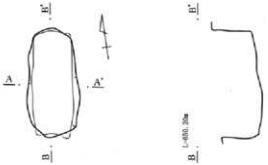


1．暗褐色土　ローム粒５％含む。
2．黒褐色土　白色粒５％含む。黒み強い。締まらない。
3．黒褐色土　ローム粒10％含む。黒み強い。締まらない。
4．黄褐色ローム　YPk５％含む。
5．黒褐色土　ローム粒20％含む。締まらない。
6．黒褐色土小ブロック＋ローム小ブロック。締まらない。
7．黒褐色土　ローム小ブロック40％含む。締まらない。

0　1:60　2m

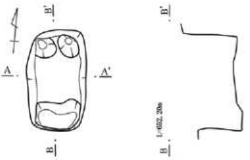
第60図　26区７、８、14、17号土坑

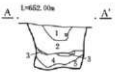
19号土坑



1．黒褐色土＋ローム大ブロック
2．黒褐色土　ローム小ブロック10%含む。締まらない。
3．黒褐色土　ローム大ブロック20%含む。締まらない。

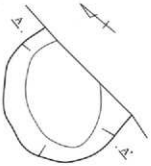
22号土坑

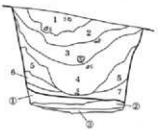




1．褐色土　ローム粒20%・風化白色岩片5%含む。
2．黒褐色土　ローム粒5%・風化白色岩片5%含む。
3．黒褐色土　ローム粒10%・風化白色岩片5%含む。締まる。
4．黒褐色土　ローム粒5%・風化白色岩片5%含む。黒み強い。
5．黒褐色土　ローム小ブロック20%含む。

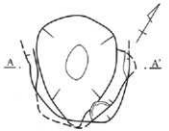
23号土坑

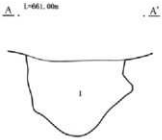




1．暗褐色土＋ローム大ブロック
2．黒褐色土　ローム粒10%・風化白色岩片5%含む。
3．黒褐色土　ローム粒1%・風化白色岩片5%含む。
4．黒褐色土　YPk・ローム粒5%・風化白色岩片5%含む。黒み強い。
5．黒褐色土　ローム大ブロック40%含む。黒み強い。
6．黒褐色土　ローム粒5%含む。
7．黒褐色土　ローム小ブロック20%含む。
①．灰黄褐色土　YPk・ローム粒5%・風化白色岩片・焼土粒・炭粒5%含む。固く締まる。
②．黒褐色土　ローム粒5%含む。固く締まる。
③．灰褐色土　YPk・ローム粒5%・小角礫5%含む。締まる。

24号土坑





1．灰白色砂質土　風化白色岩大片40%含む。締まる。

0　1:60　2m

第61図　26区19、22、23、24号土坑

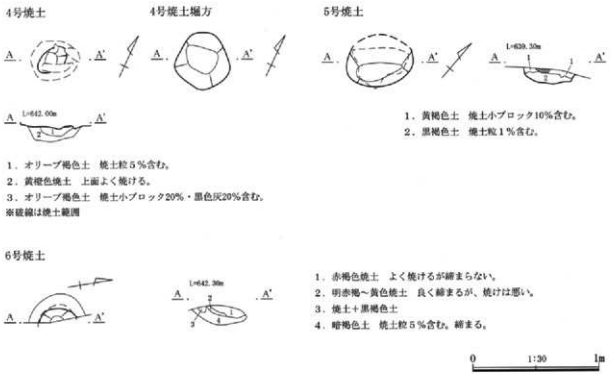
第３項　焼土遺構

17区

４号焼土遺構（第62図、ＰＬ24）Ｈ－10グリッド。１号住居跡の掘り方調査の際、発見されたため、１号住居跡より前出。確認面が既に使用面であった。焼土は良く焼けて堅い。炉の可能性が高いと考える。使用面の範囲は長辺38cm、短辺32cmで、掘り込みの規模は長辺45cm、短辺44cm、深さ12cmである。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

５号焼土遺構（第62図、ＰＬ24）Ｇ－２グリッド。確認面で滲んだような焼けの悪い焼土があり、掘り込みも確認できた。炉の可能性は低いだろう。掘り込みの規模は長辺53cm、短辺41cm以上、深さ12cmである。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

６号焼土遺構（第62図、ＰＬ24）Ｈ－９グリッド。調査区前に生えていた巨木の近くで確認したため、確認面が比較的高い。確認段階で使用面と見られる堅い焼土面があり、大半は削平されていたものと推測される。使用面の範囲は長辺31cm、短辺16cmである。焼土に乱れはないため、炉などの可能性が高い。掘り方の規模は長辺45cm、短辺21cm以上、深さ８cmである。時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第62図　17区４、５、６号焼土遺構

第５節　弥生時代以降

第１項　土坑

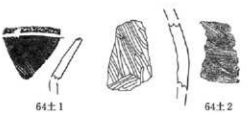
本節の遺構は、時期を限定できないが、弥生土器を含むため、前節と区別して弥生時代以降として扱う。なお、第２項以下も同じである。

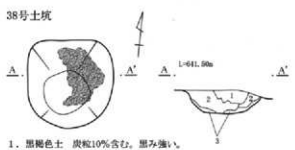
17区

38号土坑（第63図、ＰＬ24）Ｈ－５・６グリッド。上・下面とも不整円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。炭粒を堀没土中に多く含む。２号住居跡の東に隣接しており、関連も想定される。規模は長辺93cm、短辺90cm、深さ24cmである。縄文土器破片１片が出土したが、混入と判断する。

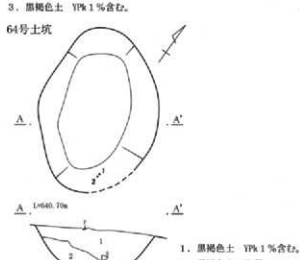
43号土坑（第63図、ＰＬ25）Ｉ－９グリッド。１号焼土遺構より前出。上・下面とも不整楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺147cm、短辺98cm、深さ26cmである。弥生土器破片１片が出土した。

64号土坑（第63図、第63図、ＰＬ25、62、63）Ｈ－４グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺174cm、短辺127cm、深さ42cmである。弥生土器甕（１・２）が出土する。

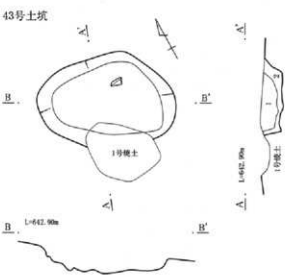




1．黒褐色土　炭粒10％含む。黒み強い。
2．暗褐色土　炭粒５％含む。
3．黒褐色土　YPk１％含む。



1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．黒褐色土　均質。



1．黒褐色土　YPk・炭粒５％含む。
2．黒褐色土　YPk１％含む。

0　1:40　1m

第63図　17区38、43、64号土坑・出土遺物

第２項　土坑（陥し穴）

17区

34号土坑（第64図、ＰＬ25）Ｉ－８・９グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺217㎝、短辺165㎝、深さ147㎝である。弥生土器破片２片が出土した。

91号土坑（第64図、ＰＬ25）Ｇ－２・３グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。壁の中間にオーバーハングする部分もある。土層断面観察の結果、埋没過程で壁面が崩落したと判断されるが、一部に貼り壁と思われる堅いローム混土が見られる。全体形は箱形２類。規模は長辺219㎝、短辺139㎝、深さ123㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

93号土坑（第64図、ＰＬ25）Ｈ－９グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸長方形。壁はややくの字形に立ち上がる。底面はやや凸凹し、両壁際に２カ所丸く窪む。全体形は箱形２類。規模は長辺180㎝、短辺137㎝、深さ106㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

157号土坑（第64図、ＰＬ25）Ｆ－６・７グリッド。上・下面とも隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺200㎝、短辺93㎝、深さ56㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

161号土坑（第64図、ＰＬ25）Ｅ・Ｆ－５グリッド。上面は不整隅丸長方形、下面は隅丸長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺177㎝、短辺116㎝、深さ97㎝である。弥生土器破片７片が出土した。

165号土坑（第65図、ＰＬ25）Ｆ－８グリッド。上・下面とも不整長楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形１類。規模は長辺164㎝、短辺73㎝、深さ28㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

176号土坑（第65図、ＰＬ25）Ｋ－４グリッド。上・下面とも不整楕円形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面はやや凸凹し、北側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺226㎝、短辺144㎝、深さ104㎝である。弥生土器破片が出土した。

26区

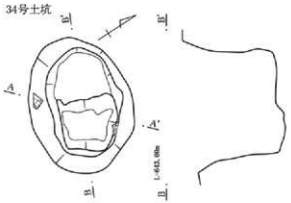
11号土坑（第66図、ＰＬ26）Ｕ・Ｖ－８・９グリッド。上・下面とも長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、西側が一段下がる。埋没土最下層が締まっていたが、使用面として位置づけるほどではない。全体形は箱形１類。規模は長辺220㎝、短辺125㎝、深さ146㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

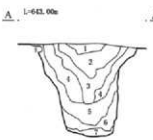
12号土坑（第66図、ＰＬ26）Ｖ－７グリッド。上・下面とも隅丸長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺220㎝、短辺120㎝、深さ113㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

13号土坑（第67図、ＰＬ26）Ｕ・Ｖ－５・６グリッド。上面は長楕円形、下面は細長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は逆台形。規模は長辺204㎝、短辺116㎝、深さ136㎝である。弥生土器破片４片が出土した。

15号土坑（第67図、ＰＬ26）Ｗ－５グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形２類。規模は長辺190㎝、短辺113㎝、深さ103㎝である。弥生土器破片１片が出土した。

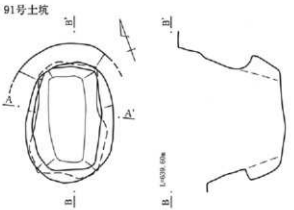
34号土坑

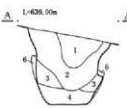




1．黒褐色土　YPk１％含む。
2．にぶい褐色土　YPk１％含む。
3．褐色土　YPk１％含む。
4．黒褐色土
5．黒褐色土　褐色土を含んで色調明るい。
6．黒褐色土　やや粘質。
7．黒褐色土＋黄褐色ローム

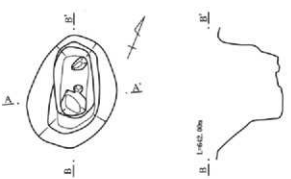
91号土坑

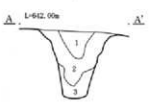




1．黒褐色土　YPk５％含む。
2．黒色土　褐色粒５％含む。
3．黒褐色土大ブロック＋黄褐色ローム大ブロック
4．黒色土　ローム小ブロック10％含む。
5．黄褐色ローム大ブロック
6．黒褐色土大ブロック＋黄褐色ローム大ブロック＋YPk締まる。貼り壁。

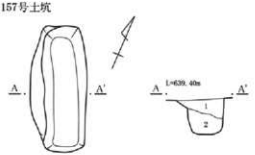
93号土坑





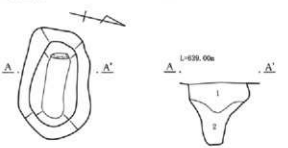
1．褐色土　YPk１％含む。Ⅲ層土体。
2．黒褐色土　YPk１％含む。締まらない。
3．黒褐色土　ローム大ブロック40％含む。締まらない。

157号土坑



1．黒褐色土　ローム小ブロック５％含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック20％、YPk１％含む。

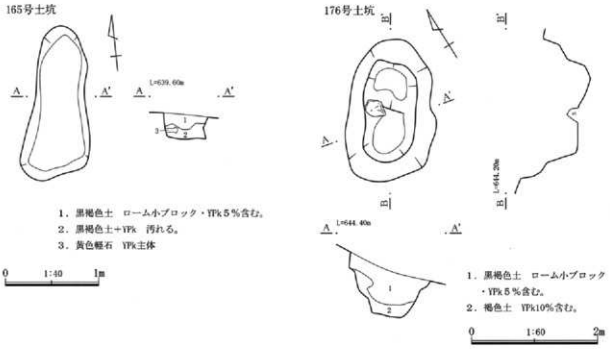
161号土坑



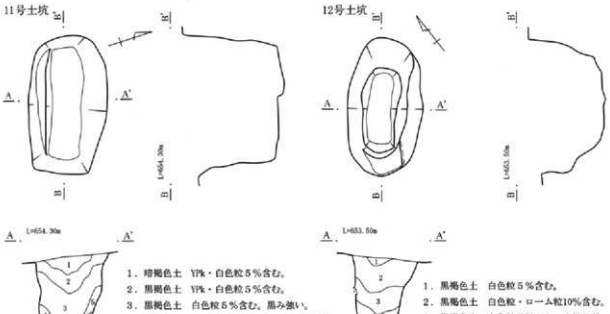
1．黒褐色土　ローム小ブロック５％含む。
2．褐色土　ローム小ブロック・YPk20％含む。

0　1:60　2m

第64図　17区34、91、93、157、161号土坑



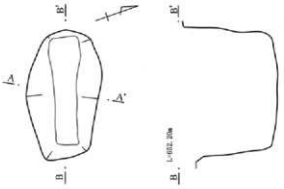
第65図　17区165、176号土坑

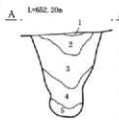


第66図　26区11、12号土坑

16号土坑（第67図、ＰＬ26）Ｗ－４グリッド。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。壁面全てに掘削時の工具痕跡が顕著に残る。刃先幅は概ね10cm程度であり、残りの良いものでＵ字形のものがある。規模は長辺154cm、短辺72cm、深さ72cmである。

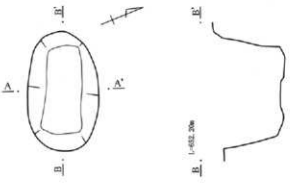
13号土坑





1．暗褐色土　白色粒わずか含む。
2．黒褐色土　白色粒・ローム粒５％含む。
3．黒褐色土　ローム粒10％含む。黒み強い。
4．黒褐色土　ローム粒20％・ローム大ブロック20％含む。
5．黒褐色土＋ロームブロック

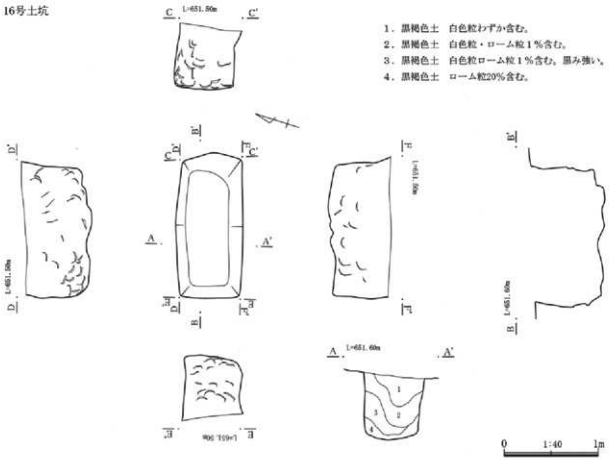
15号土坑



1．暗褐色土　ローム粒わずか含む。
2．黒褐色土　ローム粒わずか含む。
3．黒褐色土　ローム粒10％含む。黒み強い。
4．黒褐色土＋ロームブロック

0　1:60　2m

16号土坑

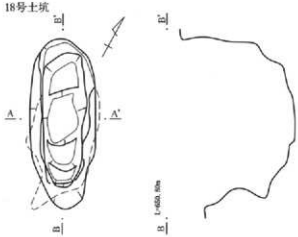


1．黒褐色土　白色粒わずか含む。
2．黒褐色土　白色粒・ローム粒１％含む。
3．黒褐色土　白色粒ローム粒１％含む。黒み強い。
4．黒褐色土　ローム粒20％含む。

0　1:40　1m

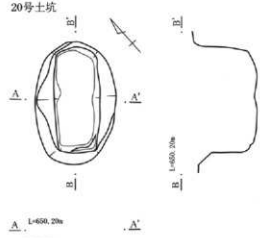
第67図　26区13、15、16号土坑

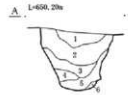
18号土坑



1．暗褐色土　ローム粒５％含む。
2．黒褐色土　白色粒５％含む。
3．黒褐色土　ローム粒10%含む。黒み強い。
4．黒褐色土　ローム小ブロック20%含む。
5．黒褐色土　ローム小ブロック40%含む。締まる。
6．にぶい黄褐色ロームブロック　暗褐色土含み締まる。
7．褐灰色土　ローム小ブロック・黒褐色土小ブロック10%含む。

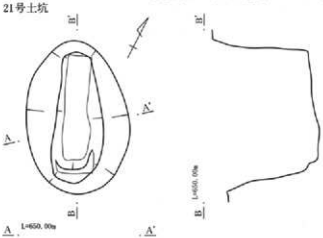
20号土坑

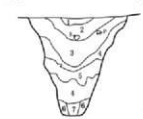




1．暗褐色土　ローム粒５％・風化白色岩片わずか含む。
2．黒褐色土　ローム粒５％・風化白色岩片わずか含む。
3．黒褐色土　ローム粒10%・風化白色岩片わずか含む。
4．褐色土　ローム粒・YPk20%・風化白色岩片10%含む。よく締まる。
5．褐色土　ローム小ブロック20%・ローム大ブロック20%含む。
6．にぶい黄褐色　ロームブロック暗褐色土含む。

21号土坑



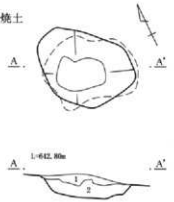


1．暗褐色土　黒褐色土小ブロック５％含む。
2．暗褐色土　YPk１％・風化白色岩片わずか含む。
3．黒褐色土　ローム粒５％・黒褐色土小ブロック５％・風化白色岩片５％含む。
4．黒褐色土　ローム小ブロック20%含む。
5．黒褐色土　ローム大ロック20%・風化白色岩片10%含む。よく締まる。
6．YPk　暗褐色土含む。
7．褐色土＋ローム粒＋YPk

0　1:60　2m

第68図　26区18、20、21号土坑

1号焼土



1．明赤褐色ブロック＋黒褐色土　炭粒10%含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック５％・炭粒10%含む。

0　1:30　1m

第69図　17区１号焼土

18号土坑（第67図、ＰＬ26）Ｖ・Ｗ－２・３グリッド。上・下面とも不整長楕円形。長辺の壁は斜めに、短辺の壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁の中間にオーバーハングする部分もある。土層断面観察の結果、埋没過程で壁面が崩落したと判断される。底面はやや凸凹する。全体形は逆台形。規模は長辺269㎝、短辺104㎝、深さ166㎝である。

20号土坑（第68図、ＰＬ26）Ｗ－１グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺195㎝、短辺128㎝、深さ101㎝である。

21号土坑（第68図、ＰＬ27）Ｖ－１グリッド。上面は楕円形、下面は隅丸細長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は逆台形。規模は長辺243㎝、短辺164㎝、深さ159㎝である。

第３項　焼土遺構

17区

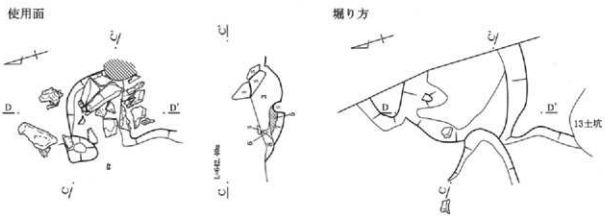
１号焼土遺構（第69図、ＰＬ27）Ｉ－９グリッド。43号土坑より後出。焼土範囲は、長辺76㎝、短辺57㎝である。焼土は焼けが悪く滲んでおり、炉とは見なしがたい。掘り込み規模は長辺82㎝、短辺55㎝、深さ10㎝である。43号土坑との新旧関係から、弥生時代以降と考えられる。

第６節　平安時代以降

第１項　竪穴住居跡

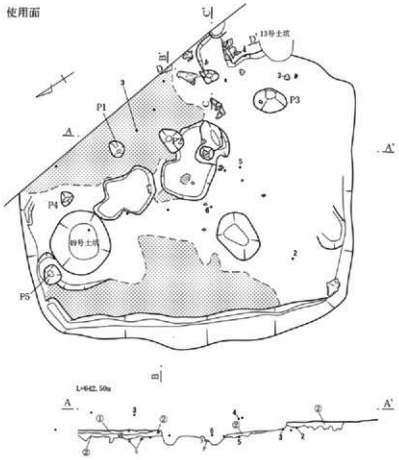
17区

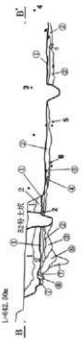
１号住居跡（第70、71図、第72図、ＰＬ27、28、46）



第70図　17区１号住居跡カマド

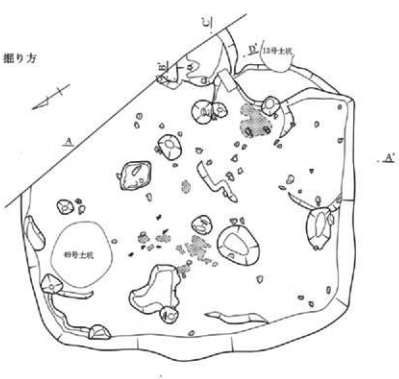
使用面





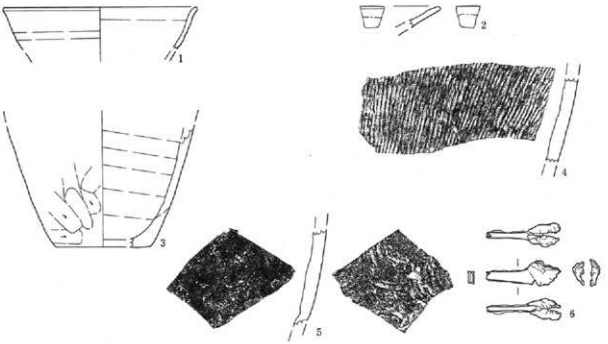
1．灰褐色土　YPk５%含む。
植物腐蝕顕著。
2．灰褐色土　YPkわずか含む。
ローム小ブロック５%含む。
①．黄褐色土　YPk・小礫40%含む。
良く締まる。貼り床。
②．暗褐色土　YPk１%含む。締まる。
③．暗褐色土　YPk１%・炭粒わずか含む。
やや締まる。
④．赤褐色焼土
⑤．暗褐色土　炭粒40%含む。
⑥．暗褐色土　ローム小ブロック５%含む。
締まらない。
⑦．暗褐色土　ローム小ブロック10%含む。
締まらない。
⑧．黄褐色ローム　貼り床の流れ込み。

掘り方



0　1:60　2.0m

第71図　17区１号住居跡



第72図　17区1号住居跡出土遺物

遺構確認が難しく、当初半分程度の住居規模と判断して調査を進めたため、遺構写真・土層観察面が不自然となっている。しかし、完掘状態から判断しても、住居が重複していた可能性は考えられない。

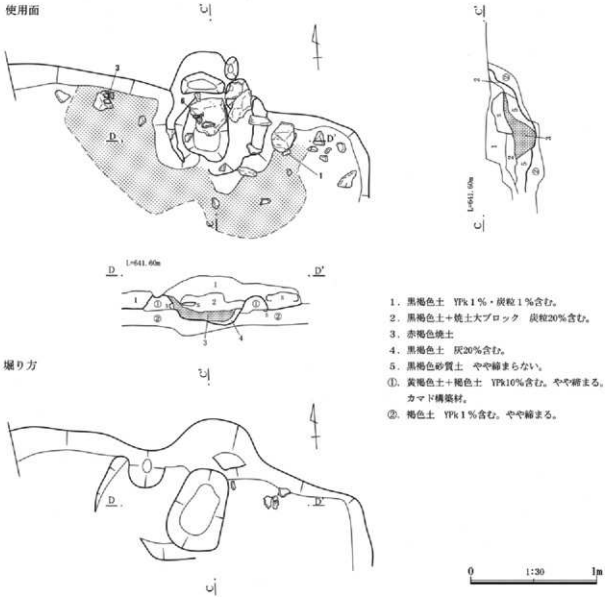
位置　17－H・I－9・10グリッド　**重複**　69号土坑、2・4号焼土より後出、13・52号土坑・1号溝より前出、1・11・12・27・47・49・50・53・73・73b・84号土坑とは新旧関係不明。

形態　主軸方向に短い長方形

主軸方位　N－130°－E　**規模**　南北5.28m、東西4.54m。北辺と西辺の半分近くまでを現代の道路によって失う。　**壁**　壁高は北辺17～27cm、南辺7～26cm、西辺20～41cmである。

カマド　東辺の中央やや南寄りに位置し、住居内に燃焼部を有する。煙道部は現代の道路により壊される。燃焼部の南壁平石が立置して残存することや、埋没土中に大礫が散乱することから、石組みカマドであったと推測される。天井部は崩落し、両袖とも残存していない。規模は、焚口～煙道が0.57m、袖焚口幅が0.43mである。火床面は床面よりやや下がる。掘り方規模は、主軸方向不明、幅1.16mである。掘り方内に焼土層が入り込んでおり、作り替えも想定される。　**内部施設**　ピットは5基を確認するが、掘り方面のものは含めない。西壁に沿って周溝が見られる。周溝規模は長辺458cm、幅23～52cm、深さ1～7cmである。中央部床面に不整形で浅い落ち込みが2基並ぶ。埋没土は締まりが無く、土坑など別の遺構とも思われるが明確な根拠はない。　**ピットの規模**（長径・短径・深さcm）P1：29、23、14、P2：42、20、29、P3：52、39、32、P4：23、19、17、P5：29、28、計測値無し　**床**　平坦でほぼ水平。住居床面の北半分で貼り床による硬化面がみられる。貼り床は5cmを超える黄褐色土を堅く貼っている。貼り床は南半分で全く確認できないため、もともと無かったものと考える。

掘り方　西壁際に不整形で浅い落ち込みがあるが、床下土坑などは見られない。焼土が点在して数カ所で確認され、うち2カ所は炉の可能性が高く別遺構とした。　**埋没状況**　自然埋没　**遺物出土状態**　非常に少ない。　**時期**　出土遺物から10世紀前半に比定される。



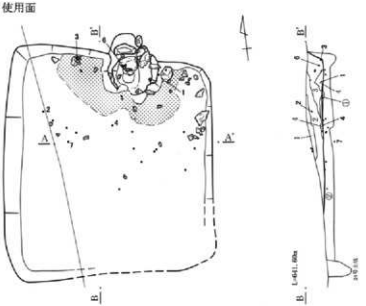
第73図　17区２号住居跡カマド

２号住居跡（第73、74図、第73図、ＰＬ28、29、30、46）

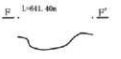
調査が第１次と第２次に分かれてる。　**位置**　Ｈ・Ｉ－５・６グリッド　**重複**　24号土坑より前出。　**形態**　ほぼ正方形　**主軸方位**　Ｎ－15°－Ｅ　**規模**　南北4.10m、東西3.28m。　**壁**　壁高は北辺10～32cm、東辺８～10cm、南辺32cm、西辺34～46cmである。　**カマド**　北辺の中央東寄りに位置し、住居内に燃焼部を有する。燃焼部東壁に石が多く、埋没土中に天井部とみられる平石が出土したことから、石組みカマドであったと推測される。天井部は崩落するが、両袖は残存する。規模は、焚口～煙道が0.97m、袖焚口幅が０.37mである。火床面は床面よりやや下がる。掘り方規模は、主軸方向0.98m、幅1.32mである。　**内部施設**　なし　**床**　カマドの南側に貼り床による硬化面がめぐる。貼り床は３cm前後で厚くない。

掘り方　東辺中央の床下土坑１は不整円形で、規模は長辺119cm、短辺104cm以上、深さ27cmである。南辺の床下土坑２は不整方形で、規模は長辺94cm、短辺78cm、深さ28cmである。西側では大きく楕円形に掘り込んだ部分があり、規模は長辺206cm、短辺72cm以上、深さ４cmであるが、二次調査では確認できなかった。

使用面

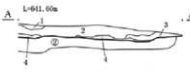


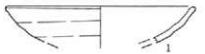
1．灰褐色土　やや砂質。YPk１％含む。
2．暗褐色土　やや砂質。YPk１％・砂粒含む。
3．暗褐色土　やや砂質。
4．暗褐色土　やや粘質，やや締まる。
①．黄色土　ロームとYPk主体。貼り床。
②．暗褐色土　炭粒含む。

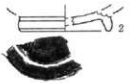


埋没状況　自然埋没　**遺物出土状態**　遺物量は少ないが、カマド周辺が多い。注目される遺物として釘（７）がある。

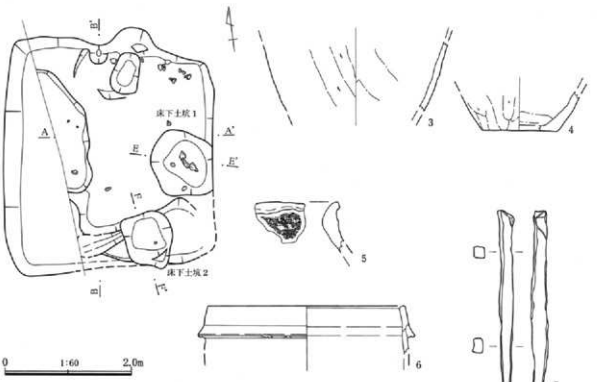
時期　出土遺物から10世紀前半に比定される。





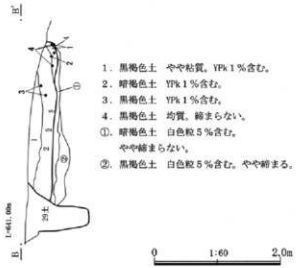


堀り方



第74図　17区２号住居跡・出土遺物

使用面

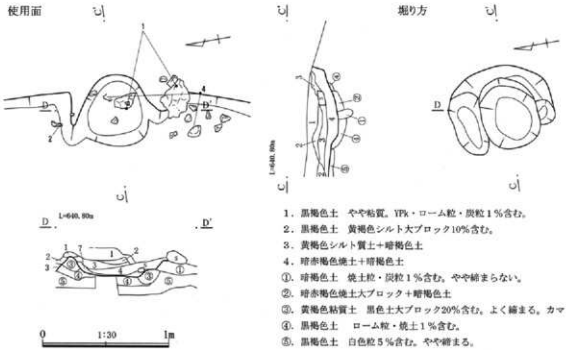


堀り方

第75図　17区４号住居跡

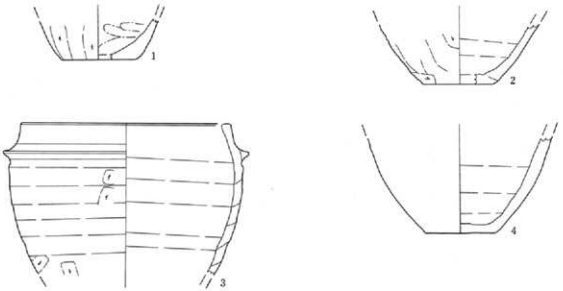
４号住居跡（第75、76図、第77図、ＰＬ30、31、46、47）

位置　17－Ｈ・Ｉ－３グリッド　**重複**　55号土坑より後出、29号土坑より前出。　**形態**　主軸方向に短い長方形　**主軸方位**　Ｎ－94°－Ｅ　**規模**　南北3.15m、東西2.52m。　**壁**　壁高は北辺23～32cm、東辺７～16cm、南辺27～36cm、西辺27～35cmである。　**カマド**　東辺ほぼ中央に位置し、住居内に燃焼部を有する。周辺に平石などが散在しており、石と黄褐色粘土を構築材にしたものと推測できる。天井部は崩落するが、両袖はやや残存する。規模は、焚口～煙道が0.53m、袖焚口幅が0.43mである。火床面は床面よりやや下がる。掘り方規模は、主軸方向0.66m、幅0.83m、深さ0.15mである。　**内部施設**　なし　**床**　カマドの前面北側にロームがあり、床面として検出した。硬化面は見られない。　**掘り方**　凸凹するが明確なものはない。　**埋没状況**　自然埋没　**遺物出土状態**　中央部に巨石が散乱していたがカマド構築材の一部であろう。遺物量は少ないが、カマド周辺が多い。　**時期**　出土遺物から10世紀前半に比定される。　**備考**　本遺構と重複関係にあることによって、29・55号土坑（陥し穴）の年代観を限定することができる。

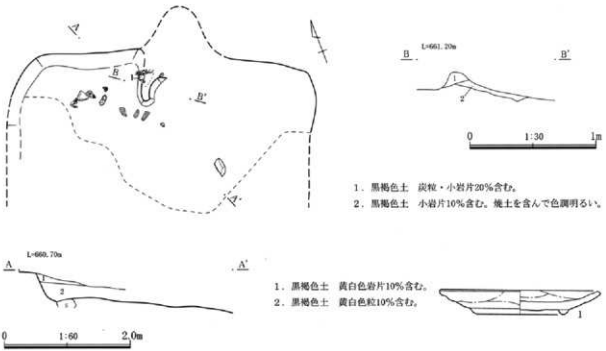


１．黒褐色土　やや粘質。YPk・ローム粒・炭粒１％含む。
２．黒褐色土　黄褐色シルト大ブロック10％含む。
３．黄褐色シルト質土＋暗褐色土
４．暗赤褐色焼土＋暗褐色土
①．暗褐色土　焼土粒・炭粒１％含む。やや締まらない。
②．暗赤褐色焼土大ブロック＋暗褐色土
③．黄褐色粘質土　黒色土大ブロック20％含む。よく締まる。カマド構築材。
④．黒褐色土　ローム粒・焼土１％含む。
⑤．黒褐色土　白色粒５％含む。やや締まる。

第76図　17区４号住居跡カマド



第77図　17区４号住居跡出土遺物



第78図　27区１号住居跡・出土遺物

27区

１号住居跡（第78図、第78図、ＰＬ31、32、47）

遺構確認面確定のため設置したトレンチに、カマドが検出され遺構確認できた。遺存状態が悪く、南半分は斜面のために消滅していた。

位置　27－Ｒ・Ｓ－12・13グリッド　**重複**　１号掘立柱建物跡Ｐ３・Ｐ４と新旧関係不明。　**形態**　不明

主軸方位　Ｎ－58°－Ｗ　**規模**　南北2.48m以上、東西4.77m。　**壁**　不明

カマド　北辺の中央に位置するが、左袖部以外は不明。規模不明。　**内部施設**　なし

床　明確でない。　**掘り方**　不明　**埋没状況**　判然としない。　**遺物出土状態**　カマド左袖脇から灰釉陶器皿（１）が出土するが、住居時期を示す唯一の遺物となる。埋没土に含まれる遺物は全て縄文晩期から弥生時代の土器であった。カマド西側に棒状の炭片が数点みられるが、性格は不明である。　**時期**　出土遺物から10世紀前半に比定される。

第2項　掘立柱建物跡・ピット群

16・17・26区

16区1号掘立柱建物跡（第79図、ＰＬ32、33）

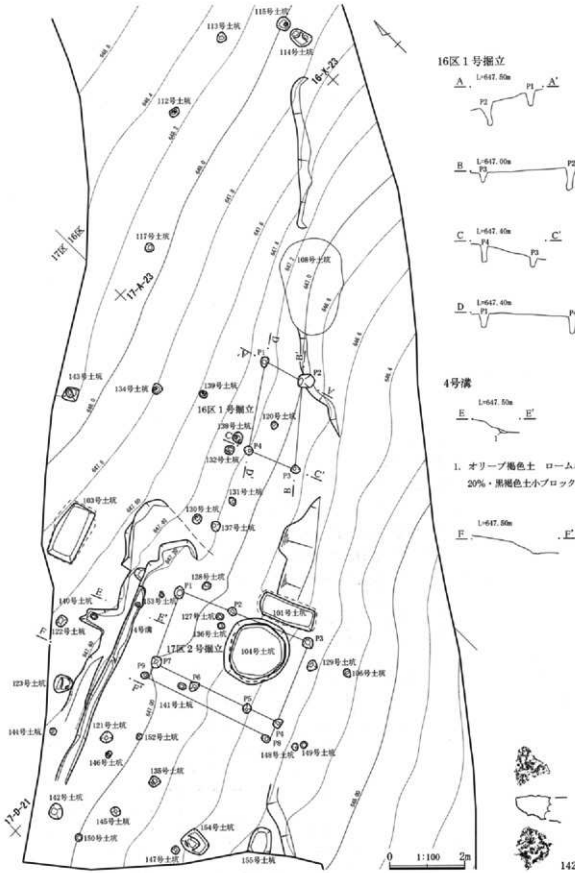
位置　16－Ｙ－21・22、17－Ａ－21　**重複**　なし　**形態**　１×１間(1.1～1.3×2.32×2.41m・４尺×８尺)。棟方向不明で菱形に歪む。柱間は長辺平均2.365mと短辺平均1.20mで大きく異なる。柱穴は全て不整円形。規模は長径23～44cm、短径20～36cm、深さ24～62cmである。　**内部施設・出土遺物**　なし

建物全体の規模		１×１間		面　積	2.67㎡
主　軸　方　位		Ｎ－49°～56°－Ｅ			
柱　穴　No	規　模（m）			形　状	次ピットとの間隔(m)
	長　径	短　径	深　さ		
Ｐ１	28	22	38	円	1.1
Ｐ２	44	36	62	円	2.32
Ｐ３	23	20	24	円	1.3
Ｐ４	24	20	43	円	2.41

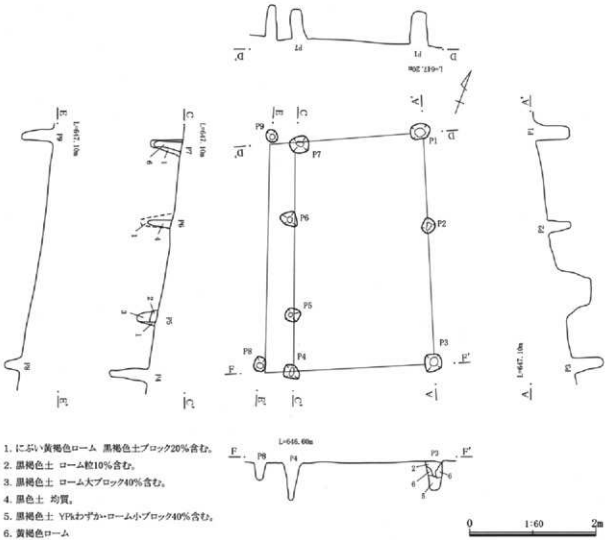
17区2号掘立柱建物跡（第79、80図、ＰＬ33、34）

位置　17－Ａ・Ｂ－20・21グリッド　**重複**　内部に104号土坑を含む。新旧関係不明、内部施設の可能性あり。　**形態**（１＋１）×３間（2.36～2.78＋0.48～0.54×3.6～3.65m・8.5尺＋1.7尺×12尺）の南北棟で西庇を持つ。東辺は桁行２間、西辺は桁行３間としており、柱間は異なる。ただし、104号土坑に壊されて、元来Ｐ２とＰ３の間にピットがあった可能性もある。柱痕跡はＰ１・Ｐ３・Ｐ５～Ｐ７で見られる。現場段階で計測した数値では、Ｐ６が長径12cm短径11cm、Ｐ７は長径12cm短径10cmで、ともに丸柱であった。柱穴はＰ３が隅丸方形以外、不整円形をなす。規模は長径21～32cm、短径17～27cm、深さ22～57cmである。柱穴の深さは大部分一定であり、棟を等高線と直交方向に設け、柱の長さを調整して水平としたか、そのまま傾斜させて造った両者が想定される。　**内部施設・出土遺物**　なし　**備考**　建物敷は山側を削平し造成する。合わせて平行して４号溝と、その北に比高差30cmほどの法切りが施される。

建物全体の規模	（１＋１）×３間			庇　西	面　積	9.33㎡
主　軸　方　位	Ｎ－17°～24°－Ｗ　南北棟				桁行平均柱間	1.208m
全体規模（m）	柱穴No	規　模（m）			形　状	次ピットとの間隔(m)
		長　径	短　径	深　さ　柱痕径		
東辺　3.65	Ｐ１	32	25	26	円	1.51
	Ｐ２	22	21	38	円	2.14
南辺　2.78	Ｐ３	29	27	40	円	2.26
西辺　3.60	Ｐ４	26	21	57	隅方	0.92 0.54(Ｐ８へ)
	Ｐ５	21	24	34	円	1.50
	Ｐ６	30	22	46　12×11	円	1.20
北辺　2.36	Ｐ７	31	26	51　12×10	円	1.91(Ｐ１へ)
庇　3.64	Ｐ８	23	19	22	円	3.64
	Ｐ９	21	17	53	円	0.48



第79図　16・17区掘立柱建物跡・ピット群・溝・出土遺物



第80図　17区２号掘立柱建物跡

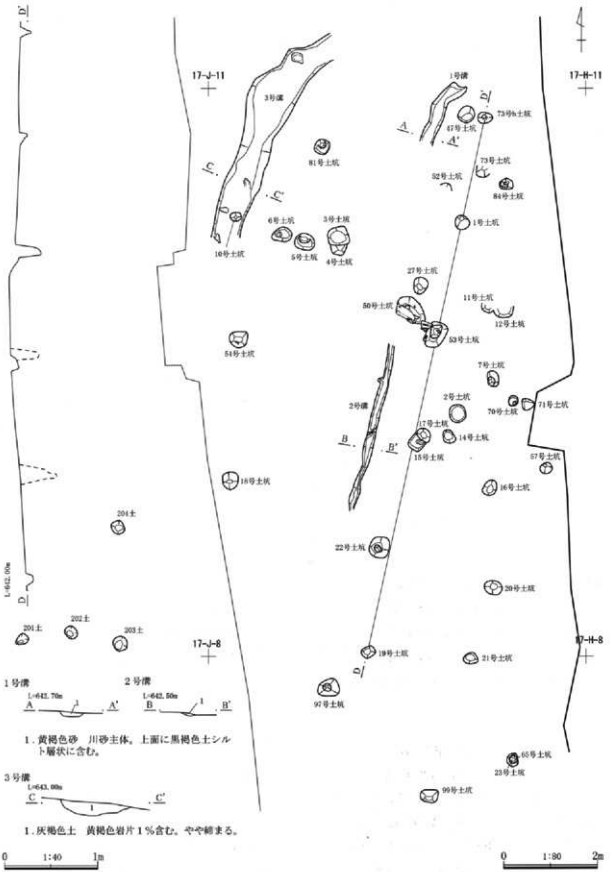
16・17区ピット群（第79図、第79図、ＰＬ47）

16区１号掘立柱建物跡及び17区２号掘立柱建物跡周辺に分布するピット状の土坑群を一括して扱う。遺構番号及び規模は遺構計測表のとおり。特に17区121・135・141・142・145～152号土坑は17区２号掘立柱建物跡と同様、造成面に位置しており建物や関連施設の柱穴である可能性が高い。　**出土遺物**　142号土坑の埋没土中から椀形鉄滓片（142土１）が出土する。

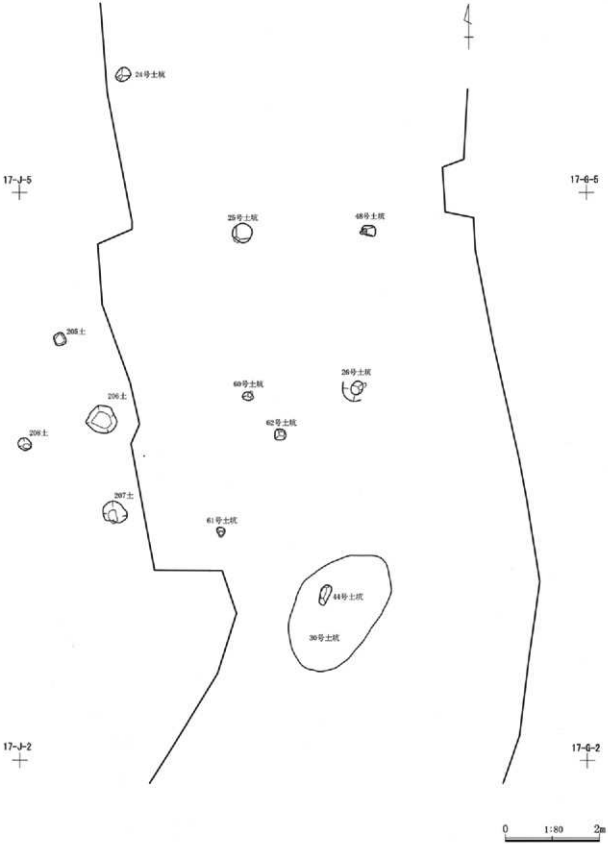
17区

17区ピット群（第81、82図、ＰＬ35）

遺構番号及び規模は遺構計測表のとおり。時期を示す遺物はないが、52号土坑が１号住居跡、16号土坑が１号竪穴状遺構より後出する状況から、一括して当期とした。５号土坑には柱痕跡があることから、柱穴が多いと判断される。ピット群は相互の関連を示すように並ぶが、掘立柱建物跡として認定するまでには至らなかった。また、73b・１・53・17・22・19号土坑はほぼ2.2m前後の間隔で直線状に並んでおり、エレベーション図を作成した。ただし、ほかにも幾つか直線状に並ぶものもあることから、柱穴列などの遺構名を冠することは控えた。あくまで参考的な並びであり、幾つかの組み合わせが想定でき、他の可能性を否定する



第81図　17区ピット群（1）



第82図　17区ピット群（２）

第83図　27区１号掘立柱建物跡・ピット群

ものではない。

27区

27区１号掘立柱建物跡（第83図、ＰＬ35､36）

位置　27－Ｑ・Ｒ－12～14　**重複**　Ｐ３・Ｐ４は１号住居跡、Ｐ１・Ｐ２は１号竪穴状遺構と新旧関係不明。

形態　２以上×２以上間（3.32×3.45m・11尺×11.5尺以上）。棟方向不明。柱間は長短辺とも同じ傾向で、1.4m前後と2.0m前後に分かれる。柱穴は隅丸方形と円形が混在する。規模は長径35～47cm、短径34～39cm、深さ14～49cmである。　**内部施設・出土遺物**　なし

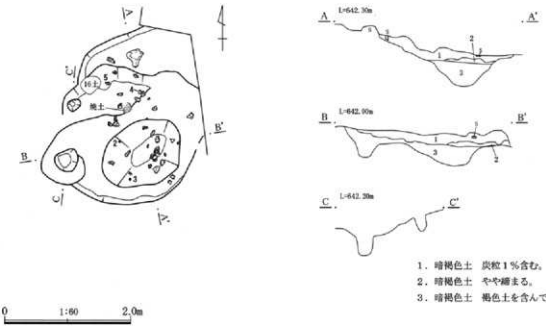
27区ピット群（第83図、ＰＬ35､36）

遺構番号及び規模は遺構計測表のとおり。１号掘立柱建物跡周辺の土坑を一括した。時期を示す遺物はないが、１号住居跡や１号竪穴状遺構の年代観を参考に、一括して当期とした。　**出土遺物**　なし

建物全体の規模	２以上×２以上間			面　積	11.45㎡以上	
主軸方位	N－9°－E	長辺側平均柱間		1.725m	短辺側平均柱間	1.665m
全体規模（m）	柱穴No	規　模（m）			形　状	次ピットとの間隔(m)
		長　径	短　径	深　さ		
南辺　3.32	Ｐ１	40	38	14	隅方	1.92
	Ｐ２	35	34	26	隅方	1.41
西辺　3.45	Ｐ３	47	36	29	隅方	1.46
	Ｐ４	38	36	42	円	1.99
	Ｐ５	40	39	49	隅方	

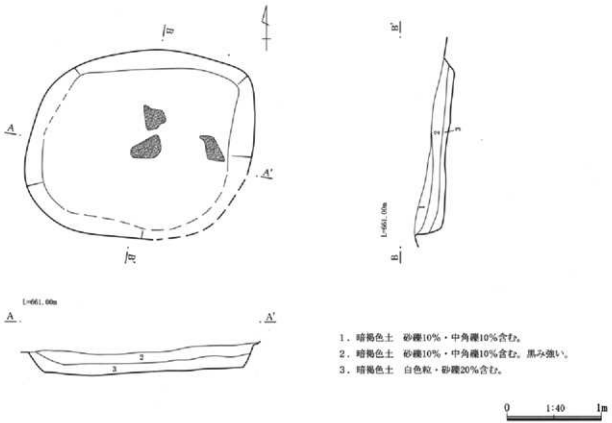
第３項　竪穴状遺構・土坑

１．竪穴状遺構



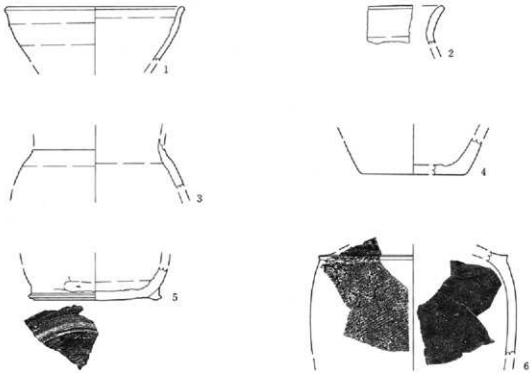
1．暗褐色土　炭粒１％含む。
2．暗褐色土　やや締まる。
3．暗褐色土　褐色土を含んで色調明るい。

第84図　17区１号竪穴状遺構



1．暗褐色土　砂礫10％・中角礫10％含む。
2．暗褐色土　砂礫10％・中角礫10％含む。黒み強い。
3．暗褐色土　白色粒・砂礫20％含む。

第85図　27区１号竪穴状遺構



第86図　17区１号竪穴状遺構出土遺物

17区１号竪穴状遺構（第84図、第86図、ＰＬ36、47）

位置　17－Ｈ－８・９グリッド　**重複**　113号土坑より後出、16号土坑より前出。52号土坑とは新旧関係不明。　**形態**　上面は不整円形で、中央部南寄りを底面としてスリ鉢形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－10°－Ｗ　**規模**　南北2.68m、東西2.45m以上。　**壁**　壁は斜めに立ち上がる。壁高は北辺７cm、東辺２cm、南辺８cm、西辺４～19cmである。　**内部施設**　西壁際にピット２本あり。　**ピットの規模**（長径・短径・深さcm）Ｐ１：39、36、23、Ｐ２：136、100、26、Ｐ３：22、17、24　**遺物出土状態**　遺物は全体に散在しており特に集中部分はない。　**時期**　出土遺物から10世紀前半に比定される。

27区１号竪穴状遺構（第85図、ＰＬ36）

位置　Ｑ・Ｒ－12・13　**重複**　１号掘立柱建物跡Ｐ１・Ｐ２、22・23号土坑と新旧関係不明。　**形態**　隅丸長方形　**長辺方位**　Ｎ－83°－Ｗ　**規模**　規模は長辺240cm、短辺220cmである。　**壁**　壁高は北辺24～51cm、東辺29～51cm、西辺19～24cmである。壁は斜めに立ち上がる。　**内部施設**　なし　**遺物出土状態**　平安時代遺物片１点出土する。

２．土坑

16区　16・17区ピット群の年代観に合わせて当該期とした。

103号土坑（第79、87図、ＰＬ36）Ｘ・Ｙ－23グリッド。上・下面とも整った長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土の上２／３が均質に埋まっており、人為的な埋没の可能性あり。規模は長辺136cm、短辺70cm、深さ80cmである。

106号土坑（第79、87図、ＰＬ36）Ｙ－22グリッド。上・下面とも隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺144cm、短辺130cm、深さ29cmである。

17区

９号土坑（第88図、ＰＬ36､37）Ｈ－Ｉ・８グリッド。22号土坑より後出。上・下面とも不整隅丸長方形。東壁は斜めに、他は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持って堅く締まる。規模は長辺198cm、短辺141cm、深さ45cmである。埋没土中位に黄褐色灰が面的に被覆する。灰層は底面から浮いており、底面との間に締まりの悪い黒色土が挟まれる。また、灰層の下に扁平気味の石がまとまって見られ、１点だけ灰層の上にあった。石のうち、中央部のものは全て底面よりも浮いた状態であり、南壁に並ぶ石４点は底面に張り付く。うち２点については裏側に炭粒やススが付着しており、地山に埋まっていることから、本遺構構築以前に付着していた可能性がある。埋没土中には焼土は全く見られない。粘土により天井を造るか、覆うような構造ではなかったかと推測される。

13号土坑（第88図、ＰＬ37）Ｈ－９グリッド。１号住居跡・７号焼土遺構より後出。上・下面とも不整楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺85cm、短辺66cm、深さ38cmである。

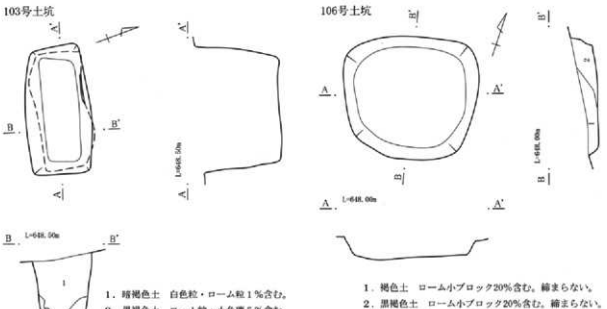
36号土坑（第88図、ＰＬ37）Ｈ－９グリッド。13号土坑より前出で、７号焼土より後出。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺64cm、短辺56cm、深さ17cmである。

46号土坑（第88図、第88図、ＰＬ47）Ｈ－10グリッド。上・下面とも隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺55cm、短辺44cm、深さ26cmである。土師器甕片（１）が出土する。

49号土坑（第88図、ＰＬ37）Ｈ－10グリッド。１号住居跡と新旧関係不明だが、前出の場合住居の貼り床が被覆するはずであるため、後出の可能性が高い。上・下面とも円形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は筒形。陥し穴の可能性もある。規模は径95cm、深さ137cmである。

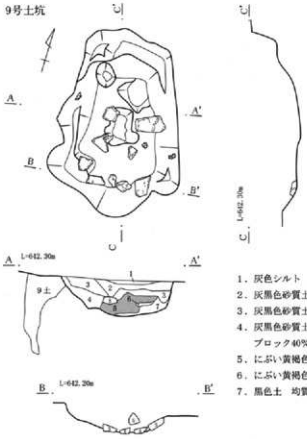
77号土坑（第88図、ＰＬ37）Ｈ－９グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は長辺51cm、短辺40cm、深さ18cmである。

101号土坑（第89図、ＰＬ37）Ａ－20グリッド。上・下面とも整った長方形。壁ははぼ垂直で、壁の下位は



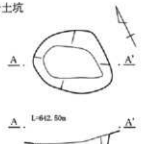
第87図　16区103、106号土坑

9号土坑



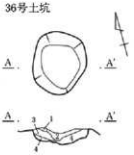
1．灰色シルト　水成堆積。
2．灰黒色砂質土
3．灰黒色砂質土　YPk５％含む。
4．灰黒色砂質土　黄灰色粘土大ブロック40％含む。
5．にぶい黄褐色灰　炭片含む。
6．にぶい黄褐色＋灰黒色土
7．黒色土　均質。締まらない。

13号土坑



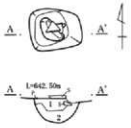
1．灰褐色土　YPk５％・１cm大炭片含む。締まらない。
2．灰褐色土　夾雑物含まない。

36号土坑



1．オリーブ褐色土　ロームブロック主体。
2．暗褐色土　炭粒１％含む。
3．暗褐色土　黒色土小ブロック５％・ローム小ブロック５％含む。
4．暗褐色土

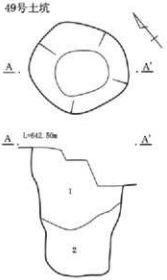
46号土坑



1．暗褐色土　やや砂質。締まらない。
2．黒褐色土　やや砂質。締まらない。

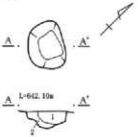
46土１

49号土坑



1．暗褐色土　黄色粒わずか含む。
2．暗褐色土　ローム小ブロック40％含む。締まらない。

77号土坑

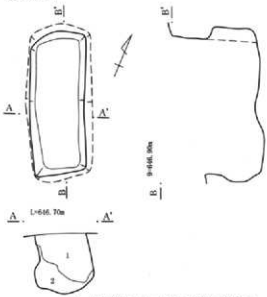


1．暗褐色土　YPk５％・炭粒１％含む。
2．暗褐色土　YPkわずか含む。

0　1:40　1m

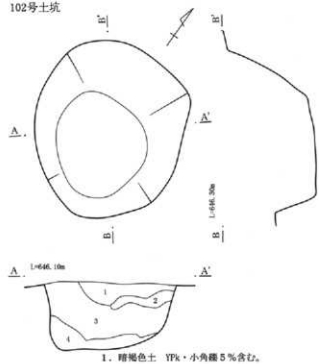
第88図　17区９、13、36、46、49、77号土坑・出土遺物

101号土坑



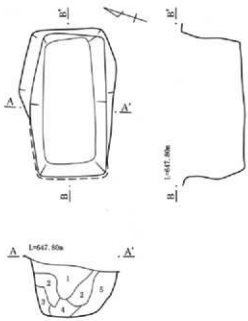
1．黒褐色土　ローム粒・小角礫５％含む。
2．暗褐色土　ローム粒20％・小角礫５％含む。

102号土坑



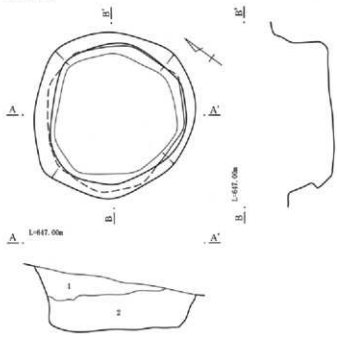
1．暗褐色土　YPk・小角礫５％含む。
2．褐色土　YPk・ローム粒20％含む。黒み強い。
3．暗褐色土　YPk・小角礫５％含む。黒み強い。
4．暗褐色土　YPk・ローム小ブロック40％含む。

103号土坑



1．黒褐色土　ローム粒１％含む。
2．黒褐色土　ローム大ブロック20％含む。
3．褐色土ローム　暗褐色土10％含む。
4．黒褐色土　ローム粒１％含む。黒み強い。
5．褐色土　ローム小ブロック20％含む。

104号土坑



1．黄褐色土　ローム大ブロック５％・暗褐色土小ブロック10％含む。
2．暗褐色土　YPk・ローム大ブロック20％含む。

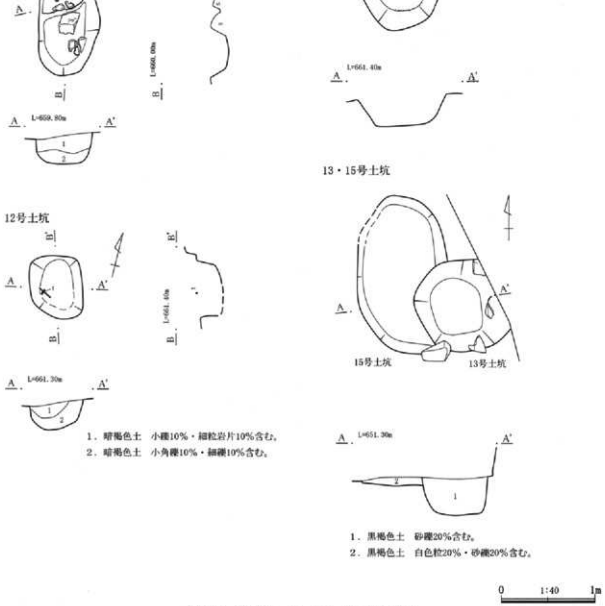
0　1:40　1m

第89図　17区77、101、102、103、104号土坑

オーバーハングする。埋没土中に目立った崩落土はなく、使用時にすでに壁面はえぐれていたものと解される。底面はやや凸凹する。規模は長辺150cm、短辺57cm、深さ64cmである。２号掘立柱建物の東辺に沿っており、関連が想定される。

102号土坑（第89図、ＰＬ37）16－Ｙ－20、17－Ａ－20グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺187cm、短辺161cm、深さ73cmである。

103号土坑（第89図、ＰＬ37）Ｂ－21・22グリッド。上・下面とも整った長方形。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺152cm、短辺81cm、深さ60cmである。101号土坑に形態的に似ており、軸方位から関連が想定される。



第90図　27区７、８、12、13・15号土坑

104号土坑（第89図、ＰＬ37）Ａ・Ｂ－20グリッド。上・下面とも円形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺171cm、短辺176cm、深さ67cmである。

27区

7号土坑（第90図、ＰＬ38）Ｔ－12グリッド。上・下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹し、南側が一段下がる。規模は長辺107cm、短辺65cm、深さ23cmである。平安時代遺物１点が出土する。

8号土坑（第90図、ＰＬ38）Ｑ・Ｒ－13グリッド。16・18号土坑と重複し、遺構確認状況から後出と推測する。北半分はトレンチ確認の際、欠損してしまったが、上・下面とも円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺96cm、短辺46cm、深さ28cmである。

12号土坑（第90図、第91図、ＰＬ38、47）Ｒ－13グリッド。上・下面とも不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺67cm、短辺56cm、深さ32cmである。確認面ではほぼ完形の鉄製紡錘車（12土－１）が横位で出土した。

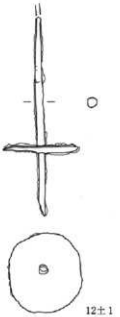
13号土坑（第90図、ＰＬ38）Ｑ－13グリッド。13号土坑が15号土坑より後出。上・下面とも円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺97cm、短辺85cm以上、深さ39cmである。

15号土坑（第90図、ＰＬ38）Ｑ－13グリッド。15号土坑が13号土坑より前出。16号土坑は遺構確認状況から15号土坑より後出と想定される。上・下面とも楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は地山礫が露呈して凸凹する。規模は長辺169cm、短辺96cm、深さ10cmである。

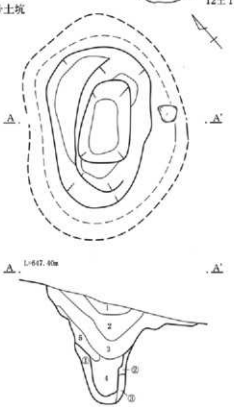
第４項　土坑（陥し穴）

16区

108号土坑（第91図、ＰＬ38）Ｘ・Ｙ－21・22グリッド。上面は楕円形、下面は不整楕円形。隅丸長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面は丸みを持つ。全体形は逆台形。調査所見では、下半部壁面は貼り壁であると記録される。規模は長辺255cm、短辺163cm、深さ188cmである。確認面上層に柏川テフラらしい灰層が堆積する。



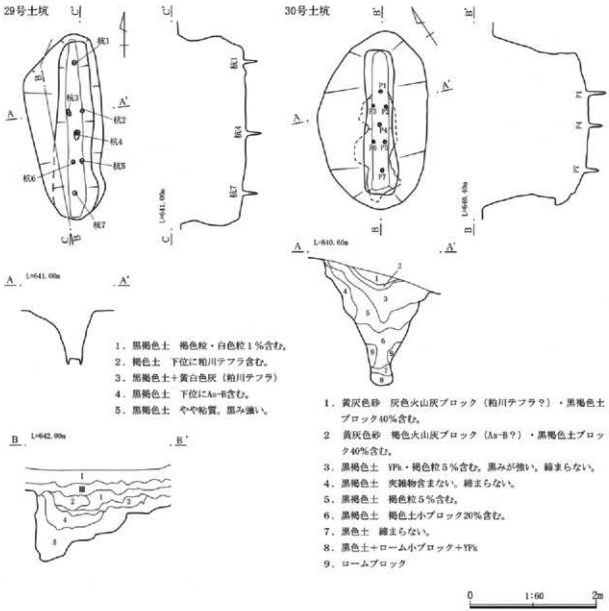
108号土坑



1．黒褐色土　灰色シルト〔柏川テフラ？〕を含む。
2．黒褐色土　YPk・ローム粒20%含む。
3．黒褐色土　YPk・ローム粒５%含む。黒み強い。
4．黒褐色土　YPk・ローム粒10%含む。黒み強い。
①．黄褐色ローム＋黒褐色土
②．暗褐色土　ローム大ブロック20%含む。
③．黄褐色ローム＋YPk

0　1:60　2m

第91図　27区12号土坑出土遺物、16区108号土坑



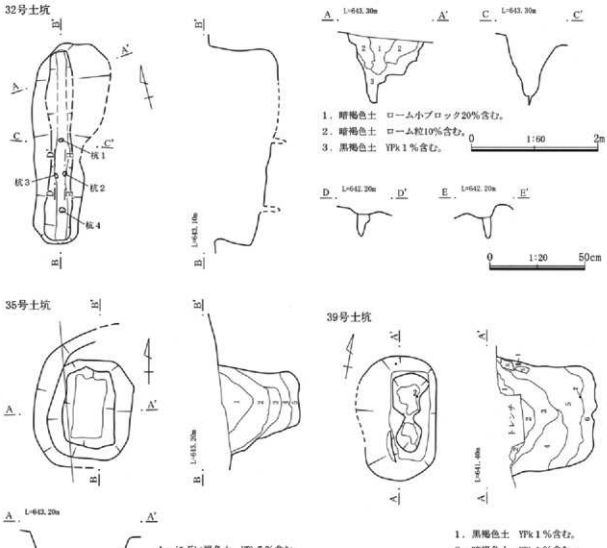
第92図　17区29、30号土坑

17区

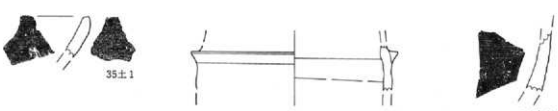
29号土坑（第92図、ＰＬ38、39）

Ｉ－３グリッド。調査が第１次と第２次に分かれてる。４号住居より後出。全体形は溝状。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺296㎝、短辺126㎝以上、深さ108㎝である。底面に杭跡７基を調査した。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。杭は当初もう１基断ち割り調査を行ったが、観察の結果根の攪乱と判断された。　杭の規模（現場計測：径・深さ㎝）Ｐ１：３、13、Ｐ２：４、10、Ｐ３：６、12、Ｐ４：４、12、Ｐ５：５、14、Ｐ６：４、15、Ｐ７：４、14

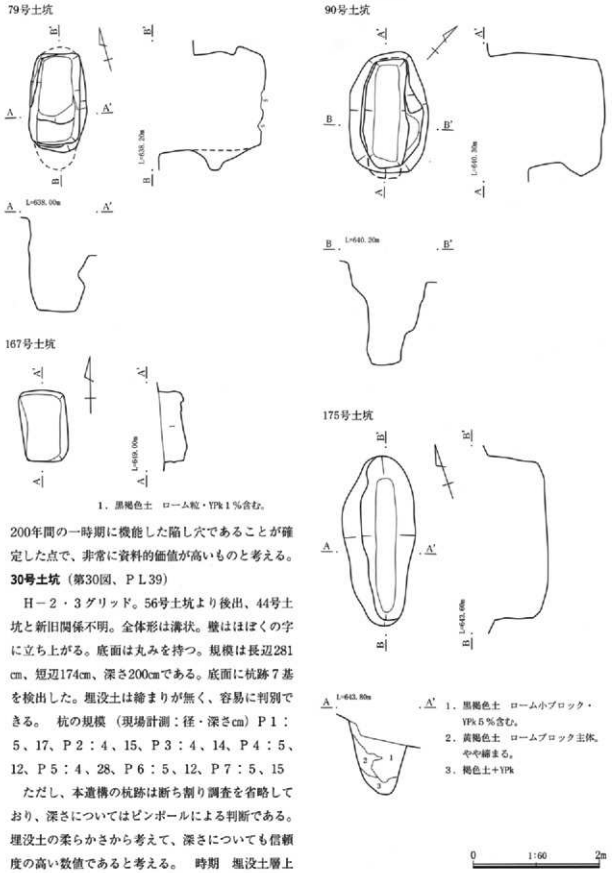
時期　４号住居の西辺を壊して造られる。埋没土層上層に火山灰層を含み、自然科学分析（第５章）の結果、浅間Ｂ軽石と粕川テフラの可能性が指摘された。この結果、本遺構は４号住居の年代観である10世紀前半以降構築され、浅間Ｂ軽石の降下年代とされる1108年以前に埋没したことが判明する。したがって、この



第93図　17区32、35、39号土坑



第94図　17区35、39号土坑出土遺物



1．黒褐色土　ローム粒・YPk１％含む。

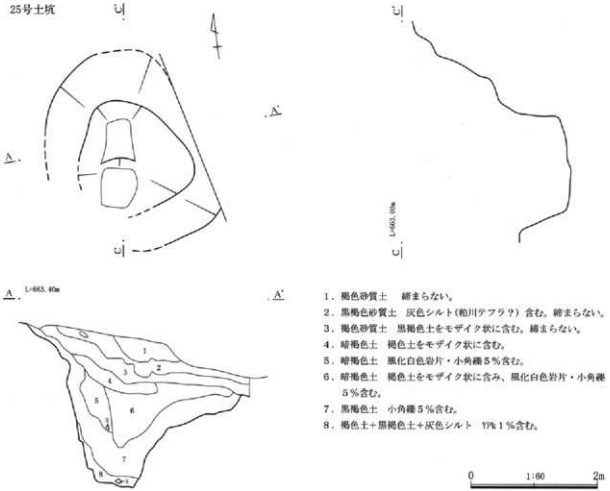
第95図　17区79、90、167、175号土坑

200年間の一時期に機能した陥し穴であることが確定した点で、非常に資料的価値が高いものと考える。

30号土坑（第30図、ＰＬ39）

Ｈ－２・３グリッド。56号土坑より後出、44号土坑と新旧関係不明。全体形は溝状。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺281㎝、短辺174㎝、深さ200㎝である。底面に杭跡７基を検出した。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。　杭の規模（現場計測：径・深さ㎝）Ｐ１：５、17、Ｐ２：４、15、Ｐ３：４、14、Ｐ４：５、12、Ｐ５：４、28、Ｐ６：５、12、Ｐ７：５、15

ただし、本遺構の杭跡は断ち割り調査を省略しており、深さについてはピンポールによる判断である。埋没土の柔らかさから考えて、深さについても信頼度の高い数値であると考える。　時期　埋没土層上層に火山灰層を含み、自然科学分析（第５章）の結果、



第96図　26区25号土坑

浅間Ｂ軽石と粕川テフラの可能性が指摘された。この結果、本遺構は浅間Ｂ軽石の降下年代とされる1108年以前に埋没したことが判明する。

32号土坑（第93図、ＰＬ39）

Ｉ－10・11グリッド。３号溝より前出、33号土坑より後出。ただし、調査段階で北側の一部を33号土坑まで掘り下げてしまったため、底面を欠損する。全体形は溝状。長辺の壁はほぼ垂直に、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺306cm、短辺116cm、深さ107cmである。底面に杭跡４基を検出したが、欠損部分に推定３基があったものと考えられる。埋没土は締まりが無く、容易に判別できる。杭の規模（長径・短径・深さcm）Ｐ１：７、５、15、Ｐ２：７、６、11、Ｐ３：８、５、12、Ｐ４：10、７、25　杭跡は全て断ち割り調査を行い、先端が尖り、平滑の削りだしが観察される。調査担当者は打ち込まれたものである可能性を示唆している。

35号土坑（第93図、第94図、ＰＬ39、47）Ｉ・Ｊ－９・10グリッド。調査が第１次と第２次に分かれてる。上面は楕円形、下面は長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦。全体形は箱形２類。規模は長辺224cm、短辺160cm以上、深さ130cmである。在地産鉢（１）とみられる口縁部が出土しており、中世の可能性がある。

39号土坑（第93図、第94図、ＰＬ39、47）Ｇ・Ｈ－７グリッド。上面は楕円形、下面は長方形。壁はややくの字に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形２類。規模は長辺197cm、短辺124cm、深さ157cmで

ある。出土遺物から10世紀前半に比定される。

79号土坑（第95図、ＰＬ40）Ｆ－２グリッド。斜面部に露呈していたため、調査が可能であったが、断面観察は明確でない。上・下面とも長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁の中間にオーバーハングする部分もある。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。規模は長辺156cm、短辺90cm、深さ161cmである。

90号土坑（第95図、ＰＬ40）Ｇ－５グリッド。上面は楕円形、下面は細長方形。長辺の壁は垂直に、短辺の壁はややくの字形に立ち上がる。底面はほぼ平担。全体形は箱形２類。規模は長辺189cm、短辺124cm、深さ159cmである。

167号土坑（第95図、ＰＬ40）Ｏ－３グリッド。急斜面のため、トレンチ調査した部分に所在する。確認面がかなり下がったため、遺構深度が浅く情報が少ない。トレンチ調査段階で上層に粕川テフらしい火山灰の堆積が確認されており、当該期の遺構とした。上・下面とも長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。全体形は箱形１類。規模は長辺114cm、短辺75cm、深さ45cmである。

175号土坑（第95図、ＰＬ40）Ｋ－３グリッド。全体形は溝状。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。底面がYPk層になっており、杭跡などは確認できなかった。規模は長辺271cm、短辺118cm、深さ117cmである。

26区

25号土坑（第96図、ＰＬ40）Ｐ－24・25グリッド。上面は楕円形、下面は不整長方形。壁はほぼくの字に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側が一段下がる。全体形は箱形２類。規模は長辺314cm以上、短辺264cm以上、深さ258cmである。埋没土上層に粕川テフらしい火山灰が良好に堆積する。

第５項　溝

１号溝（第81図、ＰＬ35）Ｈ－10・11グリッド。１号住居跡より後出。規模は長さ1.46cm、幅26～32cm、深さ２～９cmである。埋没土は黄褐色の川砂であり、一部に水成堆積が見られる。延長線上に２号溝があり、本来は同一の溝である可能性が高い。表土中には水田の床土を思わせるロームの盛土層が一部で確認されており、調査前の地形も考慮すると、旧時の水田耕作に伴う水路遺構である可能性がある。時期は不明である。

第97図　17区２号溝出土遺物

２号溝（第81図、第97図、ＰＬ35、47）Ｉ－８・９グリッド。規模は長さ357cm、幅10～20cm、深さ１～３cmである。埋没土は黄褐色の川砂であり、一部に水成堆積が見られる。１号溝の延長線上にあり、本来は同一の溝である可能性が高い。１号溝同様、旧時の水田耕作に伴う水路遺構である可能性がある。出土遺物から近世以降である。

３号溝（第81図、ＰＬ35）Ｉ－10・11グリッド。32・33号土坑より後出。規模は長さ480cm、幅50～100cm、深さ１～86cmである。

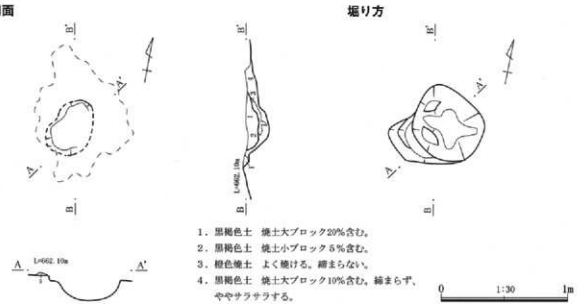
４号溝（第79図、ＰＬ35）Ｂ・Ｃ－20・21グリッド。規模は長さ561cm、幅20～34cm、深さ２～16cmである。北側の法切りの裾部に施される。２号掘立柱建物跡に伴って削平された平坦面と一連の遺構であろう。

第６項　焼土遺構

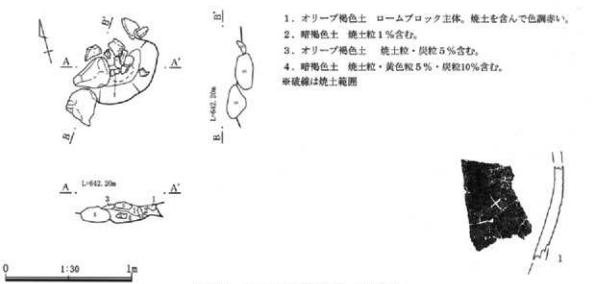
17区

２号焼土（第98図、ＰＬ40）Ｈ－９グリッド。１号住居跡の掘り方調査の際発見されたため、１号住居跡より前出。焼土は良く焼け、球形に窪むため、地床炉と考えられる。使用面の規模は径約47cm、深さ11cmで、掘り方の規模は長辺72cm、短辺63cm、深さ19cmである。出土遺物は平安時代遺物を含むが、１号住居跡の混入とも考えられ明確ではない。

７号焼土（第99図、ＰＬ40）Ｈ－９グリッド。１号住居跡・13号土坑より前出。焼土範囲は長辺26cm、短辺21cm以上である。人頭大の石が集中しており、集石遺構という面もあるが明確ではない。焼土は焼けが悪く、使用面としてとらえられる部分はなかった。出土遺物から平安時代に比定される。



第98図　17区２号焼土遺構



第99図　17区７号焼土遺構・出土遺物

第７節　遺構外出土遺物

第１項　土器

出土数・分類とも多いに多い縄文時代草創期から弥生時代後期の遺物については、時期別に分類して整理を試みた。平安時代以降については、個別に比定年代を示す。

１．縄文時代草創期・早期

第Ｉ群　草創期の土器を一括した（第104図１～13）。

第１類　表裏縄紋土器を一括した（第104図１，２）。

１，２は同一個体。やや外反する口縁部破片で、単節ＲＬを縦位気味に施紋する。裏面口唇直下および部分的に口唇部にも施紋する。胎土に金雲母を含む。

第２類　夏島式を一括した（第104図３）。

３は角頭状の口唇部をもち、口縁部でやや外反する器形を呈する。撚糸紋Ｒを縦位施紋する。

第３類　稲荷台式を一括した（第104図４～13）。

ａ種　撚糸紋を施紋するもの（第104図４，５）

４は丸頭状の口唇部で、やや肥厚する。撚糸紋Ｌを縦位施紋する。口唇部はよく研磨され、平滑である。５は４と同様の口唇部形態をもち、撚糸紋Ｒを縦位施紋する。

ｂ種　条痕・擦痕を施すもの（第104図６～13）

６～13は同一個体。丸頭状の口唇部で若干肥厚する。器面には絡条体条痕と思われる条痕が横位、斜位に施される。口唇部はよく研磨され、平滑である。

第２群　早期の土器を一括した（第104図14～第115図211）。

第１類　押型紋土器を一括した（第104図14～26）。

ａ種　山形押型紋を施すもの（第104図14～19）

14～19は同一個体。山形押型紋を横位施紋する。破片が小さく、また器面が摩滅しているため、帯状施紋なのか密接施紋なのかは判然としない。

ｂ種　楕円押型紋を施すもの（第104図20，21）

20はやや外反する口縁部破片で、楕円押型紋を横位密接施紋する。21も楕円押型紋を横位密接施紋する。

ｃ種　粗大な楕円押型紋を施すもの（第104図22～25）

22～25は同一個体。ｂ種に比べて大きめな楕円押型紋を横位施紋する。器壁も１㎝程と厚く、胎土に繊維を含む。

ｄ種　撚糸紋を帯状施紋するもの（第105図26）

26は推定口径27.6㎝、現存器高21.5㎝、頸部ですぼまって外側に開く器形を呈す。口縁部に無紋帯を残し、撚糸紋Ｌを３段、横位帯状施紋する。器面は丁寧に調整されて平滑であり、焼成も良好、堅致である。帯状施紋する技法は樋沢式に共通し、原体を押型紋から撚糸紋に置換して施紋されたものととらえることができよう。撚糸紋を施紋するということで分類的には第５類に含めてもよいと思われるが、帯状施紋という技法を重視し、本類とした。

第２類　田戸下層式を一括した（第105図27～30）。

27は半截竹管状工具による平行沈線を横位に施す。28～30は同一個体。角頭状口唇の口縁部破片で、沈線

を横位に施す。両個体とも焼成良好で堅致である。

第3類　田戸上層式を一括した（第105図31～36）。

31～33は同一個体。31は口縁部で、口唇部にむかってすぼまる形状を呈す。横位に沈線を施し、沈線間に貝殻腹縁紋を斜位に充填する。胎土に繊維、石英粒を含む。34，35も同一個体の可能性が高い。鋭角な沈線によって幾何学状のモチーフを描き、沈線間に貝殻腹縁紋を施す。35の下端に横位刺突列が確認できるが、この部分に低い隆帯が貼付されており、若干高まりをもつ。紋様帯下の区画紋としてとらえることも可能であろう。胎土に繊維、石英、金雲母を含む。器面は丁寧に調整され、平滑である。36は斜格子目沈線を施すもので、菱形区画内に貝殻腹縁紋を縦位に充填する。胎土に石英粒を多く含みざらつく感じは、次の第4類に様相が近い。

第4類　中部系と思われる沈線紋土器を一括した（第105図37～第108図116，第108図128，129，第109図）。

a～eの5種に分類したが、分類は便宜的なもので正確に線引きできるわけではなく、紋様が複合的に施紋されるものもあると思われる。特に本類の主体をなすc種とd種は様相が似ており、強い関係性がうかがえる。

a種　曲線状モチーフを描くもの（第105図37～42）

37～39は同一個体。口唇下に横位の沈線を施し、紋様帯内は複数条の沈線によって縦長の波状紋のような曲線状モチーフが描かれる。37の口唇部には刻みが付される。40は4条の沈線によって縦区画が施され、区画内は曲線状モチーフが描かれる。区画紋と主紋様の空間には刺突が施されている。41，42は同一個体。やや外反する口縁部破片で、口唇部には斜位に刻みが付される。3条1単位とする沈線を横位波状に多段施紋する。モチーフこそ異なるものの、複数条施紋の沈線は37～39の土器と共通する。

b種　沈線と刺突を施すもの（第105図43～第106図49）

43～45は同一個体。複数条の沈線により、横位鋸歯状あるいは横位菱形状のモチーフを描く。半截竹管状工具の先端部の刺突列により紋様帯を区画し、以下は無紋となる。複数条施紋の沈線はa種に共通する。46，47も同一個体。1本書きの沈線により横位、V字状のモチーフを描く。沈線間には先端の尖ったペン先状の刺突を施す。口唇部には刻みが付される。胎土に石英粒を多く含む。48は縦、横の沈線が確認できる。紋様帯下を区画する横位刺突列は、先端の尖ったペン先状刺突が用いられている。このペン先状刺突は46，47に共通する。49は丸頭状の口唇部をもつ口縁部破片で、口縁部に無紋帯を残し横位沈線を施す。最上段の沈線に上方向から刺突が施される。

c種　多条沈線（条線）と刺突を施すもの（第106図50～70，第109図130）

本種はd種とともに本類の主体をなす土器群である。口唇直下に刺突列をめぐらし、以下は多条沈線（条線）を施すことが本種の特徴といえる。概して胎土に繊維と石英粒を含み、器面がざらつく印象を受ける。個体によっては金雲母を含むものもある。

50は口唇下に3単位の刺突列をめぐらし、以下多条沈線を斜位に施す。口唇部には斜位の刻みが付される。内面は丁寧に磨かれて平滑であり、また石英粒を含まない胎土は前に記した本種の特徴とは異なり、a種の様相に近い。51も多条沈線を斜位に施すが、左端に縦位の沈線が見られ、縦区画としてとらえられるかもしれない。52は口縁部で外反する形状で、縦区画が確認できる。53は斜位に多条沈線を施す。54は斜位に条線を施し、空間に刺突を施す。55，56は同一個体。器面に条線を施したあと、口唇下に角押状の刺突をめぐらす。57は口唇部に先割れ工具による刺突を施し、多条沈線を施す。縦方向気味の多条沈線は区画線の可能性がある。口縁部付近の内面はよく磨かれて平滑である。58は多条沈線を縦に垂下させて区画し、区画内には

縦位鋸歯状の多条沈線を施すようである。沈線によってできる三角形状の空間に刺突を施す。59～61は同一個体で60の口縁部はやや肥厚する。多条沈線により菱形状のモチーフを描く。内面口縁部付近は丁寧に磨かれ平滑である。62も多条沈線と刺突を施す。63～68は同一個体。64から多条沈線による縦区画が確認できる。区画内は縦位鋸歯状のモチーフを描き、空間内は沈線に沿って刺突を施している。69は紋様帯を区画する区画紋として、円形刺突をめぐらす。70も刺突列により紋様帯が画されている。刺突列下は無紋となる。130は推定口径37cm、現存器高40cmを測る砲弾形の器形を呈す。口縁は波状口縁で、胴部上位に１帯の紋様帯をもつ。条痕状の浅い多条沈線を横位にめぐらせて紋様帯を区画し、紋様帯内は同様の沈線により菱形状のモチーフを描く。波頂部は欠損しているが、おそらく波頂部を起点として菱形のモチーフを配置しているように見受けられる。その菱形状沈線に沿って竹管を斜めに押捺した刺突を沿わせ、菱形区画内にも刺突を充填させる。また口唇直下にも刺突が施される。区画紋下は胴部なかほどまで多条沈線を縦位施紋するが、胴部下半は無紋となる。無紋部は丁寧に調整されて平滑である。内面は部分的に条痕が施される。胎土に石英粒はほとんど含まないが、繊維と金雲母、さらに多量の砂粒を含み、ざらつく印象を受ける。

胎土に石英粒を多く含み、ざらつく感じのものは52～54，57～61，63～68。さらに金雲母を含むものは52，53，59～61である。

d種　沈線と櫛歯状刺突を施すもの（第107図71～第108図98）

本種は櫛歯状刺突が大きな特徴としてあげられるが、それを除けばｃ種との関係性が強い。胎土に石英粒を多く含み、ざらつく感じのものが多いこともｃ種と共通する。

71は櫛歯状刺突を斜位に施す。口唇部には刻みが付される。72は口唇下に横位に３条の沈線を施し、以下縦位、斜位に沈線を施す。口唇部に櫛歯状刺突を斜位に施す。73は多条沈線を横位、斜位に施し、空間に櫛歯状刺突を施す。口唇部には95～97と同様な先割れ工具による刺突を施している。74は外反する口縁部で、口唇直下に刺突列をめぐらす。刺突列下に多条沈線を横位に施し、その下は縦位の櫛歯状刺突を施す。75は口縁部に無紋帯を残し、１条の櫛歯状刺突列と多条沈線を横位にめぐらす。内面は磨かれ平滑である。76は多条沈線によって縦位区画され、区画内に櫛歯状刺突、多条沈線を施す。77，78は同一個体で、小波状の口縁部を呈す。多条沈線と櫛歯状刺突によって構成される。78は波頂部下に櫛歯状刺突の区画が設けられているが、櫛歯状刺突を挟むように両脇にｃ種と同じ刺突が施されている。79～84は同一個体。外反する口縁部形状を呈す。多条沈線による縦位区画を施し、区画内は縦位鋸歯状の構成になると思われる。三角形状の空間には櫛歯状刺突が充填される。口唇部にも櫛歯状刺突が斜位に施される。刺突の種類は異なるが、紋様構成はｃ種63～68に共通する。85～92も多条沈線と櫛歯状刺突が施紋されるもので、同様の構成になると思われる。85，86，91には縦区画が確認できる。93，94は同一個体。櫛歯状刺突を横位多段にめぐらす。95～97も同一個体。やや外反する口縁部形状を呈す。96から縦区画が確認でき、他と同様、区画内は縦位鋸歯状に多条沈線を施すようである。空間にはＣ字状先割れ工具の刺突を充填する。口唇部には斜位に刻みが付される。98は条線を斜位に施すもので、口唇部に櫛歯状刺突を斜位に施す。

胎土に石英粒を多く含みざらつく感じのものは71，73，76～87，92である。金雲母の混入が顕著なものはない。

e種　沈線を施すもの（第108図99～116）

99～101は同一個体で、条線を縦位に施す。口唇部には刻みが付される。紋様構成はｄ種98と共通する。102は条線を横位に施す。やはり口唇部に刻みを付す。内面は磨かれ、平滑である。103は沈線を横位、縦位に施す。口唇部には刻みが付される。胎土に石英粒を多く含む。104は１条横位に沈線を施し、鋸歯状に沈線

を施す。105は先端の尖る口唇部をもつ波状口縁を呈す。半截竹管状工具による平行沈線を波頂部から垂下させ、横位に沈線を施す。106は波状口縁。口縁部に２条の沈線をめぐらせて区画し、以下は多条沈線を縦位に施す。波頂下にも縦位沈線が施される。107～112は沈線が横位、斜位に施される。108は胎土に石英粒を多く含む。113，114は羽状に沈線が施される。115は多条沈線による縦区画が確認できる。116は太沈線を横位に施すものである。胎土に石英粒を多く含む。

128，129は丸底の底部破片である。無紋であるため帰属時期は明確ではないが、胎土の様相から本類に含めた。

第５類　撚糸紋・縄紋施紋土器

ａ種　撚糸紋を施すもの（第108図117～121）

117は丸頭状の口縁部破片で、撚糸紋Ｒを斜位に施す。胎土に繊維を含む。118は撚糸紋Ｒが縦位、斜位に施される。119～121は沈線のようにも見えるが、凹みの底面に繊維の条が斜位に観察できるため、無節の撚糸紋と判断した。120，121は同一個体である。

ｂ種　縄紋を施すもの（第108図122～127）

122はやや内削ぎの口縁部破片で、単節ＬＲを縦位施紋する。口唇部にも施紋が見られる。123，124は同一個体。小波状の口縁部形状を呈す。単節ＬＲを横位施紋する。125は口唇部がやや肥厚する口縁部破片で、単節ＬＲを縦位施紋する。胎土が123，124と酷似するため、同一個体の可能性もある。126，127は底部破片で、126は乳房状、127は丸底を呈する。126は単節ＲＬを縦位施紋、127は単節ＬＲを縦位施紋する。

本類は撚糸紋・縄紋を施紋するものをまとめたが、胎土や施紋技法において草創期に比定できるものとは様相を異にする。確実な帰属時期は断定できないが、122，126などは第105図26の胎土に様相が近いことから押型紋土器周辺か、あるいはそれよりもやや降る時期に位置づけられるものと考えられる。

第６類　野島式を一括した（第110図131）。

131は１条の横位沈線で紋様帯を画し、紋様帯内は幾何学状のモチーフを描く。内面は条痕が施される。

第７類　鵜ヶ島台式を一括した（第110図132～143）。

132～137は沈線による意匠区画と竹管を斜めに押捺した半円形の刺突を施す。132～136は口縁部破片で、内削ぎあるいは角頭状の口唇部形状を呈し、概ね口唇内外に刻みを付す。137は段の部位である。138～141は沈線による意匠と２条１単位の刺突が施される。口唇は内削ぎ形状、口唇外面に刻みを付されるものが多い。140は波状口縁であるが、波頂部に指頭で押したような凹みがつけられている。142は刺突が施されているが、明確な沈線による意匠は見られない。143は縦位の沈線と円形刺突が施される。

第８類　早期末葉の土器を一括した（第111図144～第112図161）。

ａ種　絡条体圧痕を施すもの（第111図144～156）

144～146は同一個体。地紋に条痕が施され、口唇下に斜位に絡条体圧痕が施される。口唇部にも横位に絡条体圧痕が施されている。147は絡条体圧痕を横位多段に施す。口唇部にも施される。148はゆがんだ鋸歯状に絡条体圧痕が施されている。149は折り返し口縁で口唇部が肥厚する。その折り返しの下部に絡条体圧痕を施す。150，151は絡条体圧痕を横位、152には斜位に施す。153は絡条体圧痕を菱形状に施しているようである。154は絡条体圧痕を斜位に施す。155は地紋に条痕を施し、絡条体圧痕をまばらに施紋する。156は直線的に立ち上がる器形を呈し、推定口径26cm、現存器高22cmを測る。単節ＲＬを施紋する部分と絡条体圧痕をＬＲ風に斜位に充填することによって羽状の効果を現しているようだ。紋様帯は口縁部に集約され、絡条体圧痕を横位に部分的にＶ字状にめぐらして区画し、紋様帯内に斜位や曲線状に絡条体圧痕を施している。口

唇部にも絡条体圧痕が施される。内面は条痕が施される。

b種　隆線を施すもの（第112図157）

157は外反する口縁部破片で、口縁部に1条の刻みを付した隆線を横位にめぐらす。口唇部にも刻みが付される。胎土に多量の繊維を含む。

c種　列点を施すもの（第112図158，159）

158，159は同一個体。器面全面に列点を施す。

d種　斜格子目沈線を施すもの（第112図160，161）

160，161は沈線により斜格子目モチーフを描く。4類にも斜格子目沈線を施すものがあるが、胎土に石英粒をほとんど含まず、多量の繊維を含むことから4類とは区分した。

第9類　条痕施紋土器（第112図162～第115図211）

a種　条線状のもの（第112図162～177）

本種は条痕を施すが、施紋具が貝殻ではなく櫛歯状工具のような細くまばらなものを用いて条線状に施紋されるものである。特に施紋方向に統一性はなく、縦、横、斜めに施される。胎土の様相からほとんどが4類に伴うものと考えられる。

b種　いわゆる条痕紋土器（第113図～第115図178～211）

貝殻条痕を施すものである。178，179は口縁部破片で、口唇部に刻みを付す。180からは胴部破片で、内外施紋、外面のみ、内面のみなど多様な様相を示す。6類以降に伴うものであろう。

（橋本　淳）

2．縄文時代前期～晩期終末

第Ⅲ群　前期前半の繊維を含む土器

第1類　羽状縄文・還付末端施文するもの

第2類　関山式土器・黒浜式土器

a種　山形・弧状の平行沈線の施されるもの　　b種　コンパス文・組紐の施されるもの

c種　合撚・付加条文の施されるもの　　d種　1段・2段の回転縄文を施すもの

e種　その他　　f種　底部

第Ⅳ群　前期後半～終末の土器群

第1類　諸磯a式土器

a種　沈線、刺突文列を施すもの　　b種　縄文を施すもの

第2類　諸磯b式土器

a種　半裁竹管による爪形文施すもの　　b種　浮線文に刻みを施すもの

c種　半裁竹管による平行沈線施すもの

第3類　諸磯c式土器

a種　集合条線に棒状、ボタン状貼付文の施されるもの

b種　地文縄文・沈線で浮線を施すもの

第4類　十三菩提式土器

a種　浮線上に内皮使用による刻みの施されるもの　　b種　三角形などの除刻が施されるもの

c種　その他

第５類　大木式土器

ａ種　山形、小波状の粘土紐が貼付されるもの　　ｂ種　細い粘土紐が貼付されるもの

第Ⅴ群　中期初頭から前半の土器

第１類　五領ケ台式土器

ａ種　集合沈線による横位、縦位、斜位の文様の描かれるもの。基本は地文無文。

ｂ種　地文縄文で、沈線による直線文の描かれるもの。

ｃ種　その他

第２類　阿玉台式土器

ａ種　単列の押引文・沈線文を施こすもの

第Ⅵ群　中期後半の土器群の土器を一括した。加曽利Ｅ式土器など。

第Ⅶ群　後期の土器群

第１類　称名寺式土器

ａ種　沈線により文様を施し、縄文を充填するもの　ｂ種　沈線のみで文様を施すもの

第２類　堀之内式土器

ａ種　隆帯を貼付するもの　　ｂ種　縄文・沈線を施すもの

第３類　加曽利Ｂ式土器

ａ種　磨消縄文を施すもの　　ｂ種　その他

第４類　その他

第Ⅷ群　晩期前半の土器群　安行式土器、高井東式土器など

第Ⅸ群　晩期終末の土器群

第１類　女鳥羽川式土器

第２類　氷式土器

第３類　大洞Ａ式土器

第４類　千網式土器

ａ種　浮線のみを施すもの　　ｂ種　縄文を施すもの

ｃ種　条痕文を施すもの

３．弥生時代

第Ⅹ群　前期～中期初頭の土器群

第ⅩⅠ群　中期前半～中葉の土器群

ａ種　磨消縄文を施すもの　　ｂ種　短く縄文を施すもの

ｃ種　条痕文を施すもの　　ｄ種　その他

第ⅩⅡ群　中期後半の土器群

ａ種　口唇部に縄文、刻みを施すもの　　ｂ種　櫛描文を施すもの

ｃ種　磨き・ナデを施すもの　　ｄ種　その他

第ⅩⅢ群　後期の土器群

第２項　遺物出土状況

7・17区（第100～103、129図）

時期別に出土位置図を作成した。

縄文時代早期土器の出土分布（第100図）は、３～12グリッドラインの範囲に散在しており、竪穴住居跡２軒を伴う同時期の遺構分布と一致する。縄文時代前期土器の出土分布（第101図）は、５～12グリッドラインの範囲であり、早期よりも狭い。74号土坑や４号集石遺構など同時期の遺構と一致する部分もあるが、６ライン周辺は谷状に窪んだ地形要因により、遺物が集まった可能性が高い。縄文時代中期・後期・晩期土器の出土分布（第102図）は、数量も少なく不明だが、分布範囲は早期・前期とほぼ一致する。縄文時代の石器出土分布（第129図）も、早期・前期と同じであり、集中部は認められない。

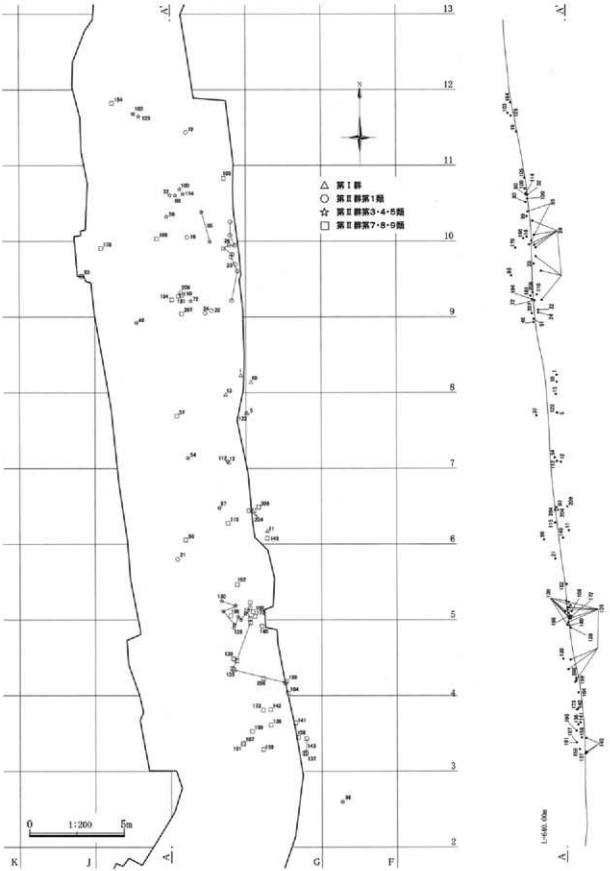
弥生時代の中期前半から中期後半の出土分布（第103図）は、集中部分がみられる。うち２カ所は、弥生時代以降の陥し穴である34・113号土坑と重なる部分であり、同遺構の上層遺物であった可能性もある。概して散漫な出土である。

16・17・26区（第146図）

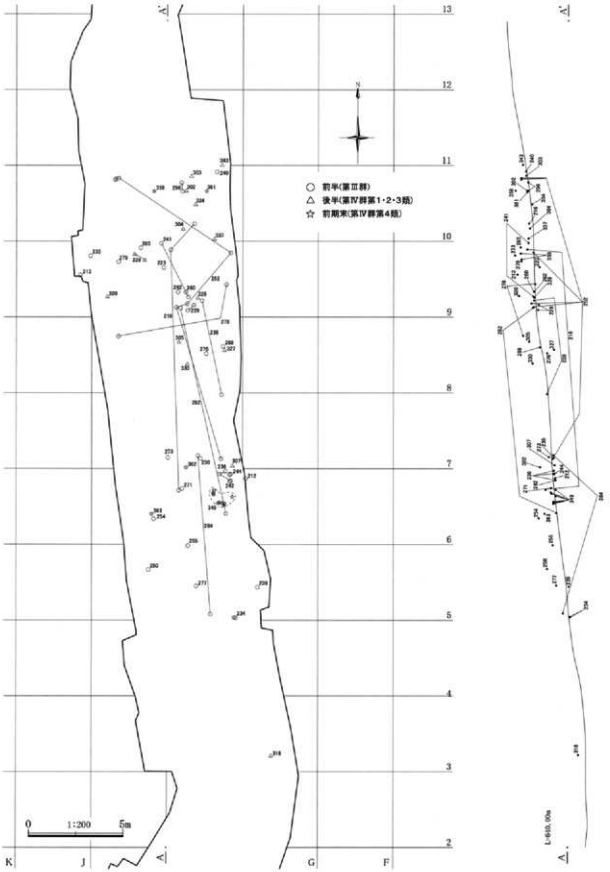
縄文時代早期から弥生時代中期後半まで、出土数は少ないが連続して遺物が出土する。１～６ラインの範囲に散在するが、遺構出土遺物も全く同じ傾向を持つ。17区部分については中近世の建物があった関係で、ローム面まで削平されており、弥生時代以前の出土遺物は非常に少ない。

27区（第152図）

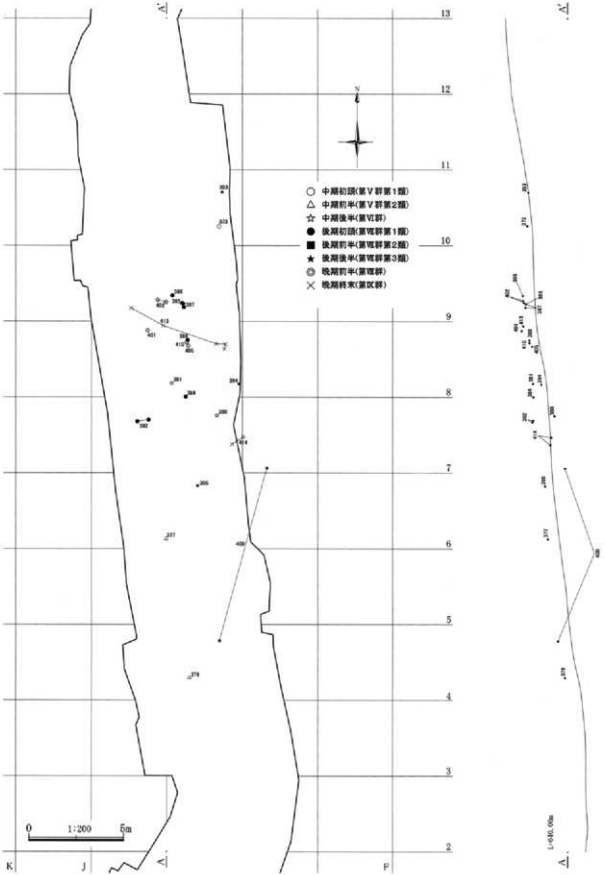
遺構外出土遺物では、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の土器の出土割合が多い。同時期の遺構は、４号住居跡のみで一致しない。調査区の中央部に南西傾斜する谷地形があるため、遺物が集まっている可能性が高いと同時に、周辺に同期の遺構が集中することも想像される。



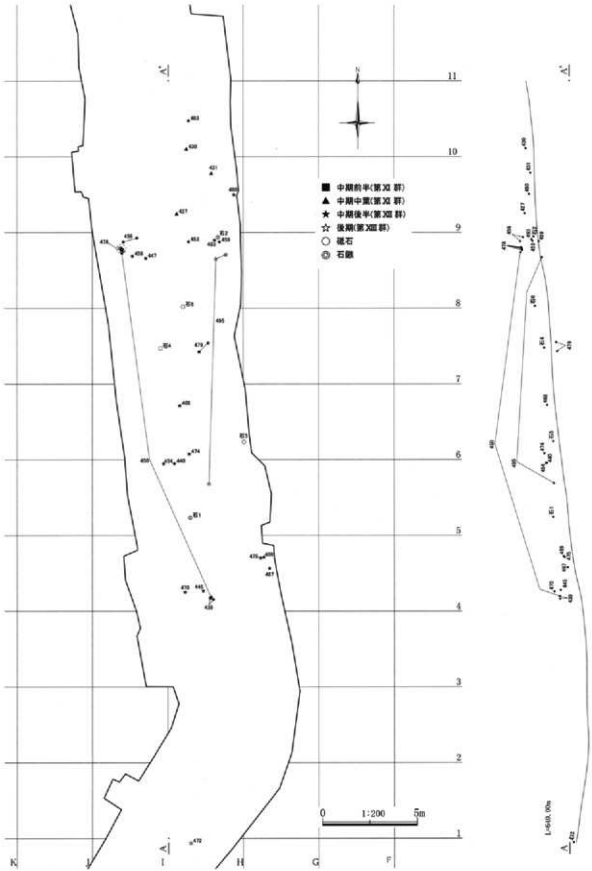
第100図　17区縄文時代草創・早期土器(第Ⅰ・Ⅱ群)出土位置図



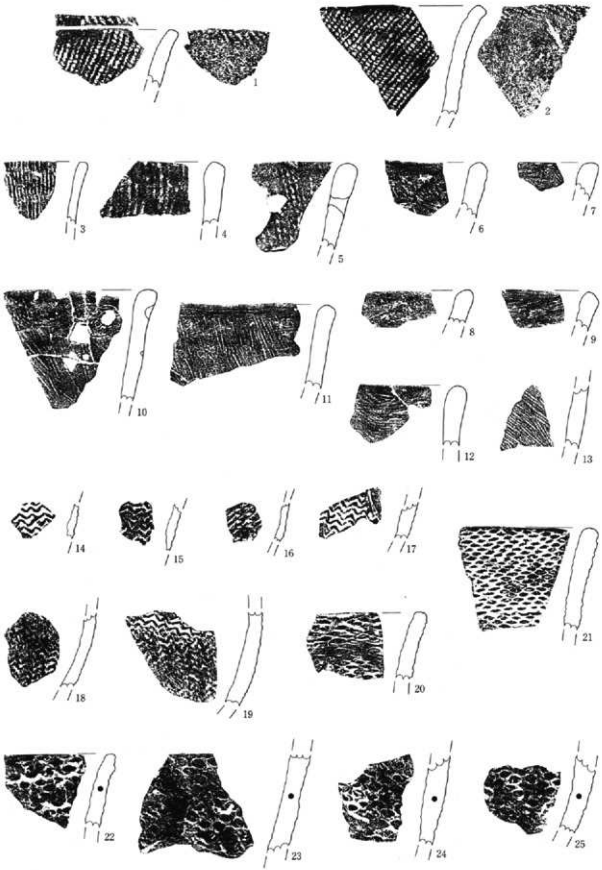
第101図　17区縄文時代前期土器(第Ⅲ・Ⅳ群)出土位置図



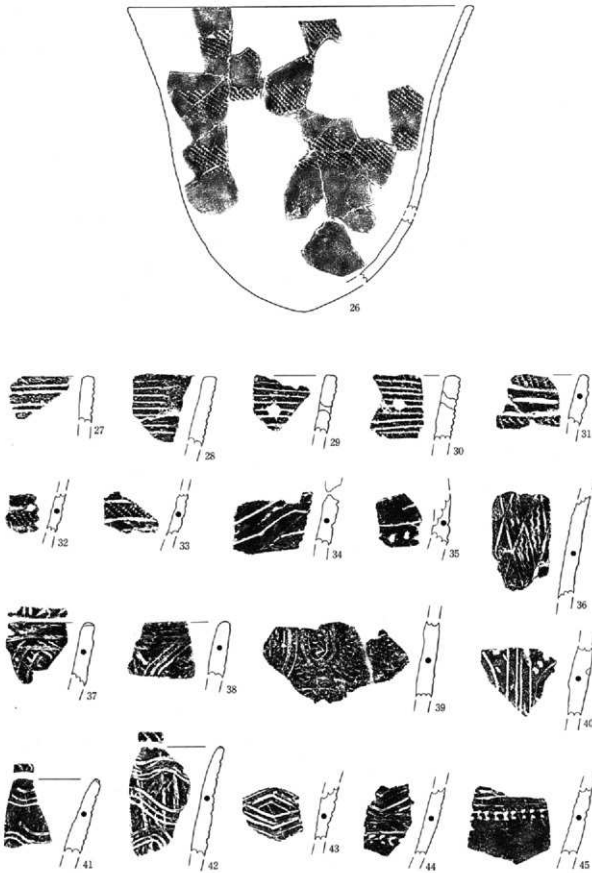
第102図　17区縄文時代中・後・晩期土器(第Ⅴ～Ⅸ群)出土位置



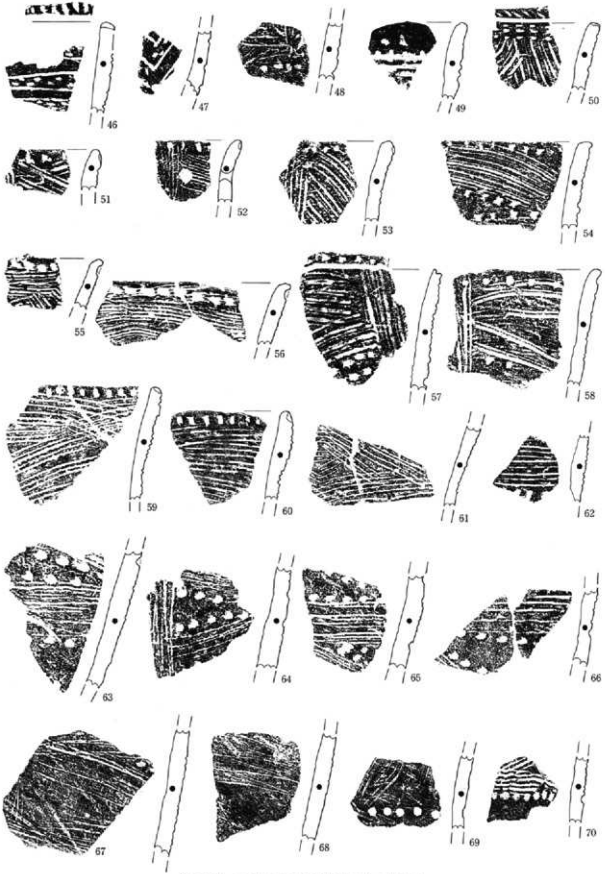
第103図　17区弥生時代土器・石器出土位置図



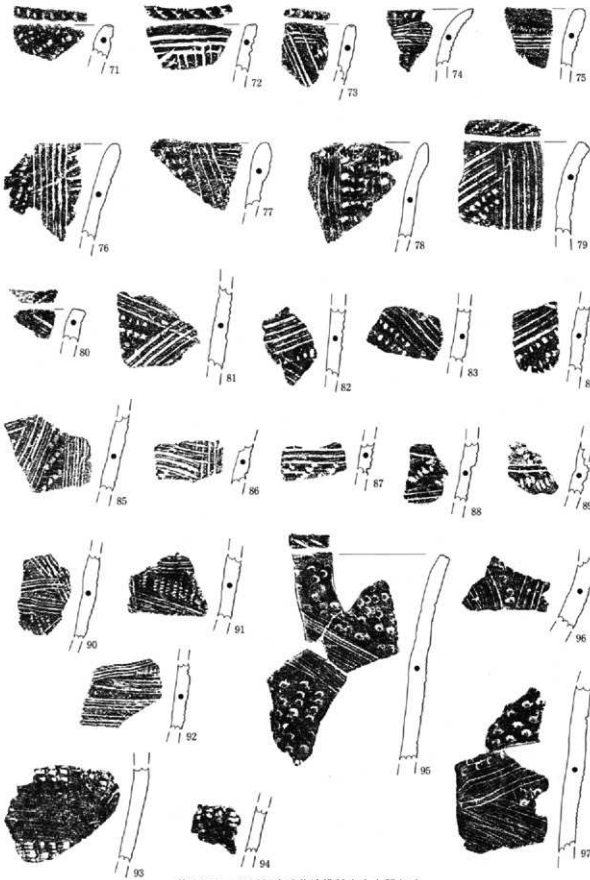
第104図　17区縄文時代遺構外出土土器（１）



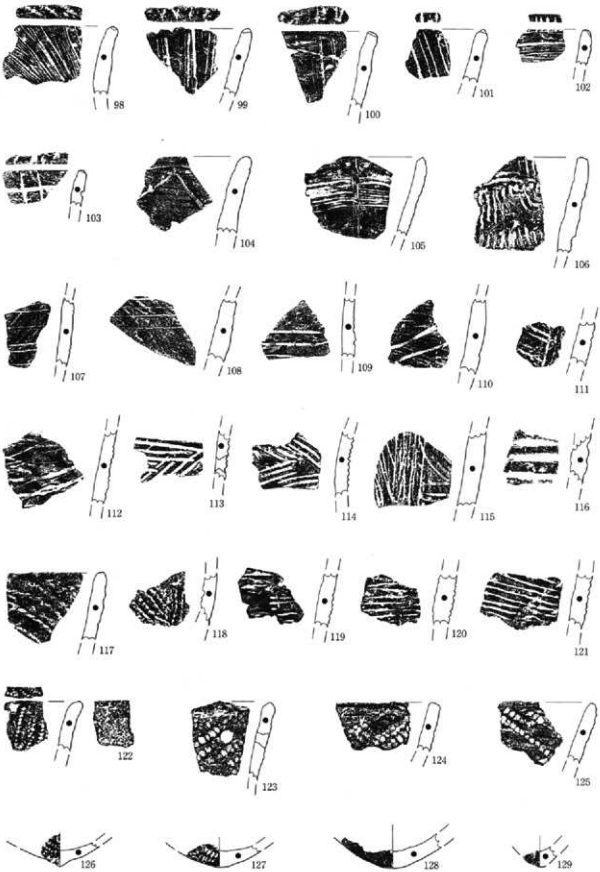
第105図　17区縄文時代遺構外出土土器（２）



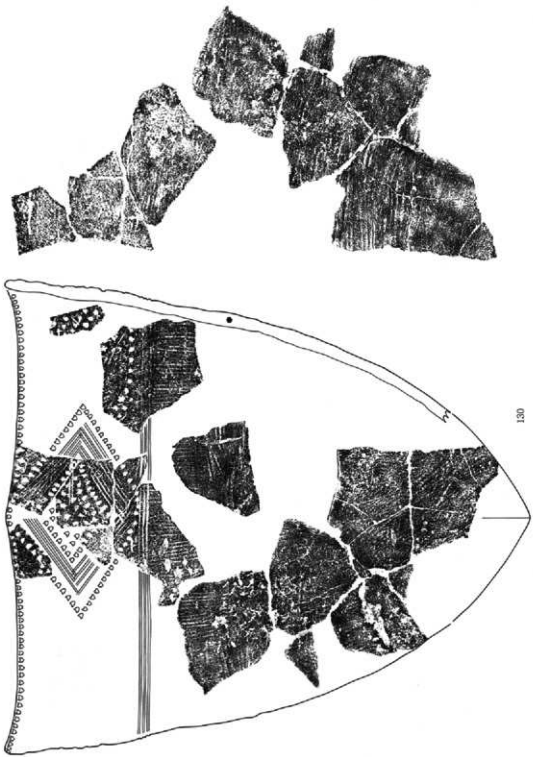
第106図　17区縄文時代遺構外出土土器（３）



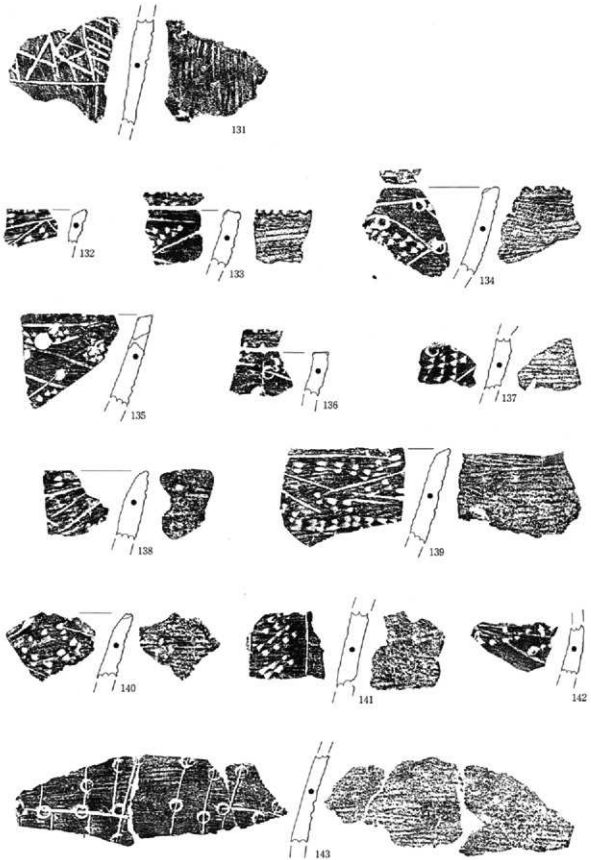
第107図　17区縄文時代遺構外出土土器（４）



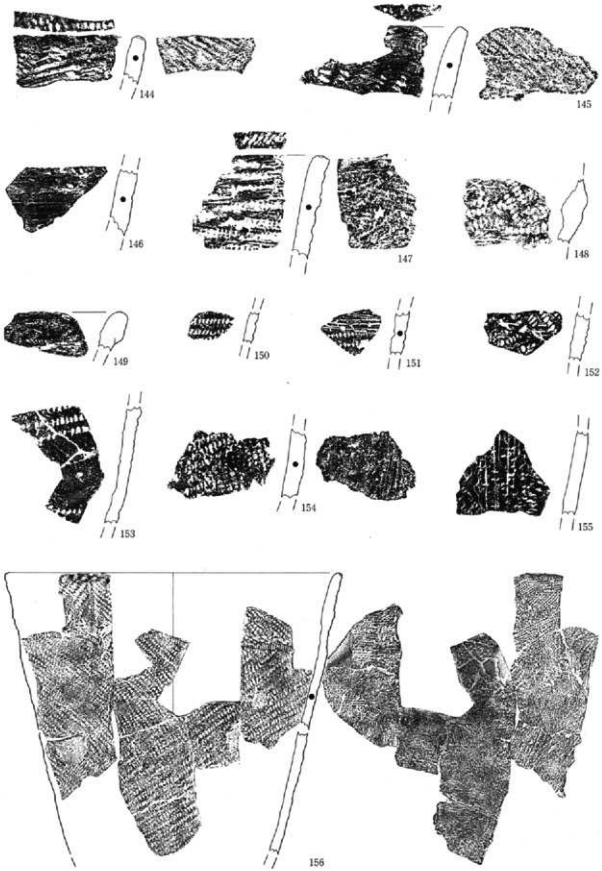
第108図　17区縄文時代遺構外出土土器（５）



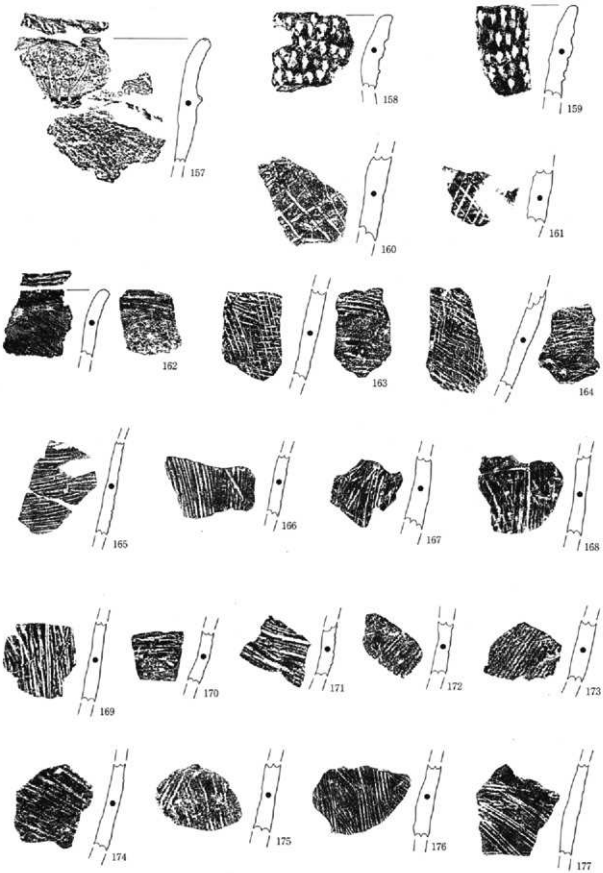
第109図　17区縄文時代遺構外出土土器(6)



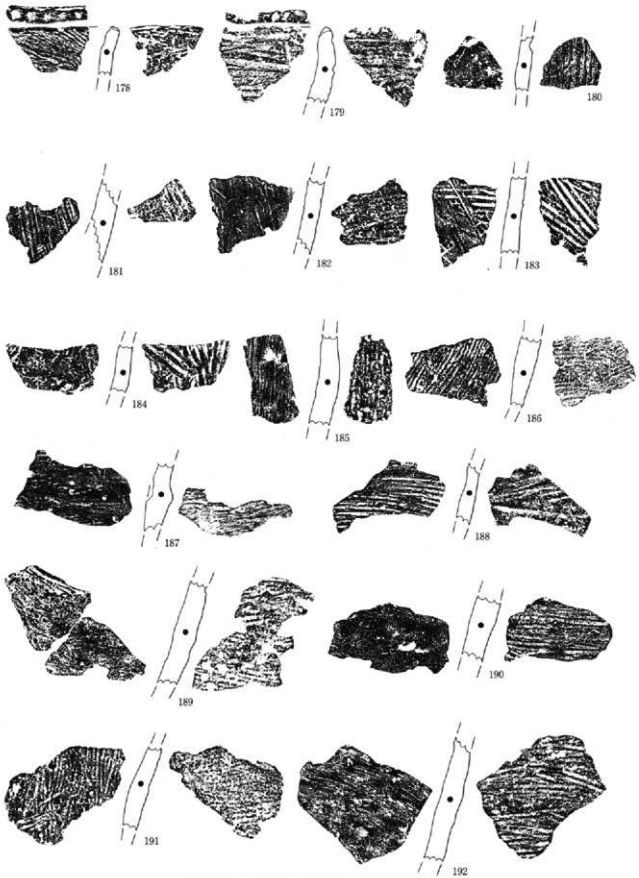
第110図　17区縄文時代遺構外出土土器（７）



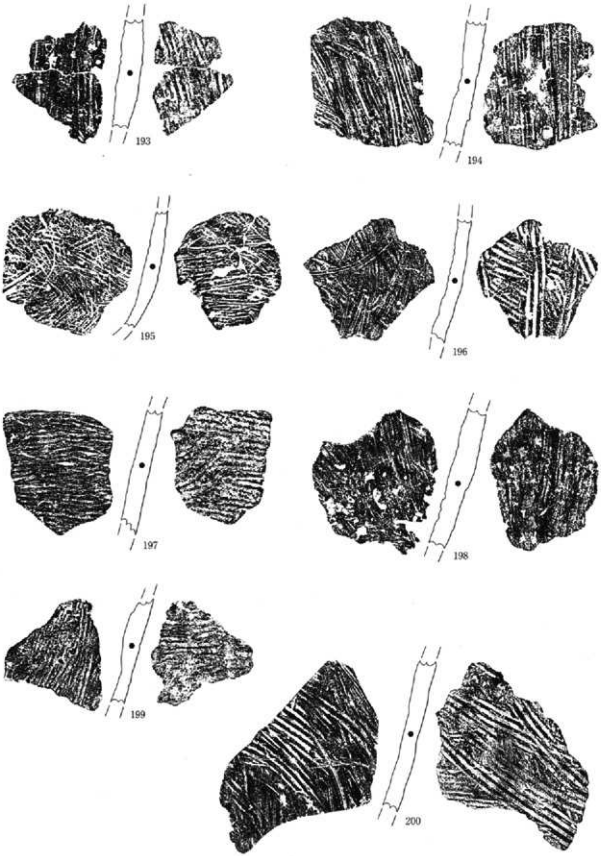
第111図　17区縄文時代遺構外出土土器（８）



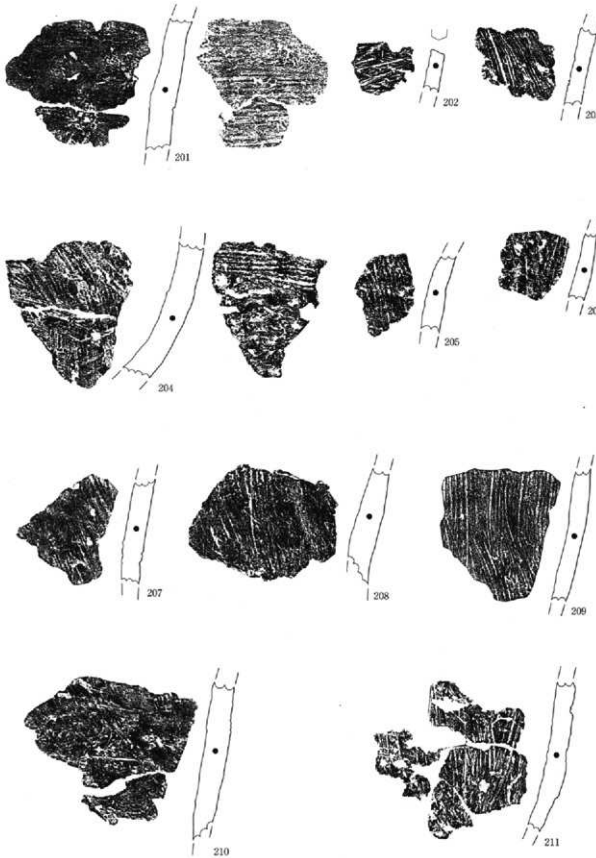
第112図　17区縄文時代遺構外出土土器(9)



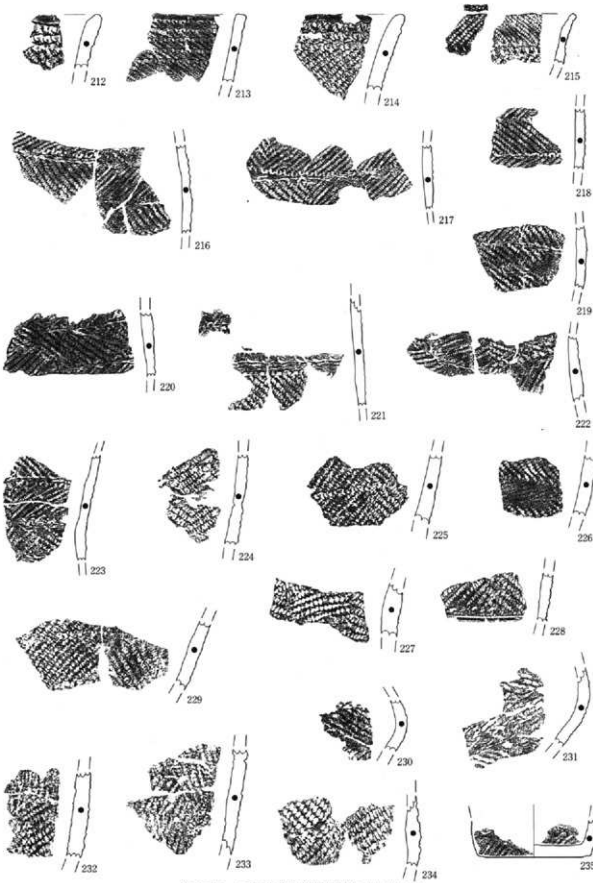
第113図　17区縄文時代遺構外出土土器(10)



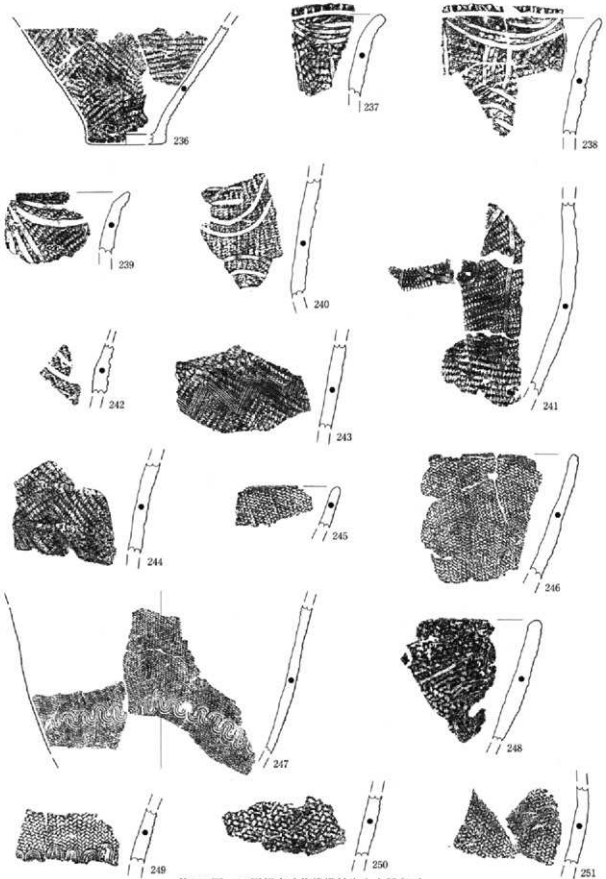
第114図　17区縄文時代遺構外出土土器(11)



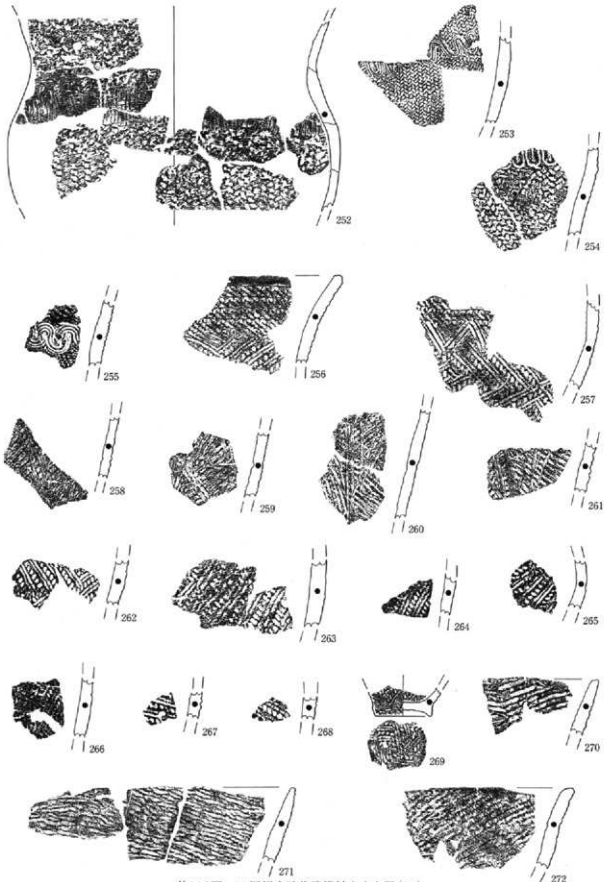
第115図　17区縄文時代遺構外出土土器(12)



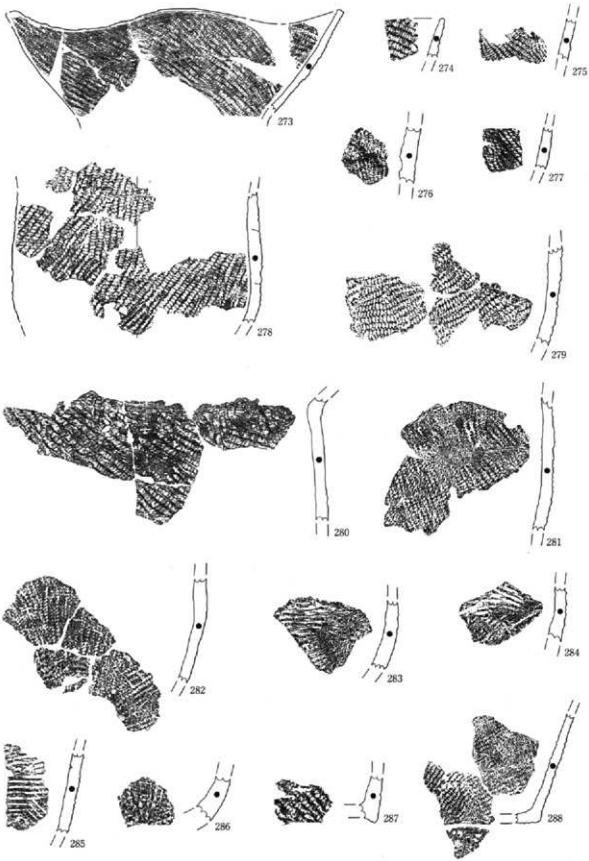
第116図　17区縄文時代遺構外出土土器(13)



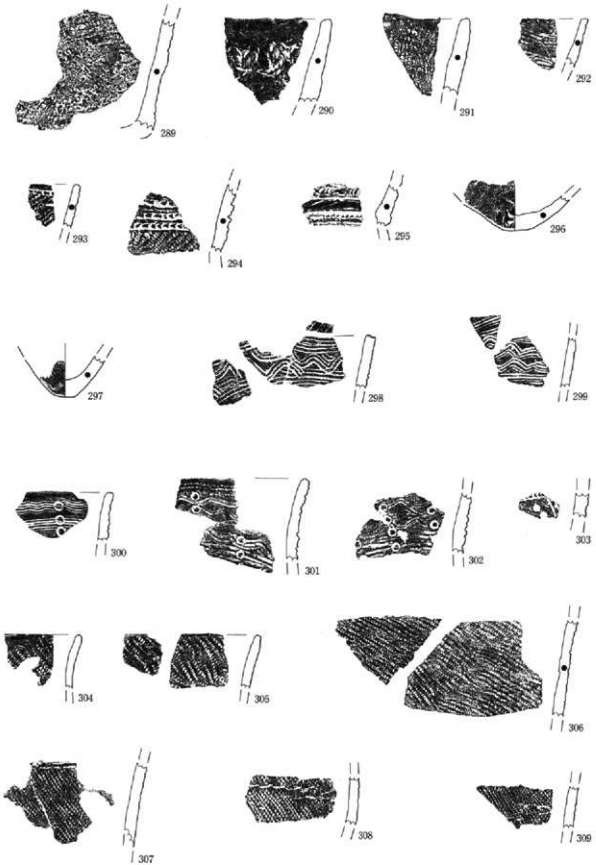
第117図　17区縄文時代遺構外出土土器(14)



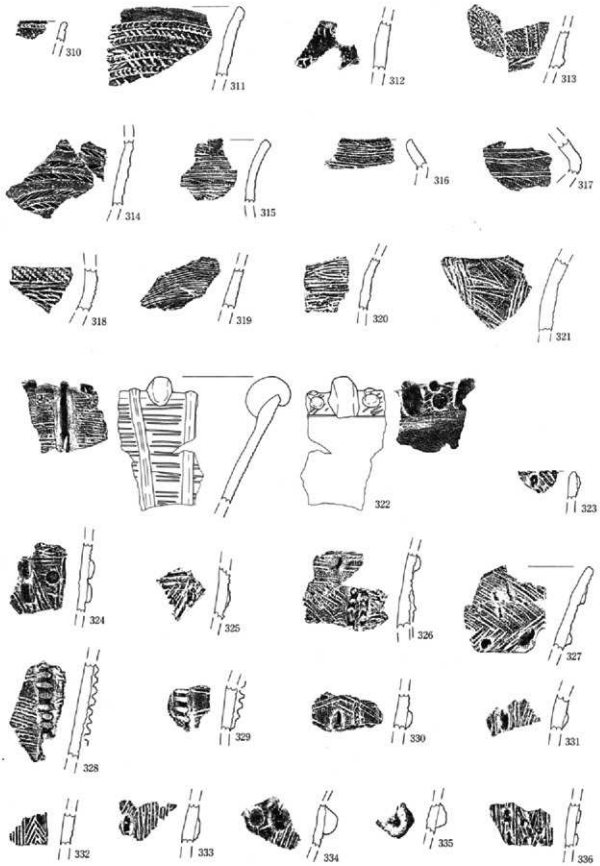
第118図　17区縄文時代遺構外出土土器(15)



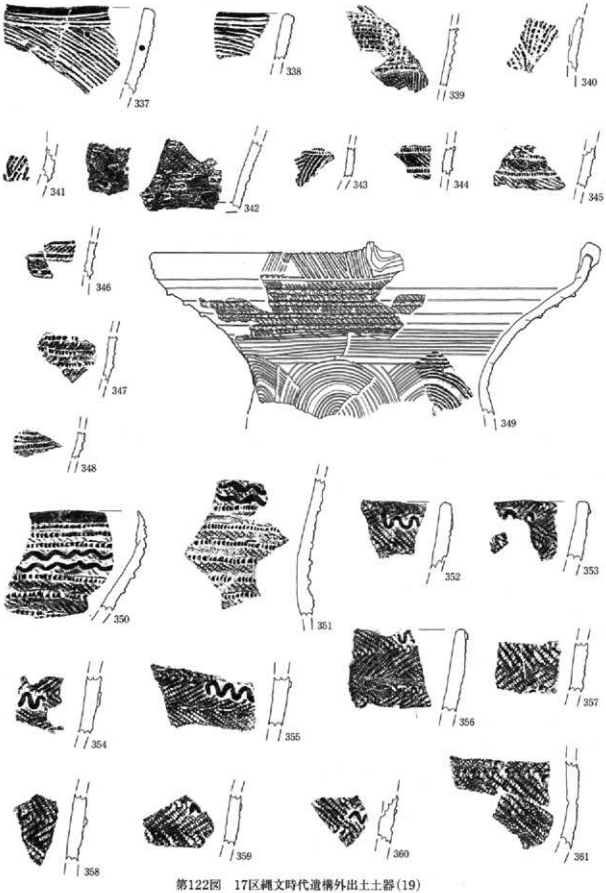
第119図　17区縄文時代遺構外出土土器(16)



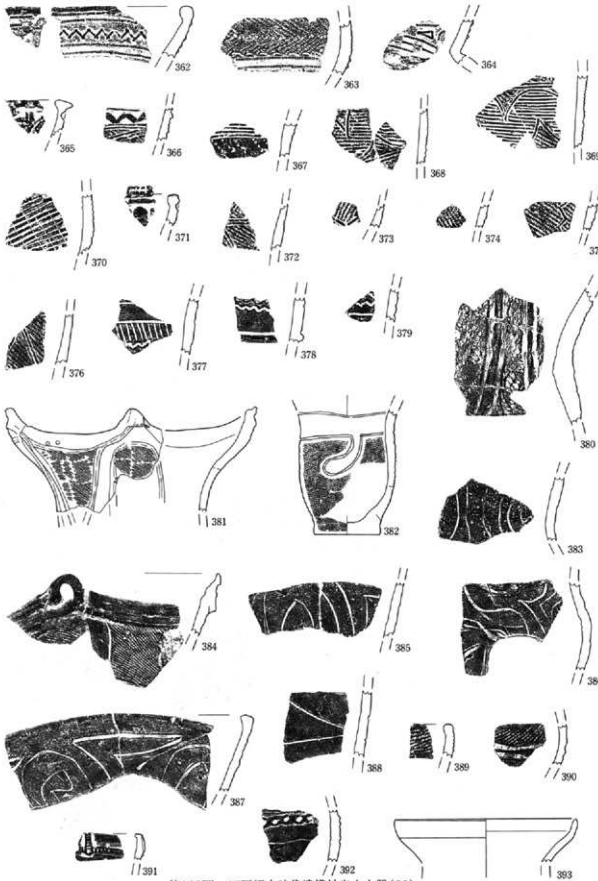
第120図　17区縄文時代遺構外出土土器(17)



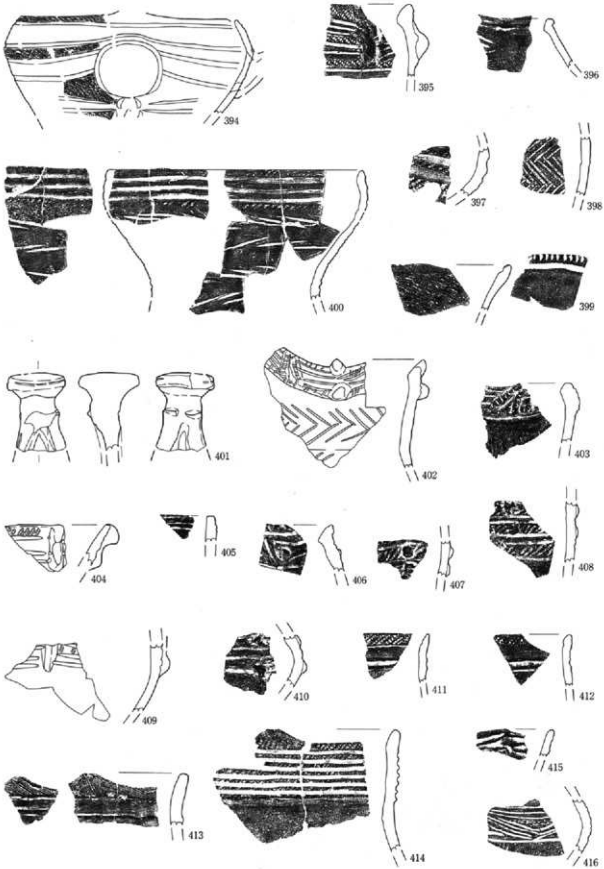
第121図　17区縄文時代遺構外出土土器(18)



第122図　17区縄文時代遺構外出土土器(19)

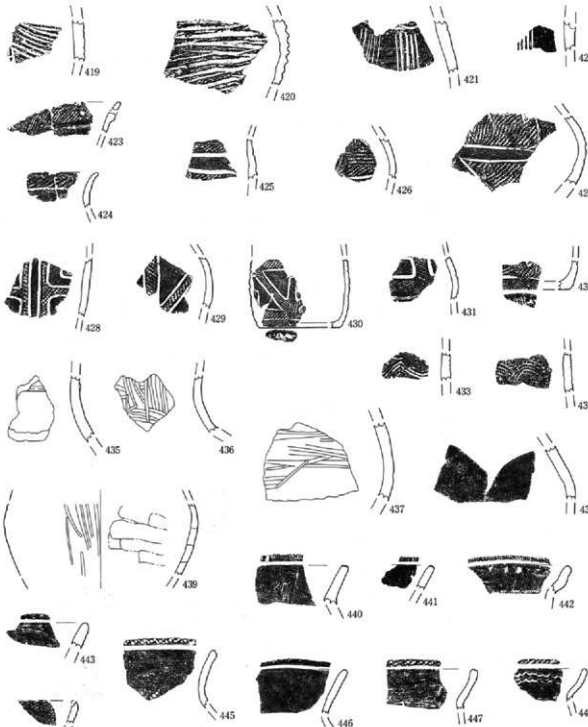


第123図　17区縄文時代遺構外出土土器(20)

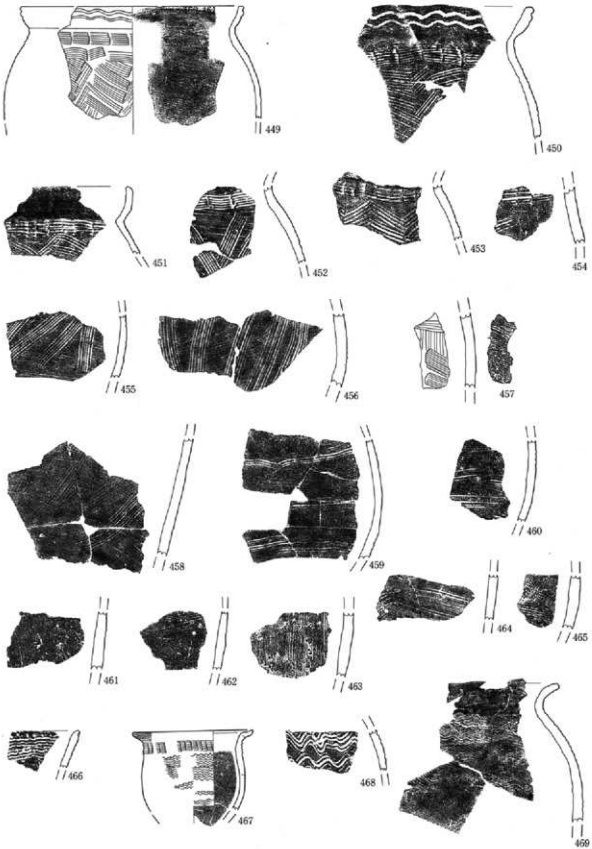


第124図　17区縄文時代遺構外出土土器(21)

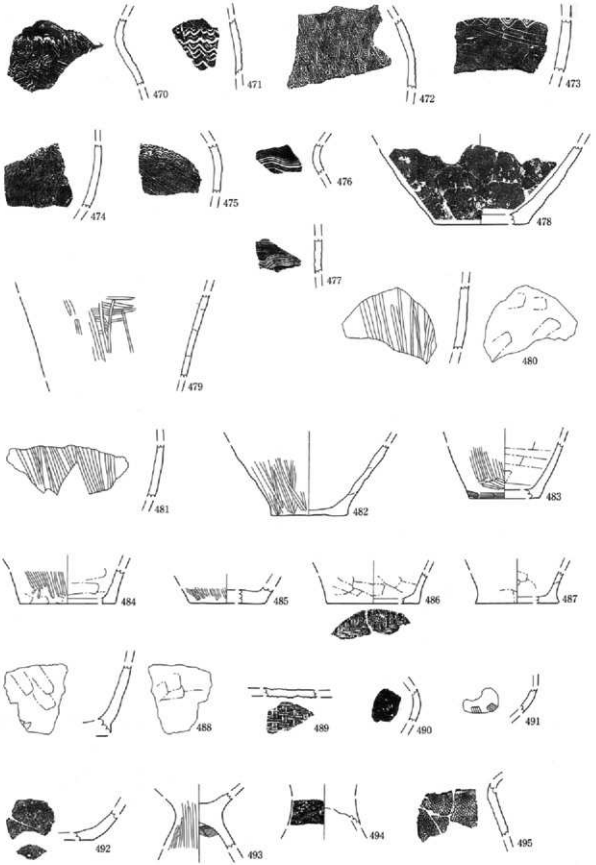
第125図　17区縄文時代遺構外出土土器(22)



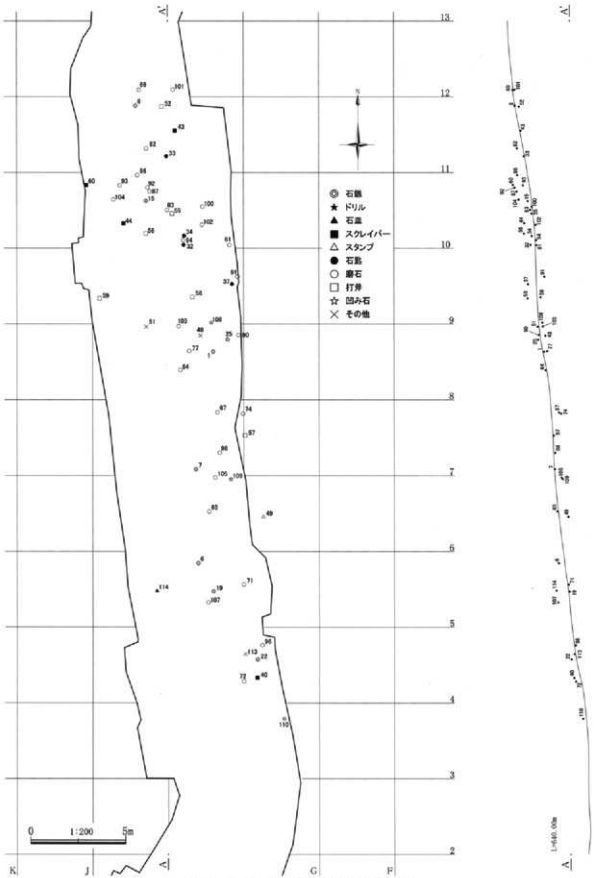
第126図　17区弥生時代遺構外出土土器(1)



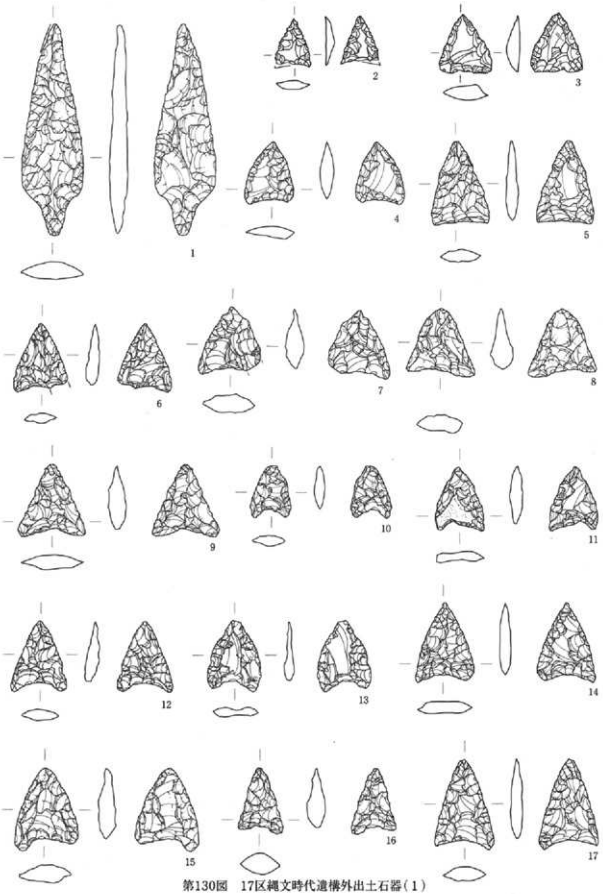
第127図　17区弥生時代遺構外出土土器（2）



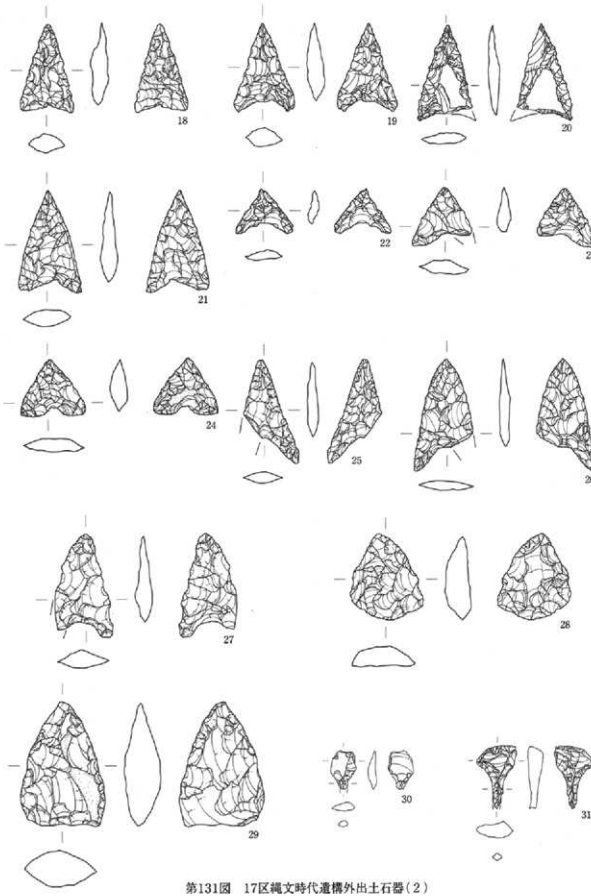
第128図　17区弥生時代遺構外出土土器（３）



第129図　17区縄文時代石器出土位置図



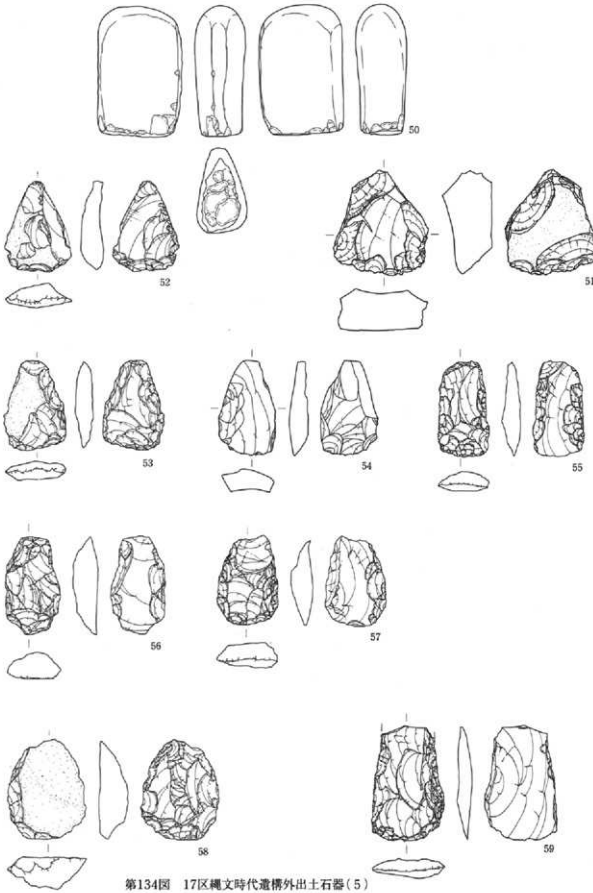
第130図　17区縄文時代遺構外出土石器（１）



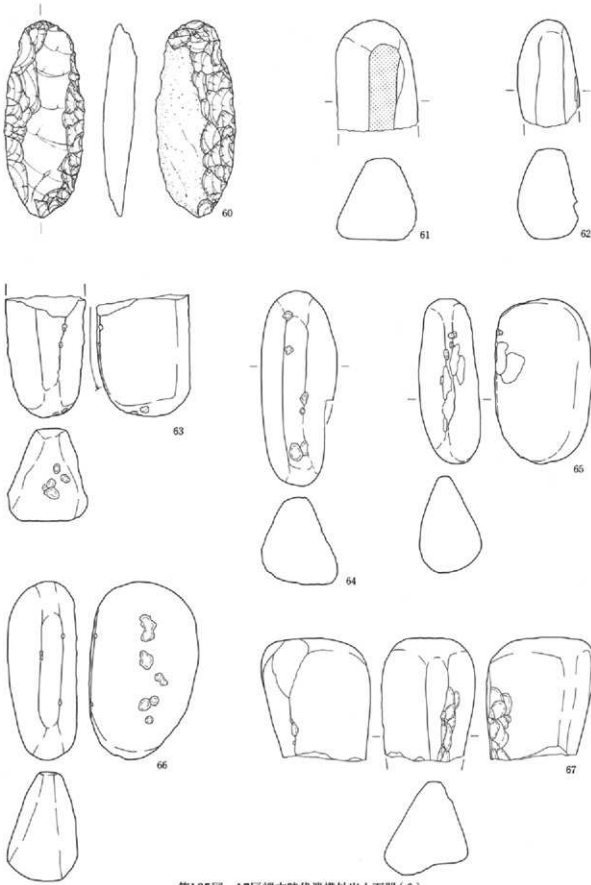
第131図　17区縄文時代遺構外出土石器（２）

第132図　17区縄文時代遺構外出土石器（３）

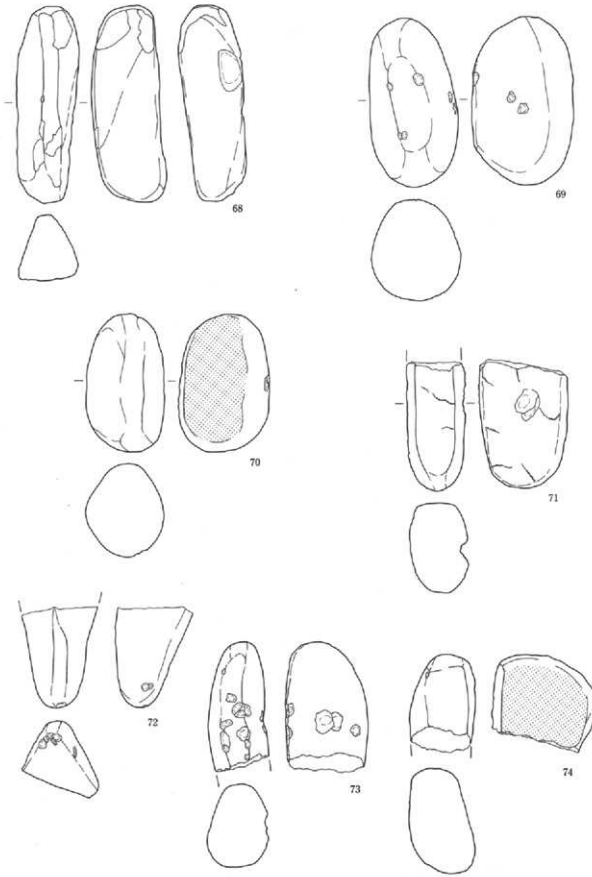
第133図　17区縄文時代遺構外出土石器（４）



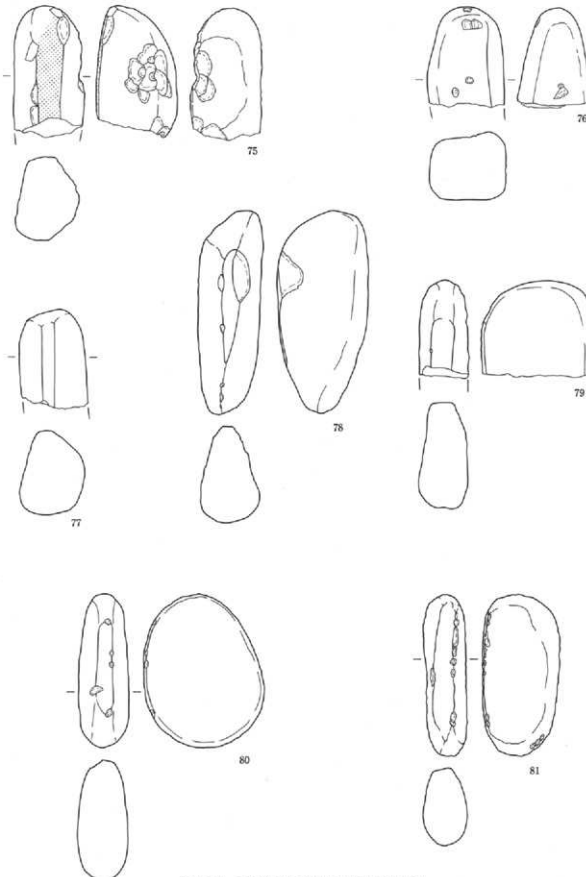
第134図　17区縄文時代遺構外出土石器（５）



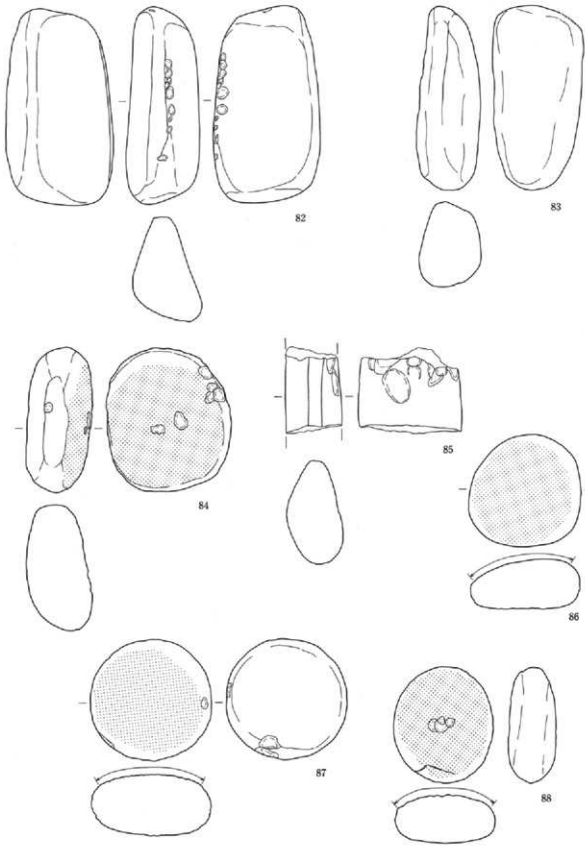
第135図　17区縄文時代遺構外出土石器（６）



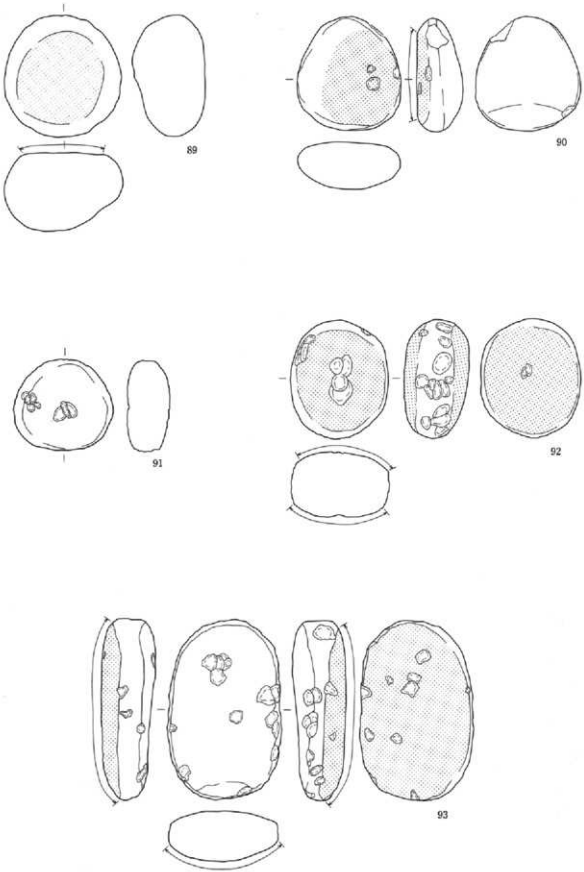
第136図　17区縄文時代遺構外出土石器（7）



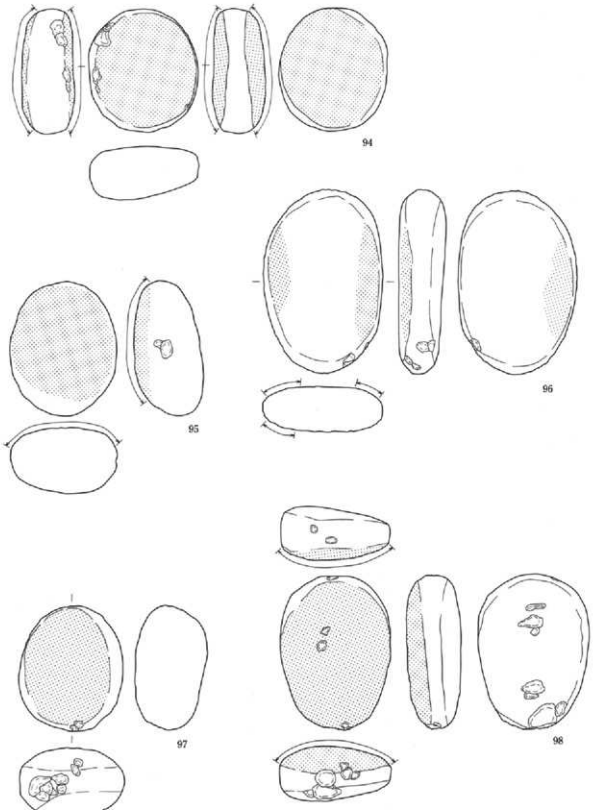
第137図　17区縄文時代遺構外出土石器（８）



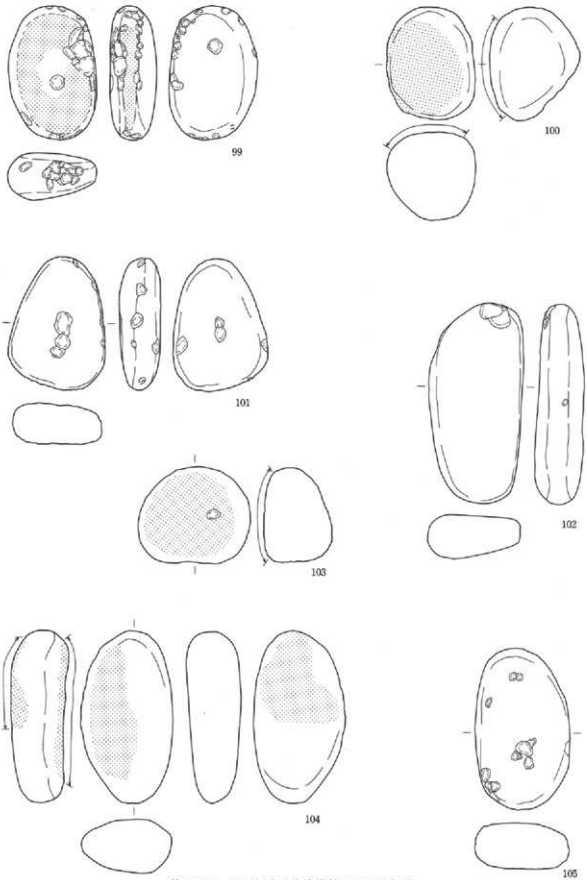
第138図　17区縄文時代遺構外出土石器（9）



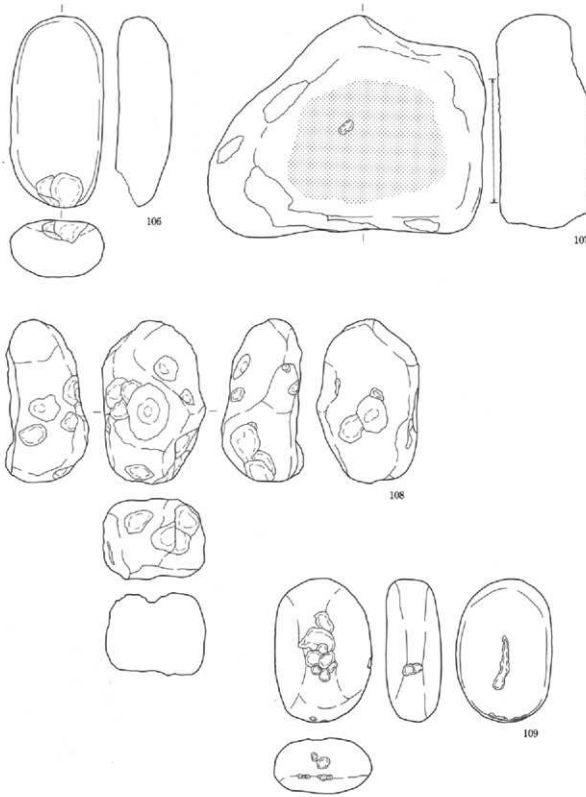
第139図　17区縄文時代遺構外出土石器(10)



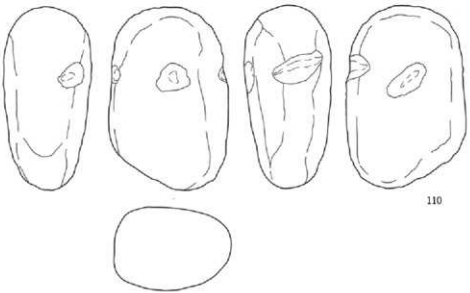
第140図　17区縄文時代遺構外出土石器(11)



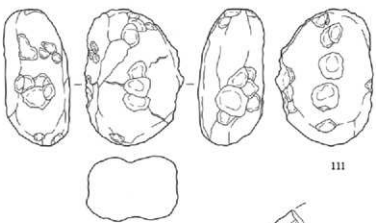
第141図　17区縄文時代遺構外出土石器(12)



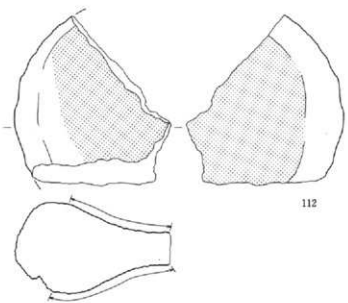
第142図　17区縄文時代遺構外出土石器(13)



110

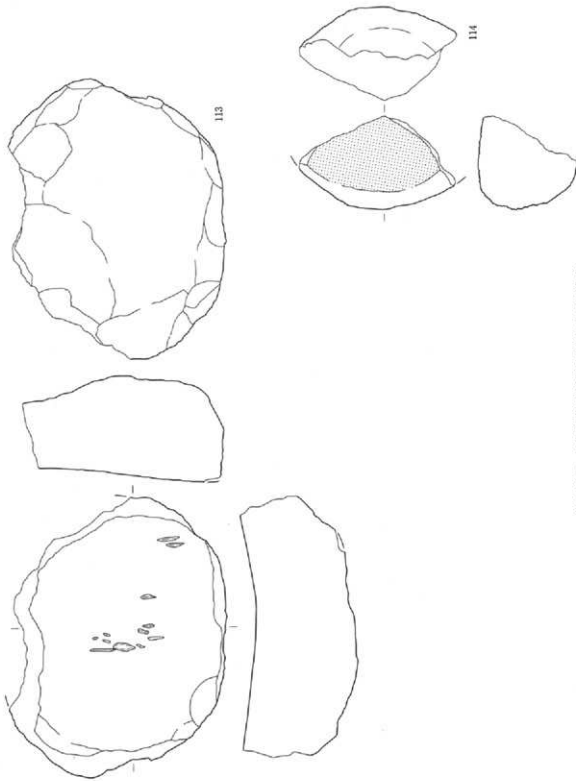


111

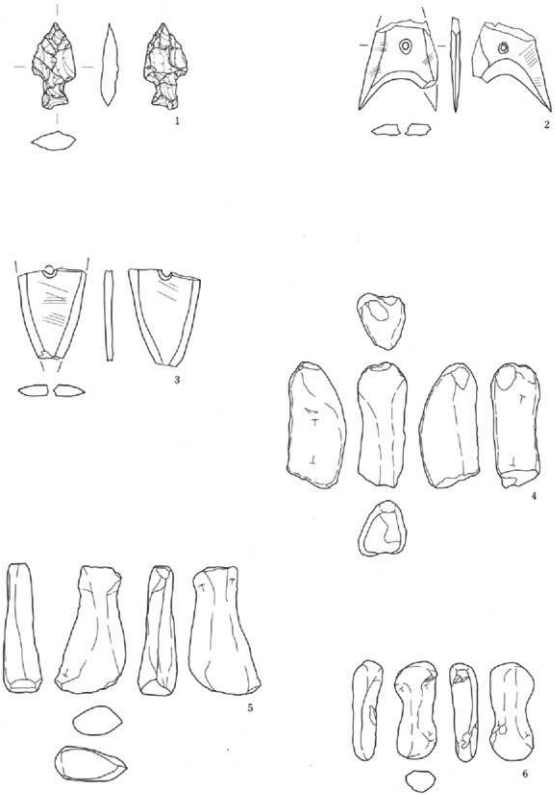


112

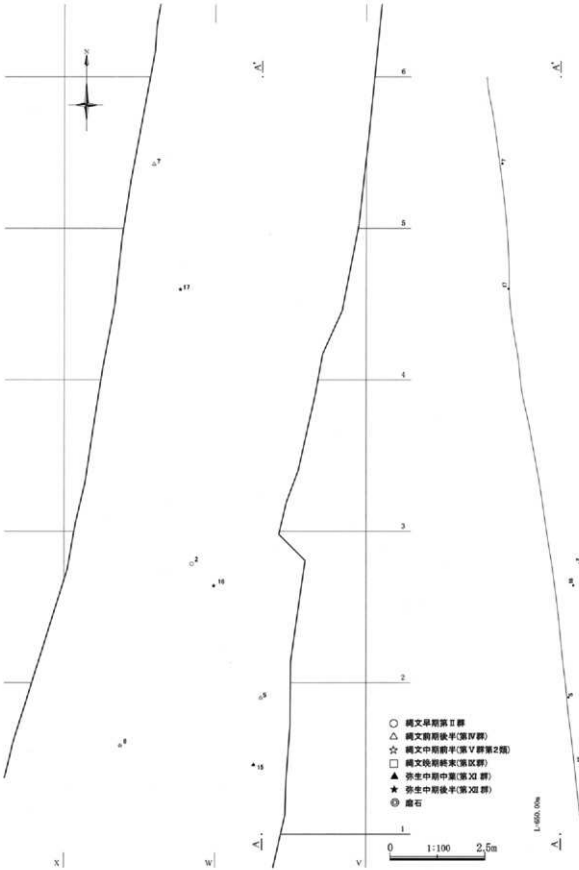
第143図　17区縄文時代遺構外出土石器(14)



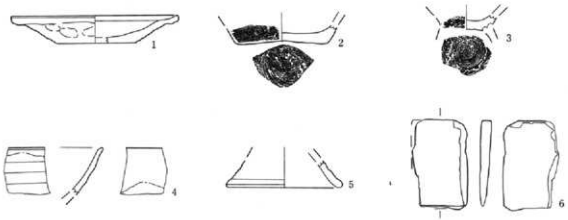
第144図　17区縄文時代遺構外出土石器(15)



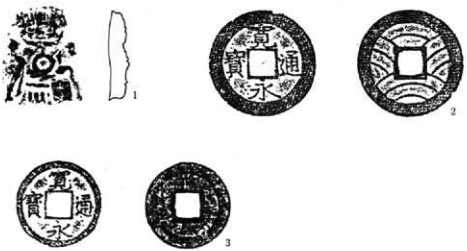
第145図　17区弥生時代遺構外出土石器（１）



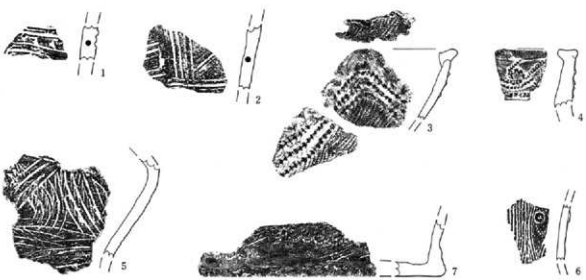
第146図　26区縄文・弥生土器・石器出土位置図



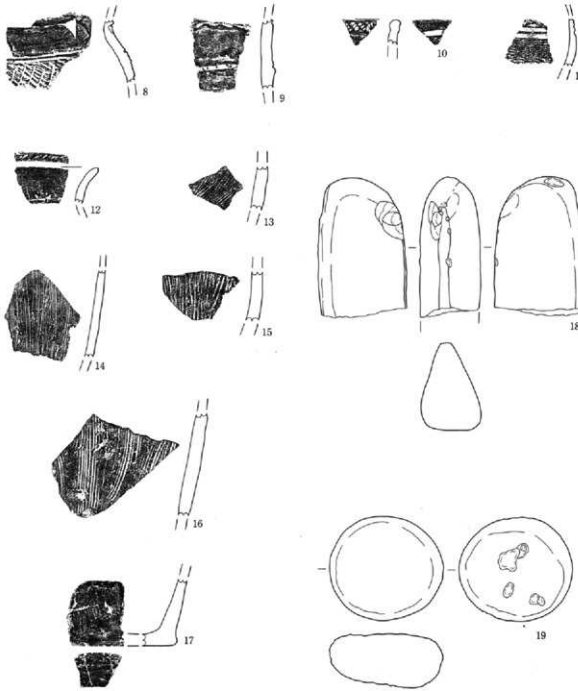
第147図　17区平安時代遺構外出土遺物



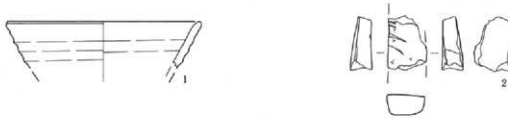
第148図　17区近世遺構外出土遺物



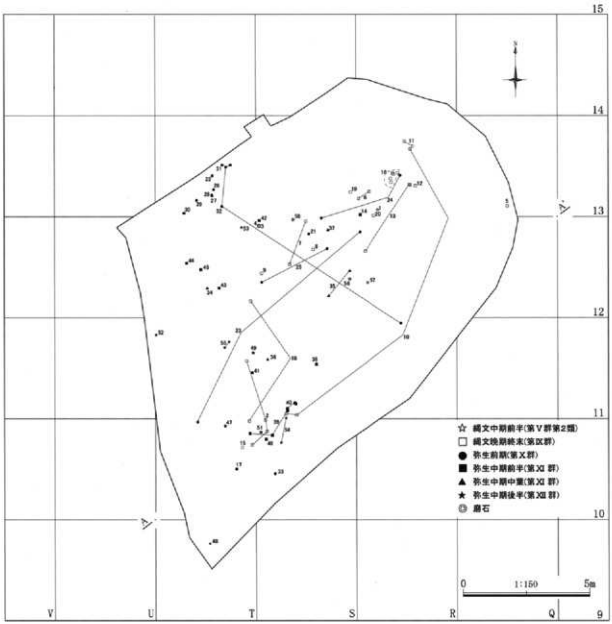
第149図　26区縄文・弥生時代遺構外出土遺物(1)



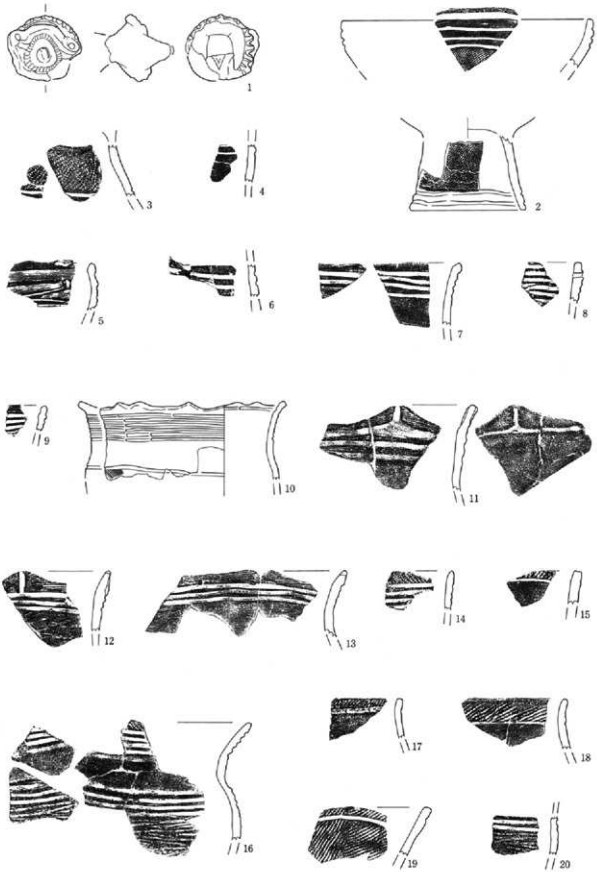
第150図　26区縄文・弥生時代遺構外出土遺物(2)



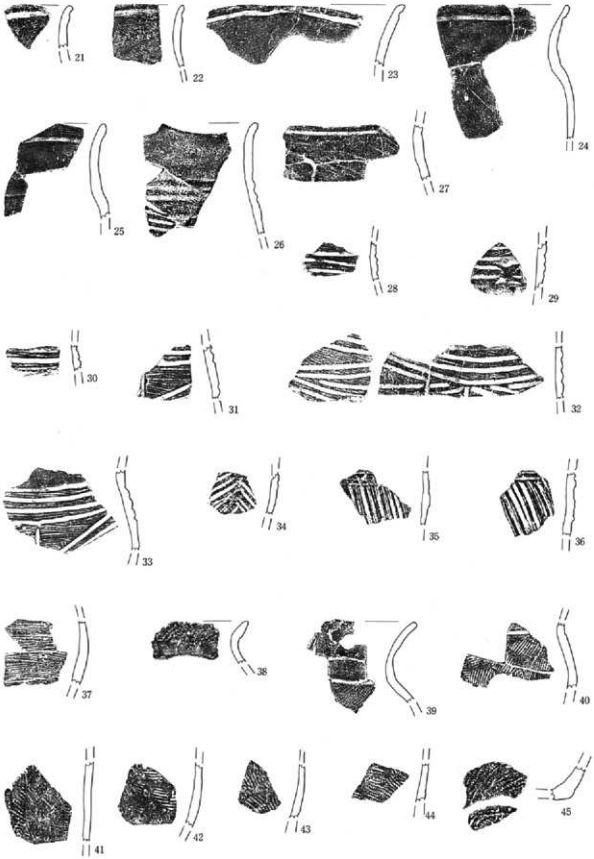
第151図　26区平安時代以降遺構外出土遺物



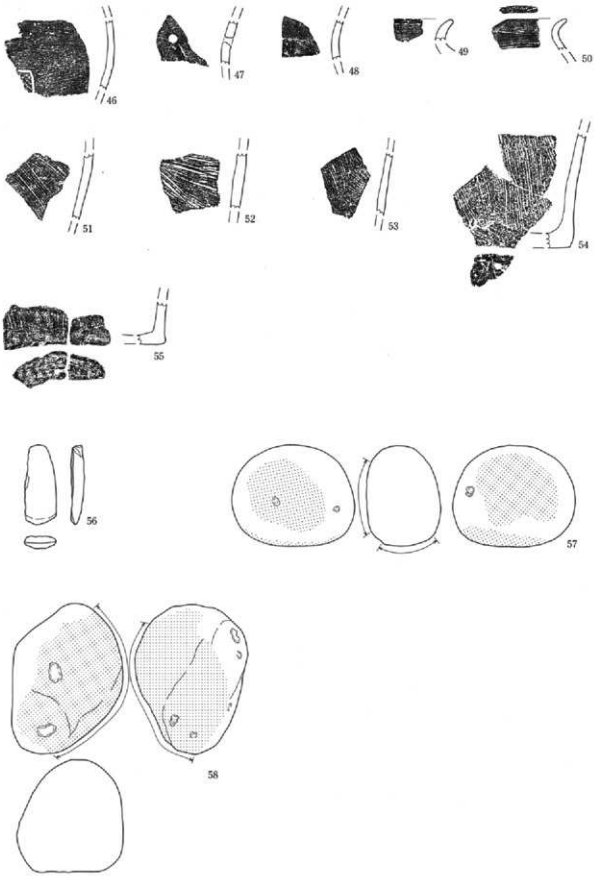
第152図　27区縄文・弥生土器・石器出土位置図



第153図　27区遺構外出土遺物（１）



第154図　27区遺構外出土遺物(2)



第155図　27区遺構外出土遺物（３）

第４章　まとめ

第１節　遺構

第１項　竪穴住居跡

縄文時代　17区で２軒、27区で１軒検出された。

17区はともに早期に属している。６号住居跡は第Ⅱ群第１・２・４・９類の土器群で、遺物の混在は床面が不明瞭であったことによると言える。炉も不明瞭であった。７号住居跡は不整形ながら、床面・壁面ともに明瞭だが、焼土は全く見られず、住居跡とする根拠に乏しい。出土遺物は第Ⅰ群第３類ａ種の土器群で、遺構の時期を示す。埋没土は締まったオリーブ褐～にぶい黄褐色土であり、埋没土からも他の縄文時代遺構よりも古い印象がある。２号竪穴状遺構も形態・状況ともに７号住居跡に類似する。出土遺物は１点のみだが、第Ⅱ群第４類ｃ種の土器が出土している。全て柱穴などは見つかっていない。

27区は、晩期終末の第Ⅸ群第１類の土器群（女鳥羽川式土器）を伴う時期である。地山が崩落土層であり、調査状況は悪かった。炉は地床炉であり、住居跡の中央部に位置している。柱穴などは見つからなかった。

弥生時代　17区で１軒、27区で１軒検出された。

17区３号住居跡は第Ⅷ群の土器群を伴う時期である。床面は不明瞭だが、中央部に遺存状態の悪い地床炉が検出された。出土遺物も埋没土上層が多く、時期を示す遺物に乏しい。柱穴などは見つからなかった。

27区２号住居跡は第Ⅺ群の土器群を伴う時期である。床面は不明瞭だが、中央部に遺存状態の悪い地床炉が検出された。出土遺物は少なく、時期を示す遺物に乏しい。柱穴などは見つからなかった。

平安時代　17区で３軒、27区で１軒検出された。時期は全て10世紀前半である。

17区１号住居跡は一辺５ｍを超えて最も大きい。北半分には堅固な貼り床を持つ。また、西辺から北辺に周溝が廻っているのは珍しい例であろう。ピットも５基確認できたが、主柱穴として位置づけられるものはなかった。柱穴は他の住居跡でも見つかっていない。貼り床は17区２号住居跡でも施されている。

カマドは17区２号住居跡が北カマドであった以外、全て東カマドである。17区の３軒は石の出土状況から、石組みカマドであった可能性が高い。

第２項　掘立柱建物跡・ピット群

平安時代以降　７・17区のピット群は直線的に並ぶものが複数列あり、掘立柱建物跡や柵列の可能性がある。５号土坑には柱痕跡も見られる。時期を示す遺物はないが、１号住居跡に後出する52号土坑の存在から、平安時代以降の所産と考えられる。

16・17区では掘立柱建物跡２棟と、同時期とみられるピット群が集中して発見された。特に17区２号掘立柱建物跡は１×３間の南北棟で西庇を持つ。建物敷地は切り土によって平坦面を造り、法下に４号溝を掘って排水を考慮したものと言える。こうした建物敷地の様相は町内の下原遺跡でも見つかっており（飯森2003）、その後も町内数カ所で発見されている。柱穴の深さは傾斜に合わせて深くなっており、地形に合わせて傾斜している建物であった可能性もある。こうした構造は居住用としては難があるため、別の用途が想定される。内部には大型で円形の104号土坑があり、隣接する長方形の101号土坑も含めて、関連が想定される。桁行平均柱間も約1.2ｍで、建物の規格としても簡便なものと判断される。

＊飯森康広2003　「下原遺跡の中世掘立柱建物跡と焼土・墓・土坑をめぐる景観　－イロリを伴うとみられる掘立柱建物を前提として－」『久々戸遺跡・中畑Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

第3項　土坑

縄文時代　前期の遺物を伴う17区74号土坑や同94号土坑は、比較的土器の遺存状態は良いが、遺構形態が明確ではない。掲載した前期の遺構外遺物が多いのも、遺構が判別しにくいことに一因があるかもしれない。早期についても遺構外遺物が多いが、住居跡も2軒あり、前期とは状況が異なる。なお、17区1・3号集石遺構は早期の土器を伴うが、同種の土坑として17区82号土坑があり、石が比熱している状況から、調理遺構の可能性があろう。

弥生時代　中期後半代の土坑が散在する。17区58号土坑は埋設状況を良好に残す土器棺墓であり、同じく同72号土坑も同種の遺構であろう。また27区1号土坑も甕の下半部のみであるが、同種の遺構である可能性がある。

平安時代以降　特徴的なものがないが、27区12号土坑はほぼ完存の鉄製紡錘車が出土した。隣接する同区1号住居跡との関連も想定されよう。

第4項　陥し穴

1．構築年代　遺跡全体の数量は88基で、うち平安時代以前が63基約72%、弥生時代以降が14基約16%、平安時代以降が11基約12%である。ただし、時代区分については出土遺物及び指標テフラ(平安時代)を基準にしており、平安時代以前と弥生時代以降との中、及び弥生時代以降と平安時代以降との中に、重なる部分が想定されることとなる。つまり、時代区分は明確ではなく、分布や形態的特徴についても、傾向を示す程度と考える。

かつて、松原孝志らは本遺跡に隣接する花畑遺跡検出の陥し穴の構築時期について、掘削工具痕の分析から金属製工具の可能性を指摘するとともに、炭化物の放射性炭素年代測定を用いて、弥生時代以降の数値を得ている(松原・石田2002)。また、石田真は本遺跡を含む長野原町内4遺跡の事例を取り上げ、弥生時代以降構築の陥し穴の存在に焦点を当て、安易に縄文時代と考えられてしまう当該遺構の状況に警鐘を鳴らしている(石田2004)。そうした意味で、本報告において、平安時代以降の陥し穴の存在が検証された成果は大きいのではないだろうか。17区29号土坑は、10世紀前半に比定される17区4号住居跡を壊し、1108年に降下した浅間B軽石の純堆積層を埋没土中に持つことから、構築年代がこの200年間の一時期に限定される好事例として特筆される。

＊松原孝志・石田真　2002　『八ツ場ダム発掘調査集成(1)』第8章花畑遺跡第5節まとめ　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

＊石田真　2004　「群馬県北西部における陥し穴の構築時期について」『研究紀要22号』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

2．形態的特徴　形態的な特徴により、本文中では以下の分類を基準に記述を行った。

筒形：上面・底面ほぼ円形で、壁が垂直に立ち上がる茶筒形のもの。

スリ鉢形：上面・底面ほぼ円形だが底面積は小さく、壁が斜めに立ち上がるもの。

箱形1類：上面・底面が長方形か隅丸長方形で、壁が垂直に立ち上がるもの。

箱形2類：上面は楕円形で、途中から長方形となって底面も長方形か隅丸長方形となる。壁面は下半部が垂直で途中から外反して、上面に向かって斜めに立ち上がるため、断面くの字形をなすもの。

逆台形：上面は楕円形か隅丸長方形で、壁は斜めに立ち上がるもの。底面は隅丸細長方形をなす。

溝状：上面は細長い楕円形、底面は端部の丸い細長い溝状になる。壁の長辺は斜め気味のV字形になるが、短辺側はほぼ垂直気味に立ち上がるもの。

以上、5種6分類とした。なお、箱形2類は発掘調査時の確認面が深くなったり、耕作による攪拌で消滅していた場合など、上半部を欠損して箱形1類となるため、同種として分類した。時代区分ごとの形態別数量は下表のとおり（17区1号土坑と16区105号土坑は、形態不明のため数含めず）。

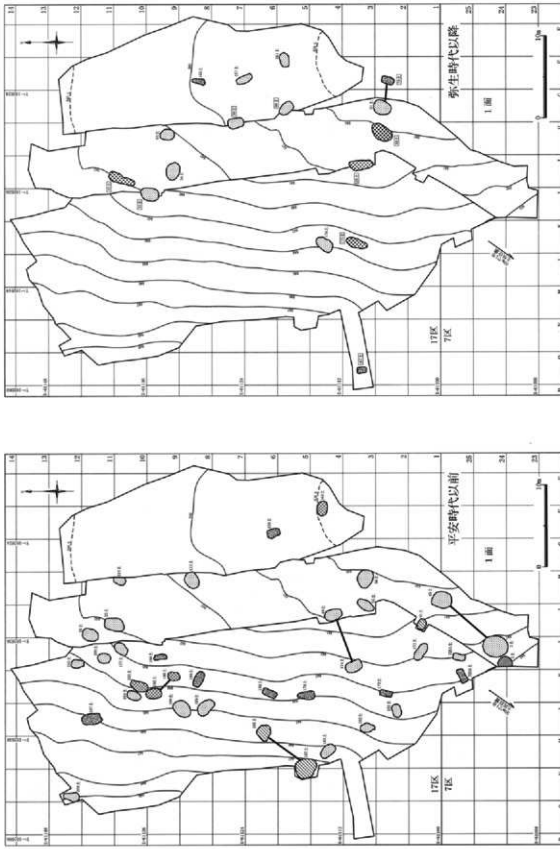
	平安時代以前		弥生時代以降		平安時代以降		計
	7・17区	16・26区	7・17区	16・26区	7・17区	16・26区	
筒形	2	2					4
スリ鉢形	3	2					5
箱形1類	8	13	1	1	2		25
箱形2類	23	6	6	1	3	1	40
逆台形	4			3		1	8
溝状					4		4
計	40	23	7	5	9	2	86

形態の傾向をみると、筒形とスリ鉢形は平安時代以前に、溝状は平安時代以降に限られることがわかる。これは時代色を表している可能性が高いだろう。ただし、筒形については、陥し穴に分類しなかったが17区49号土坑があり、平安時代以降の筒形である可能性を持つ。したがって、筒形は平安時代以前特有とは言い難い。スリ鉢形及び溝状についても、構築年代を断定する確証はないが、溝状については平安時代住居跡との重複関係や出土遺物、被覆する降下テフラなど、構築年代を判断する材料が多く、ほぼ平安時代以降と考えてよいのではないだろうか。

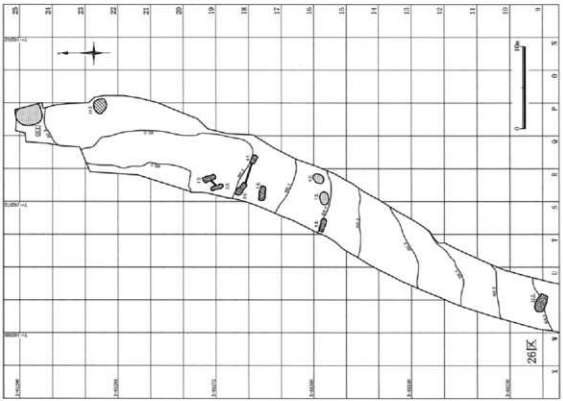
その他、箱形1類、箱形2類、逆台形は、各年代で通覧される形態である。特に箱形は2つ合わせて65基であり、全体の約74%を占めるが、平安時代以降の7・17区をみれば、箱形1・2類で5基、溝状で4基とほぼ同数に近くなっている。これを形態的な切り替わりと考えるか、機能的な分化と考えるかは即断できない。なお、溝状のものには逆茂木を有するという特徴が顕著である。

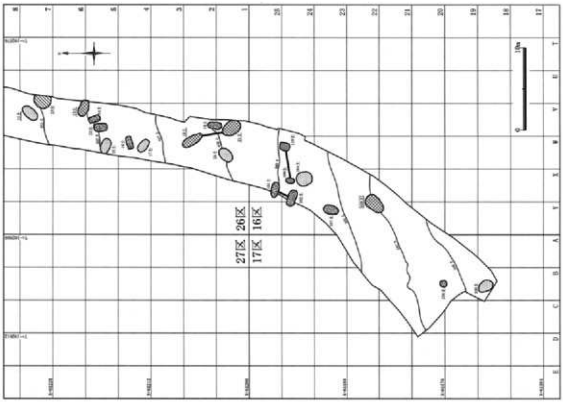
3．掘削工具痕跡　26区16号土坑の壁面で顕著に観察される。刃先幅は概ね10cm程度であり、残りの良いものでU字形のものも散見され、金属の刃先が想定できる。土坑の全体形は箱形1類である。また、過日報告を行った立馬Ⅱ遺跡の44号土坑でも、顕著な工具痕が確認され、刃先幅は8cmとやや小振りであるが、金属の刃先を想定することができた。土坑の全体形も同じく箱形1類である。花畑遺跡でも3基の土坑で工具痕跡が確認されている。刃先幅は約11cm程でU字形の金属刃先が想定されている（石田2004）。土坑の全体形も本報告で分類した箱形1類である。以上から判明するとおり、金属刃先を想定させる工具痕跡を残す陥し穴が、本遺跡周辺で散見されており、土坑全体形が一致する点からも、同時期の構築年代を想定させる結果と考える。この場合、刃先幅が8～11cmとばらつきが生じているが、全く同じ規格である必要はなく、同種の工具で掘削されたことを物語っていよう。ちなみに、箱形1類は全体で25基28%確認できているが、17区2次調査及び26区の遺構確認面深度が非常に深く、上半部を欠損して箱形1類となり、元来は箱形2類であった可能性も多いことも考慮しなければならない。したがって、箱形1類については、見かけ上混入している箱形2類を峻別していく作業が課題であり、これによって弥生時代以降の特有の形態である可能性も考慮されるところである。

*飯森康広ほか　2006『立馬Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



第156図　7・17区陥し穴分布図





第157図　26区遺し穴分布図

4．分布　第156・157図に示したとおり、2基ずつ対になって構築された様相もうかがえるが、構築期間が長く想定されることや、16・26区では調査幅が狭く全容がわかりにくい点も考慮して、対であるという認定も慎重になっている。したがって、もう少し多く線で結んでもよいという印象も残る。この点、立馬Ⅱ遺跡では陥し穴22基と少ないことがかえって煩雑さを招かず、非常に明確に2基ずつが対になっている様相が確認できている。それは、すでに石田によっても論じられている（石田2004）。

第2節　遺物

第1項　土器

1．概要　第2～4表に詳細を示したとおり、出土土器の掲載点数は全出土数5,303点中661点約12％であり、多いという印象はない。ただし、内訳を示せば、17区全出土数4,976点中に、第Ⅱ群だけで細分できなかった無文土器等が2,369点約47.6％あり、遺跡全体の約44.7％を占めている。同じく、第Ⅲ群第2類の土器群も17区全出土数957点で、遺跡全体の約18％を占める。したがって、これらの掲載を制愛したことが、掲載点数に大きく影響している。ただし、第158図に示したとおり、掲載遺物の割合でも、第Ⅰ・Ⅱ群41％、第Ⅲ群14％、第Ⅳ群11％と、縄文時代草創期～前期で66％を占めており、未掲載遺物も含めた割合と図らずも一致する結果となっている。

2．縄文時代

(1) 第Ⅱ群　第4類土器について（早期）

本類は中部系の沈線紋土器ととらえた土器群である。隣接する立馬Ⅱ遺跡（飯森2006）においても報告がなされたが、本遺跡ではよりまとまって出土しており、現在のところ群馬県内でもっとも充実した資料といえる。

本文中では紋様要素や紋様構成を基準としてａ～ｅの5種に分類した。しかし便宜的な分類であるため、同じ個体であっても破片の部位により種が違ってしまうことにもなっているだろう。それぞれの種は異なるものの特徴が共通する部分も多く、各種の関係性は強いといえる。より大きく括った場合、棒状工具やへら状工具、半截竹管状工具などによる1本書きあるいは1本書きに近い沈線のものと、櫛歯状工具や半截竹管状工具を重ねて施紋する条線状の多条沈線が施されるものの2大別が可能である。もちろん明確に区分できないものも含まれるが前者はａ・ｂ種が、後者にはｃ・ｄ種がほぼ該当しよう。ｅ種に関しては両者が含まれる。

ａ・ｂ種の特徴は、①1本書き沈線のほかに37～39、41～45のような3，4条1単位の沈線で施紋されること、②口唇部に刻みを付すものが多いこと、③紋様帯が胴部付近で区画され、胴部下半は無紋となることがあげられる。③を重要視すれば、ｃ種に分類した69，70，130もこちらに含めた方がよいかもしれない。特に130は胴部上位に1帯の紋様帯をもち、紋様帯内に菱形状のモチーフを明確にもっている。多条沈線とした沈線も櫛歯状工具によるものではなく、沈線を複数条重ねた結果、多条になったものと判断することもできるので、妥当かもしれない。本種の類例は長野県栃原岩陰（西沢1982）、下荒田遺跡（中沢1994）、湯倉洞窟（関2001）など北信および東信地域で認められる。

ｃ・ｄ種の特徴は、①櫛歯状工具や、半截竹管状工具を複数条重ねることによる条線状の沈線で施紋されること、②口唇直下に刺突列を施すものが多いこと、③櫛歯状工具による刺突が施されること、④鋸歯状や菱形状のモチーフを描くものが多いが、幾何学的なモチーフとして明確ではなく崩れたようなものが多いこと、⑤胎土に石英粒を含むものが多く、まれに金雲母を含むものがあることがあげられる。ｃ種とｄ種の関

係については、刺突の種類以外、紋様要素や紋様構成が共通することから同時期併存と推察される。78には櫛歯状刺突と c 種の刺突が併用されており、両者が同時期併存であることを物語っていよう。本稿の類例は長野県上林中道南遺跡(埴原1996)、がまん淵遺跡(鶴田1997)、大道下遺跡（中村1997)、東裏遺跡(中村2004)、上山桑Ａ遺跡(中村2004)、新潟県八斗蒔原遺跡(坂上2004)などにあり、中沢道彦氏が「上林中道南式」として提唱している土器群である(中沢2005)。「上林中道南式」は、善光寺平北部から新潟県上越・中越地方に分布する土器群(鶴田1997)(中沢2005)とされているが、本遺跡の例が加わることにより群馬県北西部にも分布域が広がることが判明した。この事実は「上林中道南式」の型式設定の妥当性を補強するものとして非常に意義があろう。

さてａ・ｂ種とｃ・ｄ種の関係であるが、現時点で断定はできないもののａ・ｂ種→ｃ・ｄ種への変化の可能性が考えられることを指摘するにとどめたい。もちろん他遺跡出土土器、特に長野県地域を中心とした当該期土器を分析・比較検討することによってこの結論を導き出すという手順が必要不可欠であるが、それは今後の課題とし、稿を改めて論じたい。　（橋本　淳）

＜参考文献＞

坂上有紀　2004　『八斗蒔原遺跡』　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

関孝一他　2001　『湯倉洞窟』　高山村教育委員会

埴原長則　1996　『上林中道南遺跡Ⅲ』　長野県山ノ内町教育委員会

鶴田典昭　1997　『がまん淵遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』　(財)長野県埋蔵文化財センター

西沢寿晃　1982　『栃原岩陰遺跡』『長野県史　考古資料編』１－２

中沢道彦　1994　『下堂田遺跡』　長野県御代田町教育委員会

中沢道彦　2005　『長野県における早期沈線文土器群の様相』『第18回　縄文セミナー　早期中葉の再検討』　縄文セミナーの会

中村由克　1997　『大道下遺跡（４次）ほか信濃町町内遺跡発掘調査報告書』　信濃町教育委員会

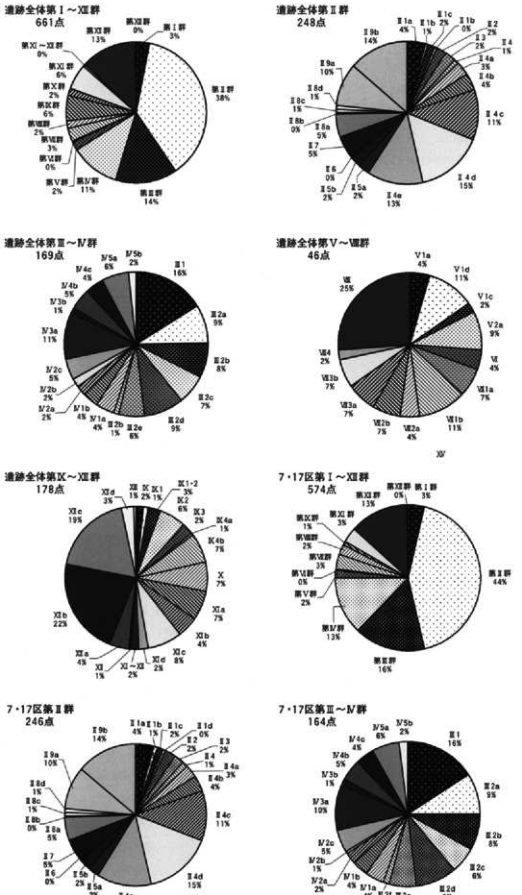
中村由克　2004　『上山桑Ａ遺跡』　長野県信濃町教育委員会

中村由克　2004　『東裏遺跡東裏摂地地点・町道柴山線地点発掘調査報告書』　長野県信濃町教育委員会

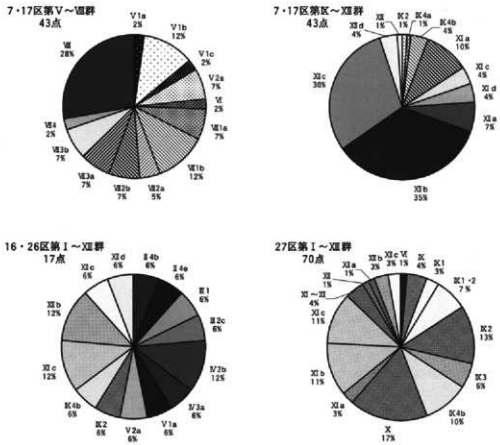
(2) 前期　第Ⅲ群の土器群では、羽状縄文を施す胴部破片が多いが、口縁部片で還付末端施紋するもの(17区遺構外－213・214・256；以下、17外－と略す)が散見される。第Ⅲ群第２類ａ種(以下、Ⅲ－２－ａと略す)の文様では、口縁部に棒状工具による弧状沈線を施す一群(17外－237～242)に対して、横位に複数の平行沈線を施すもの(17－74土２)がある。Ⅲ－２－ｂでは胴部にコンパス文を施す一群(17外－247・249・253～255)と、山形文を施す一群(17外－243・244・257)があり、中間的で雑な施文として、コンパス文としたもの(17－74土１)や、やや雑な縦位・斜位沈線を施すもの(17外－252・258～261)がある。組紐を施文したもの(17外－245～254)ではコンパス文を持つものが多い。その他の縄文では、合撚を施すもの(17外－262～269)、側面還付施文により複雑な文様を描出したもの(17－94土１)がある。

Ⅳ－１－ａでは、波状沈線を整然と施文するもの(17外－298～302)、やや乱れた沈線を施すもの(17－４集１)がある。Ⅳ－３では、集合沈線を施し棒状・ボタン状添付文を施すものに、刻み目をつけるもの(17外－328・329)がある。また、集合沈線を施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施すもの(17外－339)があり、中部高地系の影響がみられる。Ⅳ－４－ａでは地文縄文施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施すもの(17外－344～348)に加え、大型で太い隆帯を刻むもの(17外－349)もある。

(3) 中期・後期　中期は極少なく、Ⅴ－１では斜格子文を施すもの(17外－370)、地文縄文のもの(17外－372～376)がある。Ⅴ－２も細片ながらみることができる(17外－377～379)が、隣接する同時期集落である立馬Ⅱ遺跡の存在に反して、非常に少ない。中期後半も同様である。



第158図　出土土器分類別割合図（1）



第159図　出土土器分類別割合図（2）

Ⅶ－1では縄文を充填するもの(17外－381・382・384)と、沈線のみで文様を表出するもの(17外－383・385～388)がみられる。Ⅶ－2では隆帯を貼付するもの(17外－391・392)と縄文・沈線を施すもの(17外－389・390・398)がある。Ⅶ－3では磨消縄文を施すもの(17外－394・395・397)に加え、無紋で磨きの施されるもの(17外－393・396)や、内面に刻みを施すもの(17外－399)が含まれる。

(4) 晩期　Ⅷでは隆帯を貼付するもの(17外－401～403)、突起を貼付するもの(17外－404・406～410)があり、赤彩するもの(17外－406)がある。Ⅸ－1は口縁部外面に2条、内面に1条の浮線を施し、凹みを赤彩するもの(27－4住1)があり、無文で口径の広い27－17土1もある。Ⅸ－2では浮線文のみのもの(17外－416、27外－7～9)、浮線で四分岐文様を施し、赤彩するもの(27外－5・6)、条痕文を地文とするもの(27外－10～13)がある。Ⅸ－3は地文に細かな縄文を施し、沈線後赤彩するもの(27外－2～4)である。Ⅸ－4では口縁部に縄文を施すもの(17外－411・412・414、27外－14～19)に加えて、胴部に綾杉状の沈線を施すもの(17外－16・20)がある。

3．弥生時代　X群では地文無文に太い沈線を施すもの(27外21～26・28)と、地文に条痕を施すもの(27外－27・30)、地文に条痕を施し三角連鱗文を施すもの(27外31～33)がある。

XⅠ群では口縁部に縄文を施すもの(17外－423～425、27外－38)があり、球胴形や筒形で磨消縄文を施すもの(17外－426～432)も多く含まれる。縄文では短く施文する一群(17外－39～45)もあり、27－2住1は壺形土器である。条痕を施すものでは荒いもの(17外－419～420、27外－34～36)と、細かいもの(27外－37)がある。そのほか、平行沈線を縦横に施すもの(17外－421・422)、櫛歯状工具で波状文を施すもの(櫛歯状工具による433・434)がある。

第２表　遺構・グリッド別土器出土数一覧（１）

7区	第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅱ群第１類	第Ⅱ群第２類	第Ⅱ群第３類	第Ⅱ群第４類	第Ⅱ群第５類	第Ⅱ群第６類	第Ⅱ群第７類	第Ⅱ群第８類	第Ⅱ群第９類	第Ⅲ群第１類	第Ⅲ群第２類	第Ⅳ群第１類	第Ⅳ群第２類	第Ⅳ群第３類	第Ⅳ群第４類	第Ⅳ群第５類
１－23グリッド																3		
表土																1		
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0

17区	第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅱ群第１類	第Ⅱ群第２類	第Ⅱ群第３類	第Ⅱ群第４類	第Ⅱ群第５類	第Ⅱ群第６類	第Ⅱ群第７類	第Ⅱ群第８類	第Ⅱ群第９類	第Ⅲ群第１類	第Ⅲ群第２類	第Ⅳ群第１類	第Ⅳ群第２類	第Ⅳ群第３類	第Ⅳ群第４類	第Ⅳ群第５類
１号住	4	74				16					1	22	32	2	2	11	7	7
２号住	1	8											3				1	1
３号住		22				1					2		7					
４号住																		
６号住	1	117	1	2		18					7	5	12	1				
７号住	2	5																
８号住		1																
１号壁穴		2		1		1												
２号壁穴						1												
２土												2						
３土																		
４土																		
９土		3											4	1				
13土													1					
15土		4																
21土																		
25土																		
26土																		
29土																		
30土																		
31土		6				2	1				1		13	1			2	
32土		1								1			4					
33土		1								1	1		1					
34土	1	6				1							2					
35土		3										1	3					
36土		3											1					
39土	1			1									1					
43土		5											2					
45土																		
46土		1				2	1											
49土		3				1							6			1	2	1
54土																		
55土													1					
56土		1																
58土																		
64土													1					
66土													2			1		
67土		4											1	1				
68土	2					1							1		2			
69土						2							2					
70土		1											2					
72土		3																
74土		5				3						1	20					
75土		6				2							2			4		
78土																		
79土		1							1									
83土													1	1				
85土												19	1					
86土												1						
90土													4					
91土													2					
93土		12				1							4		1	1		
94土	1	18	1									1	3					
95土	1	1				1												
96土						1												
100土																		

第Ⅴ群第1類	第Ⅴ群第2類	第Ⅵ群	第Ⅶ群第1類	第Ⅶ群第2類	第Ⅶ群第3類	第Ⅶ群第4類	第Ⅷ群	第Ⅸ群	第Ⅸ群第1類	第Ⅸ群第1・2類	第Ⅸ群第2類	第Ⅸ群第3類	第Ⅸ群第4類	第Ⅹ群	第Ⅺ群	第Ⅺ～Ⅻ群	第Ⅻ群	第Ⅻ群	平安	合計
																				3
																				1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

第Ⅴ群第1類	第Ⅴ群第2類	第Ⅵ群	第Ⅶ群第1類	第Ⅶ群第2類	第Ⅶ群第3類	第Ⅶ群第4類	第Ⅷ群	第Ⅸ群	第Ⅸ群第1類	第Ⅸ群第1・2類	第Ⅸ群第2類	第Ⅸ群第3類	第Ⅸ群第4類	第Ⅹ群	第Ⅺ群	第Ⅺ～Ⅻ群	第Ⅻ群	第Ⅻ群	平安	合計
2															8		9		25	222
														1			5		38	58
							1								3		16			32
																			5	5
													1		1		1			167
																				7
																				1
1			1	1				3		1			1		11		25		23	71
																				1
																				2
								5												5
																	1			1
															1		2		1	12
																				1
								1												5
	1																			1
1																				1
															1					1
1																				1
																			1	1
																	3			29
																				6
																				4
							1							2		3	16			32
					1															8
																	1			5
							11							1	2	9	2		1	29
																2	1			10
																	1			1
														1					1	6
																1	3		1	19
																	2			2
																				1
																				1
																	3			3
	1															2	3			7
																				3
																1			1	8
																				6
																1	1			6
																			1	4
																1	7			11
																				29
																1	12	1		25
																	1			1
																			1	3
																				2
																	1			20
																				2
							1									4	4		3	16
		1															1			4
																2				21
																				24
																				3
																				1
	1																			1

第３表　遺構・グリッド別土器出土数一覧（２）

17区	第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅱ群第１類	第Ⅱ群第２類	第Ⅱ群第３類	第Ⅱ群第４類	第Ⅱ群第５類	第Ⅱ群第６類	第Ⅱ群第７類	第Ⅱ群第８類	第Ⅱ群第９類	第Ⅲ群第１類	第Ⅲ群第２類	第Ⅳ群第１類	第Ⅳ群第２類	第Ⅳ群第３類	第Ⅳ群第４類	第Ⅳ群第５類
101土																		
102土																		
103土		1				2												
107土																		
113土		20	1			3							1	2		1		
114土		10											5					
115土	20																	
137土													1					
142土		1																
143土													1					
151土															1			
157土		1				1												
158土													1					
159土		1											4					
161土	1	1				2							5					
162土		3																
164土																	1	
165土									1									
168土		1				1							1					
170土																		
177土		3																
192土													1					
195土													1					
200土		1																
3溝													7					
4溝																		
1焼土		1																
2焼土		2												3				
4焼土						3												
6焼土																		
7焼土													2					
1集石		2				1												
2集石		9				1								1				
3集石		9	1			3							1	1				
4集石		11				7						2	15	3		1		
5例本	2	64				7						5	12	2	2	2		
7例本		1											3					
9例本		33				2						2	4					
F－6グリッド													1					
G－2グリッド																		
G－3グリッド		38				2			6	2	3		3					
G－4グリッド	2	35	1	1		1			2		2		5					
G－5グリッド	1	33				1			1		1	1	6					
G－6グリッド	2	36				2				2	2	1	10					
G－7グリッド	10	1	1										1					
G－8グリッド	1																	
H－1グリッド												1						
H－3グリッド		15				1					3		3					
H－4グリッド		37				6			2				2					
H－5グリッド	1	112	1			6					1	6	10					
H－6グリッド	9	90		1		7			1	1	2	6	49	1		1	1	
H－7グリッド	4	84	1	1		29	1		1	2	3	9	132	11	3	4		1
H－8グリッド	5	246				24	4			1	6	8	42	12	2	3		1
H－9グリッド		207	4			21				3	2	51	51	1	3	3		1
H－10グリッド		123	3		1	33	2			1	6	16	54	1	2	7		2
H－11グリッド		90	3				2			1	3	1	30		1	3	3	1
H－12グリッド													1					
I－2グリッド													2					
I－4グリッド																		
I－5グリッド		29				5							3					
I－6グリッド		18				3				1			18					
I－7グリッド		50				6					1		8	1				
I－8グリッド	1	123		1	1	10				1	2	5	18			1		
I－9グリッド		102		3		43				1	2	4	127		2	2	1	

第V群第1類	第V群第2類	第VI群	第VII群第1類	第VII群第2類	第VII群第3類	第VII群第4類	第VIII群	第IX群	第IX群第1類	第IX群第1・2類	第IX群第2類	第IX群第3類	第IX群第4類	第X群	第XI群	第XI～XII群	第XII群	第XIII群	平安	合計
					1		1													2
						1														1
					1												1			5
		1																		1
															5		7			40
																			1	16
																				20
													1							2
		1																		2
																				1
																				1
																	1			3
		1																		2
																				5
		1													1		7			18
																				3
																				1
															1					2
																				3
															1					1
																				3
																				1
																				1
																				1
																				7
																	1			1
																				1
																	1		2	8
																				3
																	1			1
																			1	3
																				3
																				11
																	2			17
																				39
		1									1		1		2		12	1		114
																				4
																				41
																				1
		1													1		2			4
																				54
																	6			55
															7		6			57
1																	2			58
															2		4			19
																				1
																				1
	1																			23
		1															6		2	56
													1		3		14		1	156
	1	1			1										9		1			182
		3	2	1		1											23		6	322
		5	4	1	3	3	3								10		20		22	427
		1	6	1											9		4		3	371
					1		1				1						5		1	260
											1				5		2			146
																				1
																	1			3
																	1			1
																	5			42
																				40
			2										1						1	70
													2		6		8			179
			1				1						2		3		2		2	298

第4表　遺構・グリッド別土器出土数一覧（3）

17区	第I群	第II群	第III群第1類	第III群第2類	第III群第3類	第III群第4類	第III群第5類	第III群第6類	第III群第7類	第III群第8類	第III群第9類	第III群第1類	第III群第2類	第IV群第1類	第IV群第2類	第IV群第3類	第IV群第4類	第IV群第5類
I－10グリッド		179	2		2	24				2	3	1	78	1	2	1	1	2
I－11グリッド	3	97			1	9				2	1	4	22				1	
J－5グリッド	1	1							1				6					
J－6グリッド		2				1												
J－7グリッド		1											1					
J－8グリッド		3																
J－9グリッド		5										1	1					
J－10グリッド		11											2					
J－11グリッド		5				4							3					
J－12グリッド		1																
K－5グリッド													1					
K－6グリッド													1					
K－7グリッド													7					
K－9グリッド													1					
K－10グリッド																		
K－12グリッド													1					
L－5グリッド													1					
L－6グリッド		1											1					
M－4グリッド		2																
M－7グリッド		1									1							
M－10グリッド						2												
N－10グリッド		1															1	
表土	7	96	2	1	1	28			1			23	51	4	2	1	1	3
合計	83	2369	22	12	6	355	11	0	17	22	56	199	957	51	25	48	22	20

26区	第I群	第II群	第III群第1類	第III群第2類	第III群第3類	第III群第4類	第III群第5類	第III群第6類	第III群第7類	第III群第8類	第III群第9類	第III群第1類	第III群第2類	第IV群第1類	第IV群第2類	第IV群第3類	第IV群第4類	第IV群第5類
11土		1										1						
12土																		
13土												5	3		1			
15土		2										1	2					1
16土																		
17土													1					
18土		2				1							1					
19土													4					
20土		1											2					
21土												1	1					
22土																		
23土		1											1					
X－1グリッド												1	2					
表土		1				1							12		1	5	1	2
合計	0	8	0	0	0	2	0	0	0	0	0	9	29	0	2	5	1	3

27区	第I群	第II群	第III群第1類	第III群第2類	第III群第3類	第III群第4類	第III群第5類	第III群第6類	第III群第7類	第III群第8類	第III群第9類	第III群第1類	第III群第2類	第IV群第1類	第IV群第2類	第IV群第3類	第IV群第4類	第IV群第5類
1号住																		
2号住																		2
3号住																		
4号住						1												
1土																		
7土																		
17土																		
1号竪穴																		
Q－12グリッド																		
Q－13グリッド																		
R－12グリッド																		
R－13グリッド																		
S－10グリッド																		
S－11グリッド																		
S－12グリッド																		
S－13グリッド																		
T－10グリッド																		
T－11グリッド																		
T－12グリッド														1				
T－13グリッド																		
U－11グリッド																		
表土																		
合計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2

第Ⅴ群第１類	第Ⅴ群第２類	第Ⅵ群	第Ⅶ群第１類	第Ⅶ群第２類	第Ⅶ群第３類	第Ⅶ群第４類	第Ⅷ群	第Ⅸ群	第Ⅸ群第１類	第Ⅸ群第１・２類	第Ⅸ群第２類	第Ⅸ群第３類	第Ⅸ群第４類	第Ⅹ群	第Ⅺ群	第Ⅺ～Ⅻ群	第Ⅻ群	第Ⅻ群	平	安	合 計
															2					1	301
															1					2	143
															1						9
																					3
																					2
																					3
																					7
																					13
																					12
																					1
																					1
																					1
																					7
																					1
																	1				1
																					1
																					1
																					2
																	1				3
																	1				3
																					2
																					2
1		2					1										27			19	271
7	5	20	16	5	7	19	16	0	1	0	3	0	14	3	121	0	296	2	166	4976

第Ⅴ群第１類	第Ⅴ群第２類	第Ⅵ群	第Ⅶ群第１類	第Ⅶ群第２類	第Ⅶ群第３類	第Ⅶ群第４類	第Ⅷ群	第Ⅸ群	第Ⅸ群第１類	第Ⅸ群第１・２類	第Ⅸ群第２類	第Ⅸ群第３類	第Ⅸ群第４類	第Ⅹ群	第Ⅺ群	第Ⅺ～Ⅻ群	第Ⅻ群	第Ⅻ群	平	安	合 計
															1						3
															1						1
													1		5						15
		8													4		2				20
		1													2		1				4
																					1
							1				1				4						10
		1																			5
1		1									1				1		2				9
							3								2		3				10
															1						1
															1						3
																					3
	1														2		4			2	32
1	1	11	0	0	0	4	0	0	0	0	2	0	1	0	24	0	12	0	2		117

第Ⅴ群第１類	第Ⅴ群第２類	第Ⅵ群	第Ⅶ群第１類	第Ⅶ群第２類	第Ⅶ群第３類	第Ⅶ群第４類	第Ⅷ群	第Ⅸ群	第Ⅸ群第１類	第Ⅸ群第１・２類	第Ⅸ群第２類	第Ⅸ群第３類	第Ⅸ群第４類	第Ⅹ群	第Ⅺ群	第Ⅺ～Ⅻ群	第Ⅻ群	第Ⅻ群	平	安	合 計
										1		5		2	3	12				1	24
						1			1			1			12	25	2				44
																2					2
								1		1	5					1	1				10
																2		1			3
																1					1
									1	1											2
																2					2
																		1			1
																1		1			2
								1								5					6
								1					1		1	1		1			5
												1			1	5		2			9
								1							2	7		1			11
								1			1	2				10		2			16
								1								2					3
								1				1	1			4		1		1	9
													1		1	10		4			16
								2	1		3	1	1		1	20		2			32
								1								1					2
																1					1
															1	3		1			5
0	0	0	0	0	1	0	10	3	3	9	10	4	3	22	115	3	17	0	2		206

XII群では櫛歯状工具による施文する甕が多い。胴部に羽状に施すもの(17外－449～451・453)、斜格子文を施すもの(17－58土3、17外－452)、斜線文を施すもの(17外－454～456・458)や、波状文を施すもの(17－3住3、17外－467～477)がある。また、文様意識に乏しく櫛歯状工具によって整形するもの(17外－459・460・464)も見受けられる。これらの口縁部では、口唇部に箆状工具による刻みを施すもの(17外－440・441)と、横位縄文を施すもの(17－3住1～3、17－58土3、17外－442・445～448)、何も施さないもの(17外－449～451)がある。口辺部に2条の波状沈線を施すもの(17外－448～450)もある。頸部に廉状文を施すもの(17－3住2・4、17－58土3、17外－449～454、467)は一連止めのみである。また、頸部に廉状文を施さないもの(17外－445・469・470)もあり、胴部にまで縄文を施すもの(17外－445)もみられる。なお、17－72土4の甕は、櫛描文を施さずナデ整形のみを施している。

XII群の壺は、胴部に丸みを持ってナデ整形のもの(17－72土1)、磨き整形・無文のもの(17外－436～439、479～488)が多く、口縁部下位に沈線のみを施すもの(17－58土1)が含まれる。この時期には台付甕2点(17外－493・494)が伴っている。XIII群は1点のみでオオバコを回転施文する(17外－495)。

4．平安時代以降

住居の出土遺物は概して少ない。煮炊具は羽釜で、月夜野型と吉井型が混在している。土師器・須恵器の杯・椀類の個体数は少なく、灰釉陶器皿類は各住居跡概ね1点程度含まれる。

第2項　石器

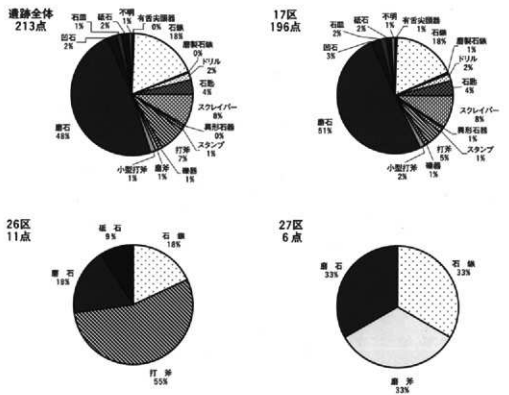
石器出土数の大半を占めるのは剥片である。とくにチップのようなものまで極力数えるという作業を科せば、更にこの傾向は助長される。第160図中の整理表に示した剥片総数2,720点も大きな数字であるが、これには大凡の数量で換えざるを得なかった細片も含まれており、実数は更に多いことも否めない。あくまで参考値という位置づけになろうか。また、礫石器は磨石や凹石などとして取り上げるに至らなかった相大な石器という意味を持たせており、49点という数値も参考程度であろう。

ここでは剥片・礫石器を除いた石器について、未掲載も含めた数量的な分析を主に行うこととする。時期については特に選別を行っていない。弥生時代とした磨製石鏃や砥石などもそのまま全体に含んでいる。なぜなら、土器の全体数でも現れているとおり、遺物の半分以上は縄文時代草創期～前期であり、この傾向は石器になると極めて顕著であると推測される。本来であれば、できるだけ異時代の遺物を選別すべきかもしれないが、あえて混ぜたままでも影響がないと考えている。ここでみる石器の傾向は、縄文時代草創期～前期の様相をほぼ示していよう。なお、データ処理上各調査区単位で表やグラフを作成しているが、17区以外は量的に分析に値しない。参考とするに止める。

実際の割合は表やグラフをみれば一目瞭然で説明を要しないが、磨石が約5割、石鏃類が次いで約2割、打斧とスクレイパーが1割弱となっている。こうした傾向は、縄文時代草創期～前期の様相として良いであろう。磨石の形態では、特殊形とした幅の狭い面を極端に使い込むものが47%を占めていて、石材は粗粒輝石安山岩が多い。石鏃は35点中、完形なもの25点の重量を計測した結果、2g以下がほとんどで、17外－29だけが5.4gで特異である。打斧は9点中、完形なもの5点の重量を計測した結果、全て150g以下であり、小型であることが確かめられた。特に際だった処理上としては、17区2号集石遺構の集石中から礫器1点が出土しており、石材は針鉄鉱で鉄分を多く含み1kg近い重さを持っている。

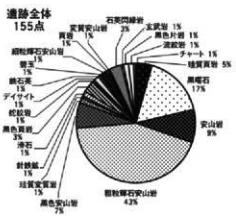
	有舌尖頭器	石鏃	磨製石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	異形石器	スタンプ	打斧	礫器	磨斧	小型打斧	磨石	凹石	石皿	砥石	不明	合計
16区合計																		0
17区合計	1	35	1	4	8	18	1	2	9	2		3	99	5	3	3	2	196
26区合計		2							6				2			1		11
27区合計		2									2		2					6
調査区全体	1	39	1	4	8	18	1	2	15	2	2	3	103	5	3	4	2	213

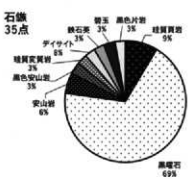
	剥片		礫石器	合計
	黒曜石	その他		
16区合計	2	1		3
17区合計	1897	705	49	2651
26区合計	5			5
27区合計	34	76		110
調査区全体	1938	782	49	2769

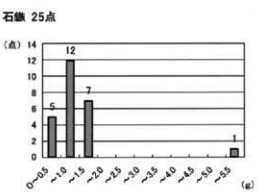


第160図　調査区別出土一覧

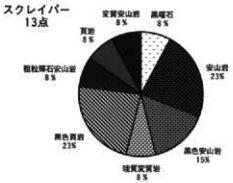
遺跡全体	珪質頁岩	黒曜石	安山岩	粗粒輝石安山岩	黒色安山岩	珪質変質岩	針鉄鉱	滑石	黒色頁岩	蛇紋岩	デイサイト	鉄石英	碧玉	細粒輝石安山岩	頁岩	変質安山岩	石英閃緑岩	玄武岩	黒色片岩	流紋岩	チャート	合計
有舌尖頭器			1																			1
石鏃	3	24	2		1	1					1	1	1						1			35
磨製石鏃																			1			1
ドリル	2		1																			3
石匙	2		1		3				1													7
スクレイパー		1	3		2	1			3					1	1	1						13
異形石器			1																			1
スタンプ			1	1																		2
打斧・小形打斧		1	2		5				1													9
磨製石斧										1											1	2
磨石・凹石			1	62							1						5	1				70
礫器							1							1								2
石皿				3																		3
砥石			1	1																2		4
不明								2														2
合計	7	26	14	67	11	2	1	2	5	1	2	1	1	2	1	1	5	1	2	2	1	155

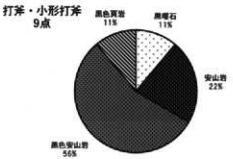


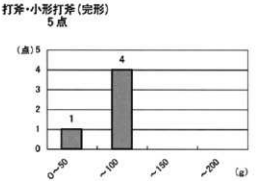


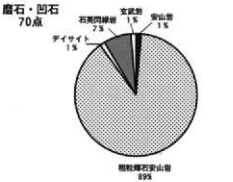


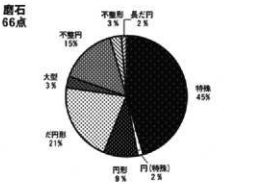
第161図　石器別石材割合図(1)











遺跡全体	磨　石
特　　殊	30
円(特殊)	1
円　　形	6
だ 円 形	14
大　　型	2
不 整 円	10
不 整 形	2
長 だ 円	1
合　　計	66

第162図　石器別石材割合図(２)

第5表　遺構・グリッド別石器出土数一覧(1)

17区	有舌尖頭器	石鏃	磨製石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	異形石器	剥片 黒曜石	剥片 その他	スタンプ	礫器	打斧	小型打斧	磨石	凹石	礫石器	石皿	砥石	不明	合計
1号住		3			1	1		1	36											42
2号住				1				58	3											62
3号住						1		7	6										1	15
6号住		3		1		1		26	109			1		9		3				153
1号墓穴		1																		1
1土									1											1
2土								1	1											2
8土								3												3
9土								2												2
17土								1												1
21土								1												1
31土									2											2
32土					1			2						2						5
33土														1						1
34土						1		1	3											5
38土								1												1
39土		1							1											2
43土								2	1											3
49土									1											1
50土																1				1
58土								1												1
64土									1											1
67土								2	6			1								9
68土						1		2	6											9
69土									1											1
70土								1												1
72土								1	1											2
73土														1						1
74土								15	1					1						17
75土	1	1						13	7					1						23
76土									1											1
77土								6												6
79土								1												1
82土								2	8											10
83土								1												1
84土								1												1
93土								1	3											4
94土								2	1											3
96土								2												2
97土								1												1
113土		1				1								1						3
114土						1			3					3						7
115土								1	7											8
159土								3												3
162土								7												7
168土						1		1	1											3
176土		1						1												2
177土								2												2
1廊									1											1
3廊								2	1											3
2穴土								1	1											2
5穴土								14												14
1集石								2	4											6
2集石											1			1		1				3
3集石		1						3	18											22
4集石								7	4					1						12
5倒木		1				1		26	45					2	1	2				78
9倒木					1			2	2					3		2				10
G－3グリッド								7	4						1	1				13
G－4グリッド		1				1		43	16					1		3	1			66
G－5グリッド								33	5					1						39
G－6グリッド								46	10	1		1				1		1		60
G－7グリッド								3	7			1								11
G－8グリッド								8												8
G－17グリッド									15											15
H－2グリッド								1												1
H－3グリッド								11	1											12
H－4グリッド								29	6					2		1				38
H－5グリッド		5						59	11					2		3				80

第6表　遺構・グリッド別石器出土数一覧(2)

17区	有茎尖頭器	石鏃	磨製石鏃	ドリル	石匙	スクレイパー	異形石器	剥片 黒曜石	剥片 その他	スタンプ	敲石器	打斧	小型打斧	磨石	凹石	礫石器	石皿	砥石	不明	合計
H－6グリッド		2				1		159	26					9	1	4			1	203
H－7グリッド		3		1				246	61			1		4		8				324
H－8グリッド		2	1				1	136	41		1	1	1	7	1			1		193
H－9グリッド					1			115	27			1		6		3				153
H－10グリッド		2			1			146	13			1		4	1	2				170
H－11グリッド						1		62	20					3		1				87
H－12グリッド								3						1						4
H－19グリッド								1												1
I－1グリッド					1	1														2
I－3グリッド								1												1
I－4グリッド								1												1
I－5グリッド						1		4									1			6
I－6グリッド								42									1			43
I－7グリッド		1						74	10					1		5		1		92
I－8グリッド		1				1		50	21							2				75
I－9グリッド					1	1		108	30			1		11		2				154
I－10グリッド		2		1		1		158	30	1			1	14		2				210
I－11グリッド		2			1			77	35				1	4		2				122
I－12グリッド		1						3						1						5
J－5グリッド								4												4
J－9グリッド								4												4
J－10グリッド							1	14	4											19
J－11グリッド								2	9											2
K－7グリッド								6	1											7
K－11グリッド								1												1
L－7グリッド									2											2
N－10グリッド									1											1
Y－21グリッド								1												1
表土								7	12					2						21
不明								2	9											11
合計	1	35	1	4	8	18	1	1897	705	2	2	9	3	99	5	49	3	3	2	2847

16区	剥片 黒曜石	剥片 その他	合計
W－23グリッド		1	1
X－24グリッド	1		1
合計	1	1	2

26区	石鏃	剥片 黒曜石	打斧	磨石	砥石	合計
15土			3			3
21土			1	1		2
V－7グリッド			1			1
表土	2	5	1	1	1	10
合計	2	5	6	2	1	16

27区	石鏃	剥片 黒曜石	剥片 その他	磨斧	磨石	合計
1号住		3	7			10
2号住	1	5	7	1		14
3号住			2			2
1土			3			3
17土		1				1
R－12グリッド		1	3		1	5
R－13グリッド			1			1
S－10グリッド		2	8			10
S－11グリッド		1	7			8
S－12グリッド		7	7	1	1	16
S－13グリッド		2	7			9
T－9グリッド	1					1
T－10グリッド		5	10			15
T－11グリッド		1	8			9
T－12グリッド		5	4			9
表土		1	2			3
合計	2	34	76	2	2	116

第５章　自然科学分析

第１節　立馬Ⅰ遺跡における火山灰分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された立馬Ⅰ遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった遺構は、立馬Ⅰ遺跡の30号土坑、29号土坑、40号土坑、上の段地点の４地点である。

２．土層の層序

（１）立馬Ⅰ遺跡30号土坑

立馬Ⅰ遺跡30号土坑の覆土は、下位より黄褐色土ブロック混じり暗褐色土（層厚12cm）、色調がとくに暗い暗褐色土（層厚９cm）、暗褐色土（層厚15cm）、色調がとくに暗い暗褐色土（層厚32cm）、暗褐色土（層厚18cm）、黄色軽石を含む暗褐色土（層厚46cm，軽石の最大径15mm）、成層したテフラ層（層厚3.4cm）、灰褐色土（層厚６cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚３cm）、粗粒の軽石を含む黄灰色土ブロック混じり灰褐色土（層厚６cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚６cm）からなる（図）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より褐色軽石を含む黄色砂質細粒火山灰層（層厚0.4cm，軽石の最大径18mm，石質岩片の最大径９mm）、橙褐色粗粒火山灰層（層厚１cm）、成層した黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚２cm）からなる。このテフラ層については、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される可能性が高い。一方、その上位の灰色砂質細粒火山灰層については、層位や層相から1128（大治３）年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ（As-Kk，早田，1991，1995）に同定される可能性が高い。

（２）立馬Ⅰ遺跡29号土坑

29号土坑の覆土では、部分的に、下位より暗灰褐色土（層厚10cm以上）、褐色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層（層厚６cm，軽石の最大径８mm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚12cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚３cm）、黄灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚６cm）が認められる（図）。これらのうち、褐色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層と灰色砂質細粒火山灰層については、層相から順にAs-BとAs-Kkに同定される可能性が高い。

（３）立馬Ⅰ遺跡40号土坑

40号土坑の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚13cm）、黒褐色土（層厚19cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層

厚13cm)、色調がとくに暗い暗灰褐色土(層厚31cm)、暗灰褐色土(層厚31cm)、褐色土(層厚13cm)、黒灰褐色土(層厚23cm)、灰褐色表土(層厚64cm)からなる（図)。

（4）立馬Ⅰ遺跡上の段地点

上の段地点では、下位より角礫混じり灰褐色土（層厚30cm以上，礫の最大径117mm)、灰褐色土混じり角礫層(層厚23cm)、黒灰褐色土(層厚21cm)、色調がより暗い暗灰褐色土(層厚40cm)、角礫混じり暗灰褐色土(層厚31cm)、色調がより暗い暗灰褐色土(層厚23cm，弥生時代の土器を含む)が認められる（図)。

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、立馬Ⅰ遺跡の30号土坑、29号土坑、40号土坑、上の段地点において採取された試料のうち、37点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

1）試料10gを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。30号土坑の試料2および試料3には、細粒の淡褐色軽石（最大径1.3mm）がそれぞれ少量ずつ含まれている。また29号土坑の試料1にも細粒の淡褐色軽石（最大径1.3mm）が少量含まれており、これらのテフラは互いによく似た軽石を含んでいることがわかる。

40号土坑では、As-YPkに由来すると考えられる発泡の良い黄白色軽石（最大径7.9mm）が、いずれの試料からも検出される。そのほか、試料31から25にかけて、また試料17では、細粒の灰色軽石（最大径2.3mm）が少量ずつ含まれている。火山ガラスとしては、いずれの試料にも白色や無色透明の軽石型ガラスが含まれている。試料31、17、9～5、1には、灰色の軽石型ガラスも少量認められる。

上の段地点では、試料29にAs-YPkに由来すると考えられる発泡の良い黄白色軽石（最大径3.8mm）が、比較的多く含まれている。そのほか、試料31や試料27さらに試料7には白色軽石（最大径1.3mm）、試料23や試料17には灰白色軽石（最大径2.5mm)、試料13、11、5には灰色軽石（最大径2.2mm）が少量ずつ含まれている。火山ガラスとしては、いずれの試料にも白色や無色透明の軽石型ガラスが含まれている。試料13、11、7、5には、灰色の軽石型ガラスも少量認められる。これらの中では、試料11で比較的多くの火山ガラスが認められる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

テフラ粒子の起源を明らかにするために、立馬Ⅰ遺跡の40号土坑の試料31、9、1、上の段地点の試料29、11の合計5点について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率測定を行った。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。40号土坑の試料31に含まれる火山ガラス（ｎ）の屈折率は、1.501－1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれており、斜方輝石（γ）の屈折率は1.706－1.710である。試料９に含まれる火山ガラス（ｎ）の屈折率は、1.501－1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706－1.711である。試料１に含まれる火山ガラス（ｎ）の屈折率は、1.505－1.515である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれており、斜方輝石（γ）の屈折率は、1.705－1.709である。

上の段地点の試料11には、重鉱物として斜方輝石のほか、角閃石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n_2）の屈折率は、各々1.706－1.710と1.672－1.681である。また試料11にも、重鉱物として斜方輝石のほか、角閃石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n_2）の屈折率は、各々1.706－1.710と1.670－1.675である。

５．考察－指標テフラとの同定

立馬Ⅰ遺跡の30号土坑および29号土坑では、覆土中にAs－BやAs－Kkの可能性が高いテフラ層が認められたことから、その層位はAs－Bより下位にあると考えられる。また、40号土坑の試料３１と試料９に含まれるテフラ粒子の多くは、軽石の岩相や火山ガラスの屈折率、重鉱物の組合せや斜方輝石の屈折率などから、As－YPkに由来すると考えられる。したがって、40号土坑の層位はAs－YPkより上位にあると考えられる。また覆土の分析で、As－BやAs－Kkに由来するテフラ粒子が検出されなかったことから、少なくともAs－Bより古い可能性が示唆される。なお、40号土坑の試料１に含まれる火山ガラスについて、その屈折率が一致するテフラはこれまで知られていない。しいて挙げるとすれば、約4,000～5,000年前[*1]に浅間火山から噴出した浅間Ｄ軽石（As－D，荒牧，1968，新井，1979，町田・新井，1992，早田，1996）であるが、同定精度は低い。また４世紀中葉[*2]に浅間火山から噴出したと考えられる浅間Ｃ軽石（As－C，荒牧，１968，新井，1979）起源のテフラ粒子も検出されなかった。

上の段地点では、試料13付近に、若干ながら灰色の軽石で特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が考えられた。同じ軽石が認められる試料11に含まれる斜方輝石の屈折率からは、As－Dまたは約5,400年前[*1]に浅間火山から噴出した浅間六合軽石（As－Kn，早田，1991，早田，1996）あるいはそれに関係するテフラの可能性が考えられる。なお、比較的多くの火山ガラスが含まれている試料11には、角閃石が含まれている。この角閃石については、その屈折率から約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間萩生軽石（As－Hg，早田，1995，1996）や、すぐ後に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石（As－Sr，町田ほか，1984，町田・新井，1992）に由来すると思われる。しかしながら、最近では、群馬県域北部の三国山脈において、約5,500～6,000年前[*1]に妙高火山から噴出した妙高赤倉テフラ（My－A，早津・新井，1980，早津，1985，町田・新井，1992）あるいは、約4,000～4,500年前[*1]に妙高火山から噴出した妙高大田切川テフラ（My－Ot，早田，1995，1996）が検出されている（苟谷ほか，1998）。試料29に含まれる角閃石より若干屈折率が高いものが認められることから、ここではこれらのテフラが混入している可能性も考えておきたい。

今後、同様のほかの土坑あるいは、より土壌の保存状態が良い地点において、テフラに関する分析が行われるとともに、土坑の覆土基底部の放射性炭素（^{14}C）年代測定が行われると良いと思われる。

6．まとめ

立馬Ⅰ遺跡において地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、浅間草津黄色軽石(As−YPk，約1.3～1.4万年前*1)、浅間六合軽石(As−Kn，約5,400年前)または浅間D軽石(As−D，約4,000～5,000年前*1)、浅間Bテフラ(As−B，1108年)、浅間粕川テフラ(As−Kk，1128年)などのテフラ層あるいはテフラ粒子を検出することができた。30号土坑および29号土坑の層位は、As−Bより下位にあると考えられる。

*1　放射性炭素(^{14}C)年代.

*2　現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば，若狭，2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀層年，群馬大学紀要自然科学編，10，p.1－79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254−269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41−52.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138−148.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.

早津賢二（1985）妙高火山群－その地質と活動史．第一法規，344p.

早津賢二・新井房夫（1980）妙高火山群テフラ地域の第四紀テフラ層－示標テフラ層の記載および火山活動との関係．地質雑，86，p.243−263.

苅谷愛彦・佐々木明彦・新井房夫（1988）三国山地平標山に分布する第四紀末期のテフラ層．地学雑，107，p.92−103.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス，東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865−928.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69−70.

早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2－7.

早田　勉（1995）テフラからさぐる浅間山の活動史．御代田町誌自然編，p.22−43.

早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの識別－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256−267.

若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの黒博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41−43.

1．テフラ検出分析結果

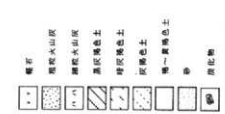
遺跡	地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
			量	色調	最大径	量	形態	色調
立馬Ⅰ	30号土坑	2	+	淡褐	1.0	+	pm	淡褐
		3	+	淡褐	1.3	+	pm	淡褐
立馬Ⅰ	29号土坑	1	+	淡褐	1.3	+	pm	淡褐
立馬Ⅰ	40号土坑	1	++	黄白	3.1	+	pm	白,透明,灰
		3	++	黄白	3.9	+	pm	白,透明
		5	+	黄白	2.6	+	pm	白,透明,灰
		7	+	黄白	1.4	+	pm	白,透明,灰
		9	+	黄灰	2.2	+	pm	白,透明,灰
		11	+	黄白	2.1	+	pm	白,透明
		13	+	黄白	2.0	+	pm	白,透明
		15	+	黄白	3.0	+	pm	白,透明
		17	+	黄白>灰	1.8, 1.7	+	pm	白,透明,灰
		19	+	黄白	3.6	+	pm	白,透明
		21	+	黄白	1.7	+	pm	白,透明
		23	+	黄白	2.2	+	pm	白,透明
		25	+	黄白,灰	2.2, 1.8	+	pm	白,透明
		27	+	黄白,灰	7.9, 1.9	+	pm	白,透明
		29	+	黄白,灰	2.2, 2.3	+	pm	白,透明
		31	+	黄白,灰	1.8, 1.4	+	pm	白,透明,灰
立馬Ⅰ	上の段	1	−	−	−	+	pm	白,透明
		1'	−	−	−	+	pm	白,透明
		3	−	−	−	+	pm	白,透明
		5	+	灰	1.1	+	pm	白,透明,灰
		7	+	灰>白	1.2	+	pm	白,透明,灰
		9	−	−	−	+	pm	白,透明
		11	+	灰	2.2	++	pm	白,透明,灰
		13	+	灰	0.8	+	pm	白,透明,灰
		15	−	−	−	+	pm	白,透明
		17	+	灰白	2.5	+	pm	白,透明
		19	−	−	−	+	pm	白,透明
		21	−	−	−	+	pm	白,透明
		23	+	灰白	1.1	+	pm	白,透明
		25	−	−	−	+	pm	白,透明
		27	+	白	1.0	+	pm	白,透明
		29	++	黄白	3.8	+	pm	白,透明
		31	+	白	1.3	+	pm	白,透明
		33	−	−	−	+	pm	白,透明

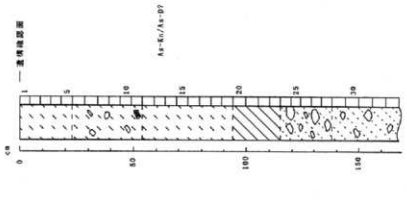
++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，−：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

2．屈折率測定結果

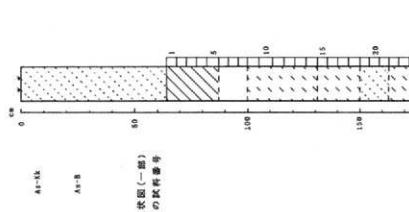
遺跡	地点	試料	火山ガラス(n)	組成	斜方輝石(γ)	角閃石(n_2)
立馬Ⅰ	40号土坑	1	1.505−1.515	opx>cpx	1.705−1.709	−
立馬Ⅰ	40号土坑	9	1.501−1.504	opx>cpx,(ho)	1.706−1.711	−
立馬Ⅰ	40号土坑	31	1.501−1.504	opx>cpx	1.706−1.710	−
立馬Ⅰ	上の段	11	−	opx>ho,cpx	1.706−1.710	1.672−1.681
立馬Ⅰ	上の段	29	−	opx>ho,cpx	1.706−1.710	1.670−1.675

屈折率の測定は，温度一定型測定法（新井，1972，1993）による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．（ ）は，量が少ないことを示す．

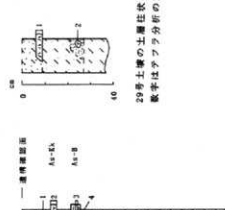




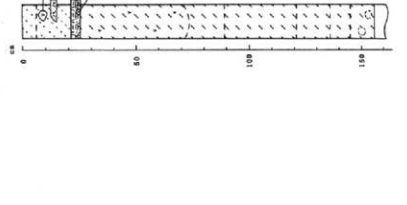
上の段地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



40号土壌の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



29号土壌の土層柱状図（一部）
数字はテフラ分析の試料番号



30号土壌の土層柱状図黒色土
数字はテフラ分析の試料番号

第２節　立馬Ⅰ遺跡における植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、上の段地点から採取された計６点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。ススキ属（ススキ）の換算係数は1.24、ネザサ節は0.48である。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

（２）植物珪酸体の検出状況

角礫混じり灰褐色土（試料５）から弥生時代の土器を含む暗灰褐色土（試料１）までの層準について分析を行った。その結果、角礫混じり灰褐色土（試料５）と灰褐色土混じり角礫層（試料４'）では、キビ族型や棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。黒灰褐色土（試料４）から弥生時代の土器を含む暗灰褐色土（試料１）にかけては、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族Ａなどが検出されたが、いずれも少量である。

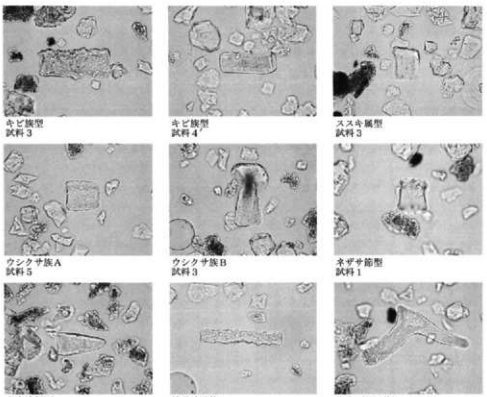
５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

角礫混じり灰褐色土および灰褐色土混じり角礫層の堆積当時は、キビ族などは見られるものの、イネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。黒灰褐色土層から弥生時代の土器を含む暗灰褐色土層にかけては、少量ながらススキ属やチガヤ属、キビ族などが生育するイネ科植生であったと考えられ、比較的乾燥した環境であったと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社．p.189−213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15−29.



植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　50μm

検出密度（単位：×100個/g）

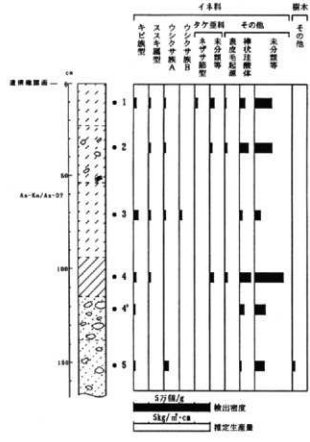
分類群	学名	地点・試料	上の段地点					
			1	2	3	4	4'	5
イネ科	Gramineae (Grasses)							
キビ族型	Paniceae type		13		28	14	7	7
ススキ属型	*Miscanthus* type		6	7	7	7		
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		6	7	7			27
ウシクサ族B	Andropogoneae B type				14			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		19					
未分類等	Others		26	13		22		
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin		6	13		14		
棒状珪酸体	Rod-shaped		32	54	14	72	26	7
未分類等	Others		110	114	36	188	66	61
樹木起源	Arboreal							
その他	Others							14
植物珪酸体総数	Total		220	208	107	318	99	115

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

ススキ属型	*Miscanthus* type	0.08	0.08	0.09	0.09
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.09			

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	100
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	



第3節　立馬Ⅰ遺跡における花粉分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

上の段地点の黒灰褐色土である。これは、植物珪酸体分析の試料4と同一試料である。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉2、草本花粉4、シダ植物胞子1形態の計7である。分析結果を表に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕
モミ属、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕
カヤツリグサ科、ソバ属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

分析の結果、樹木花粉ではモミ属やコナラ属コナラ亜属、草本花粉ではカヤツリグサ科、ソバ属、キク亜

科、ヨモギ属が検出されたが、いずれも少量である。

５．花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、上の段地点の黒灰褐色土層の堆積当時は、キク亜科などが生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはコナラ属コナラ亜属などの森林が分布していたと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

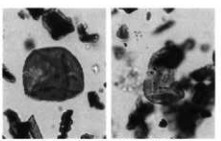
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82−110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248−262.

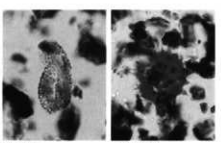
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

分類群		上の段
学名	和名	黒灰褐色土
Arboreal pollen	樹木花粉	
Abies	モミ属	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2
Fagopyrum	ソバ属	1
Asteroideae	キク亜科	12
Artemisia	ヨモギ属	1
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	1
Arboreal pollen	樹木花粉	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	16
Total pollen	花粉総数	20
Unknown pollen	未同定花粉	2
Fern spore	シダ植物胞子	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)
	明らかな消化残渣	(−)



1 コナラ属コナラ亜属　2 カヤツリグサ科



3 ソバ属　4 キク亜科

10μm

第7表　土坑（ピット群）計測表

ピット No.	位置	規模(cm) 長径	短径	深さ	ピット No.	位置	規模(cm) 長径	短径	深さ	ピット No.	位置	規模(cm) 長径	短径	深さ
16区														
112土	X－23	29	25	21	114土	W－23	60	42	26	117土	Y－23	24	24	9
113土	X－23	28	25	23	115土	W－23	37	37	22	120土	Y－21	22	18	26
17区														
1土	H－10	32	30	46	52土	H－10	25以上	9以上	41	136土	B－20	21	18	26
2土	H－9	38	35	45	53土	H－9	57	40	62	137土	A－21	28	25	48
3土	I－10	49	48	24	54土	I－9	40	39	59	138土	A－21	32	29	26
4土	I－10	36	22以上	26	57土	H－9	26	24	37	139土	A－22	23	20	28
5土	I－10	44	34	49	60土	H－3	23	17	28	140土	B－21	20	16	26
6土	I－10	43	31	21	61土	H－3	19	16	32	141土	B－20	22	18	12
7土	H－9	35	25	29	62土	H－3	25	25	22	142土	C－20	40	36	68
10土	I－10	25	19	20	65土	H－7	19	17	30	143土	A－22	47	41	49
11土	H－9	38以上	11以上	26	70土	H－9	22	20	11	144土	C－21	19	17	29
12土	H－9	43以上	27以上	23	71土	H－9	26	26	33	145土	C－20	25	25	48
14土	H－9	29	26	18	73土	H－10	32	18以上	24	146土	C－20	20	13	27
15土	H－9	32	28以上	19	73b土	H－10	32	23	22	147土	C－20	22	22	31
16土	H－8	35	27	19	81土	I－10	35	33	23	148土	B－20	20	19	26
17土	H－9	33	25	54	84土	H－10	29	23	42	149土	B－20	20	19	12
18土	I－8	38	34	71	97土	I－7	46	45	53	150土	C－20	20	20	38
19土	I－8	30	27	17	99土	H－7	35	28	20	152土	B－20	17	16	24
20土	H－8	38	29	27	106土	A－20	25	20	19	153土	B－21	17	13	11
21土	H－7	32	25	22	121土	C－21	31	28	70	154土	C－20	68	57	28
22土	I－8	45	42	88	122土	B－21	30	24	44	155土	B－19	67以上	60以上	16
23土	H－7	27	23	18	123土	C－21	50	48	29	201土	J－8	27	22	22
24土	I－5	31	30	37	127土	B－21	20	19	16	202土	J－8	28	24	29
25土	H－4	40	40	22	128土	A－21	25	21	52	203土	J－8	30	30	17
26土	H－3	52以上	45以上	102	129土	A－20	26	26	41	204土	J－8	35	28	28
27土	H－9	36	30	35	130土	A－21	26	26	28	205土	I－4	28	20	25
44土	H－2	44	20	25	131土	A－21	24	18	24	207土	I－3	52	46	36
47土	H－10	36	35	28	132土	A－21	27	24	44	208土	I－3	28	16	40
48土	H－4	30	22	77	134土	A－22	29	28	23					
50土	H－9	72	40	34	135土	C－20	31	30	34					
27区														
3土	R－13	29	28	14	16土	Q－13	45	45	35	23土	Q－12	34	(19)	8
4土	Q－13	72	54	51	18土	R－13	60	48	24					
5土	R－13	30	27	22	22土	Q－12	44	36	21					

第8表　出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
17区6号住居跡					
1	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高2.2	①小礫微②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第1類a種
2	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高3.5	①小礫微②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第1類a種
3	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高2.9	①小礫微②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第1類a種
4	縄文土器 深鉢	－16 胴部片	残存高1.2	①小礫微②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第1類a種
5	縄文土器 深鉢	＋13、39土、G・H－6、H－7、I－9、 胴部片	残存高16.2	①小礫含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第2類
6	縄文土器 深鉢	＋61 I－9 口縁部片	残存高6.5	①細砂含②やや良 ③にぶい黄褐	第Ⅱ群第2類
7	縄文土器 深鉢	－16 胴部片	残存高3.1	①細砂多②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第4類a種

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
8	縄文土器 深鉢	－16、H－8、I－9 胴部片	残存高 3.9	①金雲母多②良好 ③暗赤褐	第Ⅱ群第4類e種
9	縄文土器 深鉢	－16 胴部片	残存高 4.6	①細砂多②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第4類e種
10	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 5.4	①細砂多②良好③ 暗褐	第Ⅱ群第4類e種
11	縄文土器 深鉢	－11、9 倒木 胴部片	残存高 4.6	①細砂多②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第4類e種
12	縄文土器 深鉢	9 倒木 胴部片	残存高 8.0	①細砂多②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第4類e種
13	縄文土器 深鉢	9 倒木 胴部片	残存高 4.9	①細砂多②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第4類e種
14	縄文土器 深鉢	－35 胴部片	残存高 2.4	①小礫多③良好③ 黒褐	第Ⅱ群第4類e種
15	縄文土器 深鉢	－6、I－9 口縁～胴部片	残存高 8.7	①小礫・金雲母含 ②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
16	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 4.7	①小礫多②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第4類d種
17	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	残存高 4.2	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第4類d種
18	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 2.9	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
19	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 3.2	①細砂微②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第4類d種
20	縄文土器 深鉢	－23 口縁部片	残存高 3.7	①小礫多②良好③ 橙	第Ⅱ群第4類d種
21	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 4.0	①小礫多②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第4類e種
22	縄文土器 深鉢	3 集、H－7 胴部片	残存高 3.5	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類e種
23	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 5.2	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類e種
24	縄文土器 深鉢	113土、3 集 胴部片	残存高 4.3	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類e種
25	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 3.4	①小礫含②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第9類a種
26	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 5.9	①小礫含②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第9類a種
27	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	残存高 5.6	①小礫含②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第9類a種
28	縄文土器 深鉢	－11 胴部片	残存高 3.7	①小礫含②良好③ にぶい黄橙	第Ⅱ群第9類a種
29	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	残存高 3.5	①細砂多②やや良 ②にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
30	縄文土器 深鉢	－7 胴部片	残存高 5.8	①小礫含②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第9類a種
31	縄文土器 深鉢	床直、29土 胴部片	残存高 9.4	①白色岩片含②良 好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類a種
32	縄文土器 深鉢	＋6 胴部片	残存高 2.7	①小礫含②良好③ 灰褐	第Ⅱ群第9類a種
33	縄文土器 深鉢	－15 底部片	残存高 2.2	①細砂多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類
34	石器 石鏃	－22 完形	長 2.4　幅(1.4) 厚 0.7 重 1.1g	珪質頁岩	
35	石器 石鏃	－14 完形	長 2.2　幅 1.5 厚 0.3 重 0.6g	黒曜石	
36	石器 石鏃	－22 2/3	長 2.8　幅(1.5) 厚 0.5 重 1.1g	珪質頁岩	基部1端欠損。

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
37	石器 ドリル	ほぼ完形	長 4.1　幅 2.2 厚 0.5 重 3.8 g	安山岩	
38	石器 磨石	−10 完形	長 13.2　幅 9.7 厚 5.4 重 915.2 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面磨り使用。側部は敲き使用。
39	石器 打製石斧	床直 完形	長 10.5　幅5.7 厚 1.3 重 76.8 g	黒色安山岩	
40	石器 スクレイパー	−15 完形	長 8.8　幅4.1 厚 1.5 重 57.2 g	安山岩	
41	石器 磨石	+12 完形	長 8.8　幅5.4 厚 6.1 重 443 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・両側面平滑に磨り使用。裏面上端部を敲き使用により欠損。
42	石器 磨石	−6 2/3	長(8.5)　幅4.3 厚 5.0 重 200.7 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・両側面は平滑に使用するが顕著ではなく、稜部は丸みあり。欠損は抉理面で大きく割れる。
43	石器 磨石	床直 2/3	長(10.8)　幅5.0 厚 7.1 重 487.4 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・両側面顕著に磨るため、稜部は尖りぎみ。下部欠損後も使用されたらしく、端部が脆れる。
44	石器 磨石	床直 完形	長 11.9　幅8.7 厚 5.5 重 633.7 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面は顕著に磨り使用。
45	石器 磨石	−8 完形	長 9.4　幅10.9 厚 5.0 重 822.5 g	粗粒輝石安山岩	表面１面を顕著に磨る。
46	石器 磨石	−10 ほぼ完形	長 12.3　幅9.1 厚 4.4 重 617.4 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。右側面は元来平滑に使用されたが、最終的に敲き使用され大きく欠損。表面は丸みを持って顕著に磨り使用。
47	石器 磨石	床直 完形	長 9.4　幅9.9 厚 5.4 重 641.7 g	粗粒輝石安山岩	表面を磨り使用顕著で、裏面もやや使用。側部も細かく敲き使用。
48	石器 磨石	−9 1/2	長(6.5)　幅10.2 厚 4.5 重 376.7 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面は顕著に磨り使用。被熱のため顕著にひび割れる。
17区７号住居跡					
1	縄文土器 深鉢	H−6 口縁部片	残存高 3.5	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅰ群３類ａ種
2	縄文土器 深鉢	H−6 口縁部片	残存高 4.3	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅰ群３類ａ種
3	縄文土器 深鉢	+24 口縁部片	残存高 6.6	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅰ群３類ａ種
4	縄文土器 深鉢	H−6 口縁部片	残存高 2.5	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅰ群３類ａ種
5	縄文土器 深鉢	H−6 口縁部片	残存高 3.0	①細砂微②良好③黒	第Ⅰ群３類ａ種
6	縄文土器 深鉢	+16、39土、H−5、H−8 口縁〜胴部1/5	残存高 12.9	①細砂含②良好③黒褐	第Ⅰ群３類ａ種
27区４号住居跡					
1	縄文土器 甕	床直、カマド ほぼ完形	長 38.2　底 10.1 高 26.7	①細砂多②やや良好③にぶい橙	内外面　磨きに近い横位ナデ。口縁部浮線文上下の凹みを赤彩。底部　網代痕。第Ⅸ群第１類
2	縄文土器 甕	−17、T−12 頸部片	残存高 2.9	①小礫多②良好③橙	浮線文施す。内面は幅５mmの沈線後、横位磨きに近いナデ。第Ⅸ群第１か２類
3	縄文土器 甕	−15、T−12 頸部	残存高 3.0	①小礫多②良好③橙	浮線文施す。内面横位ナデ。第Ⅸ群第１か２類
4	縄文土器 甕	床直 頸部片	残存高 2.0	①小礫多②良好③橙	浮線文施す。第Ⅸ群第１か２類
5	縄文土器 甕	−11、T−12 頸部片	残存高 1.3	①小礫多②良好③灰褐	浮線文施す。第Ⅸ群第１か２類

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①粘土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
6	縄文土器 甕	−14、S−12 頸部片	残存高 2.1	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	浮線文施す。第Ⅸ群第1か2類
7	縄文土器 甕	T−12 頸部片	残存高 3.2	①細砂含③良好③ 橙	口縁部内外面磨きに近いナデ、胴部斜位条痕施す。 第Ⅸ群
8	縄文土器 甕	T−12 脚部片	台 13.0 残存高 3.6	①白色粒子含③良 好③にぶい褐	幅3mmの深い沈線2本を施文し、赤彩を施す。第Ⅸ群第3類
9	縄文土器 甕	+18 胴部片	残存高 3.5	①細砂含②やや良 ③橙	横位条痕施す。第Ⅺ〜Ⅻ群
17区2号竪穴状遺構					
1	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 3.5	①細砂含③良好③ にぶい赤褐	多条沈線と刺突を施す。第Ⅱ群第4類c種
17区67号土坑					
1	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 1.5	①小礫含②やや良 ③橙	尖頭状口唇。口唇直下に円形刺突をめぐらし、多条沈線を施す。第Ⅱ群第4類b種
17区68号土坑					
1	縄文土器 深鉢	H−7 口縁部片	残存高 2.9	①小礫含②やや良 ③橙	67土1と同一個体。第Ⅱ群第4類b種
2	石器 スクレイパー	ほぼ完形	長(7.8) 幅(3.6)　厚 0.8 重24.8g	珪質変質岩	
17区69号土坑					
1	縄文土器 深鉢	I−10 胴部片	残存高 3.9	①細砂多②良好③ 暗赤褐	多条沈線と刺突を施す。第Ⅱ群第4類c種
2	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 4.1	①細砂多②良好③ 暗赤褐	69土1と同一個体。第Ⅱ群第4類c種
17区74号土坑					
1	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 26.1	①細砂含②良好③ 極暗赤褐	地文横位複節斜縄文ＬＲＬ施文後、幅10mmの半裁竹管によるコンパス文施す。第Ⅲ群第2類b種
2	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 17.7	①小礫含②良好③ 明赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、幅7mmの半裁竹管による平行沈線施す。第Ⅲ群第2類a種
3	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 5.9 底 8.2	①細砂含②やや良 ③にぶい黄褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第1類
4	縄文土器 深鉢	底部片	残存高 6.8	①細砂微②軟③橙	斜位縄文ＲＬ施文。第Ⅲ群第2類d種
5	石器 磨石	完形	長 9.3　幅 11.8 厚 9.2 重 754.8g	粗粒輝石安山岩	特殊形。上面右は平坦だが荒れる。表裏両面平滑に磨り使用顕著。側面は敲き使用顕著。
17区94号土坑					
1	縄文土器 深鉢	口縁〜胴部片	残存高 30.9	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	側面環付単節縄文ＲＬ横位施文。第Ⅲ群第2類e種
17区96号土坑					
1	縄文土器 深鉢	6住 胴部片	残存高 2.8	①白色岩片多②良 好③灰褐	第Ⅱ群第4類e種
27区17号土坑					
1	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 15.2	①細砂多②良好③ にぶい褐	外面胴部横位磨き、胴部斜位ナデ、内面横位ナデ。第Ⅸ群第1類
2	弥生土器 甕	口縁部片	残存高 3.1	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	口唇部篦状工具による刻み施す。第Ⅸ群
17区1号集石					
1	縄文土器 深鉢	H−7 口縁〜胴部片	残存高 6.1	①小礫多②良好③ 明赤褐	やや内削ぎの口唇部形状。口唇直下に刺突列。横位多条沈線と梯衝状刺突列を施す。第Ⅱ群第4類d種。
2	縄文土器 深鉢	H−7 胴部片	残存高 5.4	①小礫多②良好③ 明赤褐	1集1と同一個体。第Ⅱ群第4類d種
3	縄文土器 深鉢	H−7 胴部片	残存高 4.7	①小礫多②良好③ 灰褐	1集1と同一個体。第Ⅱ群第4類d種
4	縄文土器 深鉢	H−7 胴部片	残存高 4.5	①小礫含③良好③ 赤褐	1集1と同一個体。第Ⅱ群第4類d種
5	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 3.3	①小礫多②良好③ 黒褐	多条沈線と刺突を施す。第Ⅱ群第4類c種
6	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 4.3	①小礫多③良好③ にぶい赤褐	1集5と同一個体。第Ⅱ群第4類c種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
7	縄文土器 深鉢	G－4、H－7 胴部片	残存高 4.8	①小礫含②堅③にぶい赤褐	多条沈線と刺突を施す。第Ⅱ群第4類c種
8	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 3.3	①小礫・金雲母多②良好③暗赤褐	外反する口縁部。無節撚糸紋を縦位施紋する。第Ⅱ群第5類a種
17区2号集石					
1	石器 磨石	完形	長 9.7　幅 8.5 厚 5.5 重 619.6g	粗粒輝石安山岩	表面の磨り面使用は非常に平滑。側部は顕著に荒れる。
2	石器 礫器	ほぼ完形	長 12.7 幅 10.5　厚 5.3 重 966.5g	針鉄鉱	表面に磁力あり。鉄分は吸着か。
17区3号集石					
1	縄文土器 深鉢	34土、94土、95土、68土、G・H－7、H－8	口 (44.6)	①小礫含②良好③明褐	丸頭状でやや肥厚する口唇部。無節紋Rを縦位施紋する。口唇研磨。第Ⅰ群第3類a種
2	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 3.1	①白色粒子含③良好③灰褐	複数条の沈線により菱形状のモチーフを描く。第Ⅱ群第4類e種
3	石器 石鏃	完形	長 1.2　幅 1.2 厚 0.3 重 0.3g	黒曜石	
17区4号集石					
1	縄文土器 深鉢	頸～胴1/2	残存高 24.9	①細砂多②脆③赤褐	地文横位縄文LR施文後、竹管による沈線、刺突文列を施す。第Ⅳ群第1類a種
2	石器 磨石	ほぼ完形	長 13.1　幅 9.3 厚 4.2 重 776.9g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表裏・左右側面は顕著に磨り使用。
17区3号住居跡					
1	弥生土器 甕	口縁部片	残存高 2.7	①細砂多②良好③にぶい橙	口唇部　横位縄文RL施文。頸部櫛歯状工具で波状文施す。第XII群b種
2	弥生土器 甕	口縁～頸部片	残存高 3.7	①細砂多②良好③灰褐	口唇部　横位縄文LR施文。頸部4条1単位の櫛歯状工具で一連止めの擬状文施す。第XII群b種
3	弥生土器 甕	＋7 口縁～胴部片	残存高 7.4	①細砂含②良好③黒褐	口唇部　横位縄文LR施文。胴部斜位ナデ整形後、4条1単位の櫛歯状工具で波状文施す。第XII群b種
4	弥生土器 甕	＋6 頸部片	残存高 3.3	①小礫含②良好③黒褐	6条1単位の櫛歯状工具で、一連止めの擬状文、波状文施す。第XII群b種
5	弥生土器 甕	胴部片	残存高 4.1	①細砂多②良好③灰褐	6条1単位の櫛歯状工具で、斜線文施す。第XII群b種
6	弥生土器 甕	＋29 胴部片	残存高 3.8	①細砂多②良好③明赤褐	外面　縦位ナデ　内面　横位ナデ。第XII群c種
7	弥生土器 甕	胴部片	残存高 4.2	①細砂多②良好③極暗赤褐	4条1単位の櫛歯状工具で、波状文、斜線文施す。第XII群b種
8	弥生土器 甕	胴部片	残存高 4.3	①細砂多②良好③黒褐	6条1単位の櫛歯状工具で、斜格子文施す。第XII群b種
9	弥生土器 壺	＋8、G－2 胴部片	残存高 11.7	①細砂多②良好③にぶい褐	外面　刷毛目状工具による横位ナデ。　内面　横位ナデ。第XII群c種
10	石器 不明	＋15	長 2.6　幅 1.2 厚 0.3 重 0.7g	滑石	左右稜部はやや尖る。未製品か。
11	石器 スクレイパー	完形	長 4.7　幅 3.9 厚 1.1 重 21.8g	黒色頁岩	
17区2号住居跡					
1	弥生土器 壺	床直、T－12 肩部片	残存高 12.5	①白色岩片含②良好③黒褐	無節縄文Lを短く斜位に施文。第XII群b種
2	弥生土器 甕	＋8 底部片	残存高 1.5	①白色岩片多②良好③橙	底若網代痕。第XI～XII群
3	弥生土器 甕	＋11 底部片	残存高 1.7	①白色粒子多②良好③橙	無文。第XI～XII群
4	石器 石鏃	－8 完形	長 1.7　幅 1.2 厚 0.4 重 0.5g	黒曜石	基部1端欠損。

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
5	石器 磨製石斧	床直 ほぼ完形	長(5.3) 幅 3.6 厚 1.1 重 28.3 g	蛇紋岩	基部わずか欠損。
17区58号土坑					
1	弥生土器 壺	1/2	残存高 19.1 底(7.4)	①細砂多②良好③ 明赤褐	刷毛目状工具による横位ナデ後、縦位磨き、胴部中位は横位磨き。第XII群 c 種
2	弥生土器 甕?	底部片	残存高 1.9	①細砂多②良好③ 明赤褐	無文。水平に欠ける。第XII群 d 種
3	弥生土器 甕	ほぼ完形	口 22.5 底 9.2 高 33.5	①細砂多②良好③ 橙	口唇部 地文横位縄文RL施文。6条1単位の櫛歯状工具で、一連止めの櫛状文、斜格子文施す。第XII群 b 種
17区72号土坑					
1	弥生土器 壺	3 住 胴部片	残存高 12.7	①小礫含②やや良好③にぶい黄橙	刷毛目状工具により頸部から胴部へ斜位、横位ナデ整形。内面 横位ナデ。第XII群 c 種
2	弥生土器 壺	胴部片	残存高 6.4	①小礫含②軟③にぶい褐	横位ナデ。第XII群 c 種
3	弥生土器 壺	胴下部片	残存高 3.2 底 8.2	①小礫含②良好③ 極暗赤褐	外面縦位ナデ。内面横位ナデ。第XII群 c 種
4	弥生土器 甕	頸～底部	残存高 21.1	①細砂多②良好③ 暗褐	刷毛目状工具により頸部から胴部へ斜位ナデ整形。内面 斜位ナデ。第XII群 c 種
27区1号土坑					
1	弥生土器 甕	胴～底部片	底 10.2 残存高 13.4	①小礫含②良好③ にぶい橙	5条1単位の櫛歯状工具で、斜線文を施す。内面横位ナデ。底部木葉痕。第XII群 b 種
17区114号土坑					
1	石器 磨石	完形	長 10.6 幅 8.4 厚 3.8 重 509 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。石個面は平面だが荒れる。表裏両面顕著に磨り使用。側面は全て敲き使用により荒れる。
2	石器 磨石	完形	長 29.7 幅 13.3 厚 7.5 重 4,800 g	粗粒輝石安山岩	磨り面使用は顕著でないが4面使用か。上下端部は敲き痕顕著。
3	石器 磨石	完形	長 7.4 幅 6.0 厚 3.5 重198.7 g	デイサイト	軟質な石。表面の磨り面のみ顕著。
17区64号土坑					
1	弥生土器 壺	口縁部片	残存高 3.3	①細砂含②良好③ 赤褐	口唇部 横位縄文LR施文。口縁部下半 斜位櫛描文。第XII群 b 種
2	弥生土器 甕	胴下部片	残存高 5.4	①小礫含②良好③ 黒	外面 斜位刷毛目状工具によるナデ後、縦位磨き。内面 横位ナデ。第XII群 c 種
17区1号住居跡					
1	須恵器 椀	口縁～胴部片	口(15.2) 残存高 3.3	①小礫微②良好③ 灰	ロクロ成形（右回転）。
2	灰釉陶器 段皿?	堀方 口縁部片	残存高 1.7	①密②堅③灰白	ロクロ成形、回転方向不明。釉薬は浸しがけで、釉調透明に近い灰オリーブ色。大原II
3	須恵器 羽釜	床直 胴～底部片	底 10.0 残存高 12.7	①小礫含②やや良 ②にぶい赤褐	ロクロ成形（右回転）。外面 縦位ヘラ削り。
4	須恵器 甕	カマド 胴部片	残存高 6.6	①小礫多②堅③灰	外面 平行叩き。自然釉。釉調透明。
5	須恵器 甕	堀方 胴部片	残存高 7.7	①小礫微②堅③灰	外面 刷毛目状のロクロ条痕。内面 青海波状の当て目。
6	鉄器 不明	堀方 1/3	長 3.9 幅 0.2～1.1 厚 1.4 重 2.3 g		袋状。出土後、分解。
17区2号住居跡					
1	灰釉陶器 皿	床直 口縁～胴部片	口 14.8 残存高 2.9	①白色岩片含②堅 ③灰白	ロクロ成形（右回転）。釉調透明。大原II
2	灰釉陶器 皿?	+22 底部片	残存高 1.5	①密②堅③灰白	内面 釉調不透明で、灰オリーブ色。灰かぶり。高台貼り付け。
3	土師器 甕	床直 胴部片	残存高 7.3	①小礫含②良好③ にぶい黄橙	外面 縦位ヘラ削り。内面 斜め方向のナデ。
4	土師器 甕	床直 底部片	底 8.0 残存高 4.2	①小礫多②良好③ にぶい黄橙	外面 胴部縦位ヘラ削り。底部ナデ。 内面 横位ナデ。
5	土師器 甕	口縁部	残存高 4.0	①小礫多②良好③ にぶい橙	内外面 横方向ナデ。粗製。

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び痕者
6	須恵器 羽釜	カマド 口縁部	口(11.0) 残存高 5.1	①白色粒子含②良好③にぶい橙	ロクロ成形、回転方向不明。鍔にヘラ削り時の当たり痕。月夜野型
7	鉄器 釘？	堀方 ほぼ完形	長 9.6 厚 4.5～8.5 重 17.2g		
17区4号住居跡					
1	土師器 甕	カマド 胴～底部片	底(8.0) 残存高 4.2	①白色粒子含②良好③にぶい橙	外面　胴部縦位ヘラ削り。底部ナデ。　内面　横位ナデ。
2	須恵器 羽釜	床直、2住 胴～底部片	底(7.7) 残存高 6.4	①小礫多②軟③暗オリーブ褐	ロクロ成形(右回転)。外面　胴部下半縦方向、端部横位ヘラ削り。
3	須恵器 羽釜	+14、Ⅱ－4 口縁～胴部片	口(22.0) 残存高 16.0	①片岩多②良好③にぶい黄橙	ロクロ成形(右回転)。外面　胴部縦位ヘラ削り。吉井型
4	須恵器 羽釜	カマド、30土、79土 胴～底部片	底(7.4) 残存高 10.1	①小礫多②良好③にぶい橙	ロクロ成形(右回転)。外面　縦位ナデ。
27区1号住居跡					
1	灰釉陶器 皿	床直 2/3	口(12.7) 底 7.7　高 1.8	①密②良好③灰黄	ロクロ成形(右回転)。釉薬浸しがけで、釉調不透明で灰白色。高台貼り付け後、ナデ整形。内面は使用により研磨調著。大原Ⅱ
17区142号土坑					
1	椀形鉄滓	1/5	残存高 1.8 重 16.6g		
17区1号竪穴状遺構					
1	須恵器 椀	70土 口縁～体部片	口(13.8) 残存高 4.4	①細砂微②良好③黒褐	ロクロ成形(右回転)。黒色処理。
2	土師器 甕	2ピット 口縁部片	残存高 3.0	①細砂微②良好③橙	内外面　横位ナデ。
3	須恵器 ロクロ甕	2ピット 頸部片	残存高 5.1	①細砂含②良好③浅黄橙	ロクロ成形、回転方向不明。北陸系？
4	土師器 甕？	+20 底部片	底(10.9) 残存高 3.9	①小礫含②やや良③にぶい黄褐	
5	須恵器 壺	+8 底部片	底(14.1) 残存高 3.5	①細砂微②良好③橙	ロクロ成形、回転方向不明。外面　横位ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ整形。
6	須恵器 把手付甕	2住 胴部片	残存高 10.8	①小礫含②堅③黒褐	外面　斜め方向の平行叩き。　内面　横位ナデ。
17区46号土坑					
1	土師器 甕	口縁部片	残存高 3.2	①細砂含③良好③橙	内外面　横方向ナデ。スス付着顕著。
27区12号土坑					
1	鉄器 紡錘車	ほぼ完形	円盤径 6.3×5.7　厚 0.15 軸残存長(15.7)　幅 0.8　厚 0.8 重 50.9g		上端部わずか欠損。
17区35号土坑					
1	在地土器 鉢	口縁部片	残存高 3.2	①小礫含②良好③にぶい黄褐	内外面　横方向ナデ。
17区39号土坑					
1	須恵器 羽釜	H－7 口縁部片	残存高 5.0	①白色岩片含②良好③にぶい黄橙	ロクロ成形、回転方向不明。
2	須恵器 甕	胴部片	残存高 4.8	①密②堅③褐灰	外面　胴毛目状のロクロ条痕。
17区2号溝					
1	瀬戸・美濃 丸椀	口縁～底部片	残存高 3.3	①密②良好③浅黄	釉調透明。
17区7号焼土					
1	土師器 甕	胴部片	残存高 7.4	①小礫含②良好③明褐	外面　縦位ナデ。「×」の刻印。　内面　横方向のナデ。被熱のためか顕著にひび割れる。
7・17区縄文時代遺構外出土土器					
1	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 3.0	①金雲母含②良好③黒褐	第Ⅰ群第1類
2	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 5.6	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅰ群第1類

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①粘土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
3	縄文土器 深鉢	Ⅰ－11 口縁部片	残存高 3.3	①小礫多②堅③に ぶい褐	第Ⅰ群第２類
4	縄文土器 深鉢	161土 口縁部片	残存高 3.3	①小礫多②良好③ にぶい褐	第Ⅰ群第３類ａ種
5	縄文土器 深鉢	Ｇ－７ 口縁部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③ 灰褐	第Ⅰ群第３類ａ種
6	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 2.9	①細砂含②堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
7	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 2.0	①細砂含③堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
8	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 1.7	①小礫含②堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
9	縄文土器 深鉢	Ｈ－７ 口縁部片	残存高 2.1	①細砂含③堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
10	縄文土器 深鉢	Ｇ－８ 口縁部片	残存高 5.8	①細砂含②良好③ 灰褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
11	縄文土器 深鉢	Ｇ－６ 口縁部片	残存高 4.4	①細砂含②堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
12	縄文土器 深鉢	Ｈ－７ 口縁部片	残存高 3.2	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
13	縄文土器 深鉢	Ｈ－７ 胴部片	残存高 3.3	①細砂含②堅③暗 赤褐	第Ⅰ群第３類ｂ種
14	縄文土器 深鉢	Ｈ－11 胴部片	残存高 1.9	①細砂微②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
15	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 胴部片	残存高 2.4	①細砂含②良好② にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
16	縄文土器 深鉢	Ｈ－10 胴部片	残存高 2.0	①細砂微②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
17	縄文土器 深鉢	Ｈ－11 胴部片	残存高 1.8	①細砂含②良好② にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
18	縄文土器 深鉢	113土 胴部片	残存高 3.8	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
19	縄文土器 深鉢	Ｈ－11 胴部片	残存高 5.4	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ａ種
20	縄文土器 深鉢	Ｇ－６、表土 口縁部片	残存高 3.4	①細砂含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第１類ｂ種
21	縄文土器 深鉢	Ｈ－５ 口縁部片	残存高 5.4	①細砂微②良好③ 橙	第Ⅱ群第１類ｂ種
22	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 口縁部片	残存高 3.9	①小礫含②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第１類ｃ種
23	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 胴部片	残存高 5.2	①小礫含②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第１類ｃ種
24	縄文土器 深鉢	４集 胴部片	残存高 4.7	①小礫含②良好② 橙	第Ⅱ群第１類ｃ種
25	縄文土器 深鉢	Ｈ－10 胴部片	残存高 3.8	①細砂含②良好③ 橙	第Ⅱ群第１類ｃ種
26	縄文土器 深鉢	94土、Ｈ－９・10 口縁～胴部片	口 27.0 残存高 20.5	①細砂多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第１類ｄ種
27	縄文土器 深鉢	５住 口縁部片	残存高 2.4	①細砂微②やや良 ③にぶい褐	第Ⅱ群第２類
28	縄文土器 深鉢	Ⅰ－９ 口縁部片	残存高 3.7	①細砂微②やや良 ③にぶい橙	第Ⅱ群第２類
29	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 口縁部片	残存高 2.7	①細砂微②やや良 ③にぶい橙	第Ⅱ群第２類
30	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 3.2	①細砂微②やや良 ③にぶい橙	第Ⅱ群第２類
31	縄文土器 深鉢	Ⅰ－10 口縁部片	残存高 2.7	①細砂多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第３類
32	縄文土器 深鉢	Ⅰ－10 胴部片	残存高 2.0	①細砂多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第３類
33	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	残存高 2.2	①細砂多②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第３類

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①粘土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
34	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 2.6	①細砂多②良好②黒褐	第Ⅱ群第3類
35	縄文土器 深鉢	I－11 胴部片	残存高 2.6	①細砂多②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第3類
36	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 5.6	①細砂多②良好③褐	第Ⅱ群第3類
37	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 3.3	①細砂微②やや良③にぶい橙	第Ⅱ群第4類a種
38	縄文土器 深鉢	I－11 口縁部片	残存高 2.9	①小礫含②良好③明赤褐	第Ⅱ群第4類a種
39	縄文土器 深鉢	I－11 胴部片	残存高 3.9	①小礫含②良好③明赤褐	第Ⅱ群第4類a種
40	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 3.7	①小礫多②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第4類a種
41	縄文土器 深鉢	G－6 口縁部片	残存高 3.9	①白色岩片微②良好③橙	第Ⅱ群第4類a種
42	縄文土器 深鉢	H－9 口縁部片	残存高 5.7	①細砂含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第4類a種
43	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 2.7	①白色岩片含②良好②橙	第Ⅱ群第4類b種
44	縄文土器 深鉢	I－7 胴部片	残存高 3.5	①白色岩片含②良好③橙	第Ⅱ群第4類b種
45	縄文土器 深鉢	31土 胴部片	残存高 3.6	①白色岩片含②良好②橙	第Ⅱ群第4類b種
46	縄文土器 深鉢	I－8 口縁部片	残存高 4.8	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類b種
47	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 2.0	①細砂多②良好③橙	第Ⅱ群第4類b種
48	縄文土器 深鉢	31土 胴部片	残存高 2.9	①細砂多②良好②明赤褐	第Ⅱ群第4類b種
49	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 4.0	①小礫含③良好③にぶい橙	第Ⅱ群第4類b種
50	縄文土器 深鉢	H－6 口縁部片	残存高 3.6	①細砂微②良好②にぶい橙	第Ⅱ群第4類c種
51	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 2.2	①白色粒子含②良好③灰褐	第Ⅱ群第4類c種
52	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 2.9	①小礫・金雲母多②良好②黒褐	第Ⅱ群第4類c種
53	縄文土器 深鉢	I－7 口縁部片	残存高 4.2	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種
54	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 4.5	①小礫多②堅③赤褐	第Ⅱ群第4類c種
55	縄文土器 深鉢	1住 口縁部片	残存高 2.7	①白色粒子含②良好③灰褐	第Ⅱ群第4類c種
56	縄文土器 深鉢	H－9 口縁部片	残存高 3.2	①小礫含②良好③赤褐	第Ⅱ群第4類c種
57	縄文土器 深鉢	I－11 口縁部片	残存高 6.3	①小礫多②良好③極暗赤褐	第Ⅱ群第4類c種
58	縄文土器 深鉢	不明 口縁部片	残存高 6.1	①小礫多②良好③橙	第Ⅱ群第4類c種
59	縄文土器 深鉢	H・I－10 口縁部片	残存高 5.9	①小礫多②堅③赤褐	第Ⅱ群第4類c種
60	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 4.6	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種
61	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 4.3	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種
62	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 3.5	①小礫含②良好③橙	第Ⅱ群第4類c種
63	縄文土器 深鉢	J－11 胴部片	残存高 7.1	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種
64	縄文土器 深鉢	J－11 胴部片	残存高 5.2	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
65	縄文土器 深鉢	K－10 胴部片	残存高 4.8	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類c種
66	縄文土器 深鉢	I・J－11 胴部片	残存高 3.9	①小礫多②良好③暗赤褐	第Ⅱ群第4類c種
67	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 6.7	①小礫多②良好③暗赤褐	第Ⅱ群第4類c種
68	縄文土器 深鉢	J－11 胴部片	残存高 5.4	①小礫多②良好②にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類c種
69	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 3.8	①小礫含②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類c種
70	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 3.4	①白色粒子含②良好③明赤褐	第Ⅱ群第4類c種
71	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 1.8	①細砂多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
72	縄文土器 深鉢	4集 口縁部片	残存高 2.5	①細砂含②良好③灰褐	第Ⅱ群第4類d種
73	縄文土器 深鉢	I－11 口縁部片	残存高 3.2	①細砂・金雲母含②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
74	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 3.3	①細砂含②良好③暗赤褐	第Ⅱ群第4類d種
75	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 3.1	①小礫含②良好②褐灰	第Ⅱ群第4類d種
76	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 5.1	①小礫多②良好③明赤褐	第Ⅱ群第4類d種
77	縄文土器 深鉢	H－4 口縁部片	残存高 3.5	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
78	縄文土器 深鉢	K－10 口縁部片	残存高 5.0	①小礫多②堅③暗赤褐	第Ⅱ群第4類d種
79	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 4.8	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
80	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 1.7	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
81	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 4.4	①小礫多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
82	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 3.6	①細砂多②良好③褐灰	第Ⅱ群第4類d種
83	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 2.9	①小礫多②良好③赤灰	第Ⅱ群第4類d種
84	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 3.4	①細砂含②良好③褐灰	第Ⅱ群第4類d種
85	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 4.0	①小礫含②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
86	縄文土器 深鉢	H－6 口縁部片	残存高 2.1	①小礫多②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
87	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 1.7	①細砂含②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
88	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 3.1	①細砂含②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
89	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 2.7	①細砂含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第4類d種
90	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 4.3	①細砂多②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
91	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 3.2	①細砂多②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種
92	縄文土器 深鉢	不明 胴部片	残存高 3.4	①小礫・金雲母多②良好③黒褐	第Ⅱ群第4類d種
93	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 5.0	①小礫含②良好③褐	第Ⅱ群第4類d種
94	縄文土器 深鉢	I－8 口縁部片	残存高 2.4	①小礫含②良好③褐	第Ⅱ群第4類d種
95	縄文土器 深鉢	H－9・10 口縁部片	残存高 10.8	①小礫多②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第4類d種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
96	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 3.9	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第４類ｄ種
97	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 8.7	①小礫多②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第４類ｄ種
98	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 3.5	①小礫含②良好③ にぶい黄橙	第Ⅱ群第４類ｄ種
99	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 3.6	①細砂多②良好② にぶい橙	第Ⅱ群第４類ｅ種
100	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 4.1	①細砂含③良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
101	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 2.8	①細砂微②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第４類ｅ種
102	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 1.9	①小礫含②良好② 灰褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
103	縄文土器 深鉢	74土 口縁部片	残存高 1.9	①細砂多②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
104	縄文土器 深鉢	G－4 胴部片	残存高 4.0	①小礫多②良好② 黒褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
105	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 4.1	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第４類ｅ種
106	縄文土器 深鉢	I－11 口縁部片	残存高 5.0	①小礫含②良好② 明赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
107	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 3.7	①細砂含②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
108	縄文土器 深鉢	G－5 胴部片	残存高 3.3	①細砂多②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
109	縄文土器 深鉢	5何木 胴部片	残存高 3.1	①細砂含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
110	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 4.0	①細砂含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第４類ｅ種
111	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 2.3	①細砂含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第４類ｅ種
112	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 3.8	①細砂含②堅③暗 赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
113	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 2.6	①小礫含②良好③ 褐灰	第Ⅱ群第４類ｅ種
114	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 3.5	①小礫含②堅③に ぶい赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
115	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 3.8	①細砂微②良好③ 橙	第Ⅱ群第４類ｅ種
116	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 2.6	①細砂多②堅③に ぶい赤褐	第Ⅱ群第４類ｅ種
117	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 3.5	①細砂含③良好③ 灰褐	第Ⅱ群第５類ａ種
118	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 2.7	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第５類ａ種
119	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 2.8	①白色岩片含②良 好③にぶい橙	第Ⅱ群第５類ａ種
120	縄文土器 深鉢	46土 口縁部片	残存高 2.6	①白色岩片含② 良好③にぶい褐	第Ⅱ群第５類ａ種
121	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 2.9	①白色岩片含②良 好③にぶい褐	第Ⅱ群第５類ａ種
122	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 2.6	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第５類ｂ種
123	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 3.8	①細砂微②良好② 黒褐	第Ⅱ群第５類ｂ種
124	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 2.6	①細砂微②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第５類ｂ種
125	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 3.3	①細砂微②良好② にぶい橙	第Ⅱ群第５類ｂ種
126	縄文土器 深鉢	31土 底部片	残存高 1.2	①細砂含②良好③ 橙	第Ⅱ群第５類ｂ種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調/石材	成・整形技法の特徴及び備考
127	縄文土器 深鉢	H－8 底部片	残存高 1.2	①細砂含②良好③ 橙	第Ⅱ群第5類b種
128	縄文土器 深鉢	H－4 胴部片	残存高 1.9	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第4類
129	縄文土器 深鉢	74土 底部片	残存高 1.1	①細砂微②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第4類
130	縄文土器 深鉢	3住、H－4・5 口縁～胴部片	残存高 34.9	①細砂・金雲母多 ②良好③暗赤褐	第Ⅱ群第4類c種
131	縄文土器 深鉢	100土 胴部片	残存高 5.5	①白色粒子含②良 好③にぶい橙	第Ⅱ群第6類
132	縄文土器 深鉢	H－6 口縁部片	残存高 1.7	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第7類
133	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 3.0	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第7類
134	縄文土器 深鉢	79土 胴部片	残存高 4.6	①小礫含②良好③ 橙	第Ⅱ群第7類
135	縄文土器 深鉢	G・H－4、G－5 口縁部片	残存高 4.6	①細砂多②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第7類
136	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 2.3	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第7類
137	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 2.7	①小礫含②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第7類
138	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第7類
139	縄文土器 深鉢	H－4 口縁部片	残存高 5.0	①小礫多②堅③橙	第Ⅱ群第7類
140	縄文土器 深鉢	G－4 口縁部片	残存高 3.4	①小礫含②良好③ 橙	第Ⅱ群第7類
141	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 3.8	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第7類
142	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 2.7	①小礫含②やや良 ③橙	第Ⅱ群第7類
143	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 4.5	①小礫多②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第7類
144	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 2.5	①小礫含②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第8類a種
145	縄文土器 深鉢	G－6 口縁部片	残存高 3.7	①片岩含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第8類a種
146	縄文土器 深鉢	I－6 胴部片	残存高 3.4	①小礫含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第8類a種
147	縄文土器 深鉢	161土 口縁部片	残存高 5.4	①小礫多②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第8類a種
148	縄文土器 深鉢	158土 胴部片	残存高 3.4	①小礫多②良好③ 暗赤褐	第Ⅱ群第8類a種
149	縄文土器 深鉢	I－11 口縁部片	残存高 2.1	①細砂多②やや良 ③黒褐	第Ⅱ群第8類a種
150	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 1.6	①細砂含②良好③ 橙	第Ⅱ群第8類a種
151	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 2.3	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第8類a種
152	縄文土器 深鉢	H－9 口縁部片	残存高 2.6	①細砂含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第8類a種
153	縄文土器 深鉢	H－9・10 口縁部片	残存高 6.1	①白色岩片多②良 好③灰	第Ⅱ群第8類a種
154	縄文土器 深鉢	I－11 胴部片	残存高 3.5	①細砂含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第8類a種
155	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 4.5	①細砂微②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第8類a種
156	縄文土器 深鉢	H－11、I－10、 32土、33土 口縁～胴部片	残存高 22.2	①細砂含②良好③ 黒褐	第Ⅱ群第8類a種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
157	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 6.5	①白色岩片多②良好③黒褐	第Ⅱ群第8類b種
158	縄文土器 深鉢	G－3 口縁部片	残存高 3.9	①小礫多②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第8類c種
159	縄文土器 深鉢	G－3 口縁部片	残存高 4.8	①小礫多②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第8類c種
160	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 4.4	①小礫含②良好③黒褐	第Ⅱ群第8類d種
161	縄文土器 深鉢	G－6 胴部片	残存高 2.7	①小礫・片岩多②良好③明赤褐	第Ⅱ群第8類d種
162	縄文土器 深鉢	I－8 口縁部片	残存高 3.5	①金雲母含③良好③黒褐	第Ⅱ群第9類a種
163	縄文土器 深鉢	33土 胴部片	残存高 4.7	①細砂含②良好②橙	第Ⅱ群第9類a種
164	縄文土器 深鉢	31土 胴部片	残存高 5.1	①小礫含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
165	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 4.9	①小礫含②良好②にぶい褐	第Ⅱ群第9類a種
166	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 3.2	①小礫含②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類a種
167	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 3.9	①小礫含②良好②にぶい褐	第Ⅱ群第9類a種
168	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 4.1	①細砂含②良好②にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
169	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 4.2	①細砂含③良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
170	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 2.7	①白色粒子含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
171	縄文土器 深鉢	I－11 胴部片	残存高 2.8	①小礫含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類a種
172	縄文土器 深鉢	3住 胴部片	残存高 2.8	①小礫含②良好②明赤褐	第Ⅱ群第9類a種
173	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 3.2	①小礫含②良好③橙	第Ⅱ群第9類a種
174	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 4.6	①小礫含②良好③灰褐	第Ⅱ群第9類a種
175	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 3.5	①小礫多②良好②にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類a種
176	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 3.8	①小礫含②良好③橙	第Ⅱ群第9類a種
177	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 4.8	①小礫含②堅③明赤褐	第Ⅱ群第9類a種
178	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 2.6	①細砂微②良好③明赤褐	第Ⅱ群第9類b種
179	縄文土器 深鉢	H－3 胴部片	残存高 4.0	①小礫含②良好③灰褐	第Ⅱ群第9類b種
180	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 2.9	①小礫含②良好③にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
181	縄文土器 深鉢	4集 胴部片	残存高 4.5	①片岩含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
182	縄文土器 深鉢	H－5 胴部片	残存高 4.0	①白色岩片含②良好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
183	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 4.0	①小礫微②堅③にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
184	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 2.5	①細砂微②良好②橙	第Ⅱ群第9類b種
185	縄文土器 深鉢	G－5 胴部片	残存高 4.7	①小礫含②良好③橙	第Ⅱ群第9類b種
186	縄文土器 深鉢	3住 胴部片	残存高 3.8	①小礫含②良好③橙	第Ⅱ群第9類b種
187	縄文土器 深鉢	H－3 胴部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③灰褐	第Ⅱ群第9類b種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
188	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 3.2	①金雲母多②良好 ③灰褐	第Ⅱ群第9類b種
189	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 5.4	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
190	縄文土器 深鉢	G－3 胴部片	残存高 3.5	①片岩多②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
191	縄文土器 深鉢	H－3 胴部片	残存高 4.4	①小礫含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
192	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 6.5	①雲母多②良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第9類b種
193	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 5.7	①片岩含②良好② にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
194	縄文土器 深鉢	4集 胴部片	残存高 6.7	①片岩含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
195	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 6.2	①小礫含②良好② 橙	第Ⅱ群第9類b種
196	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 6.5	①小礫微③良好③ 明赤褐	第Ⅱ群第9類b種
197	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 6.6	①白色粒子多②良 好②にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
198	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 7.3	①片岩含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
199	縄文土器 深鉢	G－4 胴部片	残存高 5.5	①小礫含②良好② 橙	第Ⅱ群第9類b種
200	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 7.9	①小礫含②堅②黒 褐	第Ⅱ群第9類b種
201	縄文土器 深鉢	G－3 口縁部片	残存高 6.8	①片岩多②良好③ 赤褐	第Ⅱ群第9類b種
202	縄文土器 深鉢	M－7 胴部片	残存高 2.6	①細砂含②良好② にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
203	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 4.0	①片岩含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
204	縄文土器 深鉢	G－6 胴部片	残存高 7.1	①小礫含②良好② にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
205	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 4.0	①小礫含②良好③ 橙	第Ⅱ群第9類b種
206	縄文土器 深鉢	G－4 胴部片	残存高 3.5	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
207	縄文土器 深鉢	4集 胴部片	残存高 5.5	①白色岩片含②良 好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
208	縄文土器 深鉢	4集 胴部片	残存高 6.0	①片岩含②良好③ にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
209	縄文土器 深鉢	G－6 胴部片	残存高 6.9	①片岩多②良好② にぶい赤褐	第Ⅱ群第9類b種
210	縄文土器 深鉢	H・I－7 胴部片	残存高 8.2	①片岩含②良好③ にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
211	縄文土器 深鉢	H－8・9 胴部片	残存高 7.8	①白色岩片含②良 好③にぶい橙	第Ⅱ群第9類b種
212	縄文土器 深鉢	G－6 口縁部片	残存高 4.3	①密②良好③橙	0段多条撚の単節RLとLRの羽状縄文。第Ⅲ群第1類
213	縄文土器 深鉢	I・J－9 口縁部片	残存高 5.3	①密②良好③褐	単節縄文RLの撚付末端施文。第Ⅲ群第1類
214	縄文土器 深鉢	I－8 口縁部片	残存高 6.0	①白色粒子含②良 好③極暗赤褐	単節縄文LRの撚付末端施文。第Ⅲ群第1類
215	縄文土器 深鉢	6住、H－8 口縁部片	残存高 4.0	①白色粒子含③良 好②赤褐	単節RLとLRの羽状縄文。第Ⅲ群第1類
216	縄文土器 深鉢	1住、H－6、H －9・10 口縁部片	残存高 6.8	①密②良好②にぶ い褐	0段多条撚の単節RLとLRの横位羽状縄文。第Ⅲ群第1類
217	縄文土器 深鉢	5個体、H・I－ 9 口縁部片	残存高 4.9	①密②良好③橙	0段多条撚の単節RLとLRの横位羽状縄文。第Ⅲ群第1類

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
218	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 4.7	①密②良好③にぶい褐	単節縄文ＲＬと０段多条燃の単節ＬＲの横位羽状縄文。第Ⅲ群第１類
219	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 4.9	①密②良好③にぶい橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
220	縄文土器 深鉢	6住、4集、H－5 胴部片	残存高 5.0	①密②良好③にぶい橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの横位羽状縄文。第Ⅲ群第１類
221	縄文土器 深鉢	H－7、H－9、I－8 胴部片	残存高 8.4	①密②良好③にぶい黄橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
222	縄文土器 深鉢	H－7、H－9 口縁部片	残存高 5.1	①密②良好③橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの横位羽状縄文。第Ⅲ群第１類
223	縄文土器 深鉢	6住、H－6 胴部片	残存高 8.3	①密②良好③橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
224	縄文土器 深鉢	H－5・6 胴部片	残存高 7.0	①密②良好③橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
225	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 5.5	①密②良好③にぶい赤褐	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
226	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 4.7	①白色粒子含②良好③黒褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
227	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 4.2	①白色粒子含②良好③にぶい黄褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
228	縄文土器深鉢	I－10 口縁部片	残存高 3.8	①細砂含②良好③暗褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
229	縄文土器 深鉢	4集 胴部片	残存高 5.4	①密②良好③にぶい赤褐	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
230	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 4.0	①白色岩片含②良好③明赤褐	無節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
231	縄文土器 深鉢	H－6・7 胴部片	残存高 6.2	①白色岩片含②良好③明赤褐	単節ＲＬと無節Ｌの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
232	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 6.6	①白色粒子含②良好③浅黄橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
233	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 8.3	①小礫含②良好③浅黄	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
234	縄文土器 深鉢	H－5 胴部片	残存高 5.5	①密②良好③浅黄橙	単節縄文ＲＬと０段多条燃の単節ＫＬの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
235	縄文土器 深鉢	9側本 底部片	残存高 3.0	①密②良好③橙	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
236	縄文土器 深鉢	H－6 底部片	底 8.4 残存高 12.6	①白色岩片含②良好③赤褐	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
237	縄文土器 深鉢	31土 口縁部片	残存高 6.5	①白色粒子含②良好③オリーブ黒	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、幅３㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
238	縄文土器 深鉢	68土、4集、I－11 口縁部片	残存高 9.2	①白色粒子含②良好③オリーブ黒	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、幅３㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
239	縄文土器 深鉢	G－5 口縁部片	残存高 4.9	①白色粒子含②良好③暗褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、幅４㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
240	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 9.4	①白色粒子含②良好③オリーブ黒	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、幅３㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
241	縄文土器 深鉢	4集、I－9・10 胴部片	残存高 15.4	①白色粒子含②良好③暗褐	斜位単節ＲＬ施文後、幅４㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
242	縄文土器 深鉢	H－6 口縁部片	残存高 3.9	①小礫微②良好③橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、幅３㎜の弧状沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
243	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 6.6	①白色粒子含②良好③黒褐	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、山形状に平行沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
244	縄文土器 深鉢	H－6 胴部片	残存高 7.1	①白色粒子含②良好③黒褐	０段多条燃の単節ＲＬとＬＲの羽状縄文施文後、平行沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
245	縄文土器 深鉢	I－7 口縁部片	残存高 3.2	①白色粒子含②良好③明赤褐	組紐を斜位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種
246	縄文土器 深鉢	I－6 口縁部片	残存高 9.8	①白色粒子含②良好③明赤褐	組紐を斜位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
247	縄文土器 深鉢	K－7 胴部片	残存高 15.6	①白色岩片微②良 好③赤褐	組縄を斜位施文後、半截竹管によるコンパス文施す。第Ⅲ群第２類ｂ種
248	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 9.5	①白色粒子含②良 好③にぶい黄橙	組縄を横位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種
249	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 4.3	①白色粒子微②良 好③明赤褐	組縄を斜位施文後、半截竹管による平行沈線でコンパス文施す。第Ⅲ群第２類ｂ種
250	縄文土器 深鉢	2住 胴部片	残存高 4.7	①白色粒子含②良 好③にぶい赤褐	組縄を横位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種
251	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 6.1	①白色粒子微②良 好③にぶい赤褐	組縄を斜位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種
252	縄文土器 深鉢	32土、94土、4集、 H－7・9 口縁～胴部片	残存高 22.9	①白色粒子含②良 好②褐	組縄を斜位施文後、平行沈線を縦位施文。第Ⅲ群第２類ｂ種
253	縄文土器 深鉢	G－3、5例本 胴部片	残存高 6.8	①白色粒子含②良 好③橙	組縄を斜位施文後、半截竹管による平行沈線でコンパス文施す。第Ⅲ群第２類ｂ種
254	縄文土器 深鉢	2住、H－9 胴部片	残存高 6.9	①白色粒子含②良 好②にぶい赤褐	組縄を横位施文後、半截竹管による平行沈線でコンパス文施す。第Ⅲ群第２類ｂ種
255	縄文土器 深鉢	H－5 胴部片	残存高 5.3	①白色粒子微②良 好③明赤褐	０段多条撚の単節ＲＬ施文後、半截竹管でコンパス文施す。第Ⅲ群第２類ｂ種
256	縄文土器 深鉢	K－7 口縁部片	残存高 6.8	①白色粒子含②良 好②黒	胴部直前段合撚施文後、口縁部０段多条撚の単節ＲＬの羽付末端施文。第Ⅲ群第２類ｃ種
257	縄文土器 深鉢	K－7 胴部片	残存高 7.0	①白色粒子含②良 好③暗赤褐	胴部直前段合撚施文後、山形状に平行沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
258	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 4.7	①白色粒子含②良 好③黒褐	無節縄文Ｌを横位回転施文後、斜位に沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
259	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 5.1	①白色粒子含②良 好③黒褐	無節縄文Ｌを横位回転施文後、斜位に沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
260	縄文土器 深鉢	4集、I－9 胴部片	残存高 8.6	①白色粒子含②良 好③赤褐	無節ＲとＬの羽状縄文施文後、斜位に沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
261	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 4.0	①白色粒子含②良 好②黒褐	単節縄文Ｒを横位回転施文後、斜位に沈線施す。第Ⅲ群第２類ａ種
262	縄文土器 深鉢	4集、H－9 胴部片	残存高 3.5	①密②良好③橙	直前段合撚の羽状縄文。第Ⅲ群第２類ｃ種
263	縄文土器 深鉢	33土 胴部片	残存高 5.3	①白色粒子微②良 好③明赤褐	直前段合撚の羽状縄文。第Ⅲ群第２類ｃ種
264	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 3.2	①密②良好③橙	直前段合撚。第Ⅲ群第２類ｃ種
265	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 3.8	①密②良好③橙	直前段合撚の羽状縄文。第Ⅲ群第２類ｃ種
266	縄文土器 深鉢	I－9 胴部片	残存高 4.6	①密②良好③橙	直前段合撚の羽状縄文。第Ⅲ群第２類ｃ種
267	縄文土器 深鉢	H－5 胴部片	残存高 2.1	①白色粒子微②良 好③赤褐	直前段合撚。第Ⅲ群第２類ｃ種
268	縄文土器 深鉢	9土 胴部片	残存高 1.8	①白色粒子含②良 好②褐	直前段合撚。第Ⅲ群第２類ｃ種
269	縄文土器 深鉢	I－6 底部片	底 5.8 残存高 3.0	①小礫含②良好③ 明赤褐	直前段合撚。第Ⅲ群第２類ｃ種
270	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 4.4	①白色岩片微②良 好②暗褐	無節縄文Ｒを縦位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
271	縄文土器 深鉢	H・I－6、I－7 口縁部片	残存高 6.0	①白色粒子微②良 好③にぶい赤褐	反撚のＲＲ回転施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
272	縄文土器 深鉢	G－6 口縁部片	残存高 6.3	①白色岩片含②良 好②暗赤褐	単節縄文ＬＲを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
273	縄文土器 深鉢	H－6、H・I－7 口縁部片	口(34.8) 残存高 10.9	①小礫含②良好③ にぶい黄褐	単節縄文ＲＬを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
274	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 3.1	①小礫含②良好③ 橙	０段多条撚の単節ＲＬを横位施す。第Ⅲ群第２類ｃ種
275	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 3.4	①小礫含②良好③ 暗赤褐	横位単節ＲＬを施す。第Ⅲ群第２類ｄ種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
276	縄文土器 深鉢	3集 底部片	残存高 4.4	①細砂微②良好③ にぶい赤褐	横位単節ＲＬを施す。第Ⅲ群第２類ｄ種
277	縄文土器 深鉢	Ｈ－５ 胴部片	残存高 3.2	①白色粒子含②良 好③暗赤褐	単節縄文ＬＲを縦位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
278	縄文土器 深鉢	93土、Ｈ－７～９、 Ｉ－８・９ 胴部片	残存高 13.7	①白色岩片含②良 好③褐	単節縄文ＬＲを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
279	縄文土器 深鉢	31土、Ｉ－９、Ｊ －10，表土 胴部片	残存高 7.8	①白色粒子含②良 好③にぶい赤褐	単節縄文ＲＬを縦位・斜位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
280	縄文土器 深鉢	Ｈ－６、Ｈ・Ｉ－ ７ 胴部片	残存高 9.7	①白色粒子含②良 好③にぶい黄褐	横位単節ＲＬを施す。第Ⅲ群第２類ｄ種
281	縄文土器 深鉢	５例木、Ｈ－８ 胴部片	残存高 10.4	①小礫含②良好③ 明赤褐	単節縄文ＲＬを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
282	縄文土器 深鉢	４集、Ｈ－６、Ｈ －10 胴部片	残存高 8.2	①小礫含②良好③ 赤褐	横位縄文ＲＬを施す。第Ⅲ群第２類ｄ種
283	縄文土器 深鉢	94土 胴部片	残存高 5.3	①白色粒子含②良 好③にぶい赤褐	直前段反撚縄文Ｒ斜位施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
284	縄文土器 深鉢	Ｈ－５、Ｈ－７ 胴部片	残存高 4.2	①白色粒子含②良 好③にぶい赤褐	単節縄文ＲＬを斜位・横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
285	縄文土器 深鉢	Ｉ－９・10 胴部片	残存高 6.2	①白色粒子含②良 好③明赤褐	１段の撚糸Ｌ横位施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
286	縄文土器 深鉢	Ｈ－７ 底部片	残存高 3.5	①白色粒子含②良 好③暗赤褐	無節縄文ＬとＲの羽状縄文。第Ⅲ群第１類
287	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 底部片	残存高 3.7	①白色粒子微②良 好③にぶい橙	横位単節ＲＬを施す。第Ⅲ群第２類ｄ種
288	縄文土器 深鉢	75土、113土、Ｈ －８ 底部片	残存高 9.3	①小礫含③良好③ にぶい赤褐	単節縄文ＬＲを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
289	縄文土器 深鉢	90土 底部片	残存高 8.6	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	単節縄文ＬＲを横位回転施文。第Ⅲ群第２類ｄ種
290	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 6.5	①白色粒子含②良 好③にぶい橙	無節Ｒと単節ＬＲの羽状縄文を乱れて施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
291	縄文土器 深鉢	Ｈ－11 口縁部片	残存高 6.1	①白色粒子微②良 好③明赤褐	単節縄文ＲＬを縦横に回転施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
292	縄文土器 深鉢	90土、 口縁部片	残存高 3.8	①白色粒子含②良 好③にぶい赤褐	単節縄文ＲＬを縦横に回転施文。第Ⅲ群第２類ｅ種
293	縄文土器 深鉢	39土 口縁部片	残存高 3.4	①白色岩片微②良 好③にぶい赤褐	単節縄文ＬＲ施文後、半裁竹管による結節平行沈線施す。第Ⅲ群第２類ｅ種
294	縄文土器 深鉢	７例木 口縁部片	残存高 5.3	①白色粒子微②良 好③にぶい橙	０段多条撚の単節縄文ＬＲの横位施文後、半裁竹管による爪形文施す。第Ⅲ群第２類ｅ種
295	縄文土器 深鉢	Ｈ－６ 口縁部片	残存高 3.2	①白色粒子微②良 好③橙	隆帯上下に半裁竹管による平行沈線・刺み施す。第Ⅲ群第２類ｅ種
296	縄文土器 深鉢	Ｈ－10、Ｈ－12 底部片	残存高 2.8	①白色粒子含②良 好②暗赤褐	無文。第Ⅲ群第２類ｆ種
297	縄文土器 深鉢	Ｈ－10 底部片	残存高 3.3	①白色岩片含②良 好③にぶい褐	無紋。第Ⅲ群第２類ｆ種
298	縄文土器 深鉢	Ｈ－８、Ｉ－10 口縁部片	残存高 4.1	①小礫多②良好③ 明赤褐	半裁竹管による平行沈線を横位施文後、波状文施す。第Ⅳ群第１類ａ種
299	縄文土器 深鉢	67土、Ｈ－７ 口縁部片	残存高 4.0	①小礫多②良好③ 明赤褐	半裁竹管による平行沈線を横位施文後、波状文施す。第Ⅳ群第１類ａ種
300	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 口縁部片	残存高 3.8	①細砂多②良好③ 明赤褐	半裁竹管による平行・波状沈線施文後、刺突文列施す。第Ⅳ群第１類ａ種
301	縄文土器 深鉢	１住、Ｈ－10 口縁部片	残存高 6.4	①小礫多②良好③ 黒褐	半裁竹管による平行沈線、爪形文施文後、刺突文列施す。第Ⅳ群第１類ａ種
302	縄文土器 深鉢	１溝、Ｈ－10 胴部片	残存高 4.7	①小礫多②良好③ 極暗赤褐	半裁竹管による平行・波状沈線施文後、刺突文列施す。第Ⅳ群第１類ａ種
303	縄文土器 深鉢	Ｈ－10 胴部片	残存高 1.9	①細砂多②良好③ 明赤褐	爪形文、刺突文列施す。第Ⅳ群第１類ａ種

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
304	縄文土器 深鉢	I区2ピット 口縁部片	残存高 4.2	①小礫含②堅③にぶい赤褐	単節縄文RLを横位回転施文。第Ⅳ群第1類b種
305	縄文土器 深鉢	9上、5側本 口縁部片	残存高 4.1	①小礫含②堅③にぶい赤褐	単節縄文RLを横位回転施文。第Ⅳ群第1類b種
306	縄文土器 深鉢	31上 胴部片	残存高 7.6	①細砂含②良好③にぶい赤褐	単節縄文RLを横位回転施文。第Ⅳ群第1類b種
307	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 6.6	①小礫多②良好③暗オリーブ褐	単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第1類b種
308	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 3.8	①小礫多②良好③にぶい赤褐	結節縄文RLを横位回転施文。第Ⅳ群第1類b種
309	縄文土器 深鉢	I－7 胴部片	残存高 3.2	①小礫多②良好③褐	結節縄文RLを横位回転施文。第Ⅳ群第1類b種
310	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 1.5	①小礫含②堅③褐	単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による爪形文施す。第Ⅳ群第2類a種
311	縄文土器 深鉢	68上、H－7 口縁部片	残存高 5.5	①小礫・白色粒子含②良好③暗褐	斜位平行沈線施文後、横位爪形文施す。第Ⅳ群第2類a種
312	縄文土器 深鉢	5側本 口縁部片	残存高 3.8	①小礫含②良好③にぶい黄褐	爪形文施す。第Ⅳ群第2類a種
313	縄文土器 深鉢	H－7・8 口縁部片	残存高 3.0	①小礫含②良好③赤黒	地文単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による爪形文、浮線文に刻みを施す。第Ⅳ群第2類a種
314	縄文土器 深鉢	5側本 胴部片	残存高 5.2	①小礫多②堅③にぶい黄褐	浮線文に刻みを施す。第Ⅳ群第2類b種
315	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 4.9	①小礫含②良好③にぶい橙	地文単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
316	縄文土器 深鉢	93上 口縁部片	残存高 2.4	①小礫含②良好③黒褐	地文単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
317	縄文土器 深鉢	151上 胴部片	残存高 2.8	①小礫含②良好③黒褐	地文単節縄文RLを横位回転施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
318	縄文土器 深鉢	G－3 口縁部片	残存高 3.4	①片岩含②良好③明赤褐	半截竹管による平行・斜位沈線施文後、横位単節縄文RL施す。第Ⅳ群第2類c種
319	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 3.1	①細砂多②良好③黒褐	半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
320	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 4.1	①小礫多②堅③赤褐	半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
321	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 5.8	①小礫多②良好③明赤褐	半截竹管による横位・斜位平行沈線施す。第Ⅳ群第2類c種
322	縄文土器 深鉢	H－9～11、5側本 口縁部片	残存高 10.5	①小礫多②良好③にぶい赤褐	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状、ボタン状貼付。第Ⅳ群第3類a種
323	縄文土器 深鉢	I－10 口縁部片	残存高 2.2	①小礫多②良好③にぶい赤褐	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
324	縄文土器 深鉢	7区J－23 胴部片	残存高 5.4	①小礫含②堅③にぶい黄橙	半截竹管による集合条線施文後、ボタン状貼付文施す。第Ⅳ群第3類a種
325	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 4.2	①小礫多②堅③橙	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
326	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 6.0	①小礫多②堅③橙	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
327	縄文土器 深鉢	113上、H－8 胴部片	残存高 6.7	①片岩・小礫含②良好③にぶい橙	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
328	縄文土器 深鉢	4集、5側本 口縁部片	残存高 7.6	①細砂含②良好③褐灰	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付し刻みを施す。第Ⅳ群第3類a種
329	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 3.5	①細砂含②良好③褐灰	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付し刻みを施す。第Ⅳ群第3類a種
330	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 2.7	①小礫多②堅③橙	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
331	縄文土器 深鉢	I－8 胴部片	残存高 2.8	①小礫多②良好③灰褐	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
332	縄文土器 深鉢	H－7 胴部片	残存高 2.5	①小礫含②良好③にぶい橙	半截竹管による集合条線施す。第Ⅳ群第3類a種
333	縄文土器 深鉢	5側本 胴部片	残存高 3.1	①小礫含②良好③橙	半截竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
334	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 3.4	①小礫含②良好②にぶい赤褐	半裁竹管による集合条線施文後、ボタン状貼付文施す。第Ⅳ群第3類a種
335	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 2.5	①小礫含②良好③にぶい赤褐	半裁竹管による集合条線施文後、ボタン状貼付文施す。第Ⅳ群第3類a種
336	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 3.5	①小礫含②良好②にぶい赤褐	半裁竹管による集合条線施文後、粘土を棒状貼付。第Ⅳ群第3類a種
337	縄文土器 深鉢	1住4ピット 口縁部片	残存高 6.8	①小礫多②良好③橙	半裁竹管による集合条線施文。第Ⅳ群第3類a種
338	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③にぶい黄橙	半裁竹管による集合条線施文。第Ⅳ群第3類a種
339	縄文土器 深鉢	I－9 口縁部片	残存高 4.6	①小礫含②良好②灰褐	半裁竹管による集合条線施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第3類b種
340	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 4.3	①小礫含③堅③にぶい褐	内皮使用による刻み文を施す。第Ⅳ群第4類c種
341	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 2.8	①小礫含②堅②にぶい褐	内皮使用による刻み文を施す。第Ⅳ群第4類c種
342	縄文土器 深鉢	H－6 底部片	残存高 5.4	①小礫含②良好③にぶい橙	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、浮線上に刻みを施す。第Ⅳ群第3類b種
343	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 2.4	①白色岩片多②良好③赤褐	内皮使用による刻み、印刻を施す。第Ⅳ群第4類b種
344	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 2.3	①小礫含②堅③にぶい赤褐	地文横位無節縄文Ｒ施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類b種
345	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 3.3	①小礫含②堅③橙	地文横位無節縄文Ｒ施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類b種
346	縄文土器 深鉢	I－10 口縁部片	残存高 3.0	①小礫含②良好③にぶい赤褐	地文横位縄文Ｌ Ｒ施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類b種
347	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	残存高 3.7	①小礫・片岩多②堅③明赤褐	地文横位縄文Ｌ Ｒ施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類b種
348	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 2.2	①小礫含②堅③にぶい赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類b種
349	縄文土器 深鉢	H－6、表土 口縁－胴部片	口(46.0) 残存高 18.2	①小礫多②堅③にぶい赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、口唇部粘土紐貼り付け、口縁部横位粘土紐貼付後刻み、胴部半裁竹管による平行沈線で同心円文表出。第Ⅳ群第4類c種
350	縄文土器 深鉢	31土 口縁部片	残存高 7.8	①細砂含②堅③橙	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、小波状の粘土紐貼付、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類c種
351	縄文土器 深鉢	1住、I－11、N－10 胴部片	残存高 10.8	①細砂含②堅③橙	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、小波状の粘土紐貼付、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第4類c種
352	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 5.2	①軟質白色岩片多②良好③灰褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
353	縄文土器 深鉢	1住 口縁部片	残存高 4.7	①軟質白色岩片多②良好③にぶい褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
354	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 4.4	①軟質白色岩片多②良好③灰褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
355	縄文土器 深鉢	49土 胴部片	残存高 3.8	①軟質白色岩片多②良好③暗灰	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
356	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 6.4	①軟質白色岩片多②良好③暗褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
357	縄文土器 深鉢	H－11 胴部片	残存高 3.7	①細砂含②良好③橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
358	縄文土器 深鉢	I－10 胴部片	残存高 5.2	①軟質白色岩片多②良好③褐灰	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
359	縄文土器 深鉢	不明 胴部片	残存高 4.0	①細砂含②良好②にぶい橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
360	縄文土器 深鉢	H－9 胴部片	残存高 3.8	①白色岩片含②良好③淺黄橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
361	縄文土器 深鉢	1住、49土、I－10 胴部片	残存高 6.8	①軟質白色岩片含②良好③にぶい橙	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、小波状の粘土紐貼付。第Ⅳ群第5類a種
362	縄文土器 深鉢	H－7 口縁部片	残存高 4.0	①白色岩片多②堅③黒褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、山形の細い粘土紐貼付、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第5類b種

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
363	縄文土器 深鉢	2住カマド 口縁部片	残存高 4.1	①白色岩片多②堅 ③黒褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第５類ｂ種
364	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 頸部片	残存高 3.3	①白色岩片多②堅 ③黒褐	単節ＲＬとＬＲの羽状縄文後、浮線上に内皮使用による刻みを施す。第Ⅳ群第５類ｂ種
365	縄文土器 深鉢	Ｉ住 口縁部片	残存高 3.0	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	内皮使用による刻み、印刷を施す。第Ⅳ群第４類ｂ種
366	縄文土器 深鉢	Ｉ住 胴部片	残存高 2.5	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線、三角形の印刷施す。第Ⅳ群第４類ｂ種
367	縄文土器 深鉢	Ｉ住 胴部片	残存高 2.7	①小礫含②良好③ にぶい橙	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅳ群第２類ｃ種
368	縄文土器 深鉢	Ｉ住、31土 胴部片	残存高 4.3	①細砂含②良好③ 橙	地文横位縄文Ｒ Ｌ、半截竹管による斜位集合沈線施文後、浮彫により雲形状の文様を描出。第Ⅳ群第４類ｃ種
369	縄文土器 深鉢	Ｉ住カマド、表土 胴部片	残存高 5.8	①白色粒子含②良 好③灰褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ、半截竹管による斜位集合沈線施文後、浮彫により雲形状の文様を描出。第Ⅳ群第４類ｃ種
370	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	残存高 4.7	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	半截竹管による平行沈線で斜格子文施す。第Ⅴ群第１類ａ種
371	縄文土器 深鉢	Ｇ－６ 口縁部片	残存高 2.5	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	沈線により逆Ｕ字形の文様表出。口唇部は棒状工具による刻み。第Ⅴ群第１類ｃ種
372	縄文土器 深鉢	表土 胴部片	残存高 3.7	①細砂含②良好③ 明赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅴ群第１類ｂ種
373	縄文土器 深鉢	Ｉ住 胴部片	残存高 1.9	①細砂多②良好③ 赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅴ群第１類ｂ種
374	縄文土器 深鉢	５住 胴部片	残存高 1.9	①細砂含②良好③ 赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅴ群第１類ｂ種
375	縄文土器 深鉢	Ｉ住 胴部片	残存高 2.2	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅴ群第１類ｂ種
376	縄文土器 深鉢	Ｉ－10 胴部片	残存高 4.0	①白色粒子含②良 好③赤褐	地文横位縄文Ｒ Ｌ施文後、半截竹管による平行沈線施す。第Ⅴ群第１類ｂ種
377	縄文土器 深鉢	Ｈ－６ 胴部片	残存高 4.4	①細砂含②良好③ 赤褐	単沈線により直線文、山形文施す。第Ⅴ群第２類ａ種
378	縄文土器 深鉢	21土 胴部片	残存高 3.4	①細砂含②良好③ 灰褐	単沈線により直線文、山形文施す。第Ⅴ群第２類ａ種
379	縄文土器 深鉢	64土 胴部片	残存高 2.6	①細砂含②良好③ 赤褐	単沈線により直線文、山形文施す。第Ⅴ群第２類ａ種
380	縄文土器 深鉢	Ｈ－７・８ 胴部片	残存高 10.8	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	地文縦位縄文ＬＲ施文後、幅４mmの沈線で懸垂文施す。第Ⅶ群
381	縄文土器 深鉢	Ｈ・Ｉ－７、Ｈ－８ 口縁部片	口(26.6) 残存高 10.9	①細砂含②良好③ にぶい黄褐	太い沈線で文様を表出後、横位縄文ＲＬを充填施文。第Ⅶ群第１類ａ種
382	縄文土器 深鉢	Ｉ－７ 底－面部1/2	底6.6 残存高 13.4	①小礫多②良好③ 明赤褐	沈線でＪ字状の文様表出後、斜位縄文ＬＲを充填施文。第Ⅶ群第１類ａ種
383	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 口縁部片	残存高 5.0	①小礫含②良好③ にぶい橙	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群第１類ｂ種
384	縄文土器 深鉢	５住、Ｈ－８ 口縁部片	残存高 4.9	①細砂含②良好③ 橙	沈線で文様表出後、縦位縄文ＬＲを充填施文。第Ⅶ群第１類ａ種
385	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 口縁部片	残存高 4.3	①細砂含②良好③ 褐	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群第１類ｂ種
386	縄文土器 注口	Ｈ－９ 口縁部片	残存高 6.9	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群第１類ｂ種
387	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 口縁部片	残存高 6.0	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	幅３mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群第１類ｂ種
388	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 口縁部片	残存高 5.2	①小礫多②良好③ 黒褐	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群第１類ｂ種
389	縄文土器 深鉢	Ｇ－４ 胴部片	残存高 2.7	①白色粒子含②良 好③にぶい褐	斜位縄文ＲＬ回転施文。第Ⅶ群第２類ｂ種
390	縄文土器 深鉢	Ｈ－８ 胴部片	残存高 3.1	①白色粒子含②良 好③にぶい橙	横位縄文ＬＲ施文後、幅４mmの横位沈線を施す。第Ⅶ群第２類ｂ種
391	縄文土器 深鉢	35土 胴部片	残存高 2.0	①細砂含②良好③ にぶい褐	隆帯を貼付し、刻みと刺突を施す。第Ⅶ群第２類ａ種
392	縄文土器 深鉢	Ｈ－９ 胴部片	残存高 4.0	①細砂含②良好③ 橙	隆帯を貼付後刺突、幅２mmの沈線を施す。第Ⅶ群第２類ａ種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
393	縄文土器 深鉢	H－10 口縁部片	残存高 4.6	①小礫含②良好③ にぶい褐	施文。第Ⅶ群第３類ｂ種
394	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	口 (22.9) 残存高 10.8	①白色粒子含②良 好③灰褐	地文横位縄文RＬ施文後、幅３mmの沈線で文様を施し、文様帯を交互に磨り消す。第Ⅶ群第３類ａ種
395	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 5.7	①細砂含②良好③ 黒褐	地文横位縄文RＬ施文後、幅３mmの沈線で文様を施し、文様帯を交互に磨り消す。第Ⅶ群第３類ａ種
396	縄文土器 深鉢	101上 胴部片	残存高 3.9	①小礫多②良好③ 暗灰黄	幅２mmの沈線で文様を施文後磨く。第Ⅶ群第３類ｂ種
397	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 3.8	①小礫多②良好③ 黒褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、横位沈線で磨り消す。第Ⅶ群第３類ａ種
398	縄文土器 深鉢	H－8 胴部片	残存高 4.5	①白色粒子含②良 好③黒褐	斜位沈線を交互施す。第Ⅶ群第２類ｂ種
399	縄文土器 深鉢	103上 口縁部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③ 灰黄褐	口唇部篦状工具で刻み、内面幅５mmの横位沈線施す。第Ⅶ群第３類ｂ種
400	縄文土器 深鉢	3住、39上、90上、 G－7 口縁部片	口 (13.5) 残存高 13.8	①小礫多②良好③ 橙	口縁部地文横位縄文ＬＲ施文後、磨り消し太い沈線を施す。第Ⅶ群第４類
401	縄文土器 深鉢	Ⅰ－8 把手	残存高 6.2	①小礫多②良好③ にぶい褐	隆帯貼付。第Ⅶ群
402	縄文土器 深鉢	Ⅰ－9 口縁部片	残存高 8.5	①小礫多②良好③ にぶい黄褐	口縁部隆帯・突起貼付後、横位沈線、篦状工具により刻む。胴部沈線。内面おこげ顕著付着。第Ⅶ群
403	縄文土器 深鉢	113上 口縁部片	残存高 4.6	①小礫含②良好③ にぶい黄橙	口縁部隆帯貼付後、横位沈線、篦状工具により刻む。第Ⅶ群
404	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 3.6	①小礫含②良好③ 暗赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、幅３mm沈線、突起貼付後、磨り消す。第Ⅶ群
405	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 2.0	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群
406	縄文土器 深鉢	113上 口縁部片	残存高 3.6	①小礫多②良好③ 黒褐	地文細かい条痕施文後、幅２mm沈線、突起貼付後、磨り消し赤彩施す。第Ⅶ群
407	縄文土器 深鉢	1竪 胴部片	残存高 2.8	①小礫含②良好③ 暗赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、幅３mm沈線、突起貼付後、磨り消す。第Ⅶ群
408	縄文土器 深鉢	H－10 胴部片	残存高 4.8	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、幅３mm沈線、突起貼付後、磨り消す。第Ⅶ群
409	縄文土器 浅鉢	5住 胴部片	残存高 5.4	①小礫多②良好③ 灰褐	地文横位縄文ＬＲ施文後、幅３mm沈線、突起貼付後、磨り消す。第Ⅶ群
410	縄文土器 深鉢	H－8 口縁部片	残存高 4.1	①小礫多②良好③ 黒褐	地文細かい条痕施文後、幅３mm沈線、突起貼付後、磨り消しに赤彩施す。第Ⅶ群
411	縄文土器 深鉢	46上 口縁部片	残存高 3.8	①白色粒子多②良 好③にぶい橙	地文横位縄文ＬＲ施文後、隔刷手法により浮線文施す。第Ⅸ群第４類ｂ種
412	縄文土器 深鉢	H－11 口縁部片	残存高 4.1	①白色粒子多②良 好③にぶい橙	地文横位縄文ＬＲ施文後、隔刷手法により浮線文施す。第Ⅸ群第４類ｂ種
413	縄文土器 深鉢	5住、5例木、34 土、113上、Ⅰ－ 8 口縁部片	残存高 4.0	①細砂含②良好③ にぶい橙	口縁部幅８mmの工具で条痕文施文後、口縁下部横位磨き施す。第Ⅸ群第４類ｂ種
414	縄文土器 深鉢	39上 口縁部片	残存高 9.6	①小礫多②良好③ 浅黄橙	地文横位縄文ＬＲ施文後、幅３mmの沈線施す。第Ⅸ群第４類ｂ種
415	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 2.1	①小礫含②良好③ にぶい橙	隔刷手法により浮線文施す。第Ⅸ群第４類ａ種
416	縄文土器 深鉢	5例木 口縁部片	残存高 4.2	①小礫含②良好③ 黒褐	胴部櫛毛目状の条痕施文後、幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅸ群第２類
417	縄文土器 深鉢	5住 胴部片	残存高 5.7	①小礫多②堅③にぶい橙	幅３mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群
418	縄文土器 浅鉢	H－8 胴部片	残存高 2.2	①細砂含②良好③ 黒褐	幅２mmの沈線で文様を施す。第Ⅶ群
17区弥生時代遺構外出土土器					
419	弥生土器 壺・甕	H－11 胴部片	残存高 3.2	①小礫多②良好③ 橙	荒い条痕文斜位施文。第Ⅺ群ｃ種
420	弥生土器 甕	161上 胴部片	残存高 5.1	①小礫含②堅③明 赤褐	荒い横位条痕施す。第Ⅺ群ｃ種
421	弥生土器 壺	Ⅰ－10 肩部片	残存高 4.1	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	平蔵竹管による平行沈線を施す。第Ⅺ群ｄ種

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
422	弥生土器 壺	49土 肩部片	残存高 2.5	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	半截竹管による平行沈線を施す。第XI群 d 種
423	弥生土器 甕	34土 口縁部片	残存高 2.2	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	口縁部横位縄文 L R 施文後、幅 3 mmの円孔を焼成前に施す。第XII群 a 種
424	弥生土器 甕	34土 口縁部片	残存高 2.8	①小礫多②良好③ 橙	口縁部横位縄文 L R 施文後、幅2mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
425	弥生土器 壺	113土 頸部片	残存高 3.2	①小礫多②良好③ 橙	横位縄文 L R 施文後、幅 3 mmの沈線で文様を施す。第XI群 a 種
426	弥生土器 壺	5住 肩部片	残存高 3.2	①小礫多②良好③ 橙	地文横位・斜位縄文 L R 施文後、幅 2 mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
427	弥生土器 壺	H－9 肩部片	残存高 5.4	①小礫多②良好③ 橙	地文縦位・斜位縄文 L R 施文後、幅 2 mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
428	弥生土器 壺	5住 胴部片	残存高 4.6	①小礫含②良好③ 黒褐	地文横位・縦位縄文 L R 施文後、幅 2 mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
429	弥生土器 壺	5住 胴部片	残存高 4.0	①細砂含②良好③ 暗オリーブ褐	地文横位・縦位縄文 L R 施文後、幅 2 mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
430	弥生土器 壺	1住 胴～底部片	底(8.4) 残存高 7.1	①細砂含②良好③ 暗オリーブ褐	幅 2 mmの沈線で文様を施文後、横位・縦位縄文 L R を充填施文。第XII群 a 種
431	弥生土器 壺	1住3ピット 胴部片	残存高 3.3	①小礫含②良好③ 橙	地文横位・縦位縄文 L R 施文後、幅 3 mmの沈線で文様を施す。第XII群 a 種
432	弥生土器 壺	1住カマド 底部片	残存高 2.6	①小礫含②良好③ 灰オリーブ	幅 2 mmの沈線で文様を施文後、横位・縦位縄文 L R を充填施文。第XII群 a 種
433	弥生土器 甕	1住8ピット 頸部片	残存高 2.2	①細砂含②良好③ 橙	櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第XI群 d 種
434	弥生土器 甕	H－9 頸部片	残存高 3.1	①細砂含②良好③ にぶい黄橙	5条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第XI群 d 種
435	弥生土器 甕	5住、49土 頸部片	残存高 5.2	①細砂含②良好③ 灰褐	横位磨き。第XII群 c 種
436	弥生土器 壺	93土 頸部片	残存高 4.5	①小礫含②良好③ にぶい橙	縦位磨き。第XII群 c 種
437	弥生土器 壺	90土 胴部片	残存高 6.1	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	横位磨き。内面横位ナデ。第XII群 c 種
438	弥生土器 甕	5住1ピット 肩部片	残存高 4.1	①小礫多②良好③ 黒褐	無文。第XII群 d 種
439	弥生土器 壺	H－4 胴部片	残存高 7.5	①小礫多②良好③ にぶい赤褐	縦位磨き。第XII群 c 種
440	弥生土器 甕	H－5 口縁部片	残存高 3.1	①細砂含②良好③ 明赤褐	口唇部箆状工具による刻み、内外面横位ナデ。第XII群 a 種
441	弥生土器 甕	表土 口縁部片	残存高 1.9	①細砂含②良好③ にぶい赤褐	口唇部箆状工具による刻み、内外面横位ナデ。第XII群 a 種
442	弥生土器 甕	34土 口縁部片	残存高 2.2	①細砂多②良好③ 黒褐	口唇部箆状工具による刻み、内外面横位ナデ。第XII群 a 種
443	弥生土器 甕	G－4 口縁部片	残存高 2.0	①小礫多②良好③ 黒褐	口縁部横ナデ。第XII群 c 種
444	弥生土器 甕	90土 口縁部片	残存高 1.8	①細砂多②良好③ 黒褐	口縁部横位縄文 L R 施文。第XII群 a 種
445	弥生土器 甕	H－4 口縁部片	残存高 4.5	①細砂多②良好③ 黒褐	口唇部横位縄文 L R、胴部縦位縄文 R L 施文。第XII群 a 種
446	弥生土器 甕	H－7 口縁部片	残存高 3.5	①細砂含②良好③ 黒褐	口縁部横位縄文 L R 施文。内外面横位ナデ。第XII群 a 種
447	弥生土器 甕	I－8 口縁部片	残存高 3.2	①細砂含②良好③ 黒褐	口唇部横位縄文 L R、頸部櫛歯状工具で、一連止めの櫛状文施す。第XII群 a 種
448	弥生土器 甕	1住8ピット 口縁部片	残存高 2.5 口(23.4)	①細砂多②良好③ 黒褐	口唇部横位無節縄文 L 施文、口縁部 2 条 1 単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第XII群 b 種
449	弥生土器 甕	表土 口縁～胴部片	残存高 11.9	①細砂多②良好③ 暗オリーブ褐	6 条 1 単位の櫛歯状工具で、一連止めの腰状文、縦羽状文を施す。頸部にスス付着跡者。内面横位ナデ。第XII群 b 種
450	弥生土器 甕	H－4、I－8 口縁～胴部片	残存高 10.4	①細砂多②良好③ にぶい黄橙	6 条 1 単位の櫛歯状工具で、一連止めの腰状文、縦羽状文を施す。内面横位ナデ。第XII群 b 種
451	弥生土器 甕	161土 口縁部片	残存高 5.3	①細砂多②良好③ 黒褐	4 条 1 単位の櫛歯状工具で、一連止めの腰状文、縦羽状文を施す。内面横位ナデ。第XII群 b 種

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ②色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
452	弥生土器 壺	M－4 胴部片	残存高 6.1	①細砂含②良好③黒褐	6条1単位の櫛歯状工具で、一連止めの簾状文、斜格子文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
453	弥生土器 壺	H－8 頸～胴部片	残存高 4.3	①小礫含②良好③灰褐	4条1単位の櫛歯状工具で、一連止めの簾状文、縦羽状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
454	弥生土器 壺	2住 頸部片	残存高 4.5	①細砂含②良好③明赤褐	櫛歯状工具で、一連止めの簾状文を施す。内面斜位ナデ。第Ⅻ群b種
455	弥生土器 壺	54土 胴部片	残存高 5.0	①細砂含②良好③黒褐	6条1単位の櫛歯状工具で、斜線文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
456	弥生土器 壺	I－8 胴部片	残存高 5.8	①小礫含②良好③にぶい赤褐	横位ナデ成形後、7条1単位の櫛歯状工具で、斜線文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
457	弥生土器 壺	113土 胴下部片	残存高 5.9	①細砂含②良好③にぶい橙	横位、縦位磨き後、斜位ナデ。第Ⅻ群c種
458	弥生土器 壺	I－8 胴部片	残存高 9.2	①細砂含②堅③にぶい赤褐	7条1単位の櫛歯状工具で、斜線文を施す。内面横位磨き。第Ⅻ群b種
459	弥生土器 壺	75土、5側本、H－9 胴部片	残存高 9.3	①細砂多②良好②暗オリーブ褐	地文細かな条痕施文後、幅9mmの櫛歯状工具により文様施す。第Ⅻ群b種
460	弥生土器 甕	I－8 胴部片	残存高 6.4	①細砂多②良好②にぶい黄橙	地文細かな条痕施文後、幅8mmの櫛歯状工具により文様施す。第Ⅻ群b種
461	弥生土器 壺・甕	H－5 胴部片	残存高 4.5	①小礫含②良好②にぶい黄橙	地文刷毛目状工具により成形後、横位ナデ。第Ⅻ群c種
462	弥生土器 壺・甕	H－5 胴部片	残存高 4.6	①細砂含②良好③にぶい褐	地文刷毛目状工具により成形後、横位ナデ。第Ⅻ群c種
463	弥生土器 甕	H－8 胴部片	残存高 5.0	①小礫含②良好③にぶい橙	刷毛目状工具により縦位条痕施す。第Ⅻ群c種
464	弥生土器 甕	H－7 胴部片	残存高 3.5	①小礫多②良好③暗灰黄	地文刷毛目状工具により横位条痕施文後、櫛描文施す。第Ⅻ群b種
465	弥生土器 甕	G－4 胴部片	残存高 4.1	①細砂含②良好③黒褐	地文刷毛目状工具により横位条痕施文後、幅5mmの波状櫛描文を施す。第Ⅻ群b種
466	弥生土器 甕	K－9 口縁部片	残存高 2.9	①細砂多②良好③褐	口辺部刺突、口縁下部7条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。第Ⅻ群b種
467	弥生土器 甕	G－4 口縁～胴部片	口(12.8) 残存高 8.2	①細砂多②良好③にぶい黄褐	6条1単位の櫛歯状工具で、一連止めの簾状文、波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
468	弥生土器 甕	H－6 胴部片	残存高 3.2	①細砂多②良好③にぶい橙	4条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
469	弥生土器 甕	G－4 口縁～胴部片	残存高 11.0	①小礫多②良好③にぶい赤褐	横位ナデ成形後、6条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面口縁部横位、胴部斜位ナデ。第Ⅻ群b種
470	弥生土器 甕	H－4 頸～胴部片	残存高 5.2	①細砂含②良好③黒褐	4条1単位の櫛歯状工具で斜線文施文後、頸部に波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
471	弥生土器 甕	表土 胴部片	残存高 4.4	①細砂多②良好③黒褐	3条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
472	弥生土器 甕	45土 胴部片	残存高 5.4	①細砂多②良好③褐灰	横位ナデ成形後、4条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ、赤色付着物あり。第Ⅻ群b種
473	弥生土器 甕	39土 胴部片	残存高 4.2	①小礫含②良好③明赤褐	横位ナデ成形後、櫛歯状工具で波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
474	弥生土器 壺	38土 肩部片	残存高 4.9	①白色粒子含②良好③黒褐	地文刷毛目状工具により成形後、波状櫛描文施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
475	弥生土器 甕	G－4 胴部片	残存高 3.8	①細砂含②良好③明赤褐	横位ナデ成形後、櫛歯状工具で波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
476	弥生土器 甕	H－7 頸部片	残存高 2.4	①小礫含②良好③にぶい黄橙	横位ナデ成形後、4条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。内面横位ナデ。第Ⅻ群b種
477	弥生土器 甕	M－7 頸部片	残存高 2.6	①小礫含②良好③黒褐	横位ナデ成形後、7条1単位の櫛歯状工具で、波状文を施す。第Ⅻ群b種
478	弥生土器 甕	I－8 底部片	底(9.8) 残存高 8.2	①小礫含②良好③明赤褐	刷毛目状工具により縦位ナデ施す。第Ⅻ群c種
479	弥生土器 壺	H－7 胴部片	残存高 8.6	①白色岩片多②良好③にぶい橙	横位後、縦位磨き。第Ⅻ群c種
480	弥生土器 甕	6後土 胴下部片	残存高 5.0	①細砂含②良好③にぶい赤褐	縦位磨き。内面横位ナデ。第Ⅻ群c種

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
481	弥生土器 壺・甕	表土 胴部片	残存高 4.1	①小礫多②良好③ 暗オリーブ褐	地文刷毛目状の成形後、縦位磨き。第XII群 c 種
482	弥生土器 甕	34上、113土 胴～底部片	底 8.0 残存高 7.3	①細砂含②良好③ にぶい橙	縦位磨き。第XII群 c 種
483	弥生土器 甕	54上、H－8 胴～底部片	底(7.4) 残存高 6.0	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	縦位磨き後、底辺部横位ナデ。内面横位ナデ。第XII群 c 種
484	弥生土器 甕	G－6 胴～底部片	底10.0 残存高 3.7	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	縦位磨き後、底辺部横位ナデ。内面横位ナデ。第XII群 c 種
485	弥生土器 甕	表土 底部片	底(8.0) 残存高 1.9	①細砂含②良好③ にぶい黄	縦位磨き。第XII群 c 種
486	弥生土器 甕	5個本、H－9 胴～底部片	底(10.0) 残存高 3.3	①小礫含②良好③ にぶい赤褐	斜位ナデ。底部網代痕。内面横位ナデ。第XII群 c 種
487	弥生土器 甕	5個本 胴～底部片	底(9.0) 残存高 3.4	①細砂含②良好③ にぶい橙	底辺部横位ナデ。底部網代痕。内面横位ナデ。第XII群 c 種
488	弥生土器 壺・甕	H－10 胴下部片	残存高 5.3	①小礫含②良好③ にぶい橙	斜位ナデ。内面横位ナデ。第XII群 c 種
489	弥生土器 壺・甕	5個本 底部片	残存高 0.7	①小礫含②良好③ 灰赤	底部網代痕。第XII群 c 種
490	弥生土器 小型壺	34上 肩部片	残存高 2.5	①細砂含②良好③ 黒褐	横位ナデ。第XII群 c 種
491	弥生土器 小型壺	1住 肩部片	残存高 1.9	①密②良好③黒褐	斜位ナデ。第XII群 c 種
492	弥生土器 小型壺	表土 底部片	残存高 2.3	①小礫多②良好③ にぶい黄橙	無文。第XII群 d 種
493	弥生土器 台付甕	H－8 高台部片	残存高 4.4	①細砂含②良好③ 赤褐	縦位磨き。内面横位ナデ。第XII群 c 種
494	弥生土器 台付甕	39上 高台部片	残存高 2.0	①小礫含②良好③ 灰褐	無文。第XII群 d 種
495	弥生土器 甕	75上、5個本、H－5 肩部片	残存高 4.2	①細砂多②良好③ 黒褐	縦位ナデ成形後、オオバコを回転施文。第XII群
17区縄文時代遺構外出土石器					
1	石器 有舌尖頭器	75土 ほぼ完形	長 5.6　幅 1.7 厚 0.5　重 4.0 g	安山岩	刃部は先端からの衝撃で欠損。
2	石器 石鏃	1住 ほぼ完形	長 1.3　幅 0.9 厚 0.2　重 0.2 g	黒曜石	
3	石器 石鏃	1住 完形	長 1.5　幅 1.4 厚 0.4　重 0.6 g	黒曜石	
4	石器 石鏃	I－7 完形	長 1.7　幅 1.3 厚 0.4　重 0.6 g	黒曜石	
5	石器 石鏃	H－6 完形	長 2.2　幅 1.6 厚 0.4　重 1.0 g	黒曜石	
6	石器 石鏃	H－5 完形	長 1.9　幅 1.4 厚 0.4　重 0.7 g	黒曜石	
7	石器 石鏃	H－7 ほぼ完形	長 1.8　幅(1.7) 厚 0.5　重 1.0 g	黒曜石	
8	石器 石鏃	I－11 完形	長 1.9　幅 1.9 厚 0.6　重 1.2 g	珪質変質岩	
9	石器 石鏃	H－7 完形	長 2.0　幅 1.8 厚 0.5　重 1.1 g	黒曜石	
10	石器 石鏃	H－5 完形	長 1.4　幅 1.1 厚 0.3　重 0.4 g	黒曜石	
11	石器 石鏃	I－11 完形	長 1.7　幅 1.8 厚 0.3　重 0.7 g	黒曜石	
12	石器 石鏃	113土 完形	長 1.9　幅 1.5 厚 0.4　重 0.6 g	黒曜石	
13	石器 石鏃	H－6 完形	長 1.9　幅 1.5 厚 0.3　重 0.5 g	黒曜石	
14	石器 石鏃	I－8 完形	長 4.2　幅 3.1 厚 0.7　重 0.9 g	黒曜石	

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	石　材	成・整形技法の特徴及び備考
15	石器 石鏃	I－10 完形	長 2.2　幅 1.7 厚 0.5　重 1.4 g	安山岩	
16	石器 石鏃	5 倒木 完形	長 1.8　幅 1.2 厚 0.5　重 0.7 g	鉄石英	
17	石器 石鏃	H－5 完形	長 2.4　幅 1.6 厚 0.4　重 1.0 g	黒曜石	
18	石器 石鏃	H－7 完形	長 2.4　幅 1.4 厚 0.5　重 1.0 g	黒曜石	
19	石器 石鏃	H－5 完形	長 2.4　幅 1.6 厚 0.5　重 1.1 g	黒曜石	
20	石器 石鏃	176土 ほぼ完形	長 2.6　幅 1.5 厚 0.3　重 1.0 g	碧玉	
21	石器 石鏃	H－8 完形	長 2.7　幅 1.7 厚 0.5　重 1.3 g	黒曜石	
22	石器 石鏃	G－4 完形	長 1.2　幅 1.8 厚 0.3　重 0.3 g	黒曜石	
23	石器 石鏃	H－10 ほぼ完形	長 1.6　幅 1.6 厚 0.4　重 0.6 g	黒曜石	基部1箇欠損。
24	石器 石鏃	H－10 完形	長 1.6　幅 1.7 厚 0.5　重 0.8 g	黒曜石	
25	石器 石鏃	75土 2/3	長 2.8　幅(1.5) 厚 0.3　重 0.8 g	安山岩	基部1箇欠損。
26	石器 石鏃	1住 2/3	長 3.0　幅(1.6) 厚 0.3　重 0.9 g	黒曜石	基部1箇欠損。
27	石器 石鏃	39土 ほぼ完形	長 2.8　幅(1.6) 厚 0.5　重 1.6 g	黒色安山岩	
28	石器 石鏃？	I－12 未製品？	長 2.3　幅 2.0 厚 0.7　重 2.6 g	黒曜石	未製品か。
29	石器 石鏃	I－10 完形	長 3.3　幅 2.3 厚 1.0　重 5.4 g	珪質頁岩	
30	石器 ドリル	2住 1/2	長(2.1)　幅 1.4 厚 0.5　重 1.0 g	珪質頁岩	刃部欠損。
31	石器 ドリル	H－7 1/2	長 3.4　幅 2.1 厚 0.9　重 3.8 g	珪質頁岩	刃部欠損。
32	石器 石匙	H－10 ほぼ完形	長 3.6　幅(4.2) 厚 0.7　重 7.8 g	安山岩	石刃部は旧時の欠損。
33	石器 石匙	I－11 完形	長 5.9　幅 7.8 厚 0.7　重 25.4 g	黒色安山岩	
34	石器 石匙	1住1ピット 完形	長 4.9　幅 5.9 厚 0.7　重 13.2 g	黒色安山岩	
35	石器 石匙	I－9 完形	長 5.0　幅 4.9 厚 1.0　重 21.4 g	黒色頁岩	
36	石器 石匙	I－1 完形	長 7.4　幅 2.4 厚 0.9　重 13.3 g	黒色安山岩	
37	石器 石匙	H－9 完形	長 4.5　幅 7.9 厚 1.2　重 32.1 g	珪質頁岩	
38	石器 石匙	32土 2/3	長 6.4　幅 2.0 厚 0.7　重 9.0 g	珪質頁岩	
39	石器 スクレイパー	1住 ほぼ完形	長 6.1　幅 5.9 厚 1.3　重 45.9 g	細粒輝石安山岩	
40	石器 スクレイパー	G－4 ほぼ完形	長 3.8　幅 3.6 厚 1.1　重 12.8 g	黒曜石	
41	石器 スクレイパー	I－1 ほぼ完形	長 4.7　幅 8.1 厚 1.1　重 34.9 g	黒色安山岩	
42	石器 スクレイパー	5 倒木 ほぼ完形	長 4.1　幅 5.0 厚 0.7　重 7.8 g	黒色頁岩	
43	石器 スクレイパー	H－11 ほぼ完形	長 8.3　幅 2.7 厚 1.3　重 26.6 g	黒色安山岩	
44	石器 スクレイパー	I－10 ほぼ完形	長 9.3　幅 3.1 厚 1.5　重 36.8 g	安山岩	

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	石材	成・整形技法の特徴及び備考
45	石器 スクレイパー	I－5 ほぼ完形	長 10.7　幅 3.3 厚 1.4　重 43.4 g	頁岩	
46	石器 スクレイパー	168土 ほぼ完形	長 7.6　幅 2.8 厚 1.2　重 30.9 g	黒色頁岩	
47	石器 スクレイパー	114土 ほぼ完形	長 7.5　幅 3.3 厚 1.4　重 31.8 g	変質安山岩	
48	石器 異形石器	H－8 完形	長 3.3　幅 3.0 厚 0.7 重 5.8 g	安山岩	両側・下側は波状に刃部を作る。
49	石器 スタンプ	G－6 完形	長 13.0　幅 9.0 厚 5.6 重 866.2 g	粗絞輝石安山岩	下面稜部を顕著に敲き使用。左側面は特殊磨り使用気味。
50	石器 スタンプ	I－10 完形	長 10.3　幅 4.0 厚 6.6 重 450.5 g	安山岩	下面稜部を顕著に敲き使用。表面は特殊磨り使用。両側面は磨り使用弱い。
51	石器 礫器	I－8 ほぼ完形	長 8.3　幅 7.5 厚 3.9 重 260.7 g	細絞輝石安山岩	
52	石器 小型打製石斧	I－11 ほぼ完形	長 4.8　幅 3.6 厚 1.3 重 14.8 g	黒曜石	
53	石器 小型打製石斧	H－8 ほぼ完形	長 4.8　幅 3.3 厚 1.0 重 15.6 g	黒色安山岩	
54	石器 打製石斧	G－6 ほぼ完形	長 7.5　幅 4.6 厚 1.8 重 65.0 g	黒色頁岩	
55	石器 打製石斧	H－10 完形	長 7.6　幅 4.1 厚 1.6 重 47.8 g	黒色安山岩	
56	石器 小型打製石斧	I－10 完形	長 7.8　幅 4.3 厚 2.1 重 74.5 g	安山岩	
57	石器 打製石斧	G－7 完形	長 7.1　幅 4.9 厚 2.0 重 71.2 g	黒色安山岩	
58	石器 打製石斧	H－9 ほぼ完形	長 7.9　幅 6.2 厚 2.6 重 125.9 g	安山岩	
59	石器 打製石斧	I－9 完形	長 9.2　幅 5.7 厚 1.6 重 80.5 g	黒色安山岩	
60	石器 スクレイパー	J－10 完形	長 10.5　幅 4.3 厚 1.8 重 80.6 g	安山岩	
61	石器 磨石	H－10 1/2	長(8.7)　幅 6.4 厚 6.4 重 591.6 g	石英閃緑岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用顕著。両側面の磨り使用は弱い。
62	石器 磨石	H－9 1/2	長 8.5　幅 4.8 厚 7.1 重 408.8 g	粗絞輝石安山岩	特殊形。表・両側面は平滑に磨り使用。
63	石器 磨石	表土 1/2	長 9.6　幅 6.3 厚 7.3 重 650.5 g	粗絞輝石安山岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用顕著。両側面の磨り使用は弱い。下面敲き使用顕著。
64	石器 磨石	H－8・9 ほぼ完形	長 15.4　幅 6.0 厚 6.9 重 825.0 g	粗絞輝石安山岩	特殊形。表・両側面平滑に磨り使用顕著。
65	石器 磨石	H－6 完形	長 13.1　幅 4.9 厚 7.7 重 669.9 g	粗絞輝石安山岩	特殊形。表面は平坦だが荒れ、敲き使用顕著。

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	石材	成・整形技法の特徴及び備考
66	石器 磨石	I－11 完形	長 14.0 幅 8.5 厚 5.6 重 942.2 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表・両側面平滑に磨り使用顕著。
67	石器 磨石	H－7 2/3	長 9.7 幅 7.4 厚 6.6 重 867.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面と左側稜部を特殊磨り使用。左側・裏面を平滑に磨り使用。表面石稜部は敲き使用顕著。
68	石器 磨石	I－10 ほぼ完形	長 15.5 幅 4.6 厚 5.1 重 565.4 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・上面は平滑に磨り使用。両側面の磨り使用は弱い。被熱のためか顕著にヒビ割れる。
69	石器 磨石	I－12 完形	長 13.3 幅 7.1 厚 8.0 重1,057 g	石英閃緑岩	特殊形。表面・左側面磨り使用顕著。
70	石器 磨石	表土 完形	長 10.9 幅 6.3 厚 7.4 重 701.9 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平坦だが磨り使用弱い。両側面は磨り使用顕著。
71	石器 磨石	G－5 2/3	長 10.3 幅 4.7 厚 7.1 重 424.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用顕著。両側面は磨り弱い。被熱のためか顕著にひび割れる。
72	石器 磨石	H－4 1/2	長 7.9 幅 6.0 厚 6.1 重 259.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平滑だが顕著な使用はない。両側面の使用も弱い。
73	石器 磨石	I－10 2/3	長 10.3 幅 4.8 厚 6.7 重 426.0 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・両側面磨り使用顕著。表面稜部は顕著に敲き使用。
74	石器 磨石	H－7 1/2	長 7.7 幅 5.2 厚 8.3 重 454.3 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平坦だが荒れる。両側面は磨り使用顕著。左側面は石稜部寄り顕著に磨る。
75	石器 磨石	9 側本 2/3	長 10.4 幅 4.7 厚 6.6 重 473.5 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・右側面は磨り使用顕著で稜部尖り気味。裏面は稜部で敲き使用顕著。
76	石器 磨石	5 側本 1/2	長(7.6) 幅 6.4 厚 5.4 重 375.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。四角い石材だが、石稜部を平滑に磨り使用。表・右側面も磨り使用顕著なため、稜部尖り気味。
77	石器 磨石	H－8 1/2	長 7.7 幅 5.3 厚 6.6 重 424.4 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表・両側面は平滑に磨り使用。
78	石器 磨石	113土 完形	長 15.4 幅 4.7 厚 7.6 重 804.7 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用顕著。両側面の磨り使用は弱い。
79	石器 磨石	32土 1/2	長 7.6 幅 3.8 厚 8.3 重 461.1 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用。両側面の磨り使用は弱い。
80	石器 磨石	I－11 完形	長 12.1 幅 4.0 厚 9.6 重 659.0 g	粗粒輝石安山岩	表面はやや平坦だが荒れる。左側面は丸みを持って前面に磨り使用。側部全体に敲き使用により荒れる。
81	石器 磨石	I－9 完形	長 12.8 幅 3.5 厚 6.2 重 391.9 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・両側面磨り使用顕著。表面稜部は顕著に敲き使用。
82	石器 磨石	I－11 完形	長 15.5 幅 5.9 厚 7.9 重 1,123 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面は平滑に磨り使用顕著。両側面は磨り弱い。右稜部敲き顕著。
83	石器 磨石	I－10 完形	長 14.3 幅 4.9 厚 6.7 重 846.0 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・左側面平滑に磨り使用。上面稜部もやや磨る。
84	石器 磨石	H－8 完形	長 11.4 幅 5.2 厚 9.9 重 874.8 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表面・左側面は平滑に磨り使用。右側面は丸みを持って顕著に磨る。
85	石器 磨石	H－9 1/2	長 6.8 幅 4.5 厚 8.1 重 378.5 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表・両側面は平滑に磨り使用。

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
86	石器 磨石	I－10 完形	長 8.8　幅 8.7 厚 4.0 重 495.6 g	粗粒輝石安山岩	表面は顕著に磨り使用。裏面もやや磨る。
87	石器 磨石	I－10 完形	長 9.6　幅 9.6 厚 4.8 重 601.6 g	粗粒輝石安山岩	表面を顕著に磨り使用。側部は全て敲き使用により荒れる。
88	石器 磨石	5 側木 完形	長 9.1　幅 7.9 厚 3.8 重 382.1 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面磨り使用。被熱のためか顕著にヒビ割れる。
89	石器 磨石	H－6 完形	長 9.6　幅 9.3 厚 6.1 重 704.1 g	粗粒輝石安山岩	表面を平坦に磨り使用。多孔質の石材。
90	石器 磨石	75土 完形	長 9.0　幅 8.3 厚 3.7 重 362.5 g	粗粒輝石安山岩	1面を顕著に磨る。
91	石器 磨石	H－9 完形	長 7.2　幅 7.9 厚 3.3 重 281.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。下側部を平滑に使用。表裏両面磨り使用し、中央部凹み使用。
92	石器 磨石	I－10 完形	長 9.3　幅 8.8 厚 5.2 重 562.4 g	石英閃緑岩	特殊形。表裏両面顕著に磨り、中央部凹み使用。左右側面は平坦だが荒れる。側部全てを敲き使用顕著。
93	石器 磨石	33土 完形	長 15.2　幅 8.0 厚 4.0 重 701.1 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。左右側面は平坦だが荒れる。表面は丸みを持って磨る。裏面も磨り使用顕著。全体に敲き使用顕著。
94	石器 磨石	H－10 完形	長 9.8　幅 8.6 厚 4.2 重 446.8 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。右側面は平坦だが荒れる。整った円形で表裏両面とも顕著に磨る。
95	石器 磨石	I－10 完形	長 10.5　幅 8.4 厚 5.2 重 767.7 g	玄武岩	表面は丸く磨り使用。側部はやや荒れる。
96	石器 磨石	G－4 ほぼ完形	長 14.5　幅 9.5 厚 3.5 重 819.2 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表裏両面とも左右端部を顕著に磨り使用する。右側面は平滑だが顕著ではない。
97	石器 磨石	9 側木 完形	長 9.8　幅 8.2 厚 5.7 重 657.9 g	粗粒輝石安山岩	表面は丸みを持って顕著に磨り使用され、下面は敲き使用顕著。裏面の磨り使用は弱い。
98	石器 磨石	H－7 完形	長 12.2　幅 8.8 厚 4.3 重 681.6 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。右側面平坦だが荒れる。表裏両面は平滑に磨り使用顕著。下面は敲き使用顕著。
99	石器 磨石	I－9 ほぼ完形	長 10.6　幅 7.0 厚 3.7 重 423.0 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。表裏・右側面平滑に磨り使用顕著。後部・下面敲き使用顕著。
100	石器 磨石	73土 完形	長 8.9　幅 7.0 厚 7.0 重 592.1 g	粗粒輝石安山岩	丸みのある石材。表面を平滑に強く磨り使用。被熱のためか顕著にヒビ割れる。
101	石器 磨石	H－12 完形	長 10.5　幅 7.7 厚 3.2 重 397.3 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。右側面顕著に使用。表裏両面も磨り使用し、中央部は凹み使用。
102	石器 磨石	H－10 ほぼ完形	長 15.8　幅 7.4 厚 3.8 重 686.3 g	石英閃緑岩	特殊形。右側面・表面磨り使用。後部は丸みを持つ。表面上端部敲き使用顕著。
103	石器 磨石	H－8 完形	長 7.5　幅 9.0 厚 5.4 重 482.1 g	粗粒輝石安山岩	表面を顕著に磨る。
104	石器 磨石	32土 完形	長 13.6　幅 7.2 厚 4.3 重 553.0 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面で部分的に顕著に磨る。
105	石器 磨石	H－6 完形	長 12.8　幅 7.5 厚 3.6 重 592.1 g	粗粒輝石安山岩	特殊形。左側部を平滑に使用するが顕著ではない。

番号	種　類 器　種	出土位置(cm) 遺存状態	法　量(cm)	①胎土②焼成 ③色調／石材	成・整形技法の特徴及び備考
106	石器 磨石	9側木 ほぼ完形	長 15.1　幅 7.4 厚 4.2 重 801.7 g	石英閃緑岩	磨り使用弱く、下面敲き使用顕著。
107	石器 磨石	H－5 完形	長 23.5　幅 29.6 厚 10.1 重 11,800 g	粗粒輝石安山岩	板石状の巨礫使用。表面部は中央部付近で顕著に磨り使用。端部の欠けは使用による破損で、敲き使用ではない。
108	石器 凹石	H－8 完形	長 12.9　幅 8.0 厚 6.4 重 755.0 g	粗粒輝石安山岩	多孔質の石材。
109	石器 凹石	H－6 完形	長 11.2　幅 7.7 厚 4.3 重 570.5 g	粗粒輝石安山岩	裏面顕著に磨る。
110	石器 凹石	G－3 完形	長 15.4　幅 14.4 厚 6.6 重 1,311 g	粗粒輝石安山岩	
111	石器 凹石	5側木 完形	長 10.7　幅 7.8 厚 5.1 重 458.5 g	安山岩	多孔質の石材。被熱のためか顕著にヒビ割れる。
112	石器 石皿	I－6 1/4	長(17.7)　幅(16.6) 厚 9.5 重 2,800 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面磨り使用。
113	石器 石皿	G－4 2/3	長(23.1)　幅 29.6 厚 10.5 重 11,800 g	粗粒輝石安山岩	表面の磨り使用わずか。側部整形痕顕著。
114	石器 石皿	I－5 1/5	長(15.1)　幅(9.9) 厚(10.5) 重 1,636 g	粗粒輝石安山岩	表面のみ磨り使用。
17区弥生時代遺構外出土石器					
1	石器 石鏃	H－5 完形	長 2.3　幅 1.2 厚 0.5 重 0.6 g	デイサイト	
2	石器 磨製石鏃	H－8 1/2	長(2.3)　幅(2.1) 厚(0.3) 孔 0.2～0.4 重 1.2 g	黒色片岩	刃部、基部１端欠損。表面に残る細かな条線は整形痕か。
3	石器 石鏃	H－8 1/2	長(2.3)　幅(2.0) 厚(0.3) 孔 0.15～0.25 重 1.5 g	黒色片岩	上下欠損。両側部は両面から削り痕で、鋭く尖る。
4	石器 砥石	I－7 ほぼ完形	長 6.6　幅 2.5 厚 3.1 重 61.9 g	安山岩	左側・裏面磨り使用。磨りは弱く稜部は尖らない。上端部敲き使用顕著。
5	石器 砥石	G－6 完形	長 6.7　幅 3.4 厚 1.5 重 48.8 g	粗粒輝石安山岩	表裏両面の左右端部使用使用。右側を顕著に使用し、両面から磨り込んで稜部は尖る。下面も平滑に整形。
6	石器 砥石	H－8 完形	長 5.1　幅 2.2 厚 1.1 重 18.5 g	泥紋岩	表裏両面の左右端部使用。両面から磨り込んで、左右稜部は尖る。
17区平安時代遺構外出土遺物					
1	土師器 皿	表土 口縁～底部片	口(13.2) 底(6.2) 残存高 2.2	①細砂含②良好③暗オリーブ褐	口縁部　横位ナデ。体部指頭圧痕顕著。底部ヘラ削り。
2	須恵器 坏	H－5 底部片	底(7.2) 残存高 1.4	①小礫含②良好③暗灰黄	ロクロ成形（右回転）。底部回転糸切り未調整。
3	須恵器 椀	H－9 底部片	底(4.2) 残存高 1.2	①細砂微②やや良③黒褐	高台貼付後、ナデ整形。
4	灰釉陶器 皿	H－7 口縁～体部片	残存高 3.8	①密②堅③灰白	釉薬は浸けがけ、釉調透明。大原Ⅱ
5	土師器 椀	H－8 高台部	台(8.8) 残存高 2.1	①細砂含②軟③浅黄	横位ナデ整形。